鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)

上野原遺跡

(第10地点)

所在地　鹿児島県国分市大字上之段字水ヶ迫ほか

第6分冊

縄文早期土器編3(早期後葉編2)・土製品編

2001年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

『国分上野原テクノパーク第３工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書上野原遺跡（第10地点）』の各分冊構成

口　絵
序　文
例　言
第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経過
　第２節　調査の組織
　第３節　調査の経過
第Ⅱ章　遺跡の位置
　第１節　遺跡の位置
　第２節　周辺遺跡
第Ⅲ章　層位
第Ⅳ章　発掘調査
　第１節　調査の概要
　第２節　近代の調査
　第３節　歴史時代の調査
　第４節　古墳時代の調査
　第５節　弥生時代の調査
　第６節　縄文時代後期の調査
　第７節　縄文時代前期の調査
（以上，第１分冊）
　第８節　縄文時代早期の調査
　　１．遺構
　付　篇　壺形土器内の土の分析
（以上，第２分冊）
図版編
（以上，第３分冊）
序　文
例　言
　　２．遺物
　　（１）土　器
　　Ａ．縄文時代早期中葉の土器
（以上，第４分冊）
　　Ｂ．縄文時代早期後葉の土器
（以上，第５分冊）
　　Ｂ．縄文時代早期後葉の土器
　　（２）土製品
　　（以上，第６分冊－本分冊）
　　（３）石　器・石製品
　　Ａ．本文・一覧表編
（以上，第７分冊）
　　Ｂ．挿図編
（以上，第８分冊）
図版編１（モノクロ編）
（以上，第９分冊）
図版編２（カラー編）
（以上，第10分冊）

なお第１・２・３分冊については，第１集として平成12（2000）年３月に刊行した。今年度，第４・５・６・７・８・９・10分冊を第２集として平成13（2001）年３月付けで刊行。

また，第４分冊以降の各項の執筆責任者は次のとおりである。

第８節	２．（１）	八木澤一郎
	２．（２）	中村耕治
	２．（３）	冨田逸郎

第６分冊凡例

1　本分冊は，縄文時代早期後葉後半の時期に属する土器を報告した部分である。他の時期に属する遺物については，『各分冊構成』を参照の上，該当する分冊にあたられたい。

2　土器については，各型式ごとに「～式土器出土状況全体図」，「～式土器出土状況図」，「～式土器実測図」の３種類の挿図を作成した。また，土器型式内において細別が可能であると判断した場合は，細別型式ごとに３種類の挿図を掲載した。

土器観察表の多くは，「実測図」の最後にまとめた形で掲載した。

3　上野原遺跡第10地点の発掘調査は，40m四方のグリッドを設定し，原則としてグリッド単位で行った。また遺物取上では，遺物番号を各グリッドごとに１番から通し番号を付けて取り上げることとした。さらに遺物取上図面は，原則として1/50で作成することとし，調査担当者がそれぞれ分担し作成した。

4　本報告書掲載の「～式土器出土状況全体図」は，各グリッドごとに遺物取上図面を50%縮小した図面を元図として，各土器型式ごとに拾い出した図面を下図として作成した。

この下図を10%縮小のうえトレースし，版下とした。それを50%縮小して掲載したので，各図は1/2000の仕上がり図面である。

またこの図で使用した地形測量図は，アカホヤ火山灰直下のⅥ層上面で作成した図を１ｍコンターで掲載した図である。

5　本報告書掲載の「～式土器出土状況図」は，４で作成した下図を，37%縮小のうえ，原則として６グリッドを１枚の挿図としてトレースし，版下とした。それを50%縮小して掲載した。

またこの図に掲載した土器の番号は，「実測図」の番号と一致する。

6　上記の「～式土器出土状況全体図」と「～式土器出土状況図」とに示した土器出土地点を示すドットは，１ドット１点の土器片が出土したことを示したものである。したがって，当該土器型式に属する全ての土器を提示したものである。

7　本報告書掲載の「～式土器実測図」は，土器実測図を67%縮小のうえトレースし，版下とした。それを50%縮小して掲載した。したがって，各図は1/3の仕上がり図面である。

なお報告番号は，各土器型式ごとに１番から通し番号をふった。この番号は該当する「～式土器出土状況図」や土器観察表の報告番号と一致する。

8　本報告書掲載の「土器観察表」は，実測図として資料化した土器片のみを対象とした表であることをお詫びする。

9　さて「土器観察表」中の記号などについては次のとおりである。

1）胎土中の鉱物欄での記号は，

◎…含有量が特に多いと思われる鉱物。

○…含有量が多いと思われる鉱物。

△…含まれはするものの含有量が少ないと思われる鉱物。

を示しているが，「多い」「少ない」は全くの主観に基づく判断である。

2）器面調整については概ね最終調整に近い段階の調整を示す。内容は次のとおりである。

「ハケ」…

木製と思われる工具によるハケ目調整を行っていることを示す。方向が判明するときには方向を明示。多方向の調整が観察できるときには単に「ハケ」と記載した。

「ナデ」…

指および工具によるナデ調整を行っていることを示す。「丁寧なナデ」はほとんどそれ以前の調整が観察できないほど丁寧にナデ調整を行っているが，「ミガキ」調整ほど光沢ができるまで調整を続けていないことを示している。

3）「色調」については全くの主観である。

第６分冊目次

第Ⅳ章　　発掘調査

第８節　縄文時代早期の調査

２．遺物……5

（1）土器……8

Ｂ．縄文時代早期後葉の土器……8

ｂ．塞ノ神式土器様式・苦浜式土器……9

①　第１群　微隆帯文土器……10

②　第２群　塞ノ神Ａａ式土器……36

③　第３群　塞ノ神Ａｂ式土器……64

④　第４群　塞ノ神Ｂｃ式土器……74

⑤　第５群　塞ノ神Ｂｄ式土器……77

⑥　第６群　苦浜式土器……115

⑦　第７群　型式不明の土器……132

⑧　小結……134

（2）土製品……139

①　土偶及び異形土製品……139

②　土製耳飾り（耳栓）……139

③　土製円盤……149

④　線刻画を有する土器……149

⑤　小結……157

第６分冊挿図目次

第１図　上野原台地周辺地形及び上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内遺跡分布図……6

第２図　上野原遺跡第10地点の土層……7

第３図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況全体図……12

第４図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図１(P・Q・R・S－8・9区)……13

第５図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図２(Q・R・S－10・11区)……14

第６図　Q・R・S－10・11区出土塞ノ神・微隆帯文土器実測図……15

第７図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図３(N・O・P－12・13区)……16

第８図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図４(Q・R・S－12・13区)……17

第９図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図５(P・Q・R－14・15区)……18

第10図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図１(１類－１)……19

第11図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図２(１類－２)……20

第12図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図３(１類－３)……21

第13図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図４(２類－１)……22

第14図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図５(２類－２)……23

第15図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図６(３類－１)……24

第16図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図７(３類－２)……25

第17図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図８(４類－１)……26

第18図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図９(４類－２)……27

第19図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図10(４類－３)……28

第20図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図11(５類－１)……29

第21図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図12……30

第22図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図13(壺形土器)……31

第23図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況全体図……38

第24図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図１(Q・R・S－７・８区)……39

第25図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図２(Q・R・S－９・10区)……40

第26図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図３(N・O・P－11・12区)……41

第27図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図４(Q・R・S－11・12区)……42

第28図　Q・R・S－11・12区出土塞ノ神Ａａ式土器実測図……43

第29図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図５(P・Q・R－13・14区)……44

第30図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図６(Q－14区)……45

第31図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図７(O・P・Q－15・16区)……46

第32図　塞ノ神Ａａ式土器実測図１(１類－１)……47

第33図　塞ノ神Ａａ式土器実測図２(２類－１)……48

第34図　塞ノ神Ａａ式土器実測図３(２類－２)……49

第35図　塞ノ神Ａａ式土器実測図４(２類－３)……50

第36図　塞ノ神Ａａ式土器実測図５(２類－４)……51

第37図　塞ノ神Ａａ式土器実測図６(２類－５)……52

第38図　塞ノ神Ａａ式土器実測図７(２類－６)……53

第39図　塞ノ神Ａａ式土器実測図８(３類－１)……54

第40図　塞ノ神Ａａ式土器実測図９(３類－２) …… 55
第41図　塞ノ神Ａａ式土器実測図10(３類－３) …… 56
第42図　塞ノ神Ａａ式土器実測図11(４類－１) …… 57
第43図　塞ノ神Ａａ式土器実測図12(４類－２) …… 58
第44図　塞ノ神Ａａ式土器実測図13(小型深鉢) …… 59
第45図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況全体図 …… 65
第46図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図１(Ｑ・Ｒ・Ｓ－７・８区)…… 66
第47図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図２(Ｑ・Ｒ・Ｓ－９・10区)…… 67
第48図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図３(Ｐ・Ｑ・Ｒ－11・12区)…… 68
第49図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図４(Ｐ・Ｑ・Ｒ－13・14区)…… 69
第50図　塞ノ神Ａｂ式土器実測図１ …… 70
第51図　塞ノ神Ａｂ式土器実測図２ …… 71
第52図　塞ノ神Ａｂ式土器実測図３ …… 72
第53図　塞ノ神Ｂｃ式土器出土状況全体図 …… 75
第54図　塞ノ神Ｂｃ式土器出土状況図(Ｑ・Ｒ・Ｓ－８・９区)…… 76
第55図　塞ノ神Ｂｃ式土器実測図…… 77
第56図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況全体図 …… 80
第57図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図１(Ｑ・Ｒ・Ｓ－７・８区)…… 81
第58図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図２(Ｎ・Ｏ・Ｐ－９・10区)…… 82
第59図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図３(Ｑ・Ｒ・Ｓ－９・10区)…… 83
第60図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図４(Ｎ・Ｏ・Ｐ－11・12区)…… 84
第61図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図５(Ｑ・Ｒ・Ｓ－11・12区)…… 85
第62図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図６(Ｐ・Ｑ・Ｒ－13・14区)…… 86
第63図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図７(Ｐ－14区) …… 87
第64図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図８(Ｑ－14区) …… 88
第65図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図９(Ｒ－14区) …… 89
第66図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図10(Ｏ・Ｐ・Ｑ－15・16区)…… 90
第67図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図１(１類－１) …… 91
第68図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図２(１類－２) …… 92
第69図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図３(２類－１) …… 93
第70図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図４(２類－２) …… 94
第71図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図５(２類－３) …… 95
第72図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図６(２類－４) …… 96
第73図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図７(２類－５) …… 97
第74図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図８(２類－６) …… 98
第75図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図９(２類－７) …… 99
第76図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図10(２類－８) …… 100
第77図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図11(３類) …… 101
第78図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図12(４類－１) …… 102
第79図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図13(４類－２) …… 103
第80図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図14(５類－１) …… 104
第81図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図15(５類－２) …… 105
第82図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図16(６類－１) …… 106
第83図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図17(６類－２) …… 107
第84図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図18(６類－３) …… 108
第85図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図19(小型深鉢) …… 109
第86図　苦浜式土器出土状況全体図 …… 119
第87図　苦浜式土器出土状況図１(Ｑ・Ｒ・Ｓ－８・９区)…… 120
第88図　苦浜式土器出土状況図２(Ｎ・Ｏ・Ｐ－10・11区)…… 121
第89図　苦浜式土器出土状況図３(Ｑ・Ｒ・Ｓ－10・11区)…… 122
第90図　苦浜式土器出土状況図４(Ｑ・Ｒ・Ｓ－12・13区)…… 123
第91図　苦浜式土器実測図１ …… 124
第92図　苦浜式土器実測図２ …… 125
第93図　苦浜式土器実測図３ …… 126
第94図　苦浜式土器実測図４ …… 127
第95図　苦浜式土器実測図５ …… 128
第96図　苦浜式土器実測図６ …… 129
第97図　苦浜式土器実測図７ …… 130
第98図　苦浜式土器実測図８ …… 131
第99図　型式不明土器実測図１ …… 132
第100図　型式不明土器実測図２ …… 133
第101図　土製品出土状況全体図１
(土偶，棒状・異形土製品，土製耳飾り，線刻土器)…… 140
第102図　土製品実測図１(土偶，棒状・異形土製品) …… 141
第103図　土製品実測図２(パレット形土製品) …… 142
第104図　土製品実測図３(土製耳飾り１) …… 144
第105図　土製品実測図４(土製耳飾り２) …… 145
第106図　土製品実測図５(土製耳飾り３) …… 146
第107図　土製品実測図６(土製耳飾り４) …… 147
第108図　土製品出土状況全体図２(土製円盤) …… 150
第109図　土製品実測図７(土製円盤１) …… 151
第110図　土製品実測図８(土製円盤２) …… 152
第111図　土製品実測図９(土製円盤３) …… 153
第112図　土製品実測図10(線刻土器) …… 156

上野原遺跡周辺の環境と土層

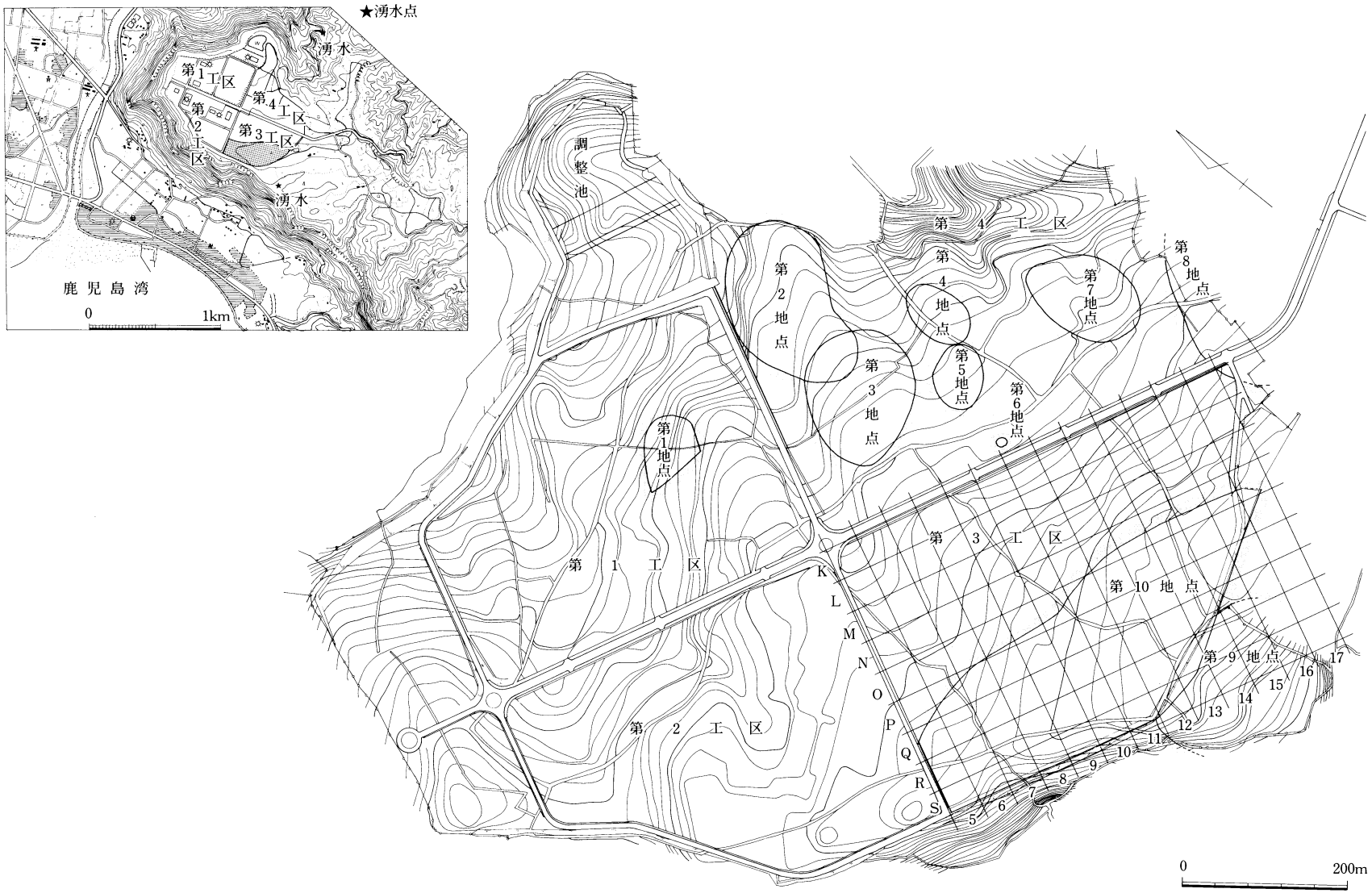
上野原遺跡の立地する上野原台地は，姶良カルデラの外輪山に相当する。外輪山は第２図のように想定されるが，天降川・別府川・検校川等によって開析されている沖積平野部分は定かでない。カルデラから霧島山麓へかけては，入戸火砕流で形成されている，ゆるやかな傾斜の台地になっている。その台地全体がこの台地は天降川や新川，検校川などで開析され，樹枝状の谷が複雑に入り組む。これらの様相は，第２図の霧島・桜島地形断面図に示すとおりである。上野原台地の標高は海側の最高所が 263m，その南側，霧島に面する所でおよそ240m であり，北側に向かってゆるやかな傾斜をもっている。台地の基盤は安山岩の岩盤であり，海側でカルデラ壁の断崖を形成している。その直上には亀割角礫層が堆積し，さらに姶良カルデラ噴出物やサツマ火山灰などの桜島噴出物が堆積して台地を形成している。

台地の東側はカルデラ壁頂部が続くが，それ以外の三方は断崖もしくは急峻な谷になっており，周辺と隔絶している。台地東側のカルデラ壁頂部には海側への浅い開析谷があり，その開口部，断崖近くには湧水がみられる。また，台地の北側にも湧水があり，台地上ではあるものの，現在も一定の水量は確保されるようである。

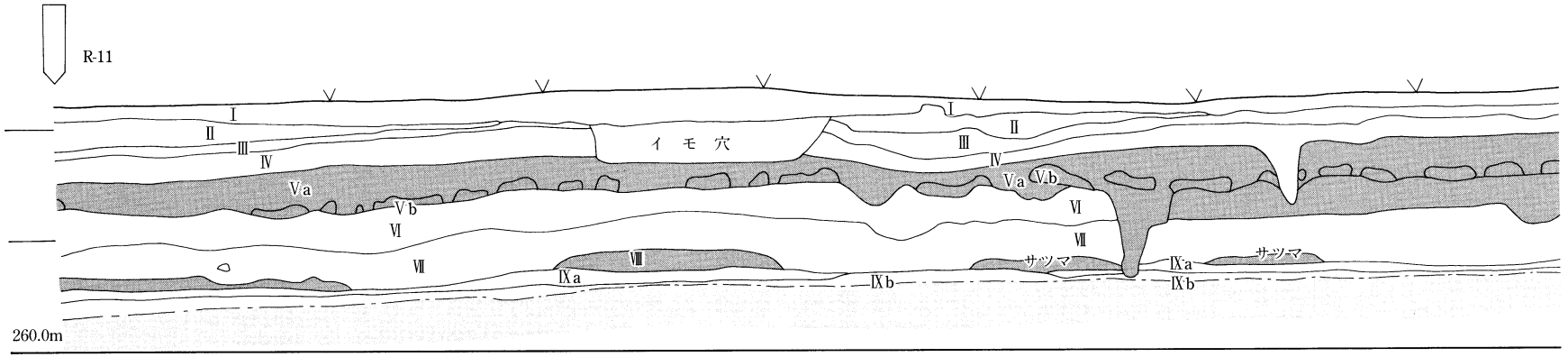
この姶良カルデラ周辺には南九州の主要な縄文遺跡が数多い。中でも，上野原台地と検校川を挟んで向き合う位置にある平栫貝塚は，本遺跡第10地点の主体的な土器の一つである平栫式土器の標識遺跡である。また，カルデラ南西部外側を流れる稲荷川流域に立地する加栗山遺跡は，本遺跡第２地点と同じく早期前葉前平式土器期の集落が検出された。同じ立地条件の加治屋園遺跡では草創期の微隆起突帯文土器が出土した。別府川の沖積地には，縄文後期中葉から後葉にかけての南九州のほとんどすべての形式の土器が膨大な量出土した干迫遺跡がある。検校川の上流に位置する城ヶ尾遺跡では，埋納された塞ノ神様式の壷が３個体出土している。この遺跡は，縄文時代早期後葉の埋納された壷形土器という共通項もあるため本遺跡との関連が注目される。

上野原台地内の遺跡分布を概観しておきたい。第１工区と第２工区のほとんどの区域については不明であるが，第１工区内の第１地点で弥生時代中期後葉の集落が検出されている。また第１地点は，ほぼ完全に復元された塞ノ神式土器の深鉢形土器１点と石鏃１点だけからなる特異なありようを示す早期後葉の遺跡でもある。第３工区と第４工区は全域が調査されている。旧石器時代から縄文時代草創期の包含層は１ケ所も確認されていない。縄文時代早期前葉に第２地点で前平式期の集落が出現し，同中葉になると，第２・３・６・10地点と広がりを見せ，同後葉になると，第７・９・10地点に分布を変える。第７地点の出土状況は第１地点とよく似ているようであり，この二者と第９・10地点との関連は今後究明されねばならない課題となるであろう。なお，第９地点は，工業用水道タンクの建設予定地であったが，確認調査の結果遺構・遺物の出土が多量に上ることが予想されたため，全面調査を実施せず，工業用水道タンクは現在地に建設された。縄文時代前期になると，第10地点の西側にごくわずかに分布するだけで，早期後葉との落差が大きい。同中期になると台地上からほとんど姿を消し，同後期になって陥し穴列が出現し，ごくわずかの土器が残される。同晩期になって再びにぎやかになり，第４・５地点で遺構・遺物とも多量に出土している。

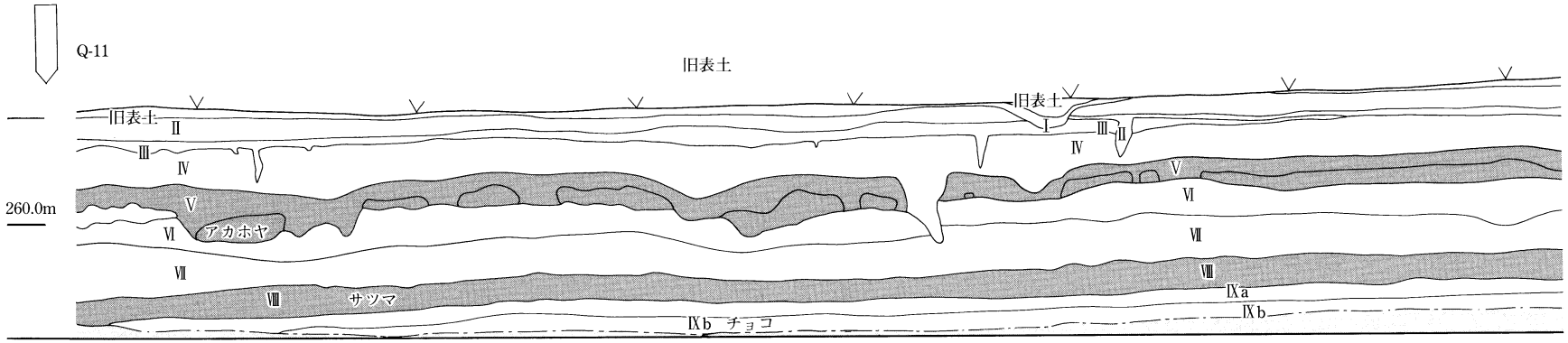
次に，土層について概略述べる。Ⅰ層は表土。Ⅱ層黒色土は，中世以降の包含層である。Ⅲ層は暗茶褐色を呈するⅡ層とⅣ層の漸移層で，縄文時代晩期から弥生時代の包含層である。Ⅳ層は黄褐色土と黄白色の火山灰に二分され，黄褐色土は縄文時代後期の包含層で，陥し穴の掘込み面でもある。Ⅴ層は上部に縄文前期の遺物を包含するが，下部は無遺物層であるアカホヤ火山灰層である。Ⅵ層及びⅦ層が縄文早期の包含層であり，第10地点の主体となる層である。Ⅵ層は白色の軽石を多く含む暗茶褐色土で，Ⅶ層は軽石が少なく，黒褐色を呈する。Ⅷ層はサツマ火山灰層で明黄褐色を呈し，第10地点でもブロック場の堆積を見せず,全面に堆積している。Ⅸ層は黒褐色ロームであり，本遺跡では遺構・遺物は出土していない。以下，入戸火砕流まで何枚かの桜島パミスを介在しながらロームが堆積している。



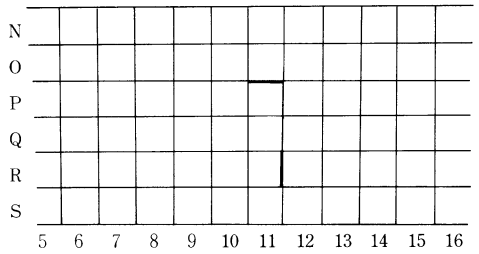
第１図　上野原台地周辺地形及び上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内遺跡分布図



R－11区　東壁土層断面図



Q－11区　北壁土層断面図



第２図　上野原遺跡第10地点の土層

第Ⅳ章　発掘調査

第８節　縄文時代早期の調査（再掲）

Ⅵ層およびⅦ層が遺物包含層であった縄文時代早期の時期の発掘調査は，各グリッドごとに進捗状況に応じて適宜行った。

上野原遺跡第10地点の発掘調査を行った結果は，約15万点にのぼる多量で，しかも多種多様な遺物が出土したことと，多様な遺構が検出されたことであった。これらのことは，南九州では縄文時代早期の段階において，すでに全国に先駆けて多彩な縄文文化が開花していたことを示すものとして，発掘調査期間中から注目された。

その成果として，平成10年６月30日には 767点の上野原遺跡出土品が重要文化財として指定された。

なお，第２分冊では縄文時代早期の時期に属する遺構として検出した，集石遺構・石核母岩集積遺構・磨石集積遺構・石斧埋納遺構・土器埋納遺構についてすでに報告を行った。

そこで，第４・５分冊と第６分冊前半部分とでは出土した土器について，第６分冊後半部分では土製品について，第７・８分冊では石器・石製品についての報告を行うこととする。

したがって，遺構検出状況などに関わる部分について必要がある場合は適宜ふれるが，詳細については第２分冊を併せて参照されたい。

２．遺物（再掲）

上野原遺跡第10地点で，縄文時代早期の時期の包含層であるⅥ層およびⅦ層からは，約15万点に達する遺物が出土した。Ⅵ層およびⅦ層から出土したこれらの遺物が属する時期は，南九州の土器編年に照らせば，縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥峯式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と，早期後葉の時期に編年されている平栫式土器・塞ノ神式土器などの土器群とが出土している。しかしながら，その出土量の比率は，早期後葉の時期の土器群が出土土器全体の９割以上を占める状況にあった。

以上の状況から上野原遺跡第10地点では，縄文時代早期中葉の時期から早期後葉の時期に人々の生活が行われ，遺跡が形成されたと考えられる。

さて遺物の分類では，壺形土器などを含む土器や耳栓などの土製品，多種多様な石器そして垂飾品などの石製品に分かれることが明らかとなった。

そこで，土器・土製品・石器・石製品の順に順次報告していくこととする。

では，まず土器について報告を行う。

（1）土　器（再掲）

先に述べたように上野原遺跡第10地点で出土した土器は，現在示されている南九州の縄文土器編年に照らせば，縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥峯式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と，早期後葉の時期に編年されている平栫式土器や塞ノ神式土器などの土器群とに属することが明らかになった。では本分冊では，次に縄文時代早期後葉後半の時期に属する土器群から報告を行うことにする。

B）　縄文時代早期後葉の土器

b．早期後葉後半の土器

上野原遺跡第10地点で出土した縄文時代早期後葉後半の時期に属する土器は，河口貞徳氏が設定した型式分類に従い，下記のように６群に分類することができた。

第１群　塞ノ神・微隆帯文土器
第２群　塞ノ神Ａａ式土器
第３群　塞ノ神Ａｂ式土器
第４群　塞ノ神Ｂｃ式土器
第５群　塞ノ神Ｂｄ式土器
第６群　苦浜式土器

なお，上野原遺跡第10地点の報告を行うにあたり，縄文早期後葉の時期に位置づけられている各型式に属する土器が，本地点でどのように出土しているか，その分布状況を比較し，検討を行った。その結果や，近年の南九州における当該期の層位的な土器出土状況の結果，そして放射性炭素年代測定法での測定値の結果，さらに土器型式組列を検討した結果，などを考慮した。その上で本報告では，河口編年に基づいた土器分類での報告を行うこととした。

b－1　塞ノ神式土器群について

①　定義

塞ノ神式土器は，鹿児島県伊佐郡菱刈町市山に所在する塞ノ神遺跡出土の土器を標識とする土器である。1933年に木村幹夫氏が全国に紹介して以来，約70年間にわたり，多くの研究者による編年研究史がある土器である。

今回報告を行うにあたり，先に述べたように河口編年に基づき，次のように従来の枠組みにある塞ノ神式土器を５群に分類した。

第１群：微隆帯文土器

ラッパ状に開く口縁部を中程で屈曲させる，いわゆる「二重口縁」の器形を呈する土器である。特に屈曲部より上位の部分を肥厚させる一群の土器が注目できる。口縁部には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し，胴部には平栫式土器の指標の１つである結節縄文の結節部のみを施文した土器である。

第２群：塞ノ神Ａａ式土器

ラッパ状に開く口縁部は直線的になる。口縁部は沈線文のみで文様を構成し，胴部には網目撚糸文を施文した土器である。

第３群：塞ノ神式Ａｂ式土器

篦描きの区画内に縄文系の文様を施文した土器である。

第４群：塞ノ神Ｂｃ式土器

貝殻により，口唇部や口縁部そして頸部に刻みや刺突連点文を施し，胴部には篦描きの区画内に貝殻条痕を施文した土器である。

第５群：塞ノ神Ｂｄ式土器

口縁部器形はラッパ状に外反するが，内弯する土器もある。口縁部文様は貝殻または篦による格子状文や平行沈線文，胴部には刺突連点文を施文した土器である。

以上，塞ノ神式土器群を第１群から第５群まで分類した，その概略を示した。この分類に基づき作成した図が出土状況全体図および出土状況図そして土器実測図(第３図～第85図)である。次節以降，これらの分類に基づいて各群を詳述していくこととする。

②　土器の大きさ

第１群から第５群まで共通して，塞ノ神式土器に属する深鉢形土器の大きさには，いくつかのまとまりがあることが観察できた。そこで，深鉢形土器の胴部最大径および口径の大きさで分類した結果，大きく，

１）大型土器，２）中型土器，３）小型土器

という３種類に，さらに２）中型土器が３種類に，分けることができた。分類基準は次のとおりである。

１）大型土器とは胴部最大径が40cm前後，口径45cm前後に達する土器を指す。

２）中型土器とは胴部最大径が18cm前後の土器から，30cm前後の土器までを指す。さらに，中型１類土器は胴部最大径が30cm前後の土器を，中型２類土器は胴部最大径が20cm以上の土器を，中型３類土器は胴部最大径が20cm未満の土器を指す。なお，中型２類土器は胴部最大径が22～23cmに個体数のピークが，中型３類土器は胴部最大径が17～18cmに個体数のピークがくるようである。

３）小型土器とは胴部最大径が15cm未満の土器を指す。個体数のピークは胴部最大径が12～13cmにくるようである。

さて，この分類基準にしたがって，各群各類ごとに出土が認められた状況を記載した。これは，深鉢形土器の大きさ，つまり土器容量から見た土器型式ごとの組み合わせを示したものである。

項目の中には，出土が認められなかった状況を併記した群や類もある。それらの項目については，その群や類に属する土器の中に，“出土が認められなかった”とした大きさの土器が“存在しなかった”ことを意味するものではない。また，資料化しなかった多くの土器の中に“出土が認められなかった”とした大きさの土器が存在する可能性を全く比定するものでもない。

この分類の結果については，再度小結で論じることとする。

① 第１群　塞ノ神・微隆帯文土器
（第３図～第22図）

ｉ）概要

第１群に属する土器は，399点の土器片が出土し，その内の189点，68個体を資料化した。

第１群は，寺師見國氏以来今日まで，塞ノ神式土器の範疇として把握されてきた土器である。近年では，河口編年においても独立した位置付けはなされず，新東編年において「栫ノ原式土器」の１類型として捉えられている土器群である。上野原遺跡第10地点では本群に属すると把握した土器がまとまって出土したことから，群を分けることにした。

第１群は，器形的特徴について「頸部でラッパ状に屈曲する。口縁部は内弯状に外反しながら中程でさらに屈曲する，いわゆる「二重口縁」を呈している。口縁部は波状口縁を呈する土器とした。一方，施文的特徴については「口唇平坦面上端に羽状の刻線を施文し，口縁部外器面の文様は口縁部縁と内弯屈曲部付近に１条から２条の刻目微隆帯文が巡る。」という定義ができる土器群である。

ではまず最初に,上野原遺跡第10地点において，第１群に属する土器がどの地点から主に出土しているか，その状況を検討してみよう（第３図～第９図参照)。なお，図中のドットは実測図が未掲載である土器も１ドット１点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは，集中して出土している区域として，①Ｒ・Ｓ－10区からＱ・Ｒ－11区およびＱ－12区にかけての区域と，②Ｒ－13・14区の区域とを挙げることができる。

ところで①区域と②区域とは共に，平栫式土器様式期の集中区域（第５分冊参照）とも，第２群（塞ノ神Ａａ式土器）に属する土器の集中区域（第23図参照）とも重なる区域である。そのうえ，Ｓ－11区からＲ・Ｓ－12区にかけての区域には，遺物があまり出土しない状況も平栫式土器様式期や第２群土器期と共通する同様の状況である。

さらに，土器集中区域の中に土器が特に集中して出土している地点が認められることや，①区域中の土器集中地点どうしに接合関係が認められることや，①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることなどが注目できる。

これらの状況から，土器が地形の傾斜などの自然的要因によって集中拡散した結果ではなく，当時の状況を概ね反映した結果であると考えられる。

また，①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることから，①区域と②区域とがほぼ同時に形成されたと考えられる。

さて，上野原遺跡第10地点で出土した第１群に属する土器を分析していくことにする。

第１群は，深鉢形土器と壺形土器とで構成されていた。そのうち，本報告では深鉢形土器を器形的特徴および施文的特徴から１類土器から５類土器まで５分類した。その特徴を以下に記す。

①－１　第１群１類土器（第10図１～第12図17）

ｉ）概要

第１群１類土器を，土器の大きさによって分類すると，胴部最大径が40cm前後の大型に属する土器（２）と，胴部最大径が30cm以上の中型１類に属する土器（３・８・17）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（７）という３種類の大きさが異なる深鉢形土器と，小型深鉢形土器に属する土器（４）とが出土した。

第１群１類に属する土器の器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がゆるやかな波状口縁を呈する土器（２・３・４・７・８）と，ほぼ平口縁を呈する土器（17）とが出土している。但し，本類に属する波状口縁の度合いは，大変緩やかであるため，破片では区別が付きにくい状況である。

さて，口縁部はわずかに内弯しながら口縁中央部でいくぶんか屈曲する。胴部はわずかに丸みを帯びた円筒形を呈する。明瞭に本類に属するとわかる底部は出土しなかった。

一方，施文的特徴として，代表的な（２）を例に記述する。ヘラ状工具を使って，口唇部外面と内面とに刻みを施す特徴がある。なかには上面観が羽状に刻みを施す土器も観察できた。

さて，口縁上端部に２条，口縁中央部に３条，横位方向に刻目を施した微隆帯を巡らしている。微隆

帯間には横位方向に波状になる沈線文と刺突連点文とを施している。口縁中央部より下位には，横位方向に刻目を施した，５条の微隆帯を波状に施している。そして，胴部には６条の結節文を縦位方向に施している。この土器は，口縁部に微粒帯文を施す土器と，胴部に「結節文」を施す土器とが同一個体であることを示す，指標となる土器である。

さて，第１群１類に属する土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は少なかったことは注目できる。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整，もしくは木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整もしくは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が，内器面では暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

①－２　第１群２類土器（第13図18～第14図24）

ｉ）概要

第１群２類土器を，土器の大きさによって分類すると，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（22）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（18・19・24）という２種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が40cm前後の大型に属する土器や胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器の出土は認められなかった。

ところで器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口唇上端部は内傾する平坦面を作出する。口縁部が内弯しながら，口縁中央部で屈曲し立ち上がる。しかし口縁部外器面の稜線は非常に不明瞭であり，口縁部内器面では稜線は観察できない。胴部は直線的な円筒形である。

一方，施文的特徴として代表的な(18)を記述する。さて，口唇上端部の内傾面には刻みを施す。口縁上端部に２条，口縁下半部に５条，横位方向には数条の沈線文を施す点とを挙げることができる。そして胴部には２条もしくは３条の結節文を縦位方向に刻目を施した微隆帯を巡らしている。微隆帯間の施文では，土器に向かって右側と左側とでは文様構成が異なる土器である。すなわち，右側では横位方向に波状になる沈線文と刺突連点文とを施している。一方，左側では横位方向に波状になる刻目を施した微隆帯文が施される土器である。

さて，第１群２類に属する土器の胎土中鉱物は，石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器がなかったことは注目できる。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整を，内器面は木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を，あるいは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では暗茶褐色から暗黄褐色が，内器面では暗黄褐色から暗褐色が主流であった。

①－３　第１群３類土器（第15図25～第16図36）

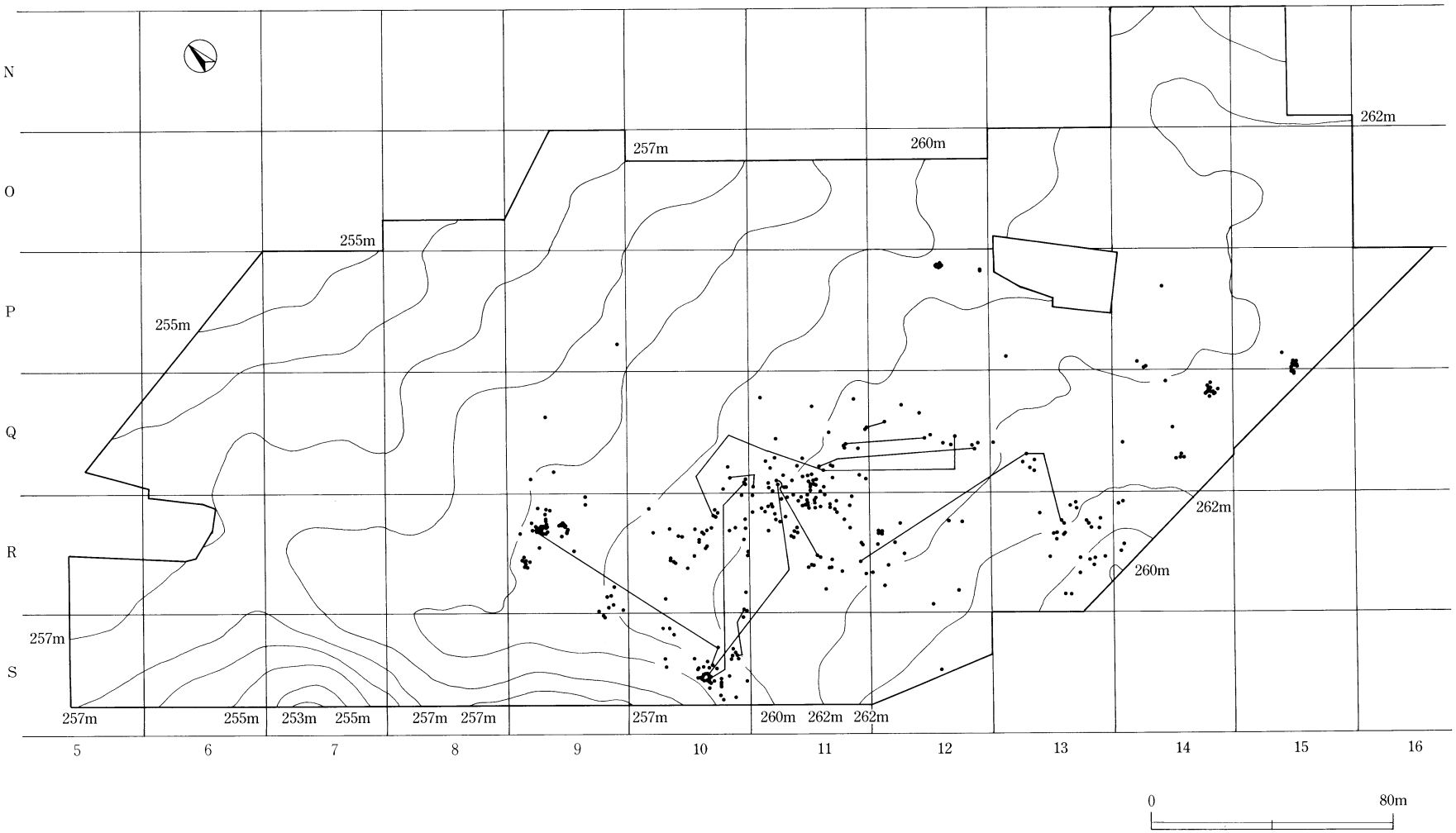
ｉ）概要

第１群３類土器を，土器の大きさによって分類すると，胴部最大径が40cm前後の大型に属する土器（33）と，胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（34・35）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（31）という３種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器の出土は認められなかった。

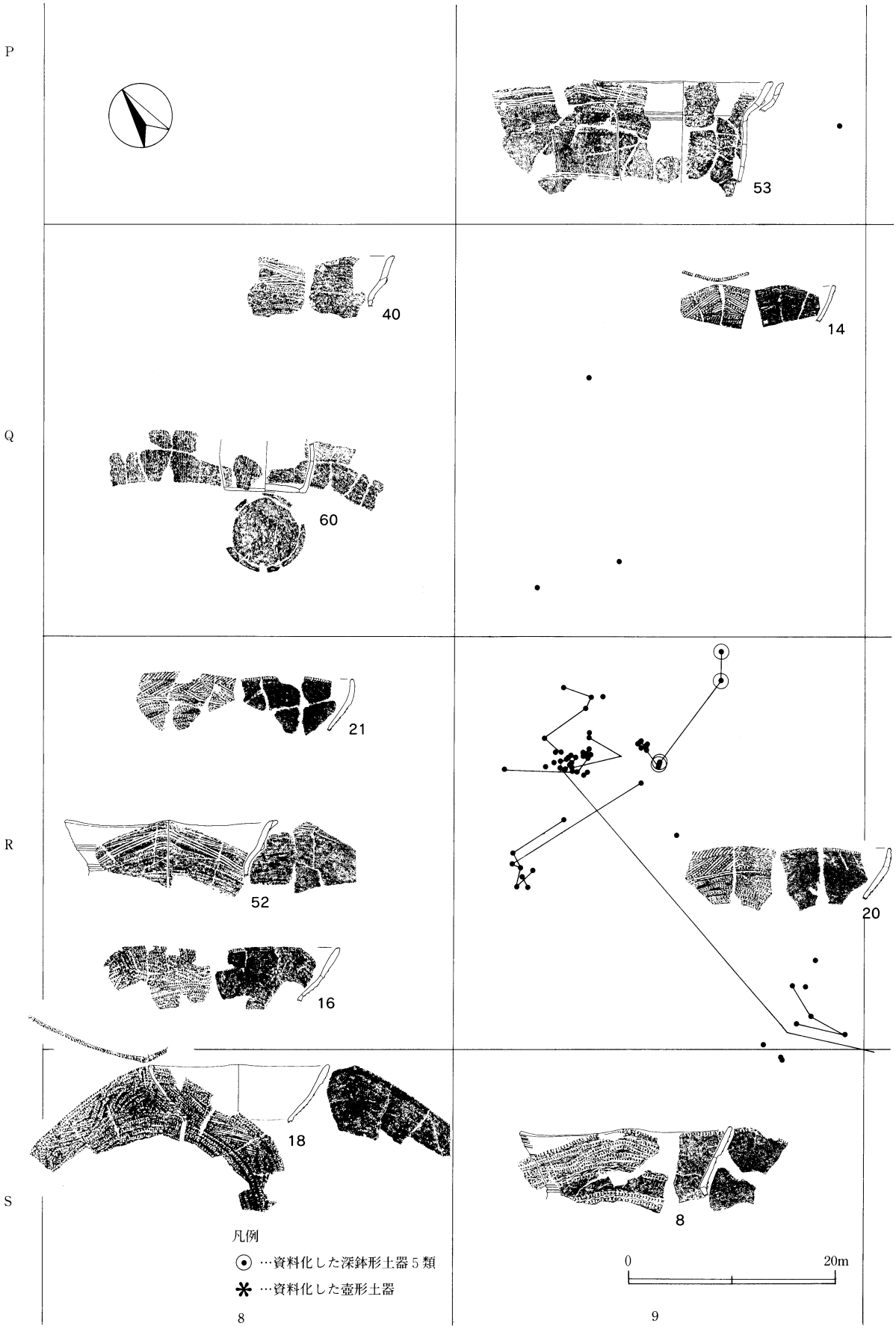
ところで器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部が外反しながら，口縁中央部で強く屈曲し立ち上がる。２類土器では不明瞭であった，口縁部外面中央部が屈曲する部分の稜線が，３類土器では明瞭であるのが，３類土器の指標である。但し口縁部内面中央部が屈曲する部分の稜線は，不明瞭であるのは，注目できる。本類に属する土器で口縁部と胴部とが接合した例が少なく，胴部形態の詳細は不明である。しかし，（31）から胴部は張りを持った円筒形を呈すると考えられる。

一方，施文的特徴としては，(27)や(32)のように口唇上端部には刻みを内面と外面とに２列施し，屈曲部より上位では波状あるいは山形状に沈線文や刺突連点文を施すのが特徴である。また，屈曲部より

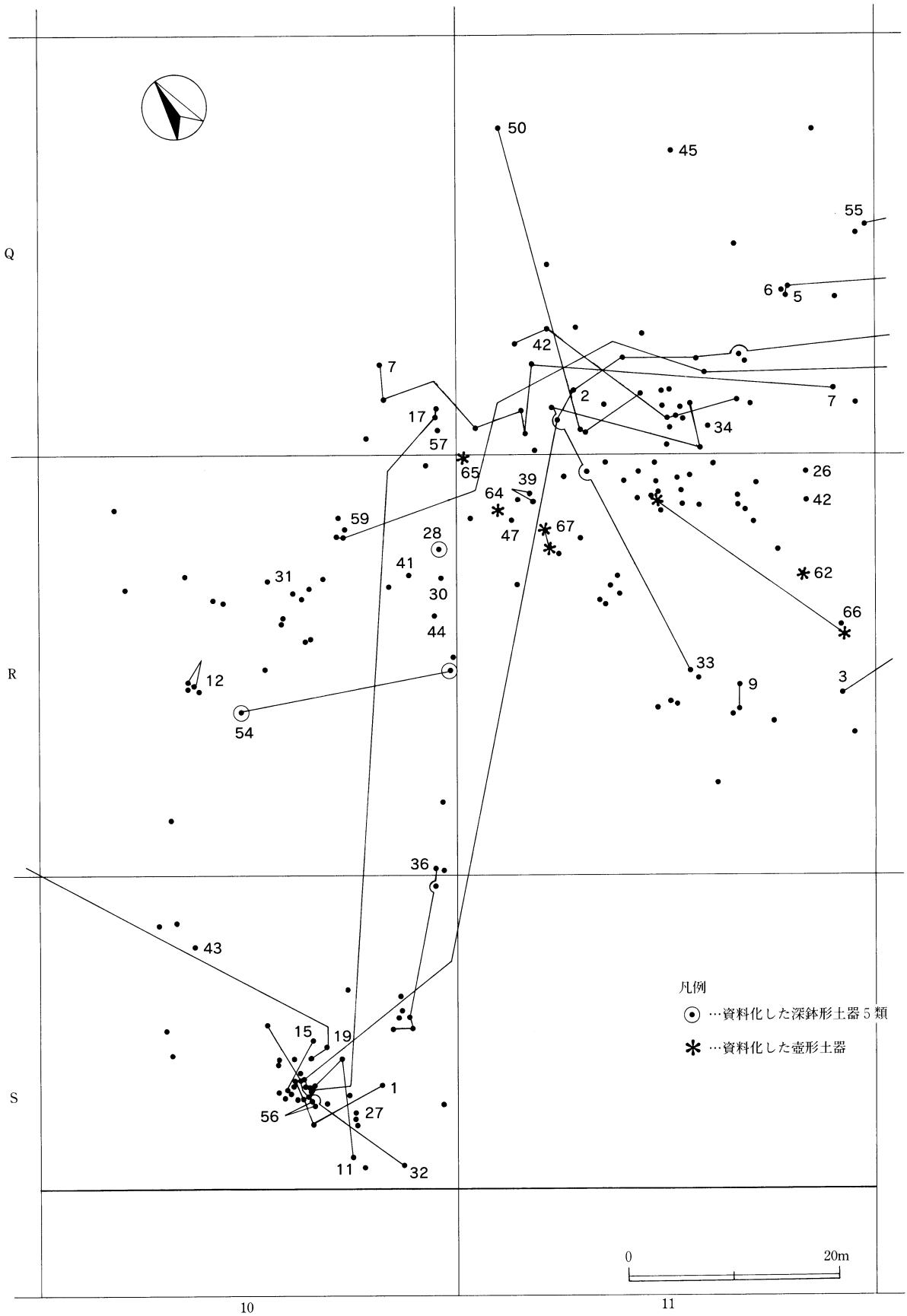
（p.25へ続く）



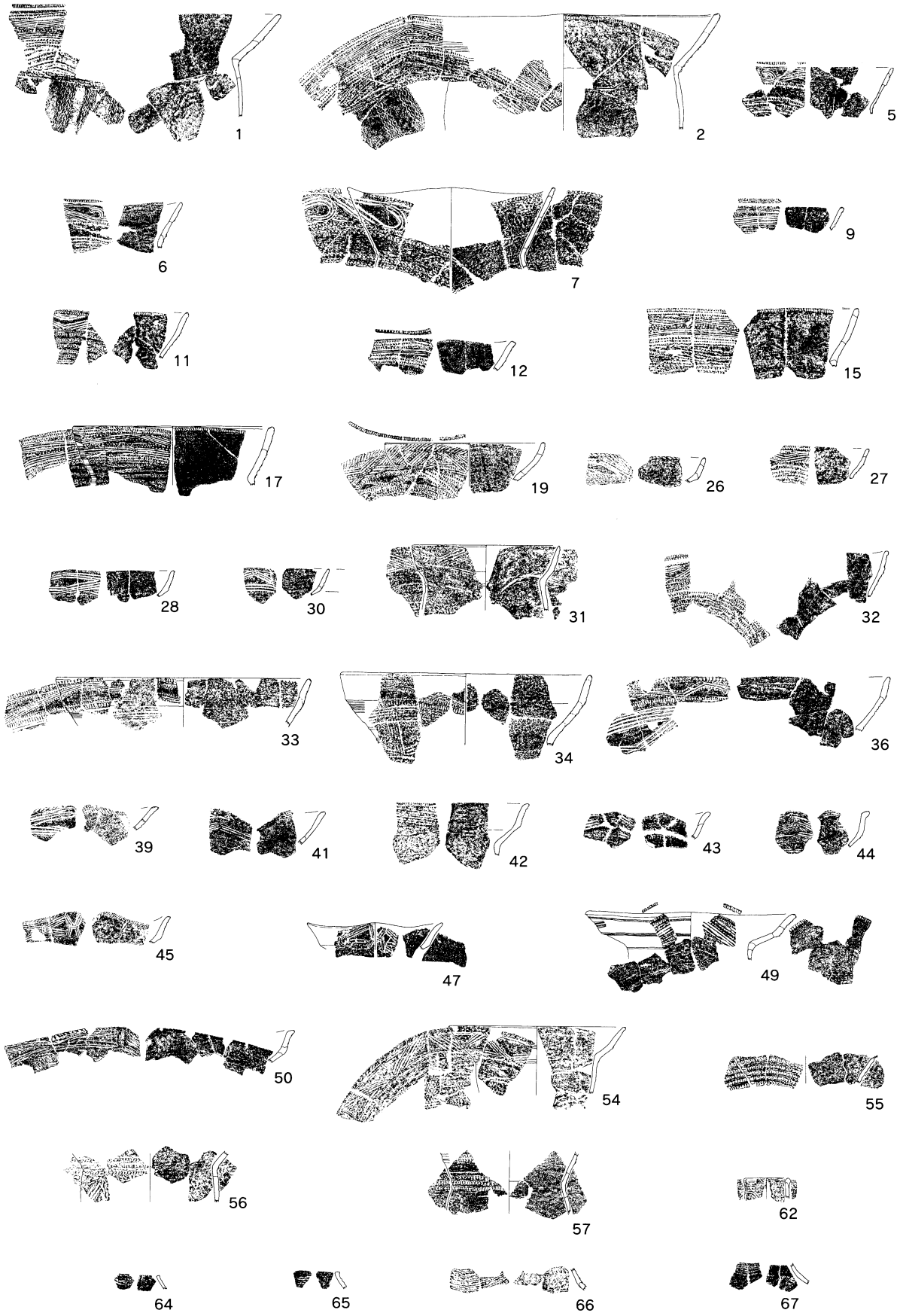
第３図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況全体図



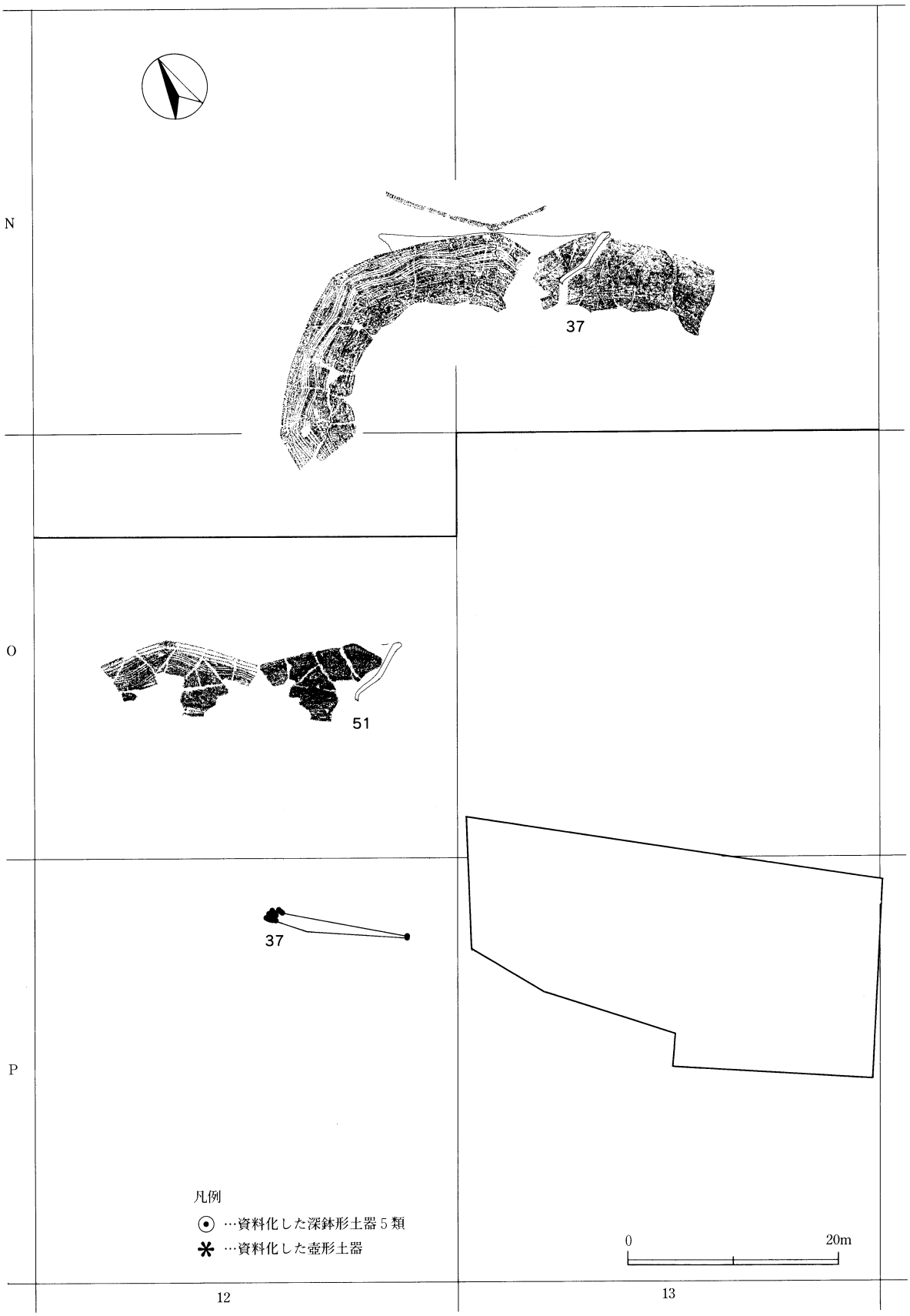
第４図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図１(P・Q・R・S－８・９区)



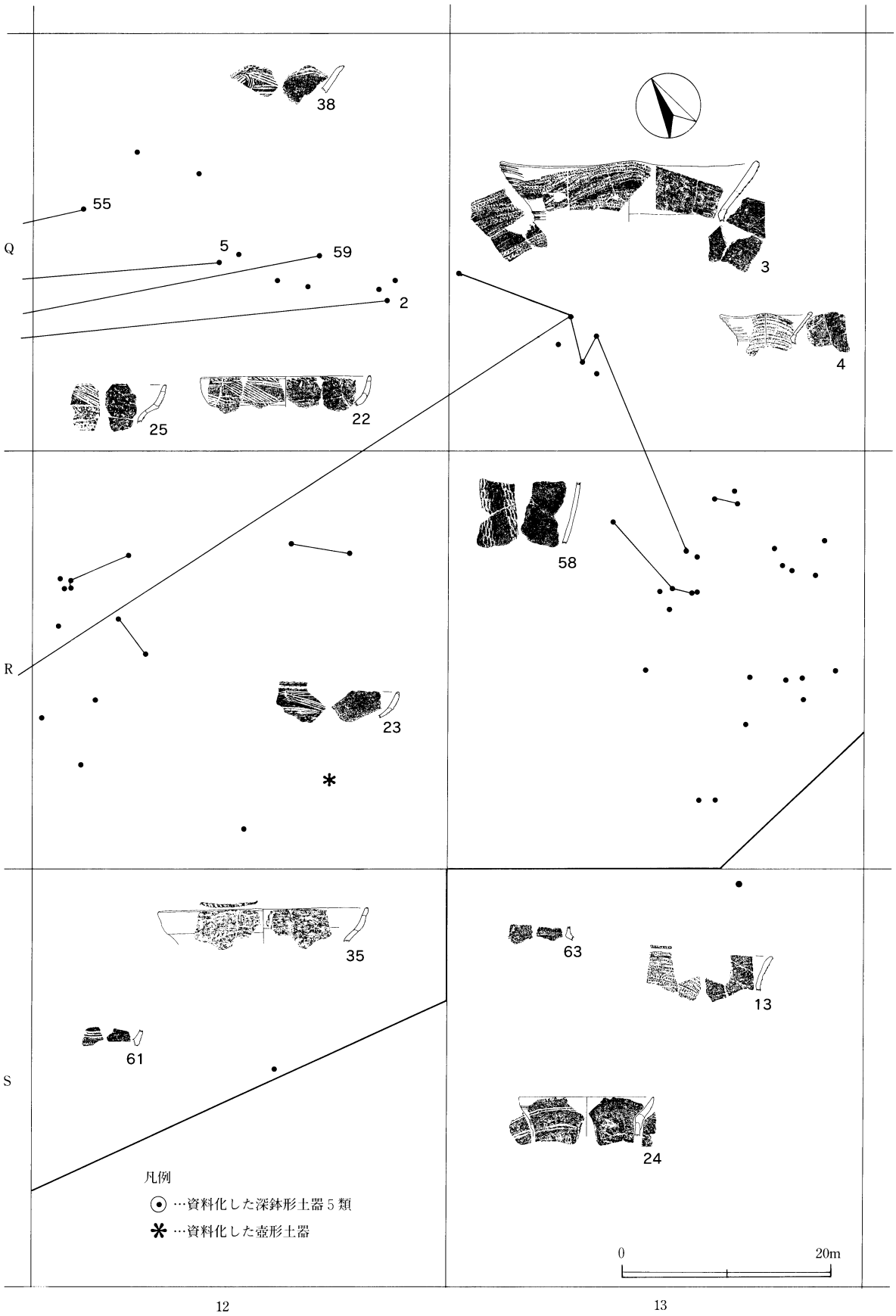
第５図　塞ノ神･微隆帯文土器出土状況図２(Q･R･S－10･11区)



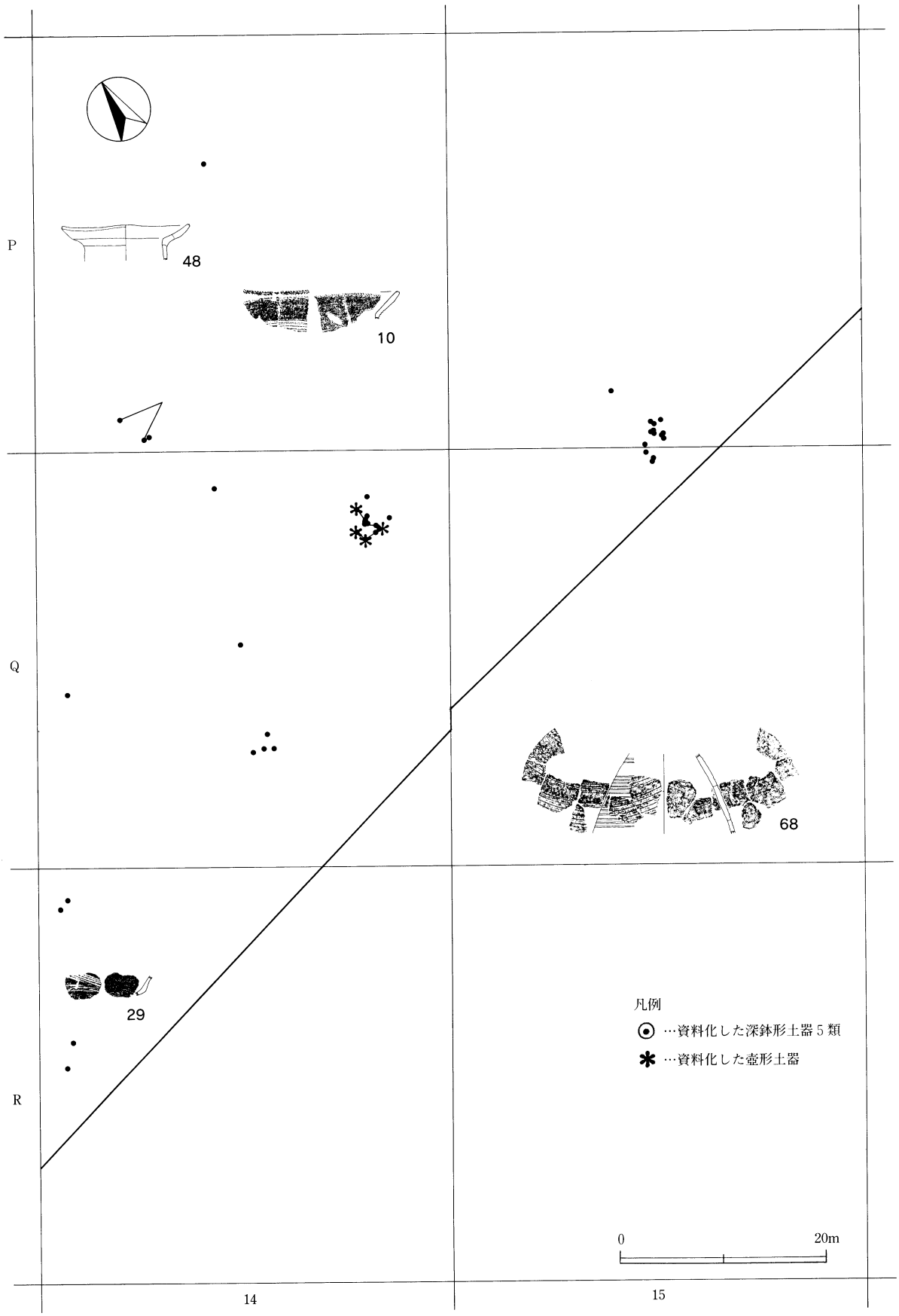
第6図　Q・R・S－10・11区出土 塞ノ神・微隆帯文土器実測図



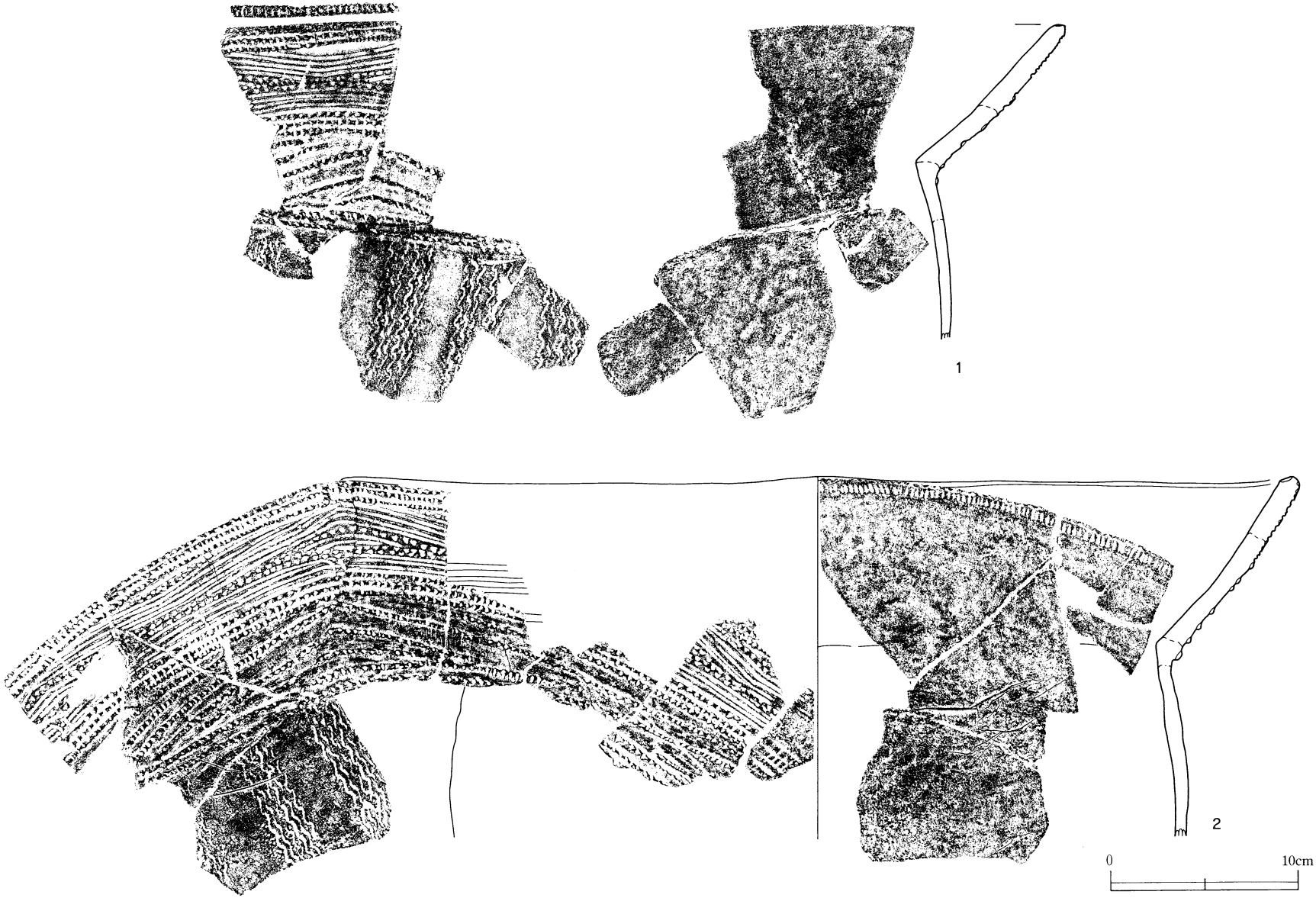
第７図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図３(N・O・P－12・13区)



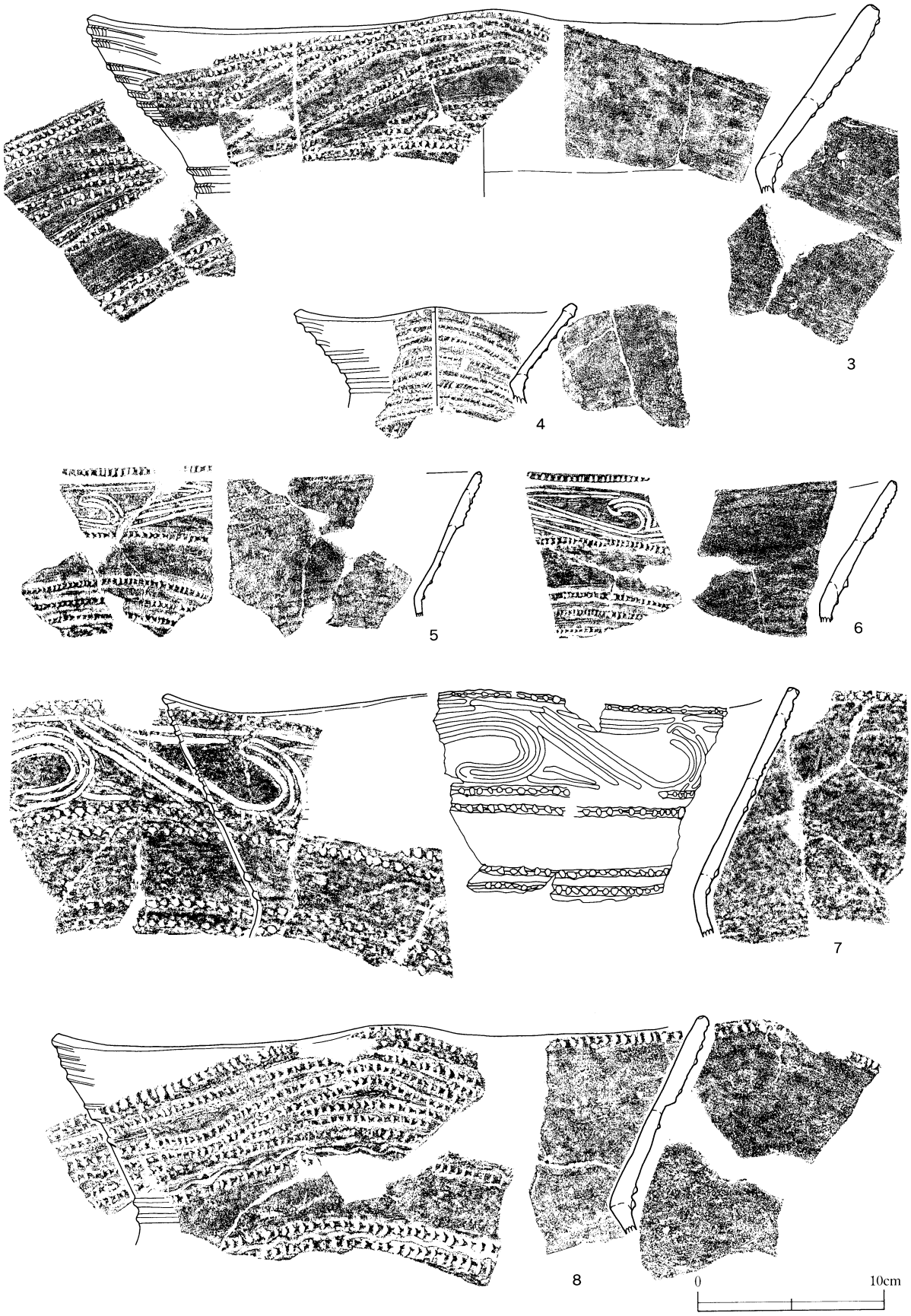
第８図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図４(Q・R・S－12・13区)



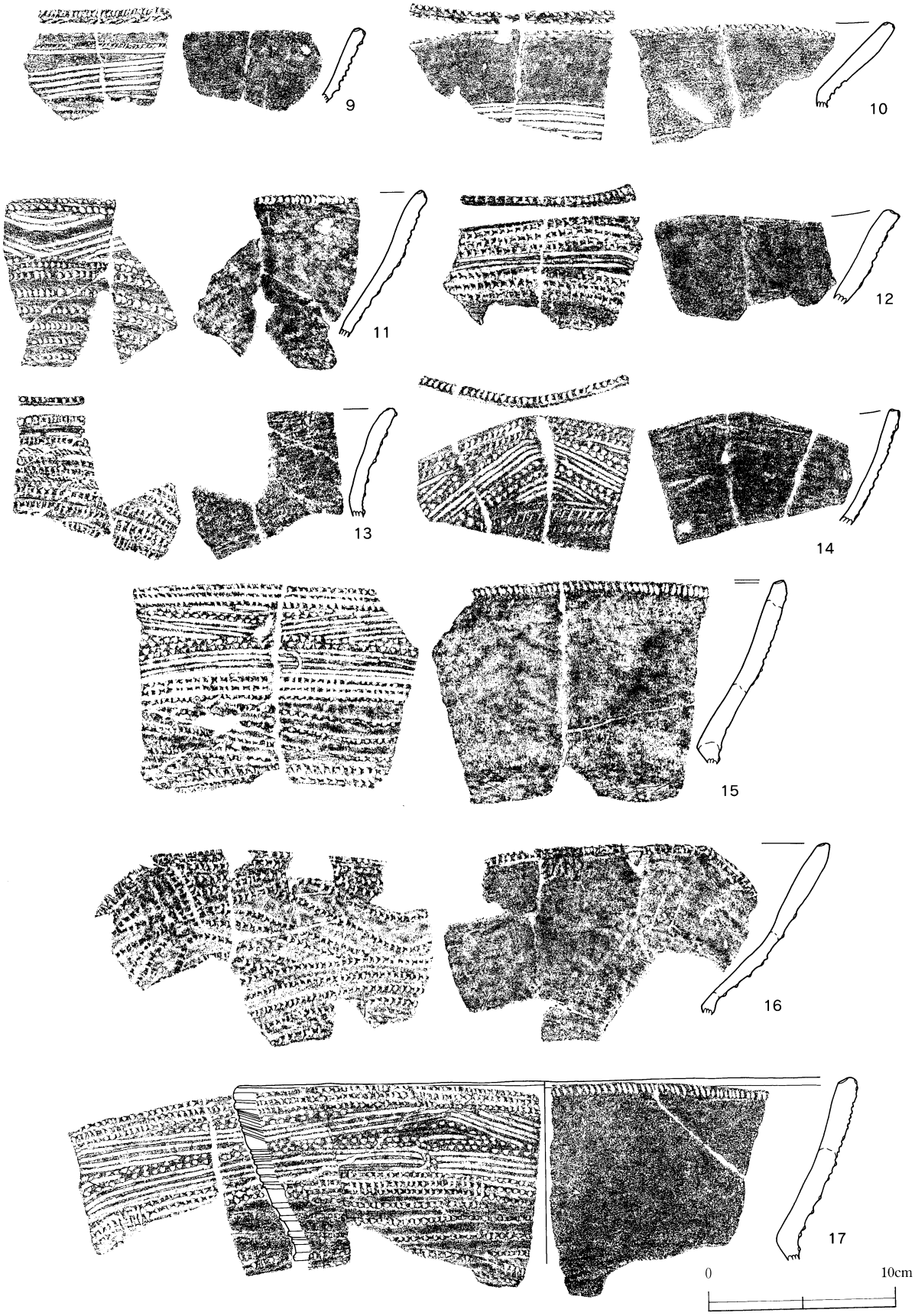
第９図　塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図５（P・Q・R－14・15区）



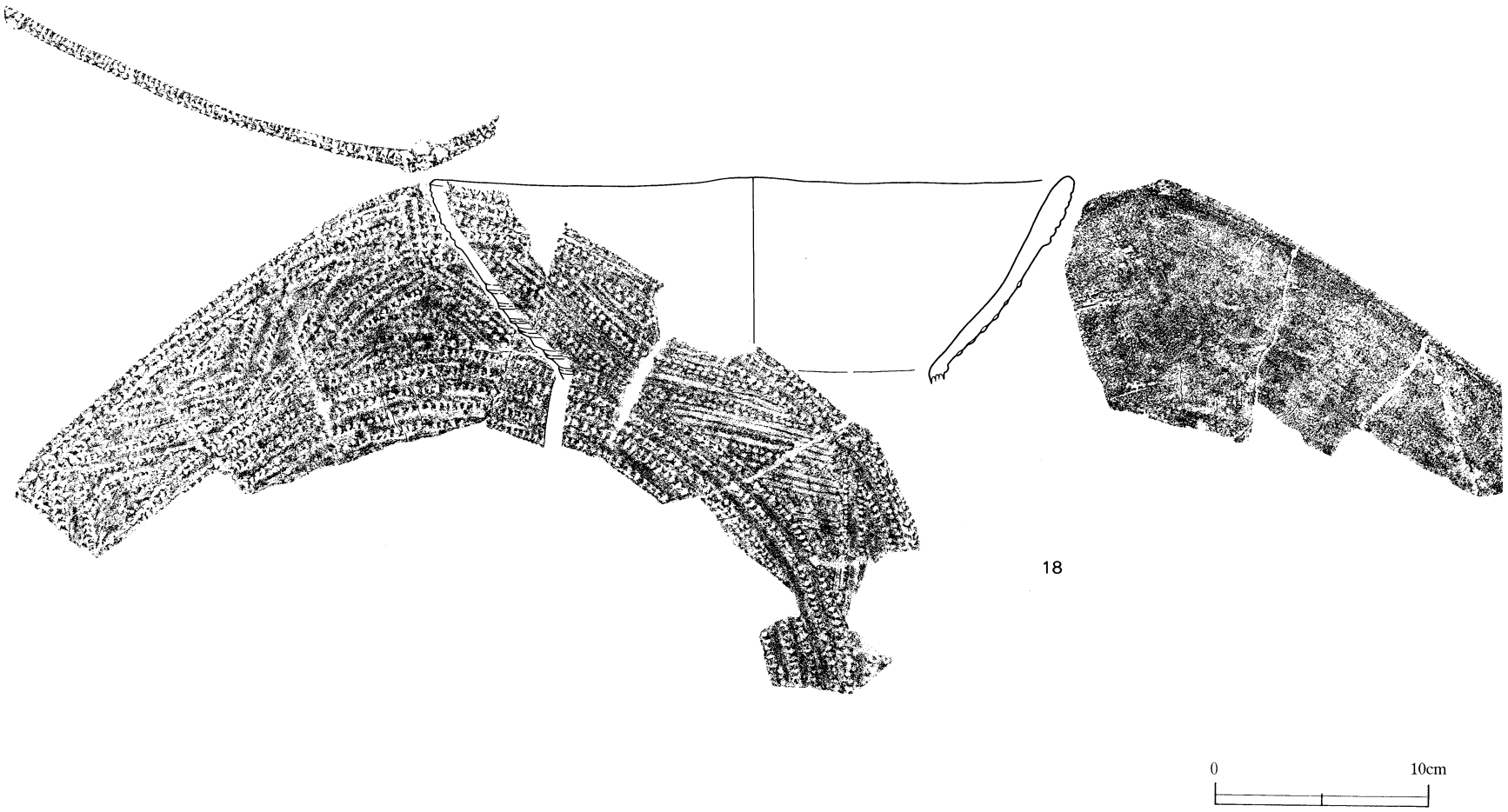
第10図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図１（１類－１）



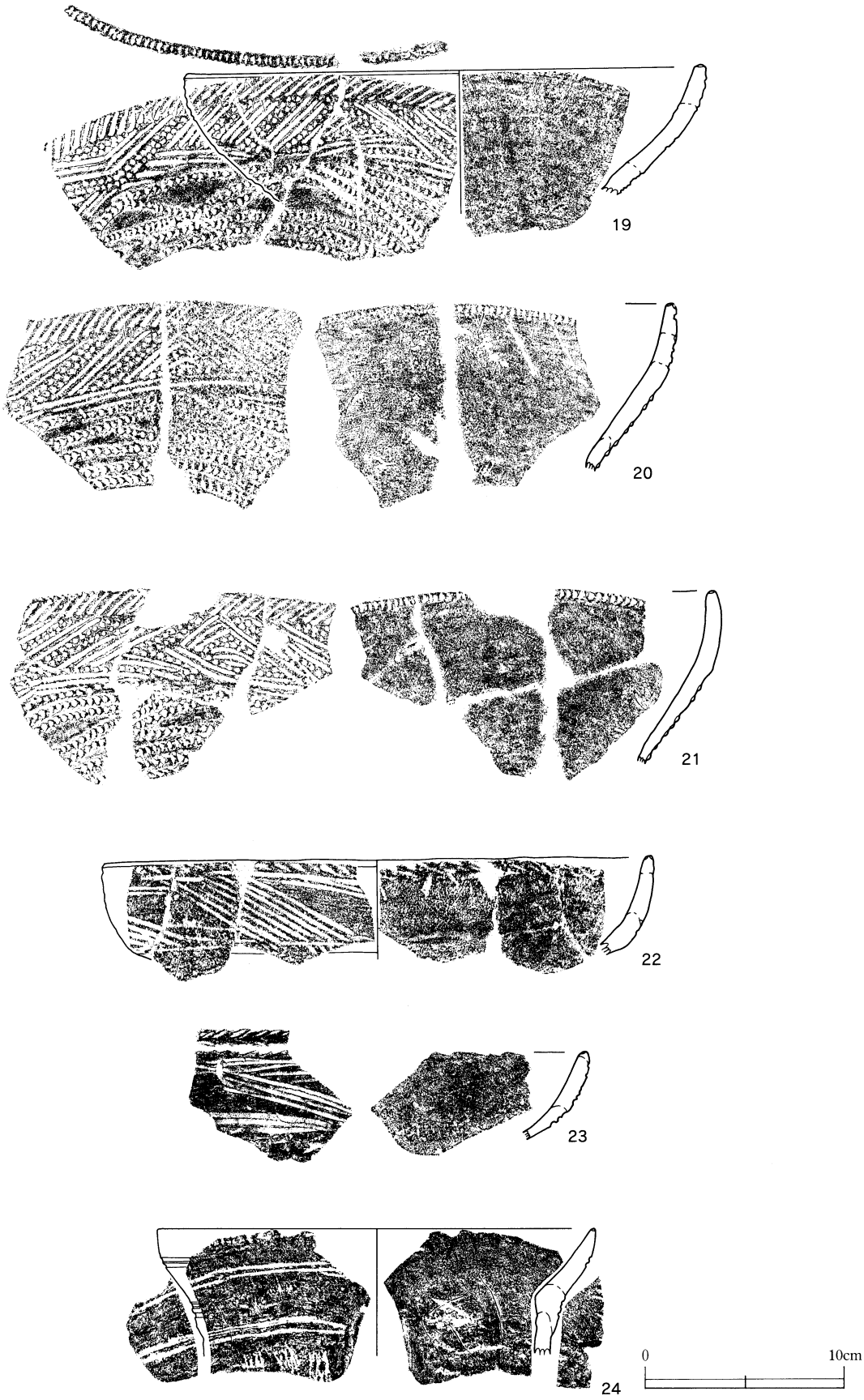
第11図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図２（１類－２）



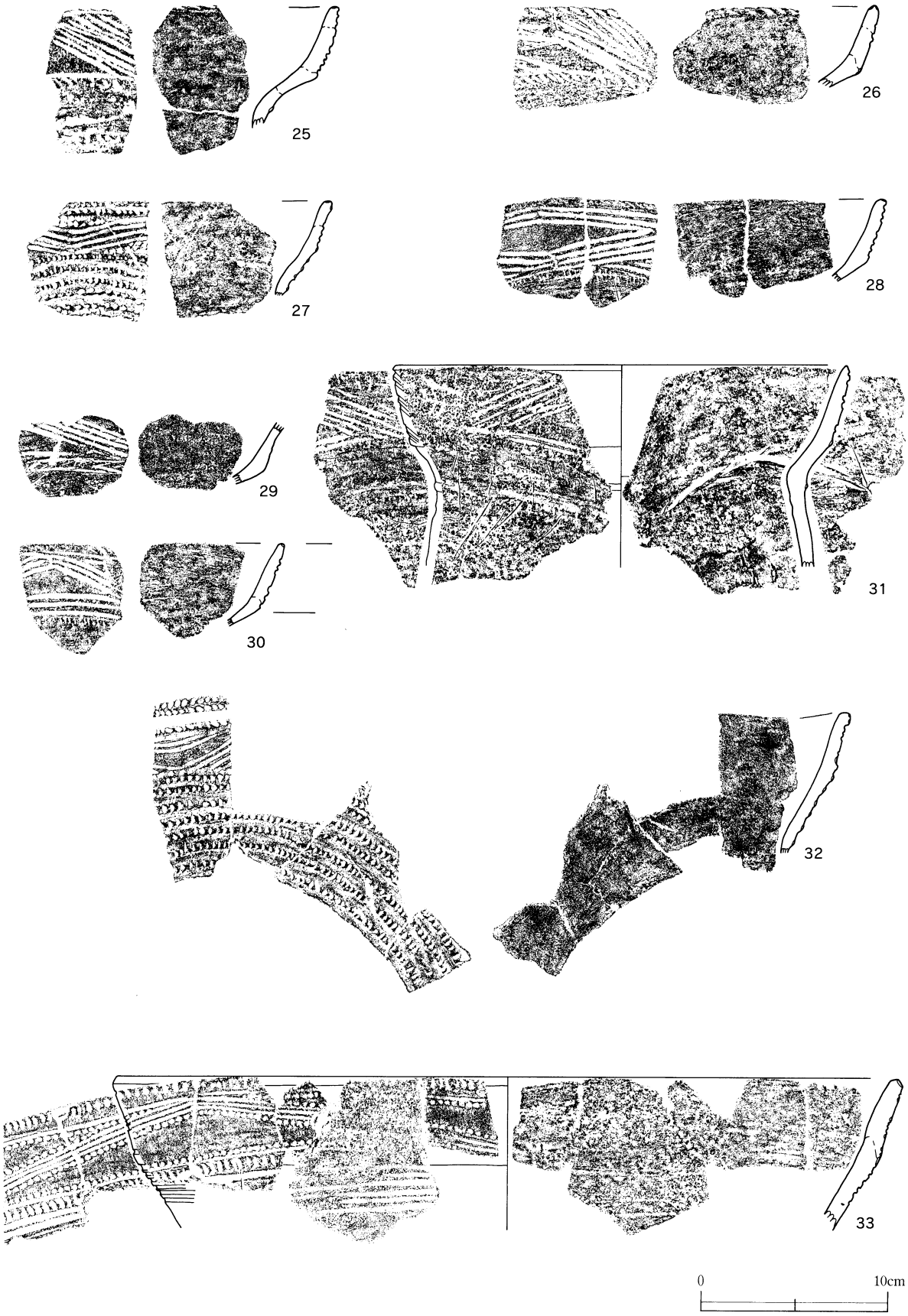
第12図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図３（１類－３）



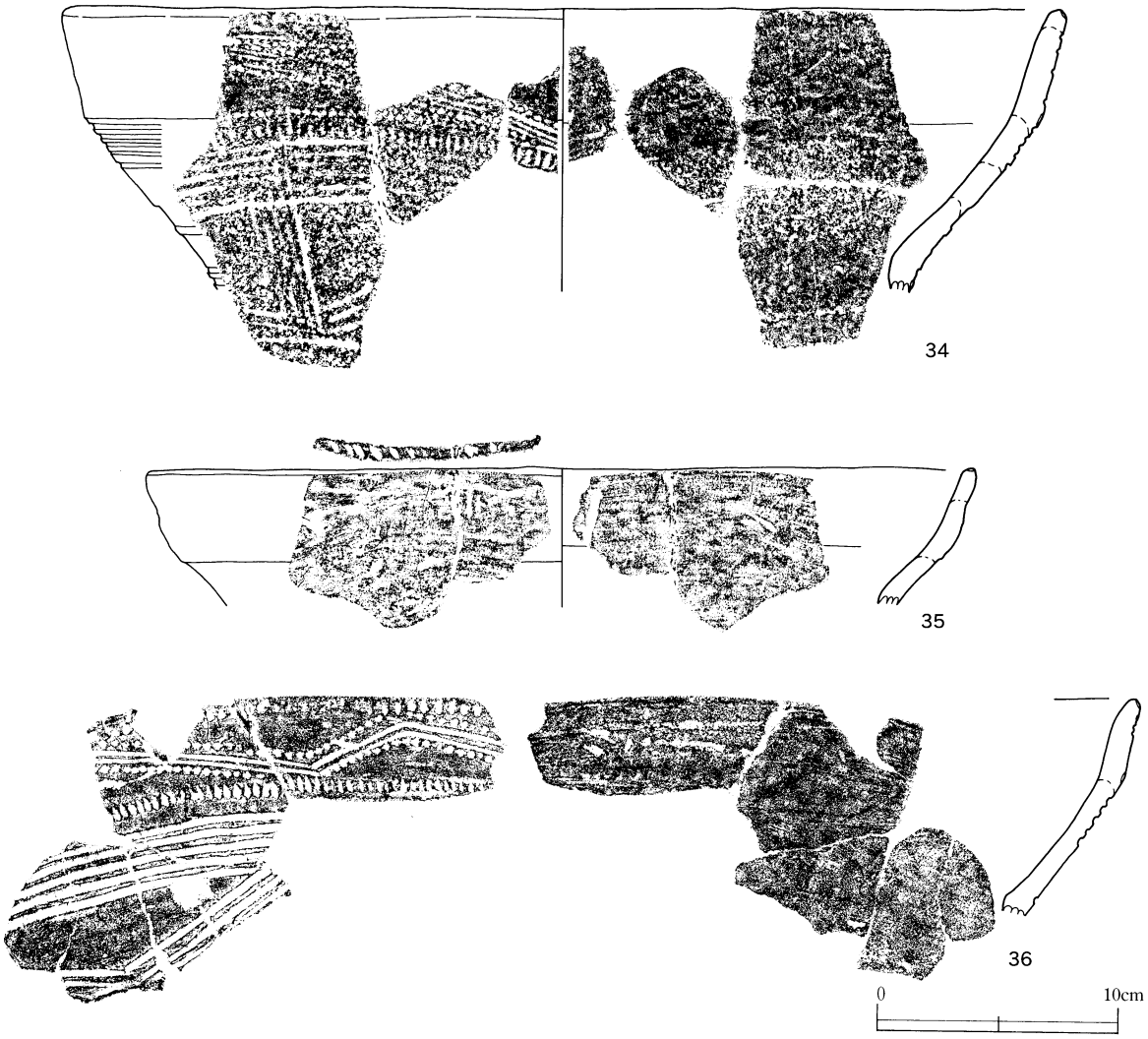
第13図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図４（２類－１）



第14図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図５（２類－２）



第15図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図６（３類－１）



第16図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図７(３類－２)

(p.11から続く)

下位の部分では横位方向に刻目を施した，５条以上の微隆帯を波状に施している，のが本類の指標である。しかし中には(34)のように口縁屈曲部より下位の部分にも横位方向や鋸歯状に沈線文を施す土器がある。ところで(34)では口縁中央部の屈曲部と，胴部と口縁部との境の屈曲部には，貼付突帯を巡らし，その上に刻みを施す土器もある。

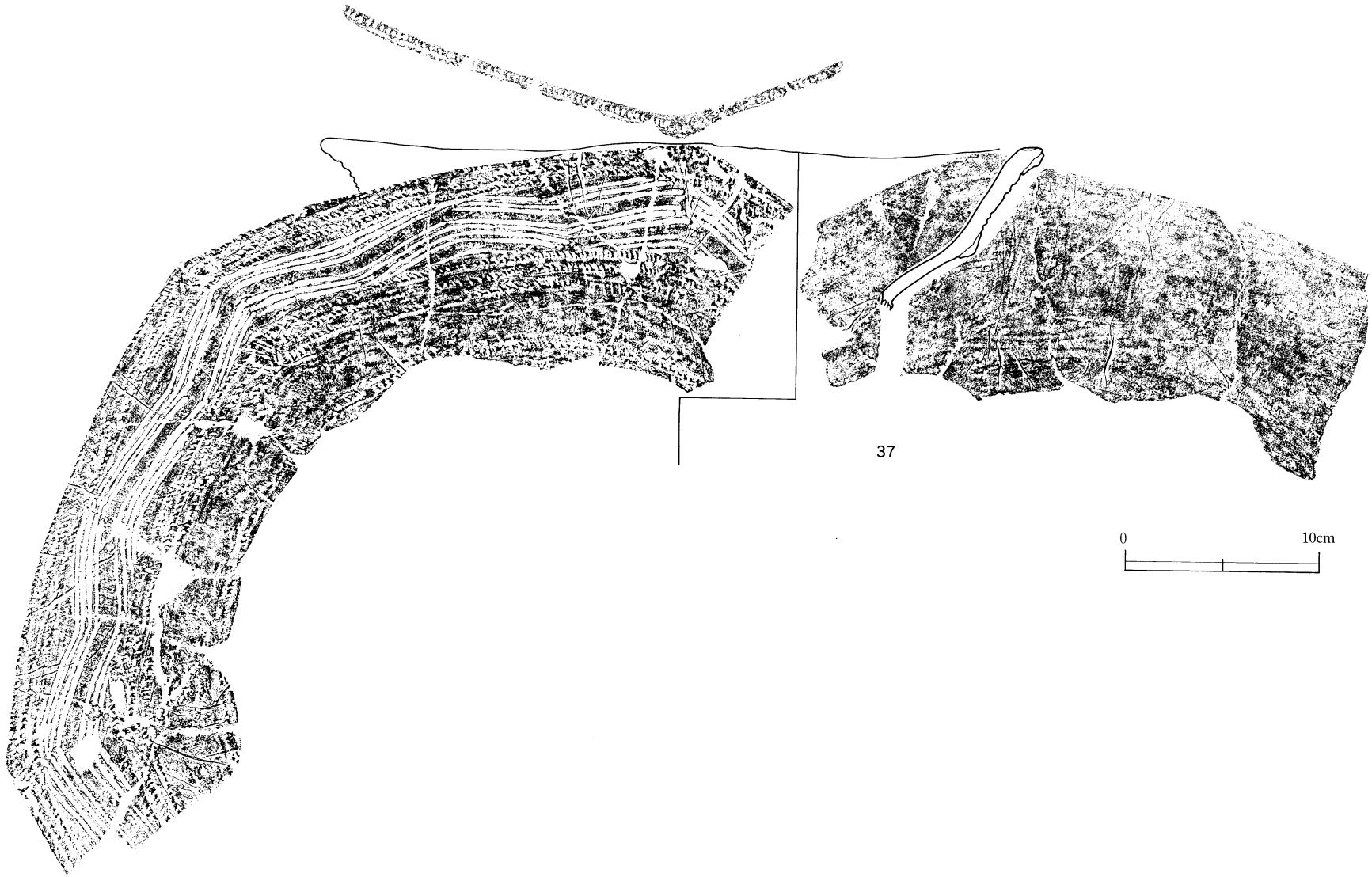
さて，第１群３類に属する土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は１点だけであった。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整，もしくは木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整を行う土器もあったが，丁寧なナデ調整を行うことが主流であり，ミガキ調整を行う土器もあった。土器の色調は，外器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が，内器面では暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

①－４　第１群４類土器（第17図37～第19図52）

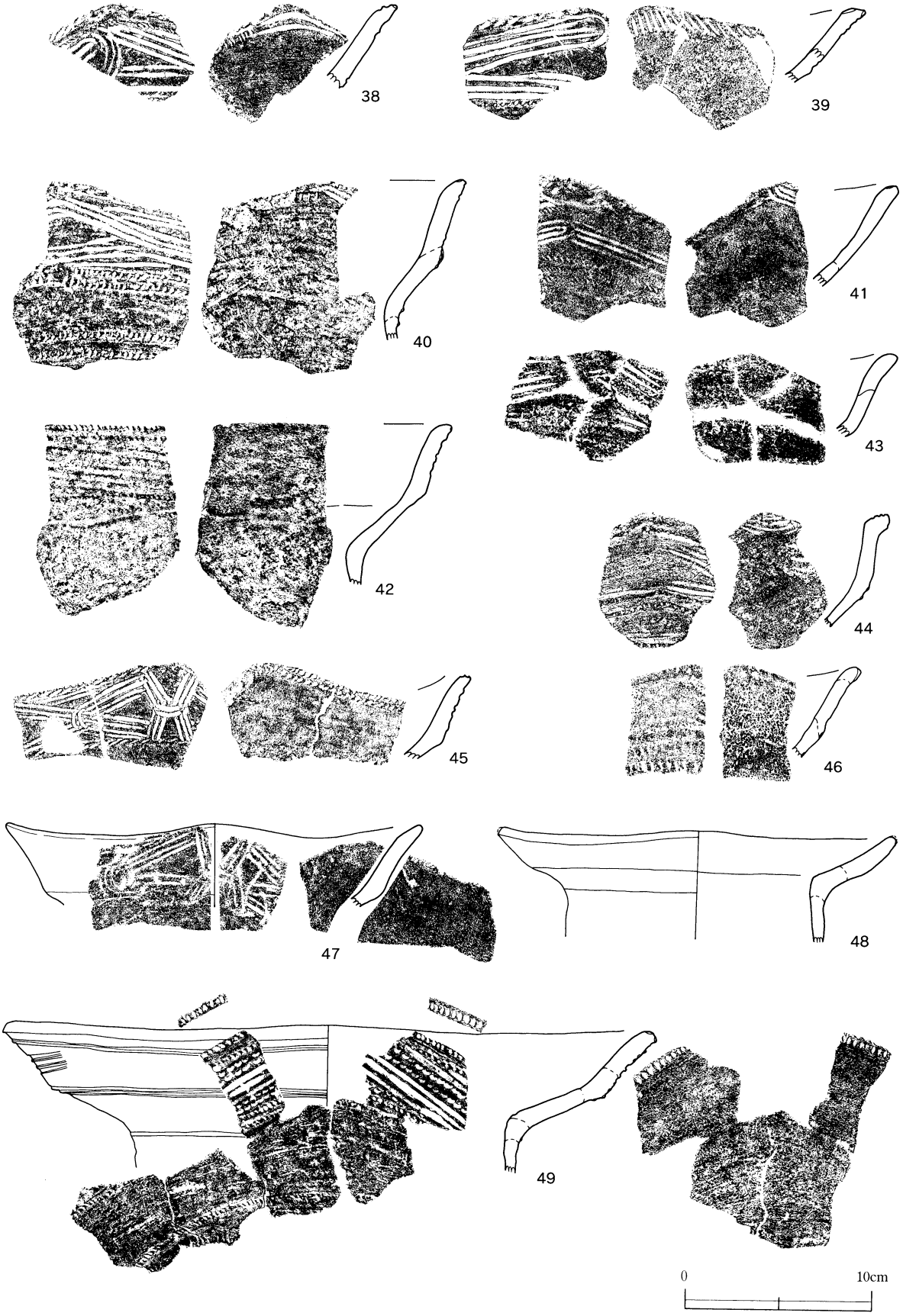
ｉ）概要

第１群４類土器を，土器の大きさによって分類すると，胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器(52)と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器(49)と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（48）という３種類の深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が40cm前後の大型

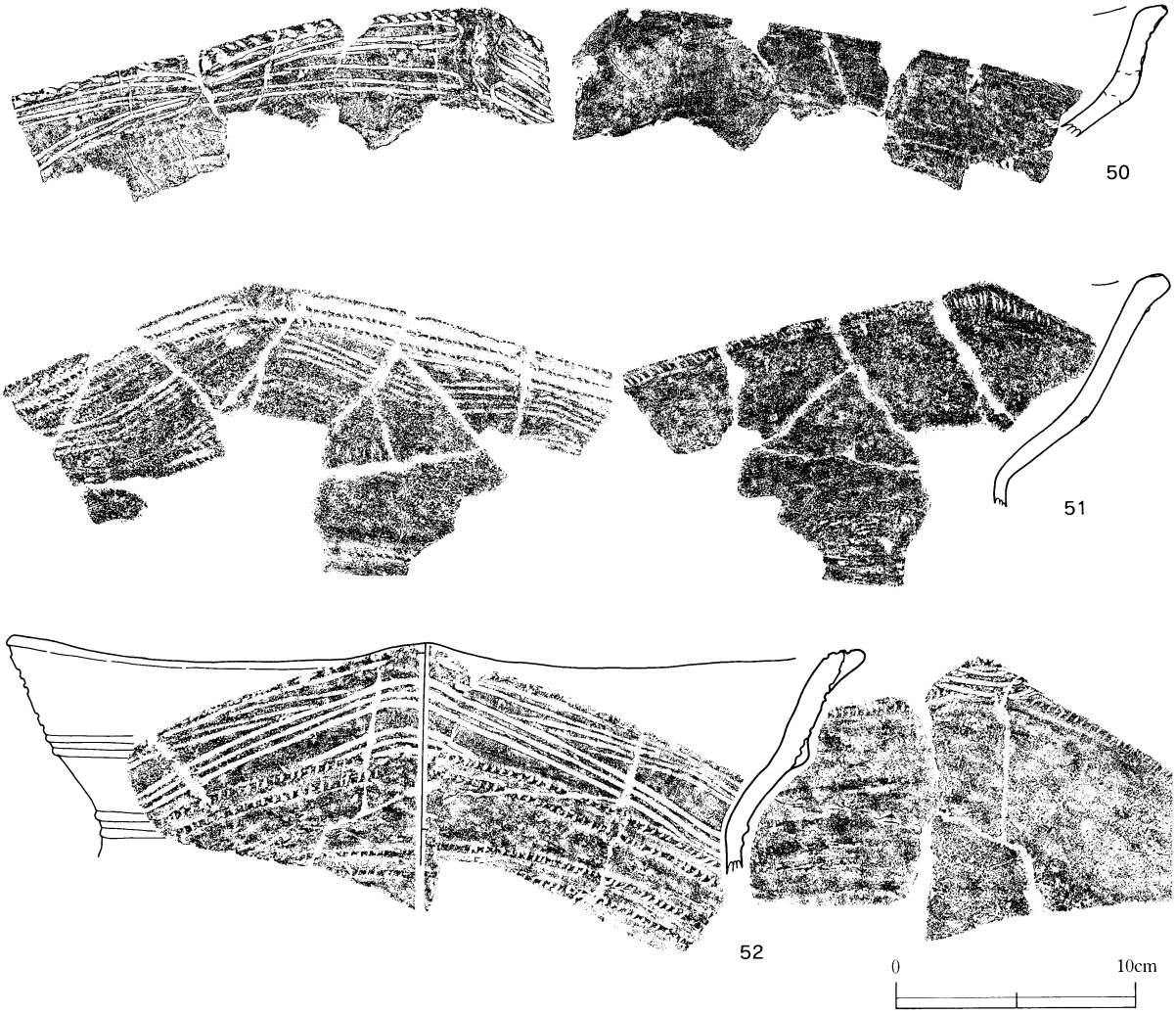
(p.28へ続く)



第17図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図８（４類－１）



第18図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図９（４類－２）



第19図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図10（４類－３）

(p.25から続く)

に属する土器出土は認められなかった。

ところで器形的特徴としては，次のことがいえる。

①口縁形態はほぼ波状口縁を呈する。

②口縁部が外反しながら，口縁中央部で強く屈曲し立ち上がる。

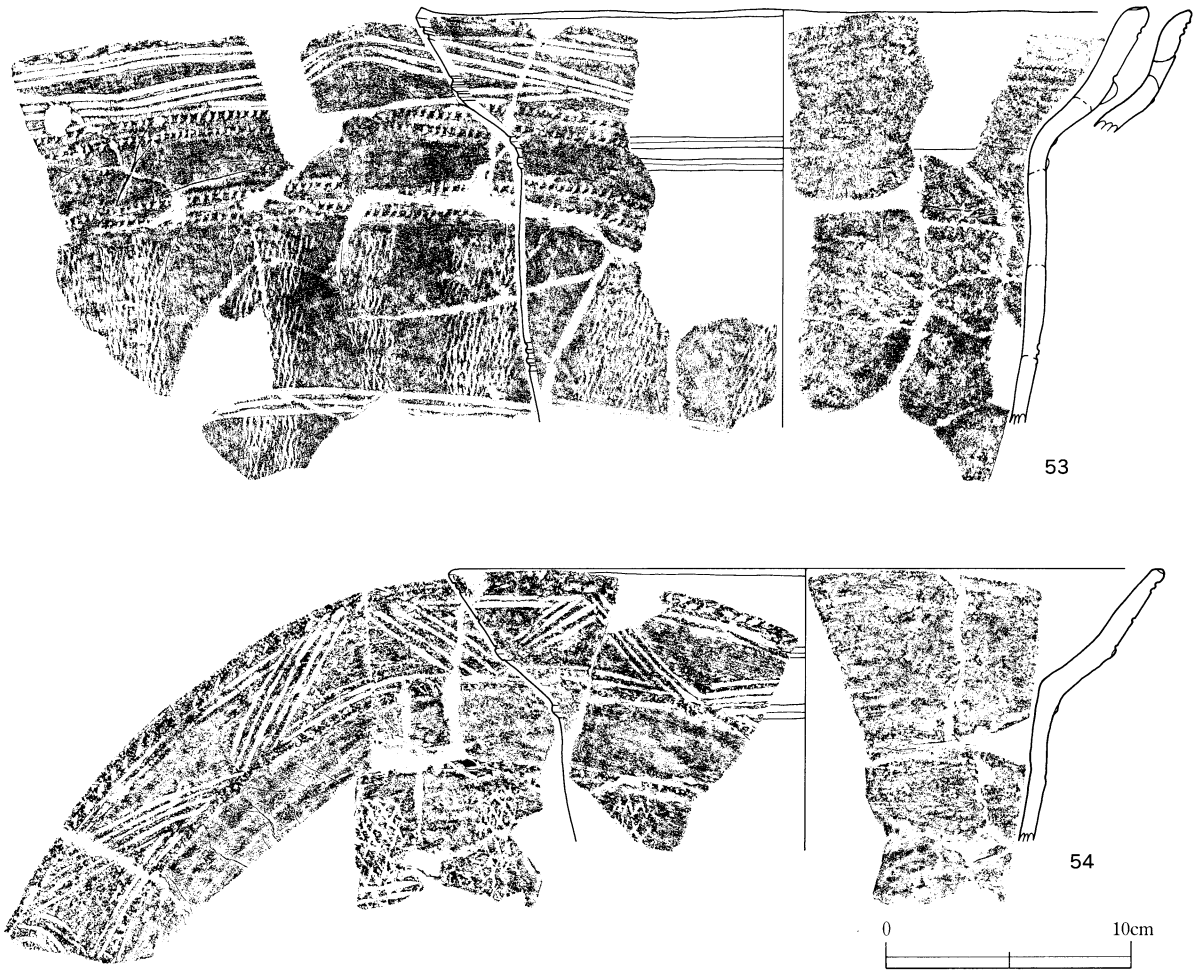
③３類土器では不明瞭であった口縁部内面中央部が屈曲する部分の稜線が，４類土器では明瞭になる。

④口唇上端部は平坦面を形成する。

⑤波頂部の口唇端部を外側に張り出させる。つまみ出す土器や折り曲げる土器や三角状の突起を張り付ける土器などがある。

以上，５点を指摘できる。

さて，第１群４類に属する土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は１点であった。また，土器の調整方法は，外器面がナデ調整，もしくは木製工具によるヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整もしくは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が，内器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が主流であった。



第20図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図11（５類－１）

①－５　第１群５類土器（第20図53～54）

ｉ）概要

第１群５類土器は，資料化できた個体数が２個体であったため，類型化には若干困難な面があるが，重要な要素を含んでいるので，あえて類型化した。

まず，大きさによる分類では，両個体とも胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器であった。

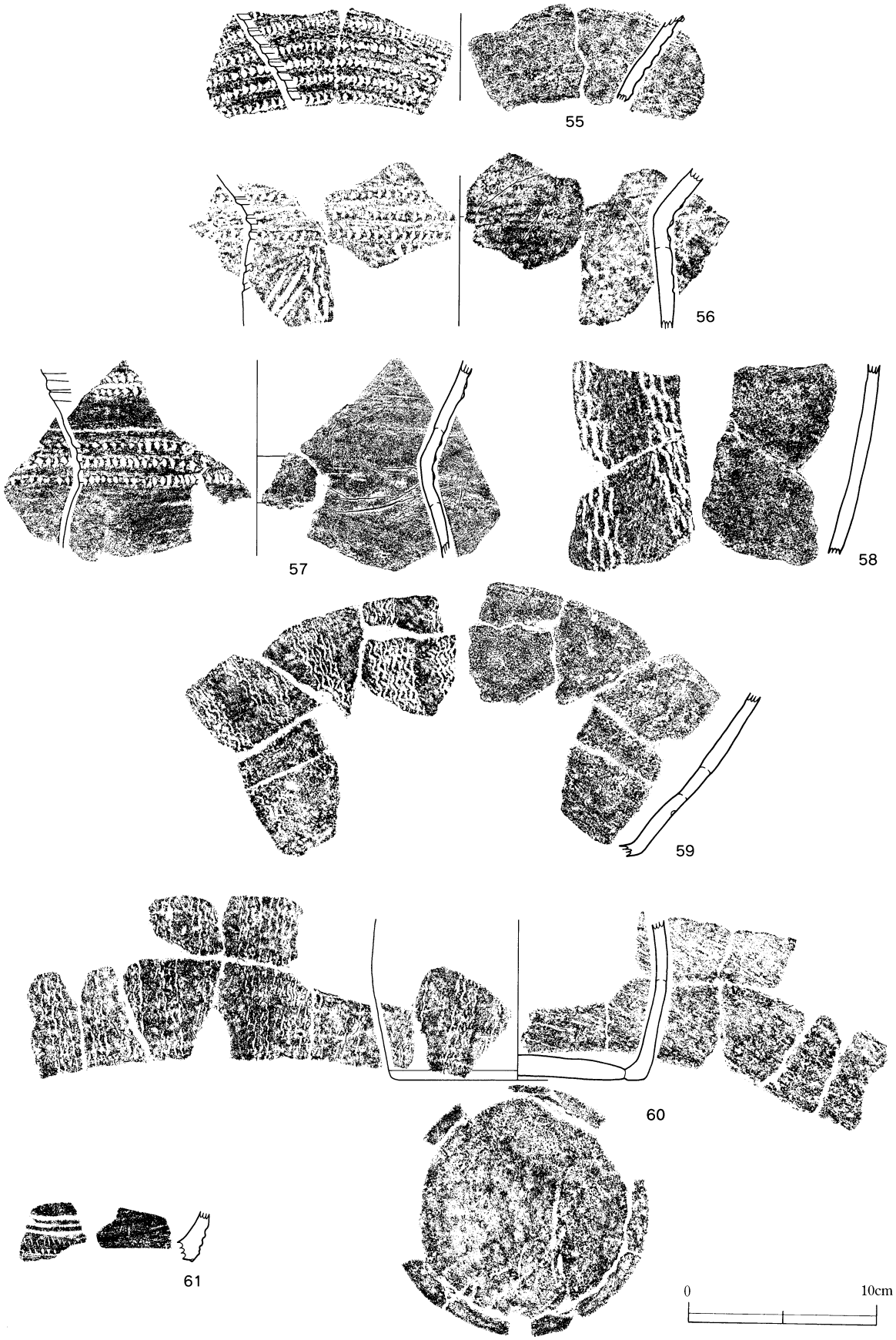
器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈すこと，口縁部が外反しながら口縁中央部で強く屈曲し立ち上がること，口唇上端部にはやや内傾する平坦面を作出することなどの特徴がある。

また施文的特徴としては，(53)のようにヘラ状工具を使って，口唇平坦面には縦位方向に刻みを施す。また，口縁屈曲部より上位には，横位方向に２条から３条の山形文や波状文を施している。一方，口縁部と胴部との境と，口縁屈曲部とに，刻目を施した微隆帯を横位方向に２条ずつ巡らしている。

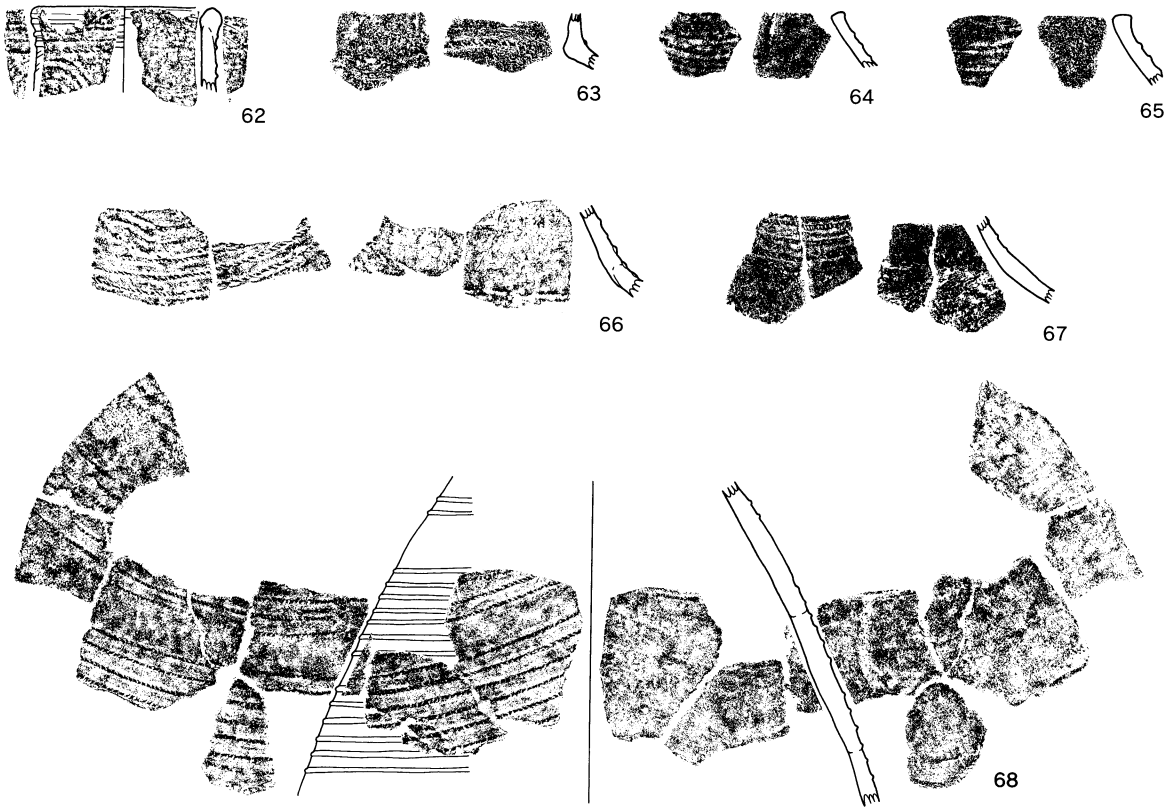
ところで，胴部には縦位方向に網目撚糸文を施す。

撚りは１段左撚（R）の縄を，棒状工具に「左巻き後右巻き」で巻いた施文具を使用している。原体幅は現状で約２cmであった。さらに胴部下半には，棒状工具を使用して横位方向に２条の沈線文を巡らす。

さて，第１群５類に属する土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は(57)と(58)であった。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整，もしくはハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を，もしくは丁寧なナデ調整を，あるいはミガキ調整をを行うことが主流である。土器の色調は，外器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が，内器面では暗黄褐色・暗褐色が主流であった。



第21図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図12



第22図　塞ノ神・微隆帯文土器実測図13（壺形土器）

①－６　第１群・壺形土器（第22図62～68）

ｉ）概要

第１群に属する壺形土器は，径が復元できた土器は(68)の１点のみであった。したがって土器の大きさによる分類は今後の課題となる。

第１群に属する壺形土器は，器形的特徴および施文的特徴から２つに分かれる。

ａ類土器：

ａ類土器(62・63)は長頸壺である。口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部が直行し，口唇部を肥厚させ，長めの頸部が立ち上がり，肩部が強く張るタイプの土器である。このタイプの土器は，62のように口縁部の上面観は円形である。口唇上端部は内傾した平坦面を作出している。

また施文的特徴は，細かい刻みを施した微隆帯を，口唇肥厚部直下には横位方向に３条巡らし，その下位には弧状に３重に施している。さらに頸部と肩部の境の屈曲部にも横位方向に１条巡らす土器である。以上がａ類土器の特徴である。

ｂ類土器：

ｂ類土器(64・68)は無頸壺である。口縁形態はほぼ平口縁を呈する。口唇部は舌状に肥厚させる。口唇部直下から胴部はゆるやかに湾曲しながら張るようになり，胴部最大径は胴部下半に位置する。

また施文的特徴は，細かい刻みを施した微隆帯を，口唇肥厚部直下から，少なくとも出土している胴部上半までは横位方向に巡らす土器である。なお(68)では，６条を単位として微隆帯を施している。以上がｂ類土器の特徴である。

さて，第１群に属する壺形土器の胎土中鉱物は，石英・長石で構成されていた。角閃石やクロウンモが含有する土器は少なかったことは注目できる。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整を，を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整もしくは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では黄褐色・茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が，内器面では黄褐色・茶褐色・暗褐色が主流であった。

塞ノ神・微隆帯文土器１類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第10図	1	S－10	3211	895	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～明黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	
		S－10	4723		Ⅵ												
		S－10	7543		Ⅵ												
		S－10	9014		Ⅵ												
		S－10	9389		Ⅵ												
	2	Q－11	413	1046	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗赤褐色～暗茶褐色	黄褐色～暗黄褐色	口径50.2cm 結節文
		Q－11	4164		Ⅵ												
		Q－11	9664		Ⅵ												
		Q－11	9691		Ⅵ												
		Q－12	8672		Ⅵ												
		S－10	3210		Ⅵ												
		S－10	3226		Ⅵ												
第11図	3	Q－13	3241	900	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→丁寧なナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～黄褐色	口径41.0cm
		Q－13	8303		Ⅵ												
		Q－13	9376		Ⅵ												
		Q－13	9596		Ⅵ												
		R－11	2452		Ⅵ												
		R－13	996		Ⅵ												
	4	R－13	129	886	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	黄白色～暗褐色	黄白色～暗褐色	口径14.6cm
		R－13	142		Ⅵ												
	5	Q－11	1751	882	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	
		Q－11	2839		Ⅵ												
		Q－12	7588		Ⅵ												
	6	Q－11	7207	887	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	7	Q－10	720	806	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色～暗黄褐色	黄白色	口径33.9cm
		Q－10	2142		Ⅵ												
		Q－11	1079		Ⅵ												
		Q－11	9200		Ⅵ												
		Q－11	10389		Ⅵ												
		Q－11	10675		Ⅵ												
		Q－11	10792		Ⅵ												
	8	R－09	5330	897	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○			細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～黄褐色	暗茶褐色～黄褐色	口径34.8cm
		R－09	5664		Ⅶ												
		R－09	5859		Ⅶ												
		R－09	5874		Ⅶ												
第12図	9	R－11	2138	989	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～暗褐色	
		R－11	2149		Ⅵ												
	10	Q－14	1704	990	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～茶褐色	無文
	11	S－10	173	888	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○		○	細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	
		S－10	230		Ⅵ												
		S－10	9321		Ⅵ												
	12	R－10	5861	878	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色～赤褐色	
		R－10	7703		Ⅵ												
	13	R－13	978	884	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	黄褐色～茶褐色	暗黄褐色～茶褐色	
		R－13	1036		Ⅵ												
		R－13	1691		Ⅵ						○						
	14	R－09	1063	877	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～黄白色	暗茶褐色～黄白色	スス付着
		R－09	1665		Ⅵ												
	15	S－10	6557	885	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗茶褐色	スス付着
		S－10	9399		Ⅵ												
	16	R－09	1270	899	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗黄褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	
		R－09	1280		Ⅵ												
		R－09	1285		Ⅵ												
		R－09	1287		Ⅵ												
		R－09	1415		Ⅵ												
	17	Q－10	3719	894	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	口径32.8cm
		Q－10	6650		Ⅵ												
		S－10	3226		Ⅵ												

塞ノ神・微隆帯文土器２類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第13図	18	R－09	597	1047	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗赤褐色	暗黄褐色～暗茶褐色	口径29.6cm
		R－09	1267		Ⅵ												
		R－09	1278		Ⅵ												
		R－09	1285		Ⅵ												
		R－09	1289		Ⅵ												
第14図	19	R－09	1690	893	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	明黄白色～暗茶褐色	暗褐色～暗黄褐色	口径26.0cm
		R－09	1826		Ⅵ												
		R－09	2537		Ⅵ												
		S－10	120		Ⅵ												
		S－10	3301		Ⅵ												
	20	R－09	1780	1056	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	
		R－09	2066		Ⅵ												
	21	R－09	1689	1055	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	
		R－09	2528		Ⅵ												
	22	R－12	348	872	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～明黄白色	暗黄褐色～暗褐色	口径27.6cm
		R－12	396		Ⅵ												
		R－12	510		Ⅵ												
	23	R－12	1100	986	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～黒褐色	暗褐色～黒褐色	
	24	S－12	160	919	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄褐色～暗茶褐色	暗褐色～黒褐色	結節文

塞ノ神・微隆帯文土器３類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第15図	25	R－12	1089	984	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	横白色	暗黄褐色～暗褐色	
	26	R－11	2341	874	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	27	S－10	1312	881	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～黒褐色	茶褐色～暗黄褐色	
	28	R－10	6019	918	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	29	R－14	1441	997	Ⅵ	深鉢	口縁～頸部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	暗茶褐色～黒褐色	
	30	R－10	6015	983	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	右下がり・ヨコハケ→ナデ	横白色～茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	31	R－10	7277	916	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○		○	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～黄白色	
	32	S－10	451	883	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ミガキ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	
		S－10	942		Ⅵ												
		S－10	2944		Ⅵ												
	33	Q－11	11911	902	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	34と同一個体 口径41.0cm
		Q－11	12262		Ⅵ												
		Q－11	12487		Ⅵ												
		R－11	2538		Ⅵ												
第16図	34	Q－11	12272	896	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～黄褐色	暗茶褐色	口径41.0cm
	35	R－12	553	873	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			細砂・微砂	粗いナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色	口径34.0cm 無文
		R－12	598		Ⅵ												
	36	R－10	5023	898	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗茶褐色	
		S－10	3470		Ⅵ								ナデ	ヨコハケ→ナデ			
		S－10	5005		Ⅵ												
		S－10	5009		Ⅵ												

塞ノ神・微隆帯文土器４類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第17図	37	P－12	2115	1045	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～黒褐色	茶褐色～黒褐色	内：スス付着
		P－12	2116		Ⅵ												
		P－12	2118		Ⅵ												
		P－12	2120		Ⅵ												
		P－12	2121		Ⅵ												
		P－12	2122		Ⅵ												
		P－12	2123		Ⅵ												
		P－12	2125		Ⅵ												
		P－12	2448		Ⅵ												
		P－12	2449		Ⅵ												
		P－12	3113		Ⅵ												
		P－12	3186		Ⅵ												
第18図	38	Q－12	3245	981	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
	39	R－11	1163	991	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～暗褐色	黒褐色～暗茶褐色	スス付着
		R－11	1164		Ⅵ												
	40	Q－09	2027	880	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	スス付着
	41	R－10	6082	875	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	横白色	暗黄褐色～暗褐色	
	42	R－11	2336	987	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	著しい摩耗	著しい摩耗	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	
	43	S－10	5916	982	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○			細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
	44	R－10	7901	879	Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗茶褐色	
	45	Q－11	4520	978	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色	スス付着
	47	R－11	2915	979	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	口径22.2cm
	48	P－14	945	915	Ⅵ	深鉢	口縁胴部上端	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗褐色	無文
		P－14	2224		Ⅵ												
		P－14	2225		Ⅵ												
	49	Q－11	4780	920	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗褐色	
		Q－11	7861		Ⅵ												
		Q－11	11922		Ⅵ												
		Q－11	12305		Ⅵ												
		Q－11	12341		Ⅵ												
第19図	50	Q－11	5194	917	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○		○	細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～黒褐色	
		Q－11	10640		Ⅵ												
		Q－11	10641		Ⅵ												
		Q－11	11271		Ⅵ												
	51	P－12	2115	904	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	黄白色～黒褐色	茶褐色～黒褐色	スス付着
		P－12	2124		Ⅵ												
		P－12	2126		Ⅵ												
		P－12	3113		Ⅵ												
		P－12	3187		Ⅵ												
	52	R－09	1165	903	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～黒褐色	暗茶褐色～黒褐色	スス付着

塞ノ神・微隆帯文土器５類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第20図	53	R－09	1150	913	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色～黒褐色	暗茶褐色～黒褐色	口径29.8cm スス付着 網目撚糸文
		R－09	1165		Ⅵ												
		R－09	1166		Ⅵ												
		R－09	1947		Ⅵ												
		R－09	1948		Ⅵ												
		R－09	1950		Ⅵ												
		R－09	4104		Ⅵ												
		R－09	4111		Ⅵ												
	54	R－10	1040	914	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～黒褐色	口径28.8cm
		R－10	5968		Ⅵ												

塞ノ神・微隆帯文土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第21図	55	Q－11	2337	891	Ⅵ	無頸壺	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ミガキ	黄白色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
		Q－12	682		Ⅵ												
	56	S－10	9200	892	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	胴部径23.0cm
		S－10	9204		Ⅵ												
	57	Q－10	3558	889	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○	◎	細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径20.8cm，スス付着
	58	R－12	71	854	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○		○	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗茶褐色	結節文
		R－12	97		Ⅵ												
	59	Q－11	4131	852	Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ			
		Q－12	6632		Ⅵ												
		R－10	8279		Ⅵ												
		R－10	13215		Ⅶ												
	60	R－09	990	921	Ⅶ	深鉢	胴部下半～底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗褐色～黒褐色，	結節文
		R－09	997		Ⅵ												
		R－09	1065		Ⅵ												
		R－09	1516		Ⅵ												
		R－09	1691		Ⅵ												
		R－09	1770		Ⅵ												
		R－09	1971		Ⅵ												
		R－09	2067		Ⅵ												
		R－09	2518		Ⅵ												
		R－09	2933		Ⅶ												
		R－09	2946		Ⅵ												
		R－09	2964		Ⅵ												
	61	R－12	959	909	Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	口径7.4cm

塞ノ神・微隆帯文土器（壺形土器）観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第22図	62	R－11	2320	908	Ⅵ	有頸壺	口縁～頸部	○	○			細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	黄白色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	63	R－12	666	910	Ⅵ	有頸壺	頸部～肩部	○	○			細砂・微砂	ナデ	粗いナデ	黄褐色	黄褐色	
	64	R－11	64	906	Ⅵ	壺	口縁～頸部	○	○			細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色	
	65	R－11	34	907	Ⅵ	壺	口縁～頸部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	明黄褐色	明黄褐色	
	66	R－11	2428	912	Ⅵ	無頸壺	胴部	○	○			細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色	
		R－11	2972		Ⅵ												
	67	R－11	1593	911	Ⅵ	壺	頸部	○	○		○	細砂・微砂	ナデ	上：丁寧なナデ 下：粗いナデ	暗黄褐色～茶褐色	茶褐色	
		R－11	1597		Ⅵ												
	68	Q－14	27	905	Ⅵ	壺	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ			胴部径23.4cm
		Q－14	1621		Ⅵ												
		Q－14	1622		Ⅵ												
		Q－14	1626		Ⅵ												
		Q－14	1634		Ⅵ												
		Q－14	1636		Ⅵ												
		Q－14	1650		Ⅵ												
		Q－14	1664		Ⅵ												

② 第２群　塞ノ神Ａａ式土器（第23図～第44図）

ｉ）概要

第２群に属する土器は，1422点の土器片が出土し，その内の239点，81個体を資料化した。

第２群は，器形的特徴について「円筒形の胴部に，ラッパ状に開いた口縁部が付くもので，平栫式の要素を残して，波状口縁を呈するもの，口縁部が僅かに屈曲するものが若干見られる。底部はやや上げ底気味の平底である。内面の口縁部と胴部の堺に明瞭な稜線を形成する」土器とした。一方，施文的特徴については「口縁部には幾何学文・連点文を配し，胴部には撚糸文系の縄文を施文する」。また，「胴部にも幾何学文・連点文が施文されていることで，網目文や，まれに撚糸文が縦に施文された後で，その上にさらに箆描きの凹線を重ねて施文している」と定義されている，河口貞徳氏により設定された土器型式である。

ではまず最初に,上野原遺跡第10地点において，第２群に属する土器がどの地点から主に出土しているか，その状況を検討してみよう（第23図～第31図参照）。なお，図中のドットは実測図が未掲載である土器も１ドット１点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは，集中して出土している区域として，①Ｒ・Ｓ－10区からＱ・Ｒ－11区およびＱ－12区にかけての区域と，②Ｐ・Ｑ・Ｒ－14区からＰ・Ｑ－15区にかけての区域とを挙げることができる。

ところで①区域は，平栫式土器様式期の集中区域（第５分冊参照）とも，第１群（塞ノ神・微隆帯文土器）に属する土器の集中区域（第３図参照）とも重なる区域である。そのうえ，Ｓ－11区からＲ・Ｓ－12区にかけての区域には，遺物があまり出土しない状況も平栫式土器様式期や第１群土器期に引き続いて同様の状況である。

ところが②区域は，平栫式土器様式期や第１群土器期では遺物があまり出土していない区域である。つまり縄文早期後葉の時期において，この区域が土器の集中出土区域になるのは，第２群の時期が初めてである。

次に注目できることは，①区域中にも②区域中にも，さらに土器が特に集中して出土している地点が何カ所も認められることである。

これらのことから，第23図から第31図に示した出土状況は，土器が地形の傾斜などの自然的要因によって集中拡散した結果ではなく，当時の状況を概ね反映した結果であると考えられる。

そのうえで，①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることは，①区域と②区域とがほぼ同時に形成されたと考えられる。

このことは当時の「場の機能」を考える上で重要であるが，その性格付けについては今後の検討課題である。

さて，上野原遺跡第10地点で出土した第２群に属する土器を分析していくことにする。

第２群は，深鉢形土器と小型深鉢形土器とで構成されていた。そのうち，本報告では深鉢形土器を器形的特徴および施文的特徴から１類土器から４類土器まで４分類した。その特徴を以下に記す。

②－１　第２群１類土器（第32図１～９）

ｉ）概要

第２群１類土器を，土器の大きさによって分類すると，胴部最大径が40cm前後を超える大型に属する土器（７）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（４）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（６）という３種類の大きさが異なる深鉢形土器が出土した。

第２群１類に属する土器の器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部が僅かに内湾しながら屈曲し，胴部が僅かに丸みを帯びた円筒形を呈する。底部は底径が約15cmを測る，平底である。

また施文的特徴としては，ヘラ状工具を使って，口唇部には上面観が羽状になる刻みを施す点と，口縁部には数条の沈線文を施す点とを挙げることができる。そして胴部には２条もしくは３条の結節文を縦位方向に施す土器（４，７）と，網目縄文を縦位方向に施す土器（８）と，網目文にならない撚糸文を縦位方向に施す土器（６）とがある。

さて，第２群１類に属する土器の胎土中鉱物は，

石英・長石・角閃石で構成されていた。特にクロウンモが含有していないことは注目できる。また，土器の調整方法は，外器面・内器面ともにナデ調整，もしくは木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色から暗茶褐色が，内器面では黒褐色から茶褐色が主流であった。

ⅱ）小結

さて，第１群を分類する際に用いた土器の指標の１つが，「結節文」を施すことであった。このとき同じ「結節文」を施す第２群１類と，類を分けることになったのは以下のとおりである。

すなわち，第１群に属する土器は，口縁部外器面の屈曲の度合いが強く，稜線が明瞭な土器とした。これに対して第２群１類に属する土器は，口縁部外器面の屈曲の度合いが僅かに角度の変化が見られる程度の屈曲にとどまり，稜線が不明瞭な土器とした。

この器形的特徴の違いは程度の差である。しかし，「平栫式土器様式から塞ノ神式土器様式へ」という土器型式組列を考えたとき，「口縁部肥厚帯（という文様帯）を意識する土器から意識がなくなる土器へ」という器形的特徴の変遷と，「沈線文＋刺突連点文施文から沈線文施文へ」あるいは「縄文から撚糸文へ」という施文的特徴の変遷とが，わずかな差が現れつつ変化を生じたものとして考え，器形的変遷を重視して分類を行った。その結果「結節文」を施す土器は，第１群と第２群１類とに分かれたが，過渡期の様相として捉えることが可能であろう。

②－２　第２群２類土器（第33図10～第38図43）

ⅰ）概要

第２群２類に属する土器は，土器の大きさで分類すると，胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（10・12・15～17・23）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（11・13・14・18・21・22・35・37）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（24・25）と，胴部最大径が15cm前後の小型に属する土器（26・27）という，３種類の大きさが異なる中型の深鉢形土器と小型深鉢形土器とが出土していることが認められた。

さて，器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器（10～12，21，23～25，27）と，緩やかな波状口縁を呈す土器（13～18，22，26）とが本類でも認められた。

ところで大きさや口縁形態の違いに係わらず，口縁部はラッパ状に開く土器である。胴部形態は直線的に口縁部と底部をつなぐ円筒形を呈する土器が大部分であるが，胴部が湾曲する土器（10）もある。さらに底部は器形的特徴の違いから，

a：やや上げ底気味の底部に対して，胴部が直立して立ち上がる土器（39・40）。

b：やや上げ底気味の底部に対して，胴部がやや外反しながら立ち上がる土器（38）

c：やや上げ底気味の底部に対して，胴部がやや湾曲しながら立ち上がる土器（43）

という３種類に分けられるようである。共に底径は13cm～15cmが主流である。

一方，第２群２類土器の施文的特徴としては，まずヘラ状工具を使って，口唇部には上面観が羽状に刻みを施す点を挙げることができる。

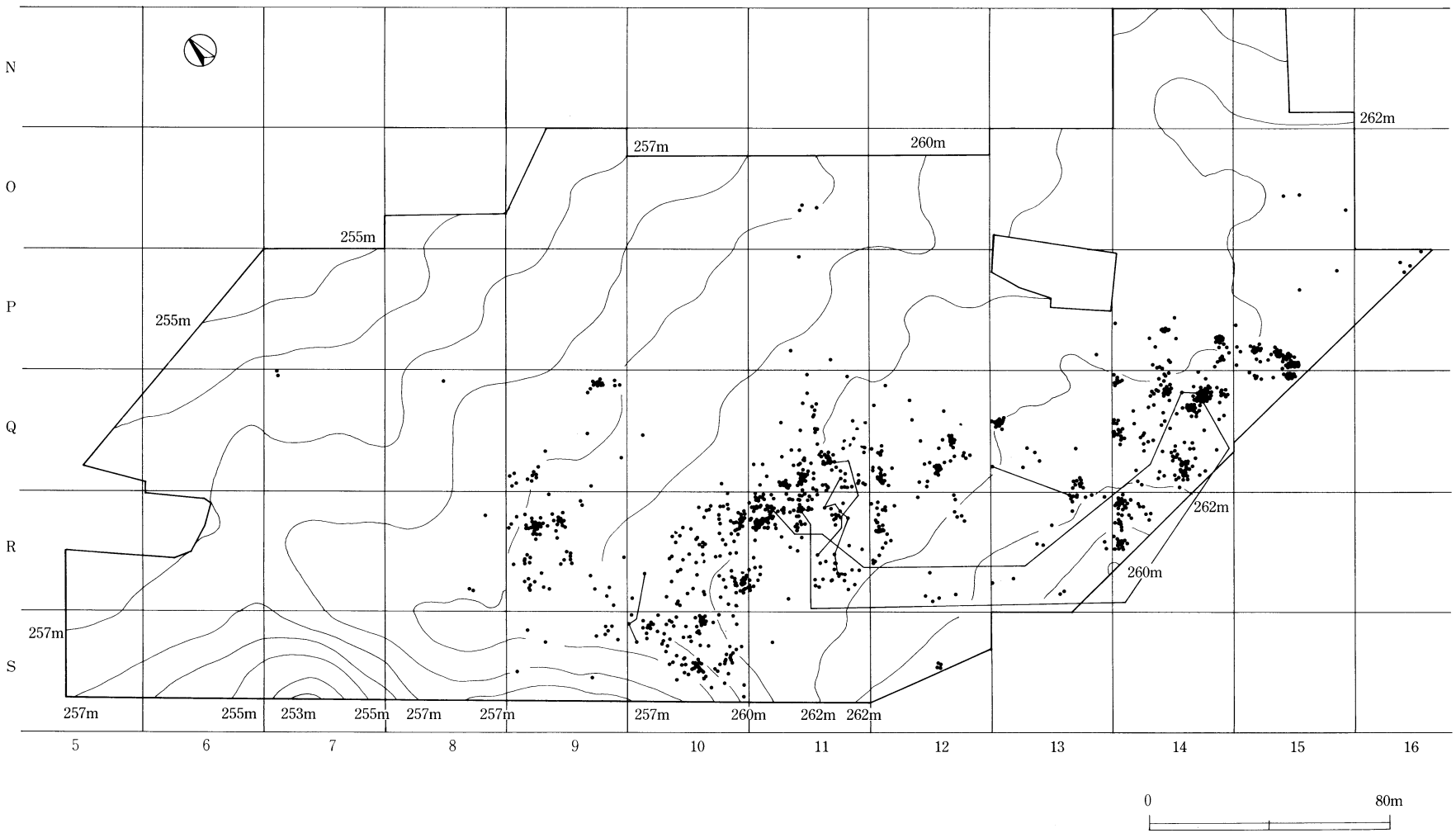
次に先端が尖った叉状工具あるいは棒状工具を使って横位方向に，口縁部には２条ないし３条の沈線文を２ヶ所ないし３ヶ所に巡らしている。特に緩やかな波状口縁を呈する土器では，多くの土器が波頂部の直下で，沈線と沈線とを丸くつなぎ終結させている。

胴部には，まず縦位方向に３条から５条を単位とした，網目撚糸文を施す（28～36）。多くは，１段左撚（R）の縄を棒に巻き付けたものを原体とする。現状で原体の幅を測ると約２cmであった。

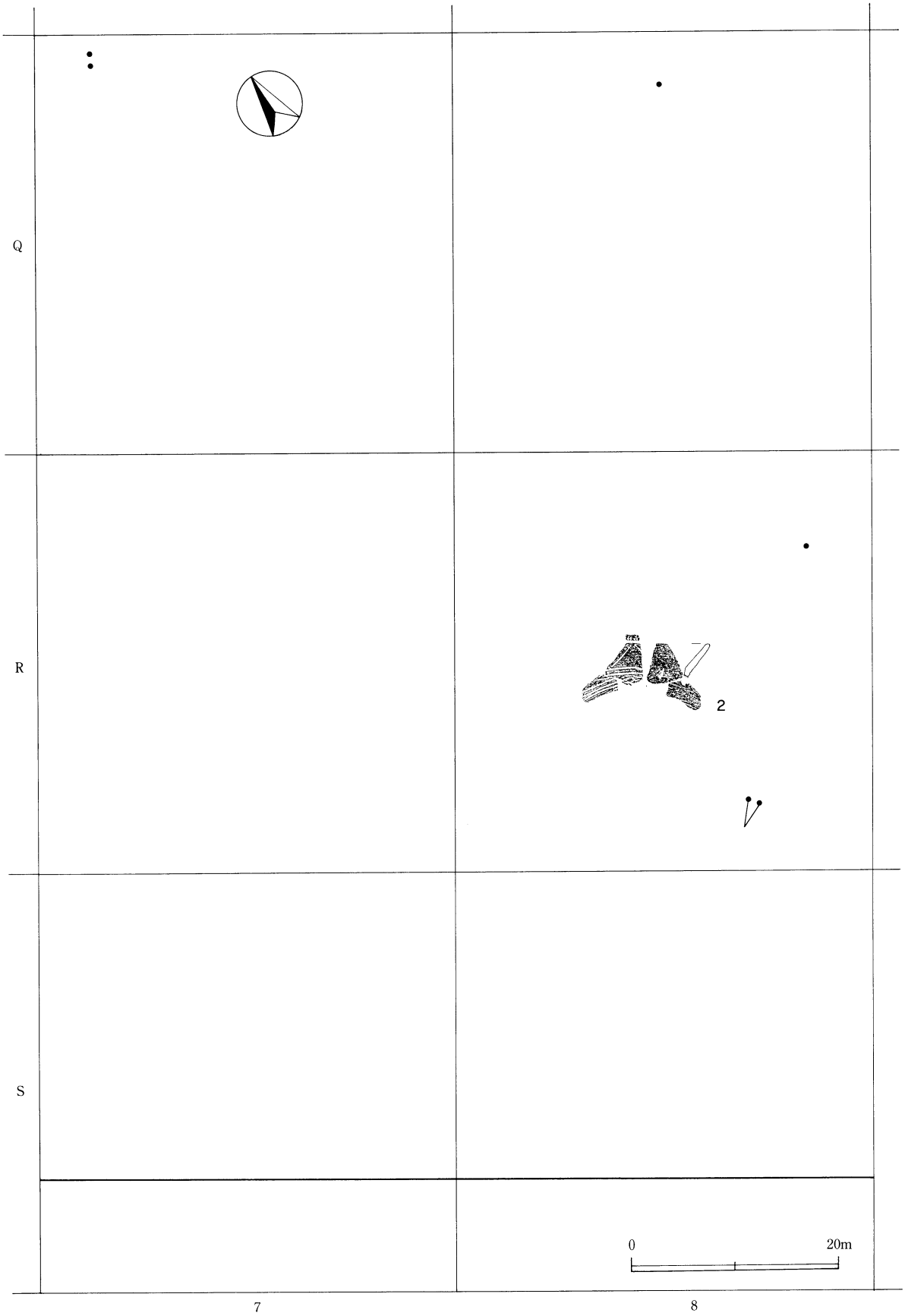
この網目撚糸文を施した後に，叉状工具あるいは棒状工具を使って，２条から３条の沈線文を１単位として，胴部中の数か所で横位方向に巡らしている。

さて，第２群２類に属する土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有していた土器は13・18・19の３個体であった。また土器の調整方法では，外器面がナデ調整を，内器面が木製工具によるヨコ方向のハケ目調整

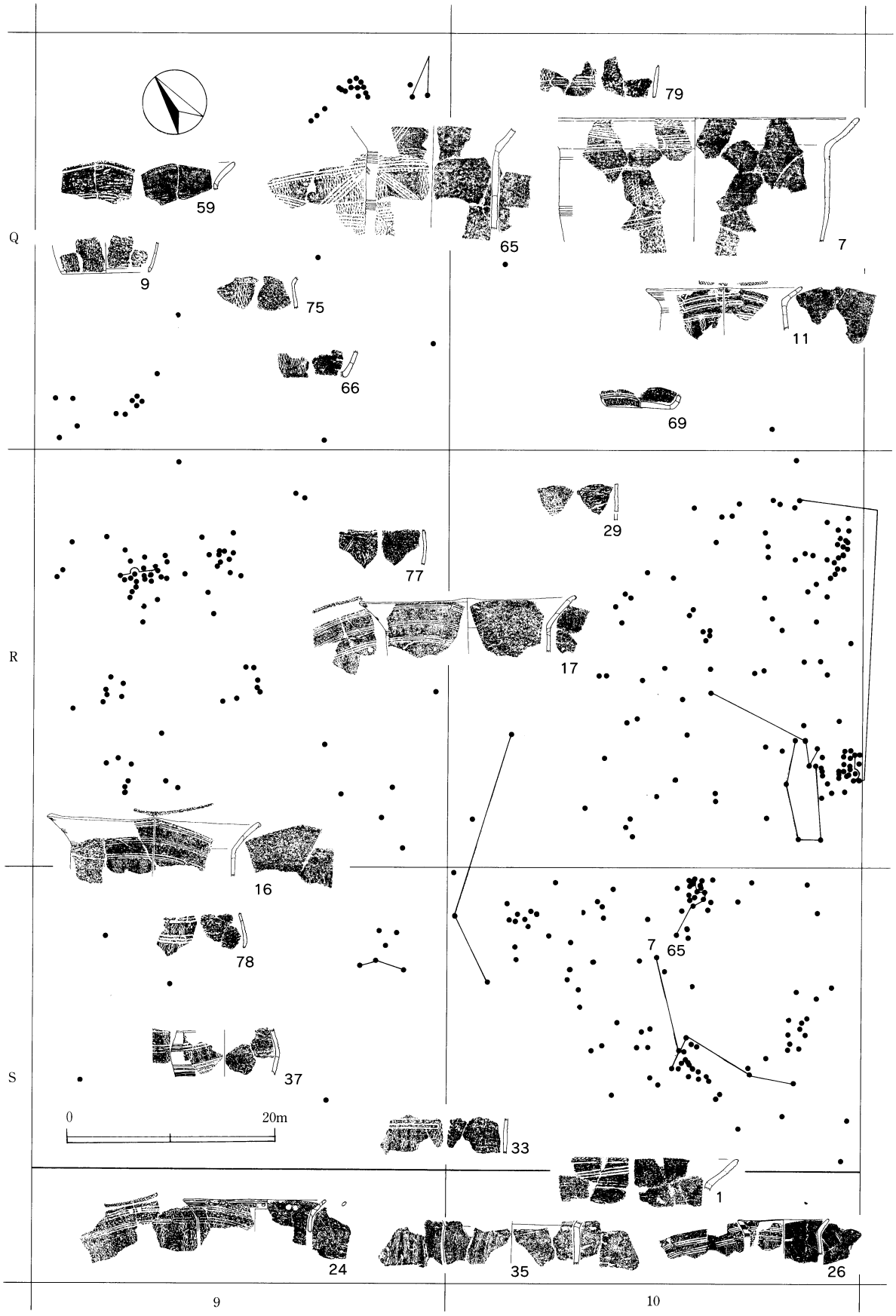
（p.53へ続く）



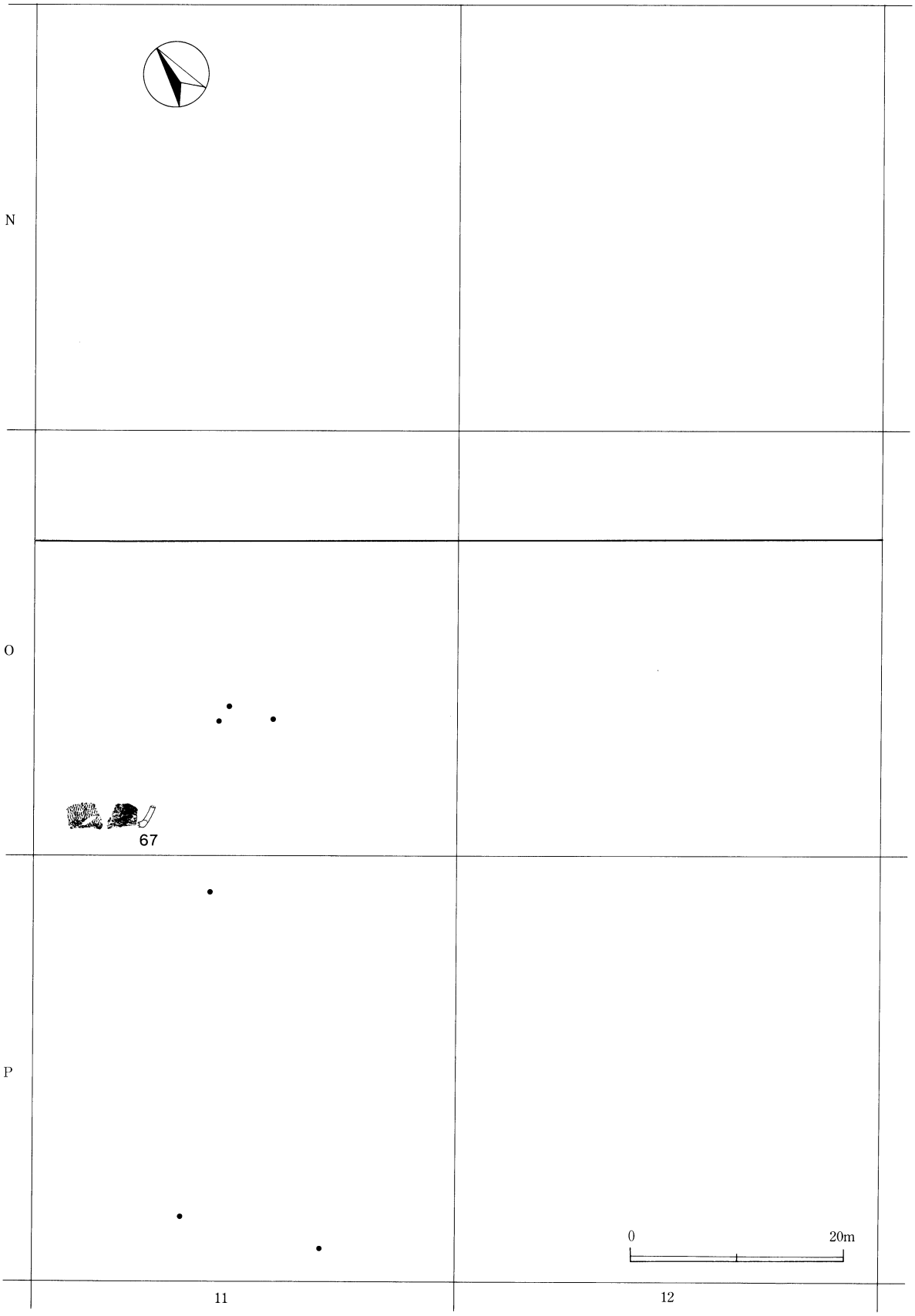
第23図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況全体図



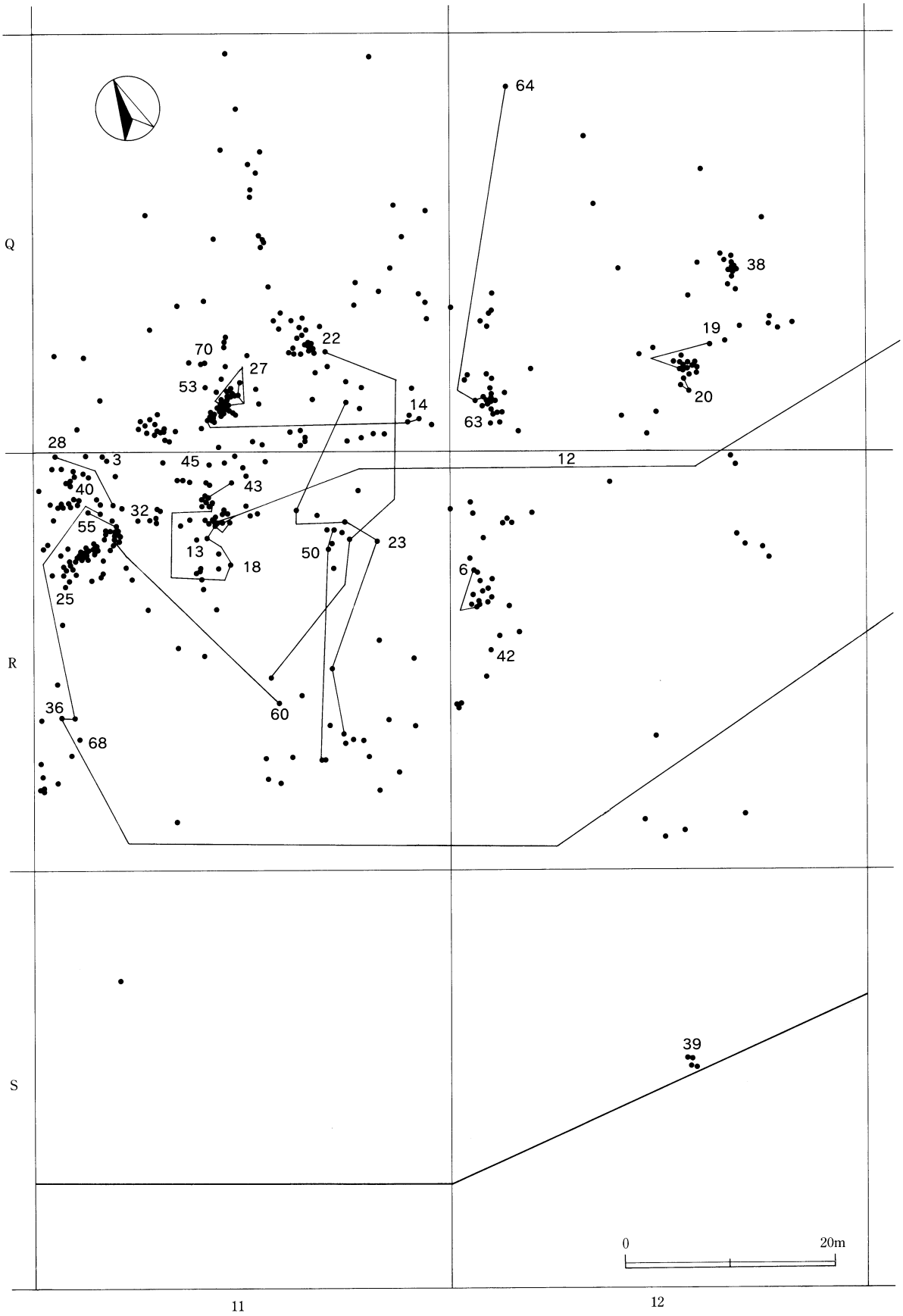
第24図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図１(Ｑ・Ｒ・Ｓ－７・８区)



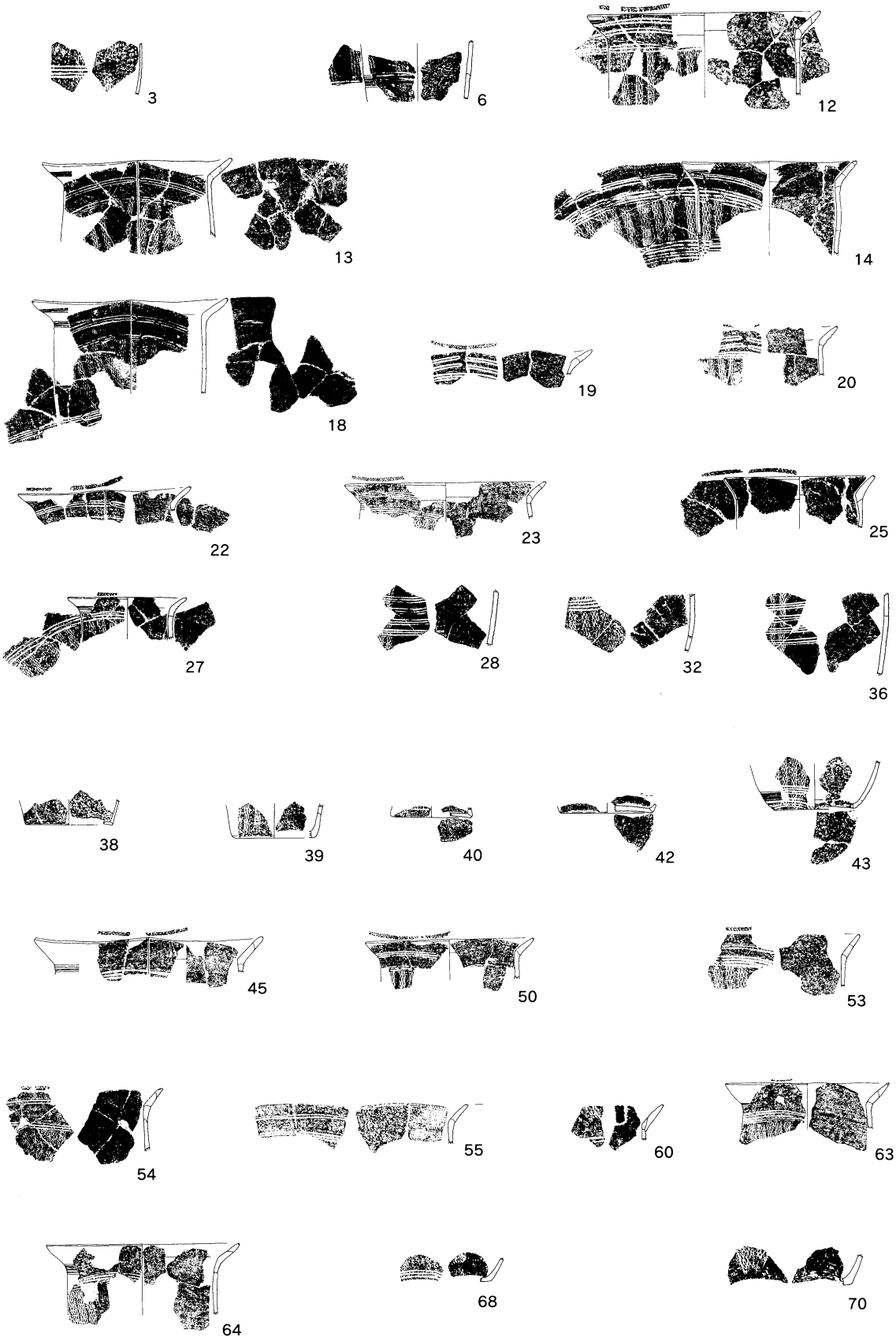
第25図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図２(Ｑ・Ｒ・Ｓ－９・10区)



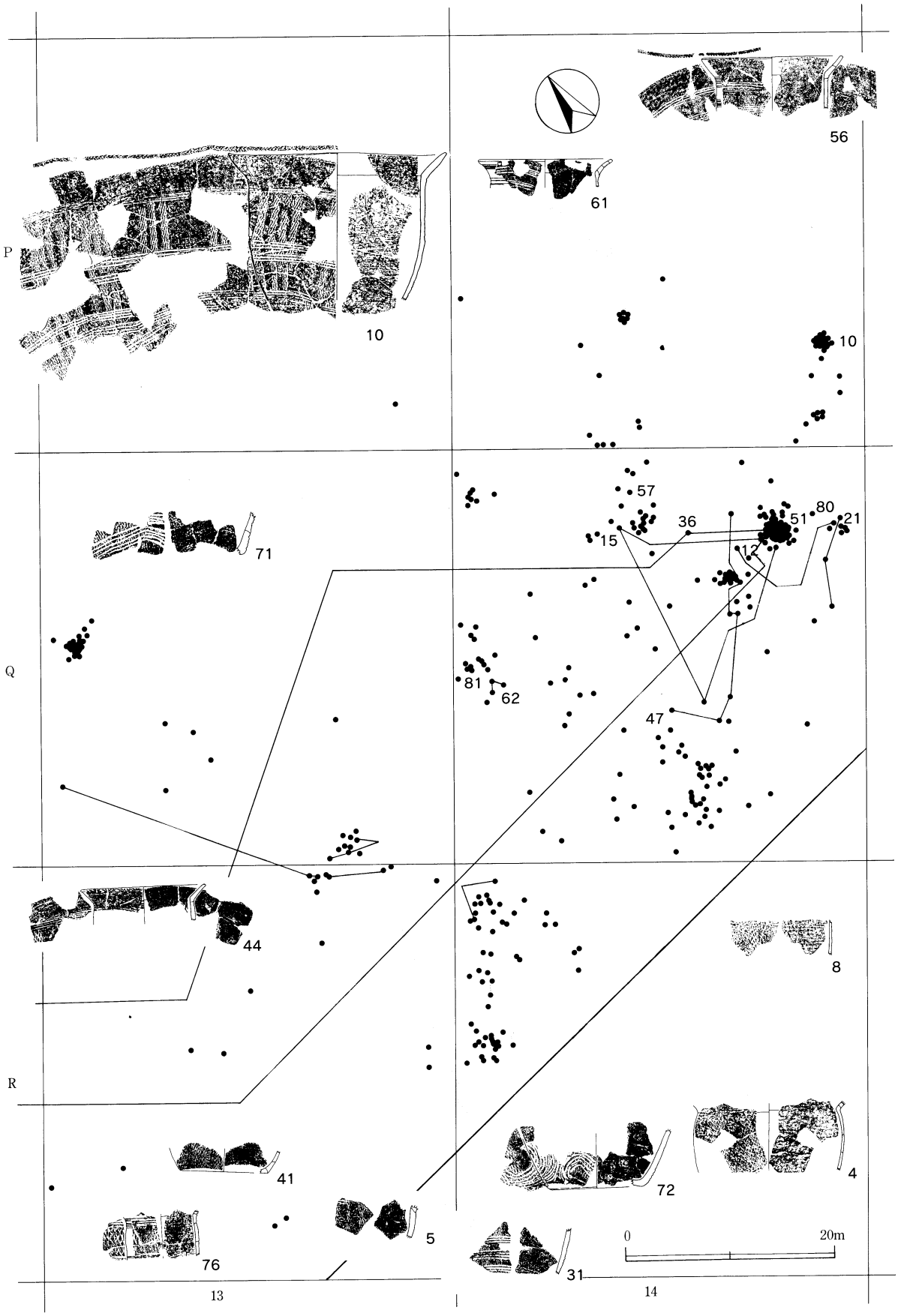
第26図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図３(Ｎ・Ｏ・Ｐ－11・12区)



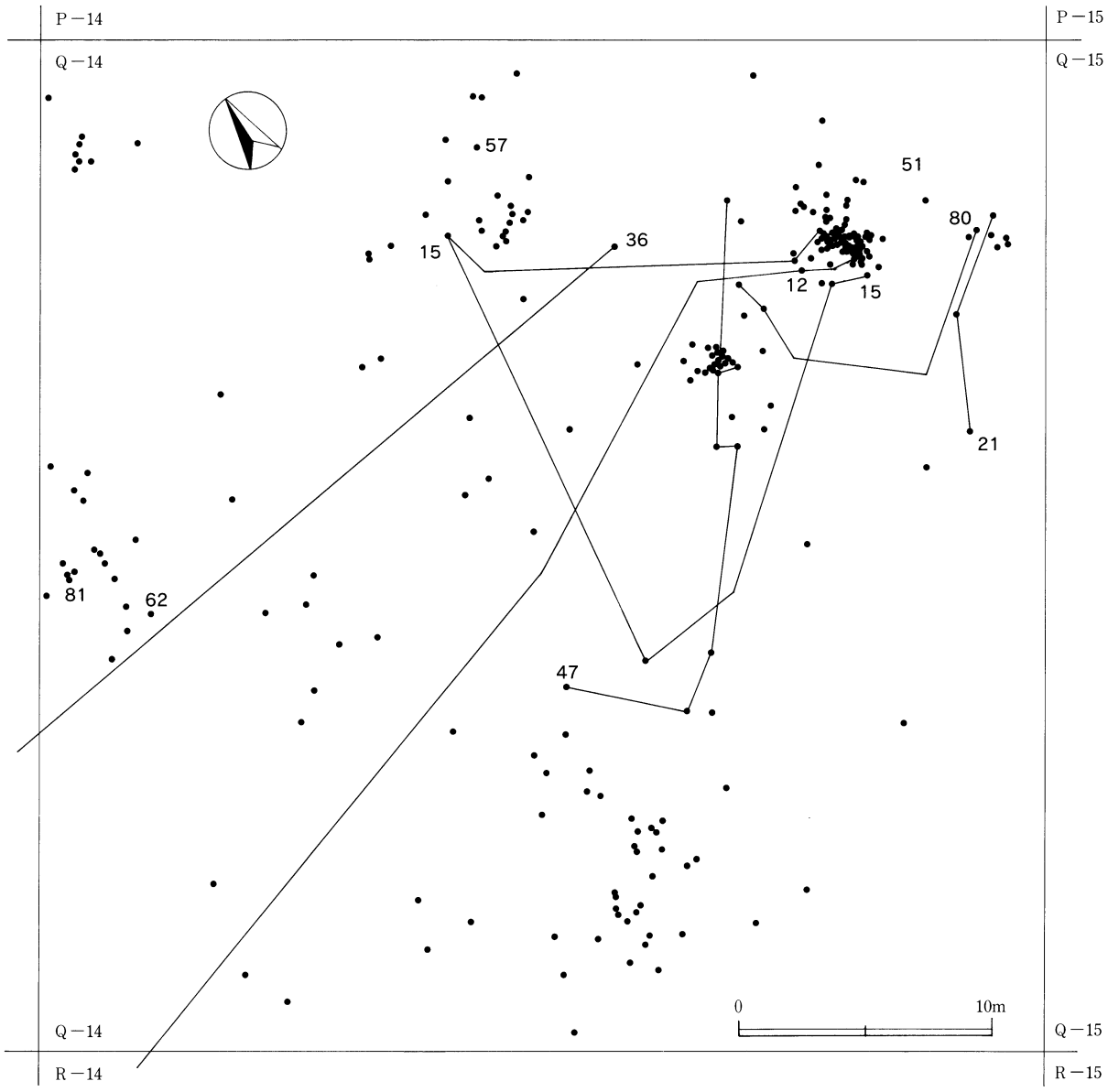
第27図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図４(Ｑ・Ｒ・Ｓ－11・12区)

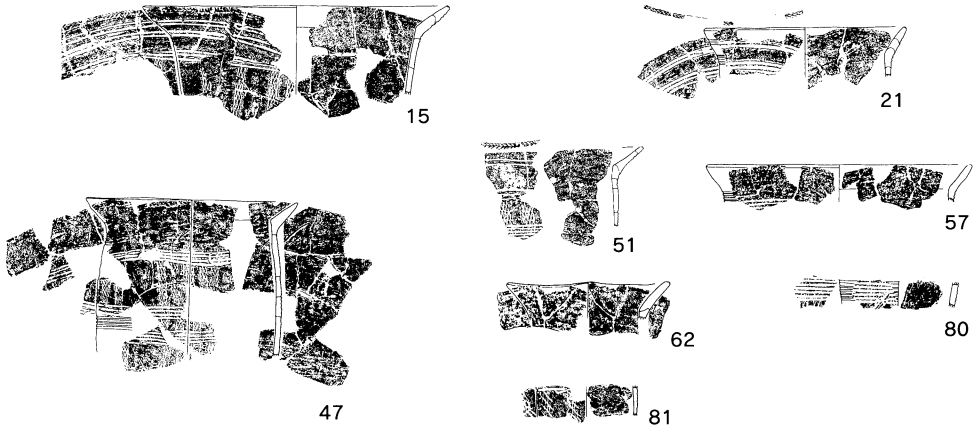


第28図　Q・R・S－11・12区出土　塞ノ神Ａａ式土器実測図

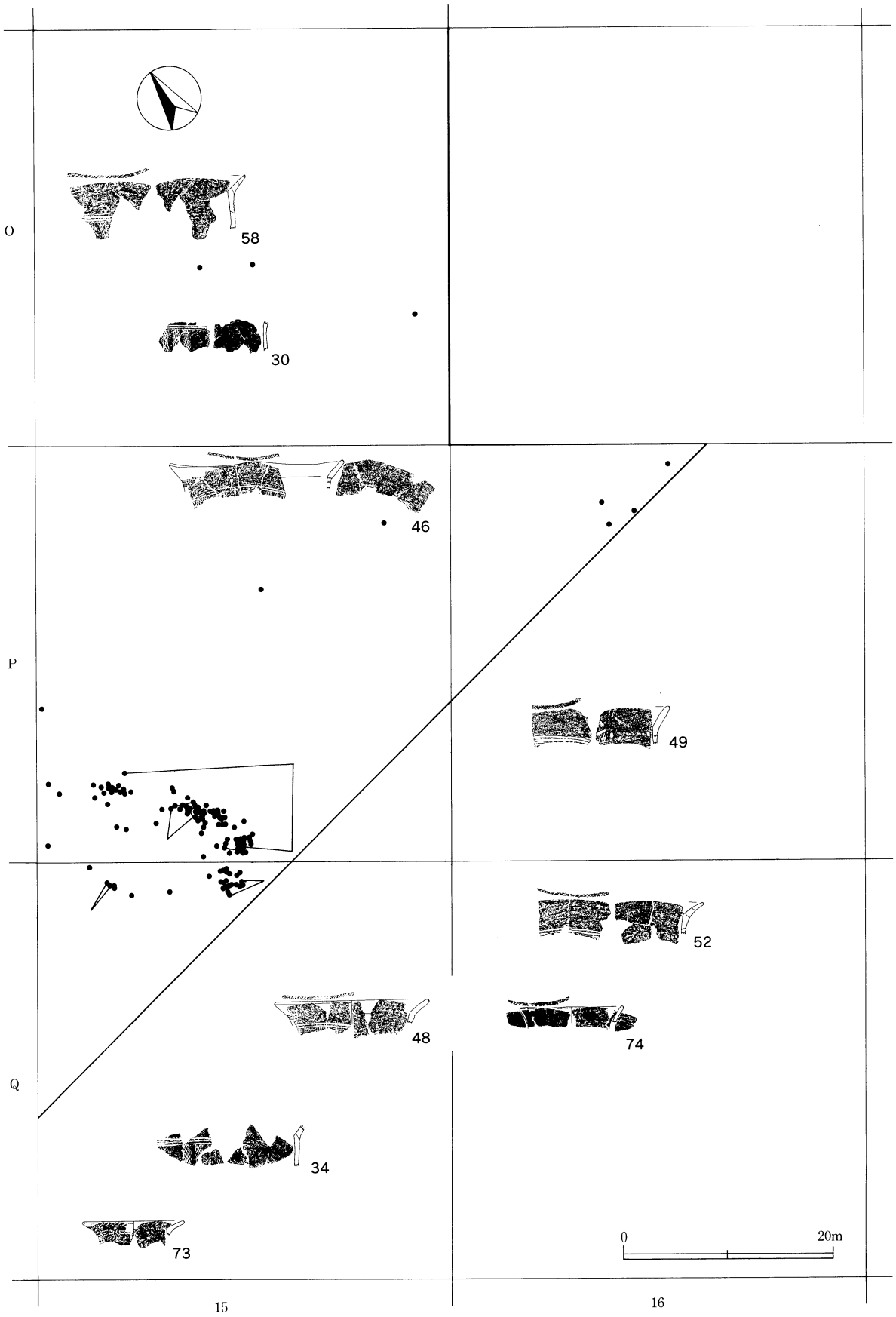


第29図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図５(Ｐ・Ｑ・Ｒ－13・14区)

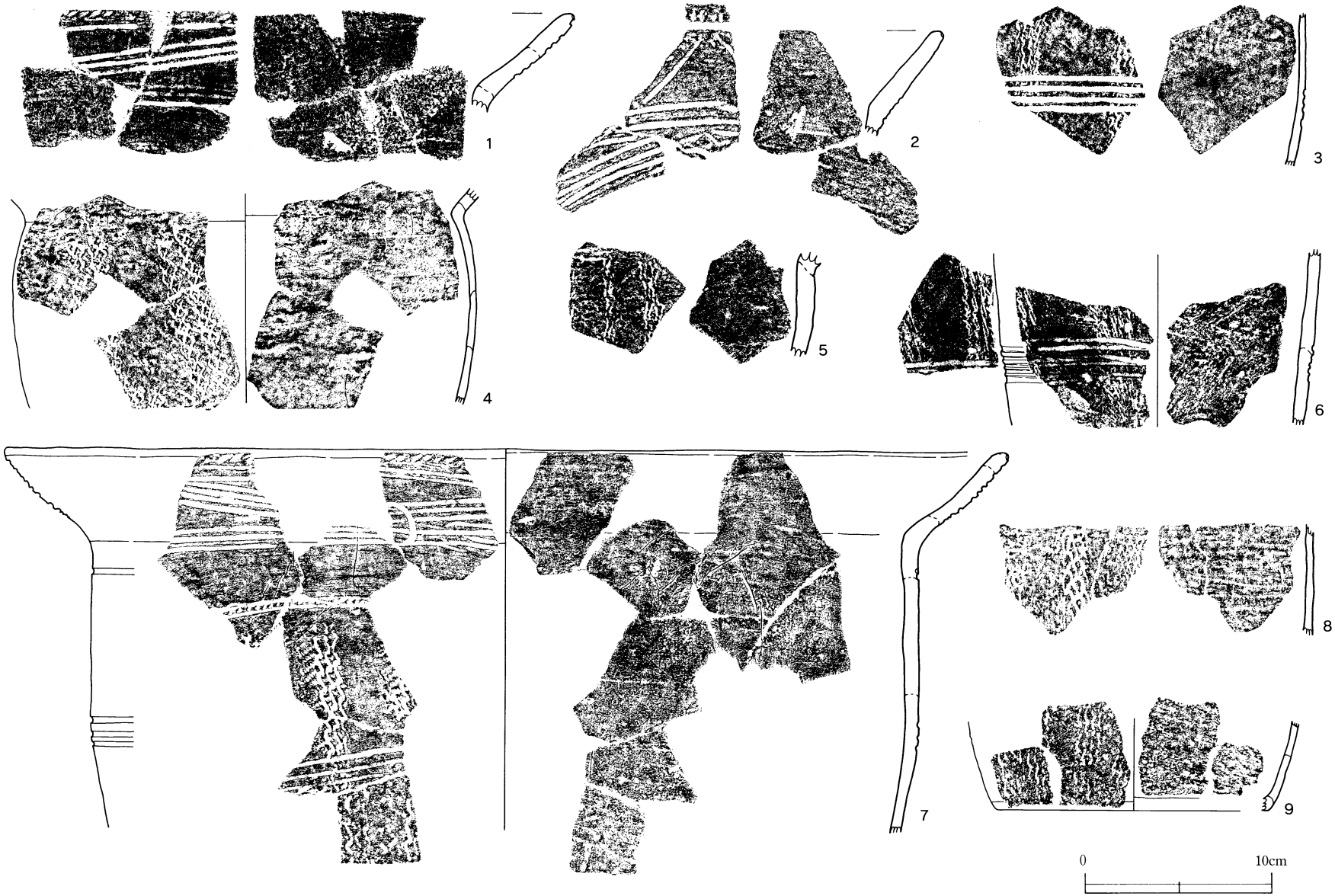




第30図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図６(Ｑ－14区)

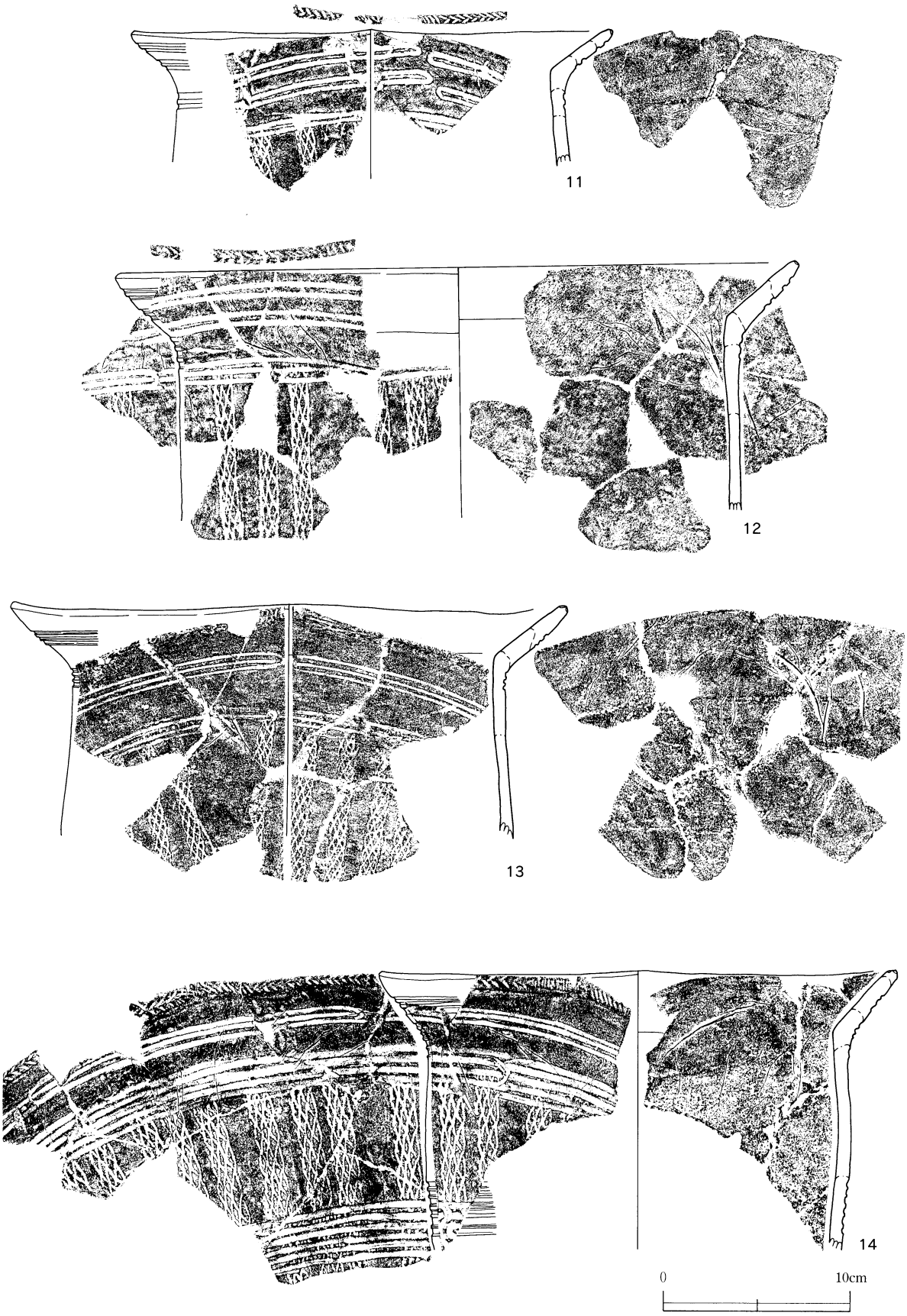


第31図　塞ノ神Ａａ式土器出土状況図７(O・P・Q－15・16区)

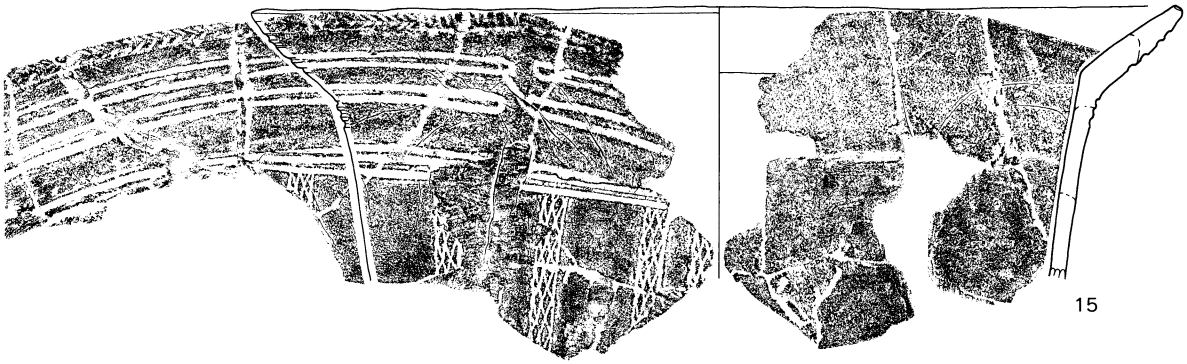


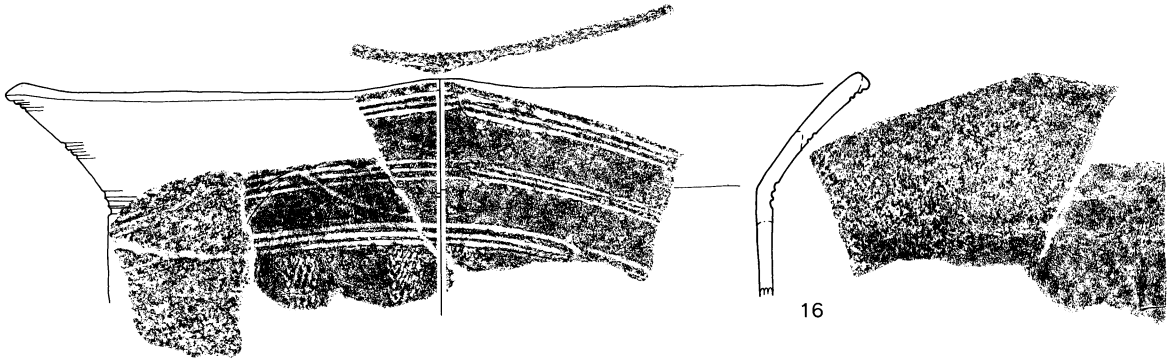
第32図　塞ノ神Ａａ式土器実測図１（１類－１）

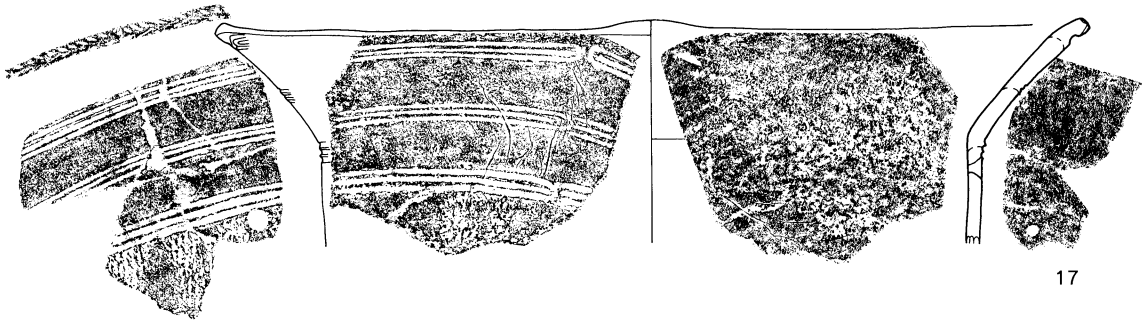
第33図　塞ノ神Ａａ式土器実測図２（２類－１）

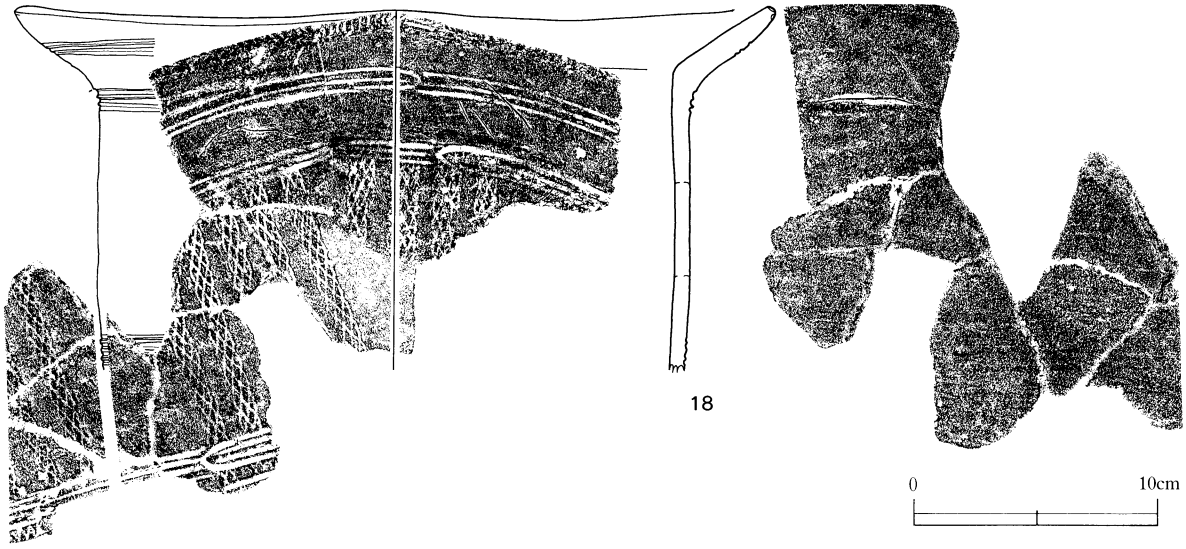


第34図　塞ノ神Ａａ式土器実測図３(２類－２)

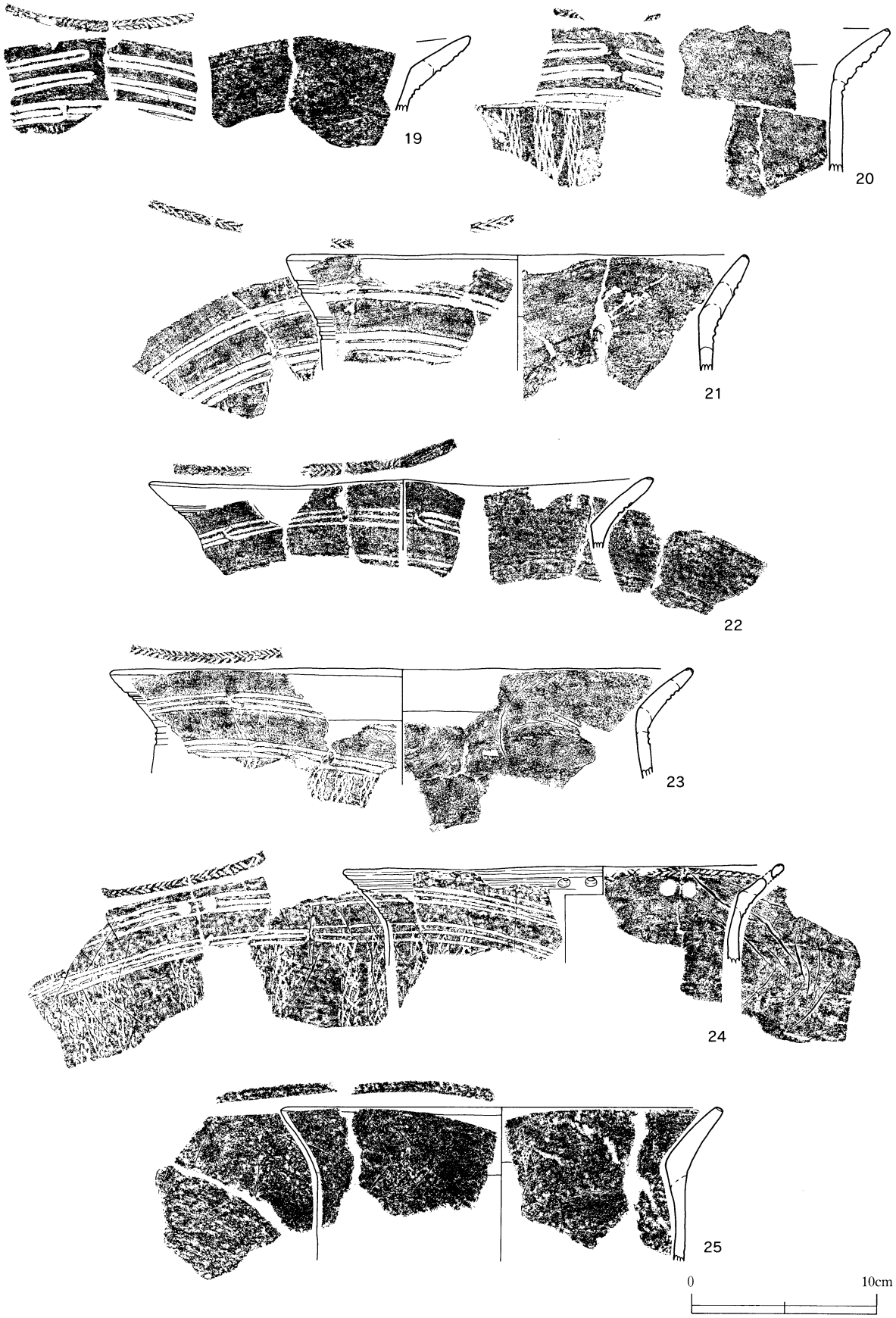




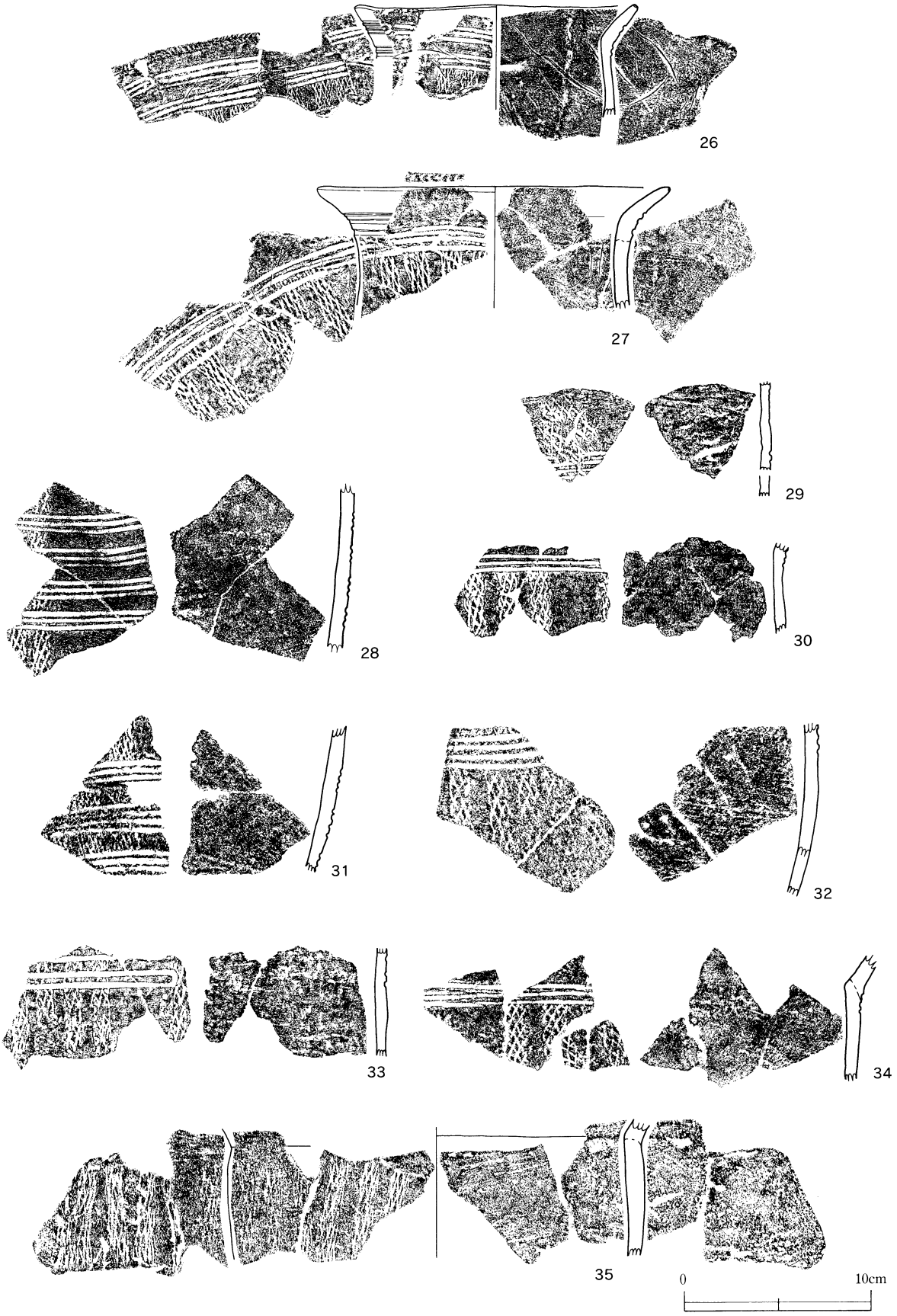




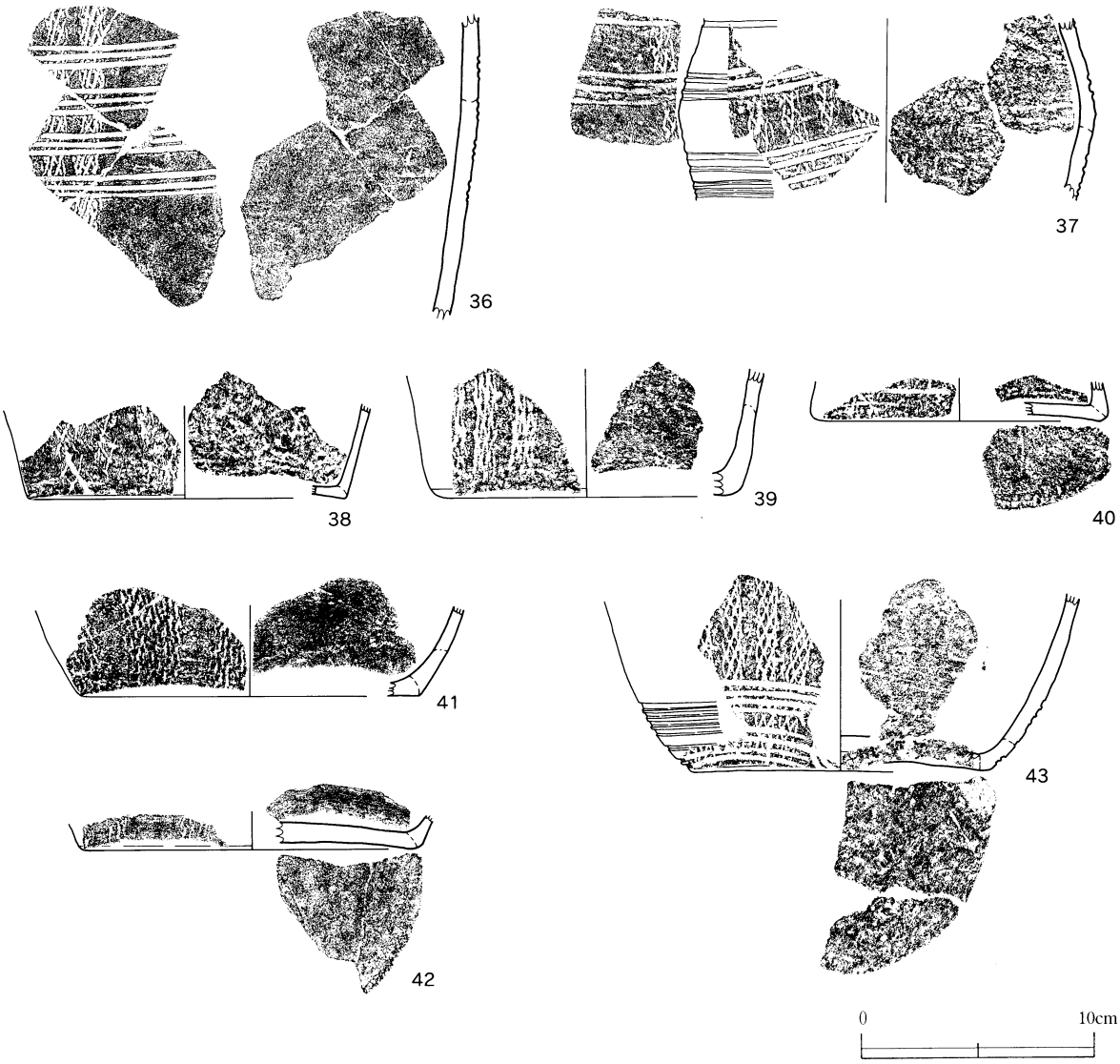
第35図　塞ノ神Ａａ式土器実測図４（２類－３）



第36図　塞ノ神Ａａ式土器実測図５（２類－４）



第37図　塞ノ神Ａａ式土器実測図６（２類－５）



第38図　塞ノ神Ａａ式土器実測図７(２類－６)

(p.37から続く)

の後にナデ調整，あるいは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色から暗茶褐色・暗褐色・黒褐色が，内器面では暗黄褐色から茶褐色が主流であった。

ⅱ）小結

本類が，河口貞徳氏が設定された塞ノ神Ａａ式土器に該当する。特に，

①ラッパ状に開いた口縁部を形成する土器。

②胴部には撚糸文系の網目文を施文する土器。

という２つの特徴を，第２群２類の指標とした。

②－３　第２群３類土器（第39図44～第41図58）

ｉ）概要

第２群３類に属する土器は，土器の大きさにより分類すると，胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（45・57）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（46・47・49）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（44・48・56）という，３種類の大きさが異なる中型の深鉢形土器が出土している。

さて，器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器（44，47～58）と，緩やかな波状口縁を呈する土器（45，46）とが本類でも認められた。また，口縁部はラッパ状に強く開き，胴部は直線的

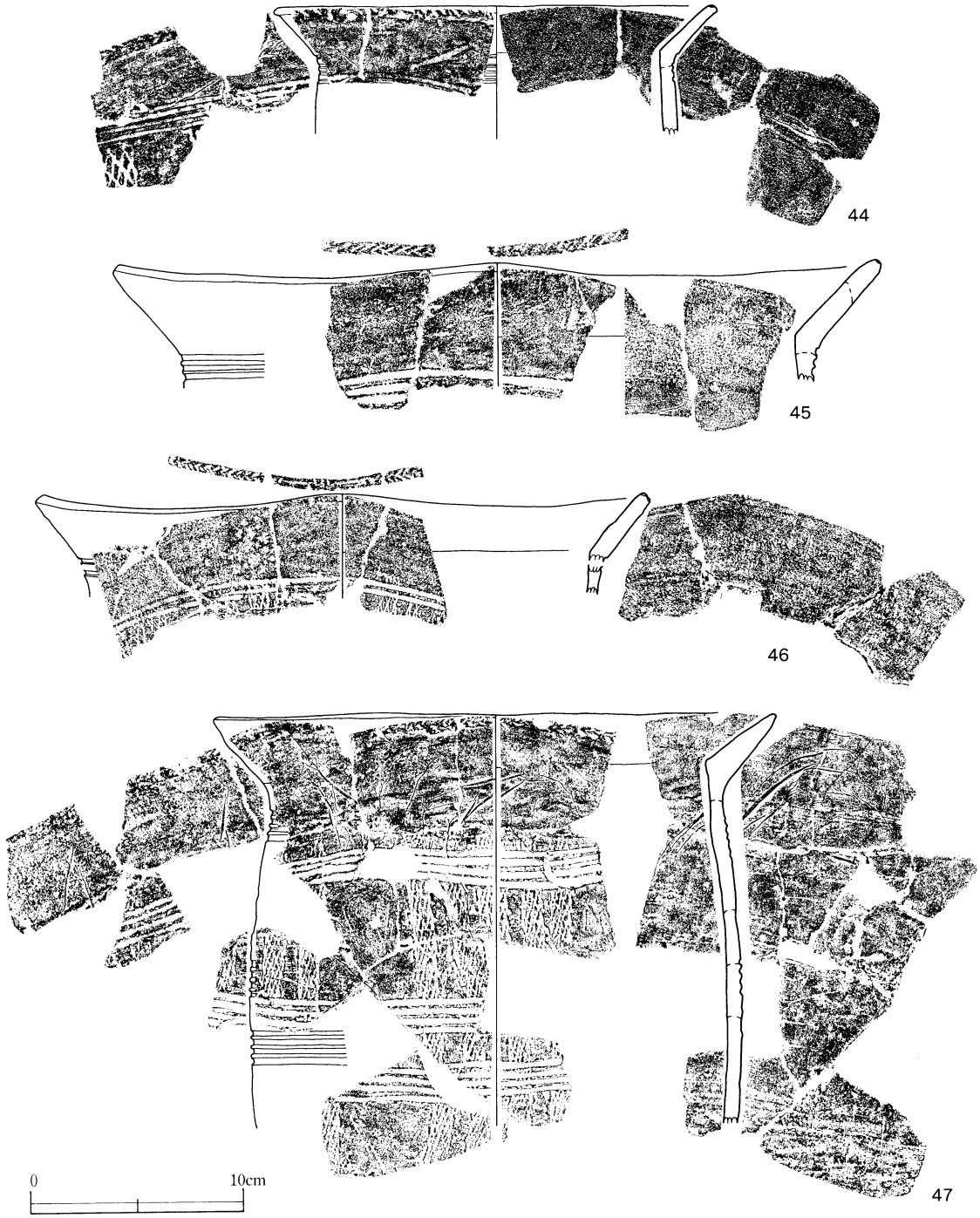
で円筒形を呈する。明瞭に本類に属する底部は出土していない。

一方，施文的特徴としてはまずヘラ状工具を使い，口唇部に上面観が羽状になる刻みを施す点を挙げることができる。口縁部には施文を行わない。

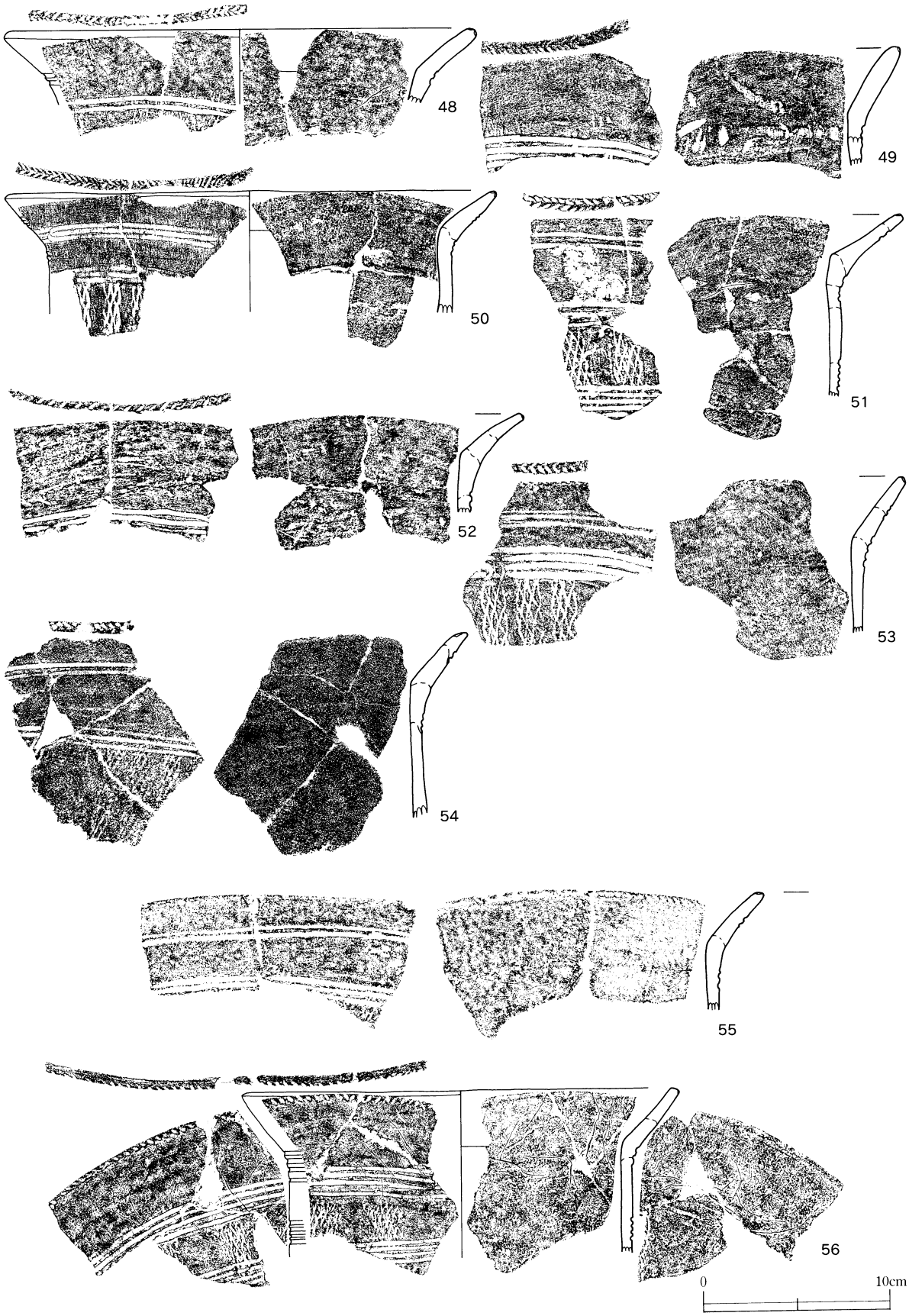
胴部には第２群２類土器と同様に，まず縦位方向に主に３条を単位とした，網目撚糸文を施す。その後に，叉状工具あるいは棒状工具を使って，３条から５条の沈線文を１単位として，胴部中の数か所で横位方向に巡らしている。

さて，第２群３類に属する土器の胎土中鉱物は，

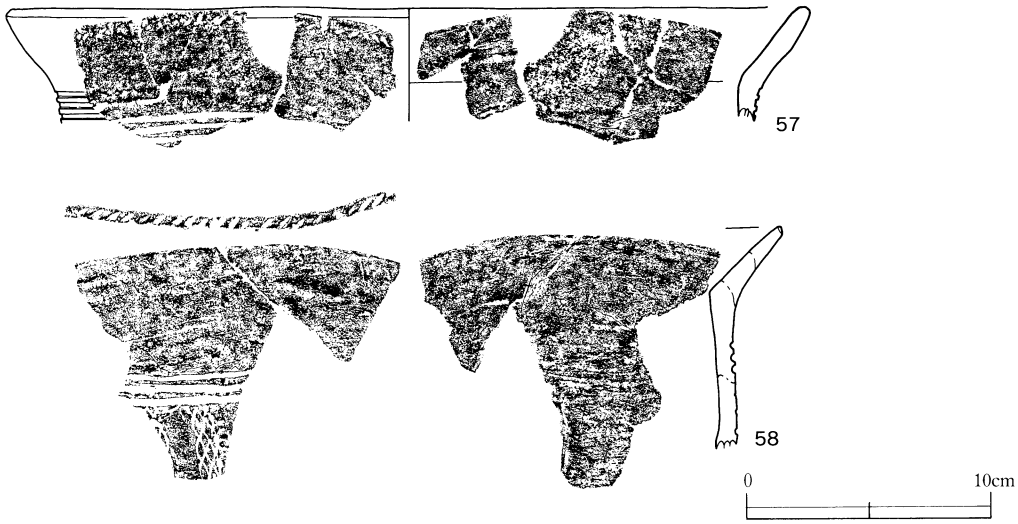
(p.56へ続く)



第39図　塞ノ神Ａａ式土器実測図８(３類－１)



第40図　塞ノ神Ａａ式土器実測図９（３類－２）



第41図　塞ノ神Ａａ式土器実測図10（３類－３）

(p.54から続く)

石英・長石・角閃石で構成されていた。特にクロウンモの含有は認められなかったのが注目できる。また土器の調整方法では，外器面がナデ調整を，内器面が丁寧なナデ調整あるいは木製工具によるヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色から暗茶褐色・暗褐色が，内器面では暗黄褐色から暗茶褐色が主流であった。

ⅱ）小結

第２群３類土器の型式的内容は，器形的特徴でも施文的特徴でも，第２群２類に属する土器と概ね同様である。

その中で２類と３類とに類を分けた指標として，

①内器面において，口縁部と胴部とを分ける稜線が２類土器より明瞭に形成される。

②口縁部外器面が無文になる。

という２点を挙げることができる。

①の指標は，塞ノ神式Ａａ土器の指標の１つである。２類土器では丸みをもち，明瞭であるとは言い切れなかった口縁部と胴部とを分ける稜線が，３類土器では明瞭な稜線が形成されるのである。

②－４　第２群４類土器（第42図59～第43図72）

ⅰ）概要

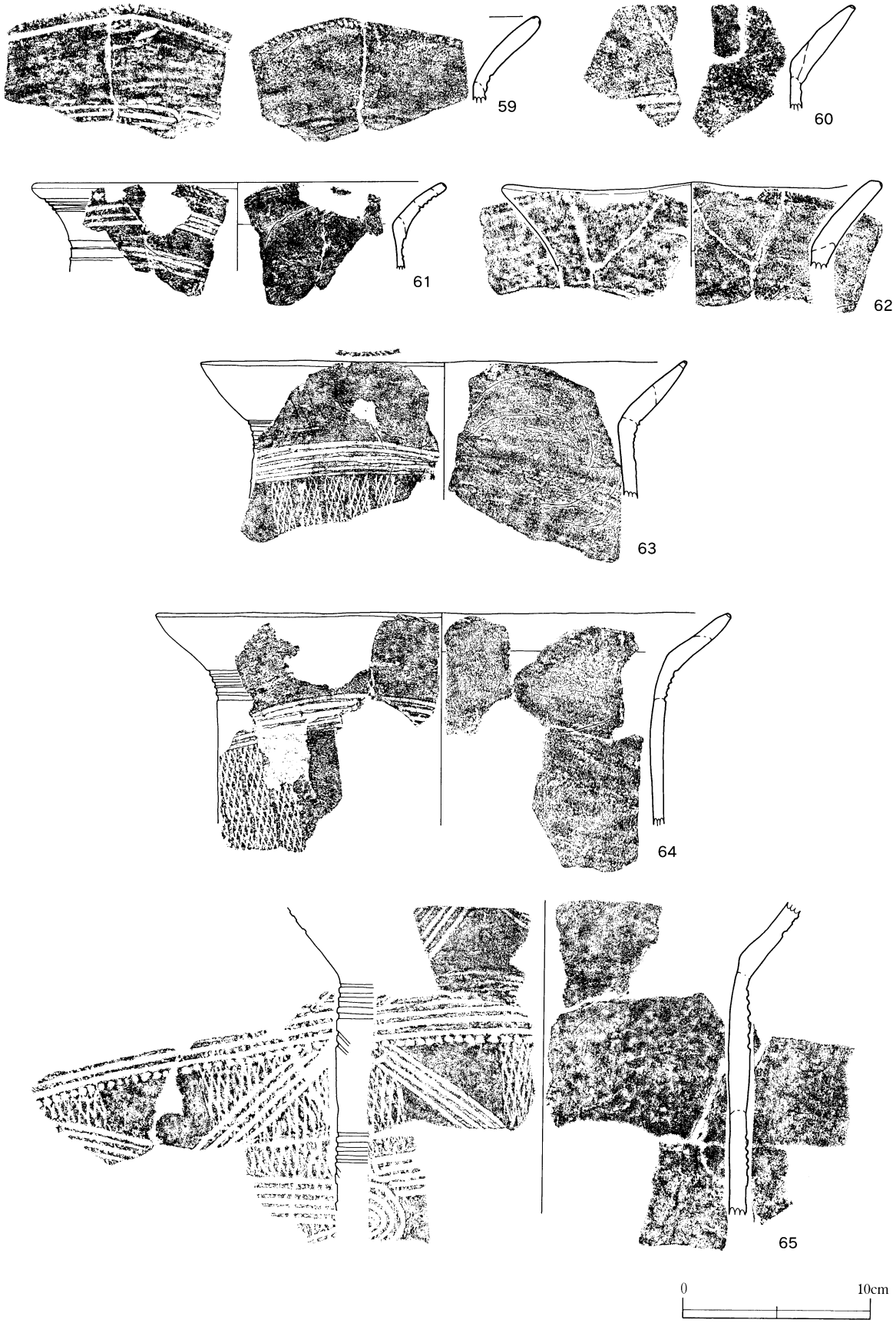
第２群４類に属する土器は，土器の大きさでは胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（63・64・65）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（61・62）という，２種類の中型深鉢形土器が出土していることが認められた。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器や胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器は出土しなかった。

器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器（59・61・63・64）と，緩やかな波状口縁を呈す土器（62）とが本類でも認められた。

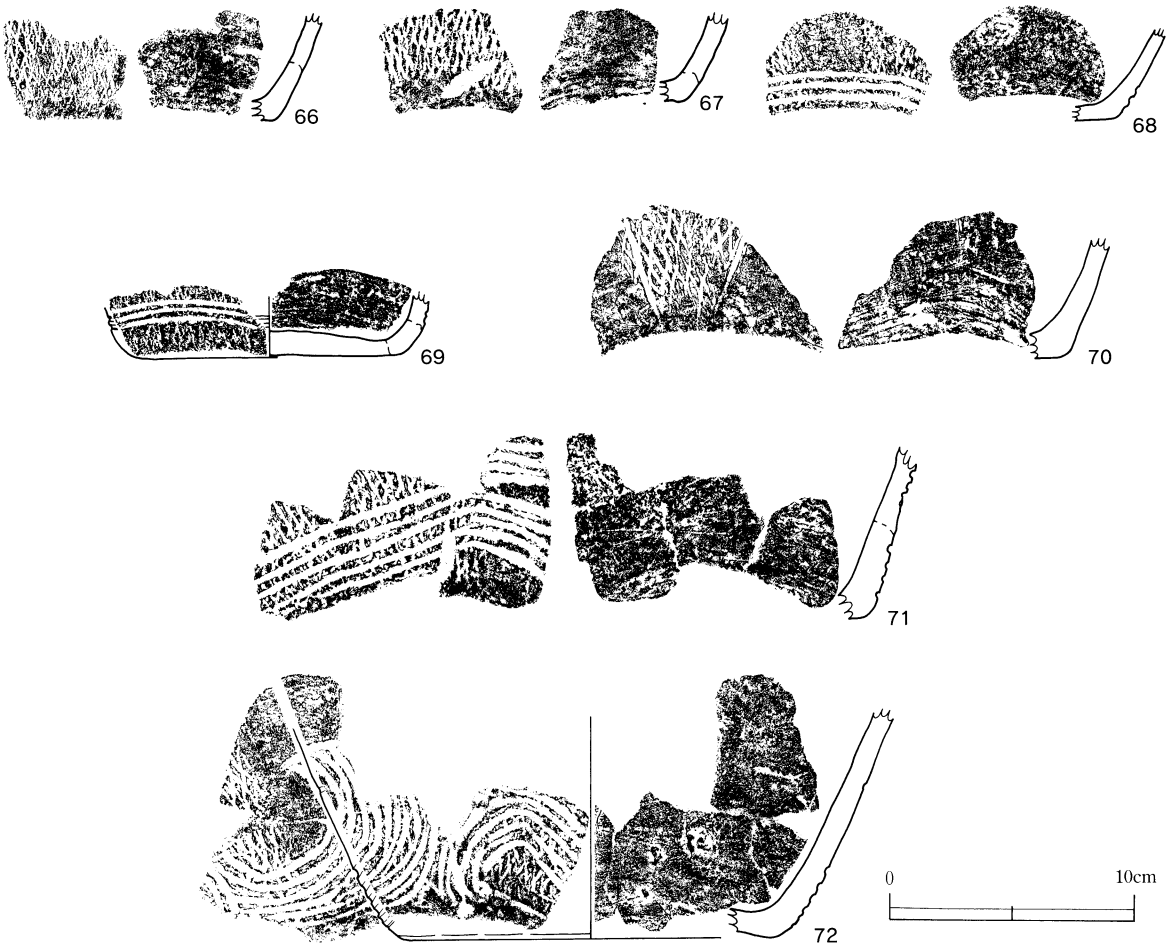
ところで大きさや口縁形態の違いに係わらず，第２群３類土器と同様に，口縁部は特に大きく開く土器である。胴部形態は直線的に口縁部と底部とをつなぐ円筒形を呈する。底部はやや上げ底気味の底部に対して，胴部がやや外に開きながら立ち上がる土器である（第43図66～72）。

一方，第２群４類土器の施文的特徴は，次のとおりである。まず，口唇部にはヘラ状工具を使って上面観が羽状(64)もしくは斜位(63)の刻みを施す土器と，口唇部を無文にする土器(59～62)とがある。さらに口縁部外器面では，横位方向に数条の沈線文を

(p.58へ続く)



第42図　塞ノ神Ａａ式土器実測図11（４類－１）



第43図　塞ノ神Ａａ式土器実測図12（４類－２）

(p.56から続く)

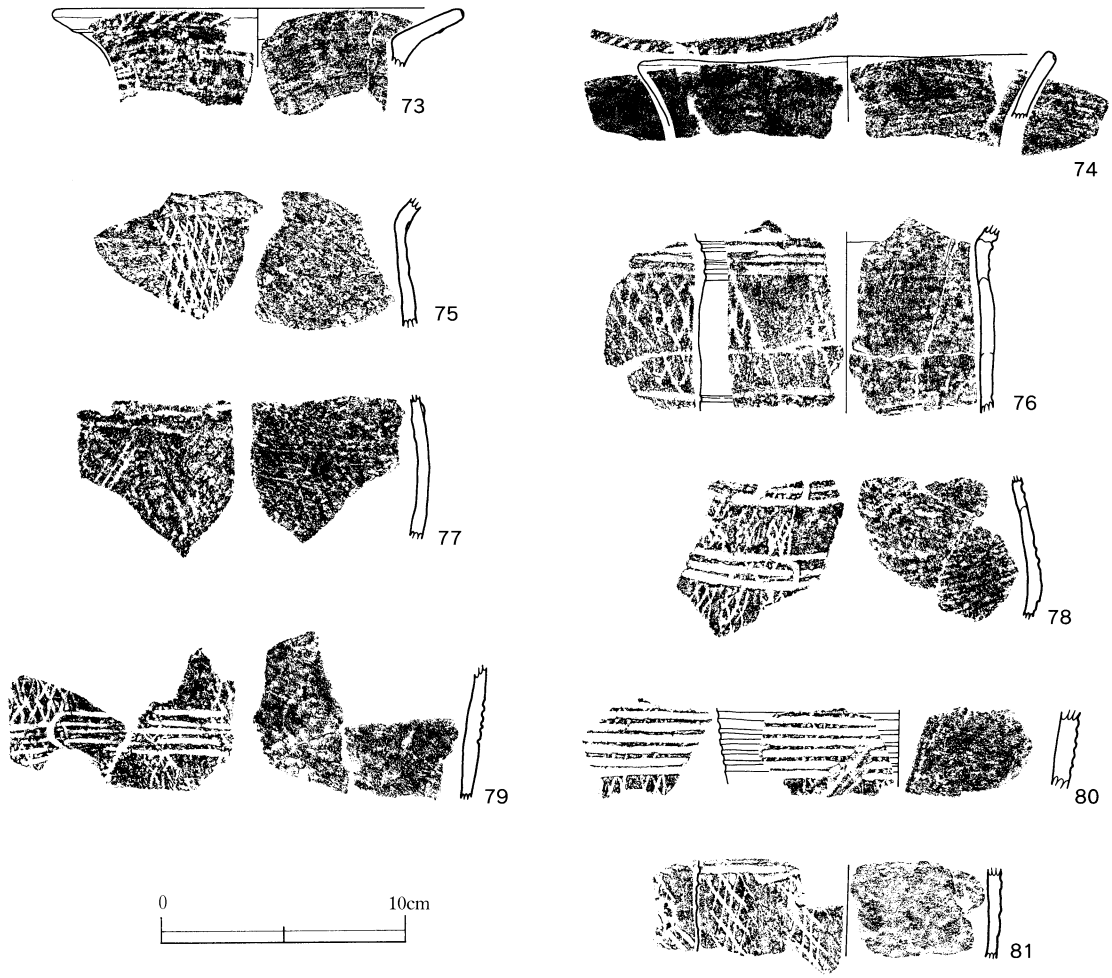
巡らす土器(61)の他の土器は，無文の土器(59・60・62～64)であった。口縁部と胴部との境には，横位方向に５～６条の沈線文を巡らす。

次に胴部文様であるが，第２群４類土器には２タイプの土器を範疇に入れた。

第１のタイプの土器は，網目撚糸文を縦位方向に施文するのは，２類土器や３類土器の特徴と同じであるが，２類土器や３類土器と比較して１条ごとの間隔が極端に狭くなり，さらに単位となる条数も３～５条に増え，単位となる施文幅が広いタイプの土器（63・64）である。現在の原体幅は，約２cmである。

第２のタイプの土器は，網目撚糸文を縦位方向に施文するが，１条ごとの間隔がなくなり，施文単位幅が極端に広くなるタイプの土器(65～72)である。この施文方法で胴部下端まで施文をしている。撚糸文を施文後に，横位方向もしくは斜位方向に４条から５条の沈線文を施す。65のように沈線文を弧状に結んだり，72のように重弧文を施したりしているのも特徴の１つである。

さて，第２群４類に属する土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は63・64の２点であった。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整，もしくはヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整もしくはナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が，内器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が主流であった。



第44図　塞ノ神Ａａ式土器実測図13（小型深鉢）

②－５　第２群小型深鉢形土器（第44図73～81）

ｉ）概要

第２群に属する小型深鉢形土器は，胴部最大径が15cm以下で，多くが12cm前後になる土器をいう。

第２群小型深鉢形土器の器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部がラッパ状に開く(73・74)。胴部形態には僅かに丸みを帯びた円筒形を呈する(75～77)土器と，直線的に口縁部と底部とをつなぐ(79～81)土器とがある。本群に属する底部は，上野原遺跡第10地点では出土が確認できていない。

一方，施文的特徴としては，ヘラ状工具を使って口唇部に刻みを施すことと，口縁部には文様を施さないこと，を挙げることができる。

そして胴部には，「網目撚糸文」を縦位方向に施す。撚りは１段左撚（Ｒ）の縄を，棒状工具に「左巻き後右巻き」で巻いた施文具を使用している。原体幅は現状で約2.5cm ある。この原体幅は，中型深鉢形土器に施文する際に使用している，施文原体の長さとあまり変化がないことを示しており，注目できる。

撚糸文を施文後，横位方向に４条から５条の沈線文を，口縁部と胴部との境と，胴部中央部とにそれぞれ施す。

さて，第２群に属する小型深鉢形土器の胎土中鉱物は，石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器が認められなかったことは注目できる。また，土器の調整方法は，外器面はナデ調整，もしくはハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色・暗茶褐色・暗褐色が，内器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

塞ノ神Ａａ式土器１類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第32図	1	S－１０	5990	818	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	スス付着
	2	R－０８ R－０８	2835 2962	1000	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ		茶褐色～暗黄褐色	茶褐色	
	3	R－１１	1530	1023	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	黄褐色～暗褐色	
	4	R－１４ R－１４	1703 1732	1018	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁下端～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ		茶褐色～暗褐色	胴部径25.1cm，スス付着
	5	R－１３	202	1040	Ⅵ	深鉢	胴部上半	○	○			砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄白色～茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
	6	R－１２ R－１２	521 1116	1022	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む		ヨコハケ→ナデ	暗黄白色～暗茶褐色	黒褐色～暗褐色	胴部径17.5cm，スス付着
	7	S－１０ S－１０ S－１０ S－１０ S－１０ S－１０	765 996 2983 6365 7093 7692	820	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			ナデ	口縁～胴部上半：丁寧なナデ 胴部下半：ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	口径53.2cm スス付着
	8	R－１４ R－１４	665 678	1024	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部上半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～黒褐色	茶褐色～暗茶褐色	
	9	R－０９ R－０９	354 1676	848	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○			細砂・微砂			暗黄白色	黒褐色	

塞ノ神Ａａ式土器２類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第33図	10	P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ P－１４	8 36 160 1006 1052 1129 1133 1601 1602 1608 1612 1617 1618 1620 1621 1622 1624 1625 1626 1627 1632 1639 1644 1646 1650 1651 1657 1658 1677 1732 1741	1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052 1052	 Ⅲ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～暗茶褐色	口径36.4cmスス付着
第34図	11	R－１０ R－１０ R－１０ R－１０	13534 13832 13834 13835	816	Ⅶ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～黒褐色	緩やかな波状口縁 口径44.6cm，スス付着
	12	Q－１４ Q－１４ R－１１ R－１１	70 1696 573 1416	845-1	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	◎	○	砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	口径36.2cm
	13	R－１１	1100	845-2	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○	◎	細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	茶・暗茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗褐色	緩やかな波状口縁口径29.6cm
	14	Q－１１ Q－１１ Q－１１ Q－１１ Q－１１ Q－１１	9369 9405 9526 10551 10562 10607	842	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	◎		細砂・微砂	ナデ	右下がりハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	緩やかな波状口縁 口径23.6cm 補修孔あり，スス付着

塞ノ神Ａａ式土器２類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第35図	15	Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14	68 72 683 958 960 1364 1662 1671 1673 1692 2475	843	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ・ナデ	ヨコハケ・ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗茶褐色	緩やかな波状口縁 スス付着 口径37.8cm
	16	R－10 S－10 S－10	5721 2253 5658	822	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○			細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～黒褐色	緩やかな波状口縁 口径34.8cm
	17	S－10 S－10	5730 9797	817	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗褐色～黒褐色	暗茶褐色～黒褐色	緩やかな波状口縁 口径35.2cm スス付着，補修孔あり
	18	R－11 R－11 R－11 R－11 R－11 R－11	245 580 723 742 1125 1415	838	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○		◎	細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	暗褐色～黒褐色	黒褐色～暗茶褐色	口径31.0cm，スス付着
第36図	19	Q－12 Q－12	6496 8647	864	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○		◎	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗褐色	暗茶褐色～暗褐色	緩やかな波状口縁
	20	Q－12 Q－12 Q－12	6100 6146 6469	827	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	21	Q－14 Q－14 Q－14	967 1902 1924	821	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～黒褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径24.6cm スス付着
	22	Q－11 R－11 R－11	1698 2373 2548	870	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	緩やかな波状口縁 口径26.6cm
	23	Q－11 R－11 R－11 R－11 R－11 R－11	12008 2243 2331 2370 2634 2675	823	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗黄褐色	茶褐色～黒褐色	口径31.4cm
	24	S－09 S－09 S－09	568 2188 2426	844	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗黄褐色	補修孔あり
	25	R－11	881	973	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	無文・口径23.4cm
第37図	26	R－10 R－10 R－10 R－10 R－10 R－10	854 4995 5013 5020 5059 5060	839	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色～黒褐色	暗茶褐色～黒褐色	緩やかな波状口縁 口径14.8cm，スス付着
	27	Q－11 Q－11 Q－11 Q－11	9520 9536 9540 10565	841	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	◎		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ・ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～黒褐色	口径18.8cm
	28	R－11 R－11	1471 1540	2001	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○			細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～黒褐色	暗茶褐色～黒褐色	スス付着
	29	R－10	9935	999									ナデ	ヨコハケ→ナデ			
	30	P－15 P－15	599 600	998	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部上半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	黒褐色～暗褐色	暗茶褐色～黒褐色	
	31	R－13	945	856	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ・ナデ	黄白色～黒褐色	茶褐色～暗茶褐色	
	32	R－11	3065	855	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～黄褐色	暗黄褐色～黄褐色	
	33	S－10 S－10	5748 8264	865	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	黒褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
	34	Q－15 Q－15	144 183	1041	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○			細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	暗黄褐色～暗茶褐色	
	35	S－10	1982	866	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄褐色～黄褐色	暗茶褐色～暗褐色	胴部径45.0cm
第38図	36	Q－14 Q－14 R－11 R－11 R－11	1680 1771 1520 1853 2869	1021	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	底部：ナデ 右上がりハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～黒褐色	スス付着
	37	S－10 S－10	5723 5726	1019	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～暗褐色	黒褐色～暗茶褐色	胴部径18.0cm
	38	Q－12	6698	847	Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○			細砂・微砂			暗黄褐色～黒褐色	明黄白色	
	39	S－12	158	851	Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	黒褐色	底径12.0cm
	40	R－11	1200	849	Ⅵ	深鉢	胴部下端～底部	○	○			細砂・微砂	ハケ→ナデ	ナデ	暗褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗褐色	底径12.0cm
	41	R－13	943	850	Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～暗褐色	黒褐色～暗黄褐色	底径14.3cm
	42	R－12	566	1020	Ⅵ	深鉢	底部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	胴部下半：ヨコハケ・ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～黒褐色	底径14.2cm，スス付着
	43	R－11 R－11 R－11	239 241 1621	846	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○		◎	細砂・微砂			茶褐色～暗褐色	黒褐色～暗茶褐色	

塞ノ神Ａａ式土器３類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第39図	44	Q－13 Q－13 Q－13	2169 4018 4514	840	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	◎		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗褐色～黒褐色	口径20.4cm
	45	R－11 R－11 R－11	267 469 951	859	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	◎		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～暗褐色	茶褐色～暗茶褐色	緩やかな波状口縁 口径36.0cm
	46	P－15 P－15 P－15 P－15	738 1047 1060 1086	867	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	
	47	Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14 Q－14	108 110 339 675 679 975 976 1248 1583 1584 1598 2385	807	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	口縁部：丁寧なナデ 胴部：ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	口径26.6cm
第40図	48	P－15 P－15 P－15 P－15	733 737 899 1085	819	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	口径24.7cm
	49	P－15	754	988	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～黒褐色	暗褐色～暗黄褐色	緩やかな波状口縁
	50	R－11 R－11 R－11	2369 2380 2680	869	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径26.0m
	51	Q－14 Q－14	1652 1656	863	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～黄褐色	黄褐色～暗褐色	スス付着
	52	P－15	765	828	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色	
	53	Q－11	3802	824	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗褐色～暗黄褐色	
	54	R－11	1853	1009	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	暗茶褐色～茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	
	55	R－11 R－11	1518 1571	858	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗茶褐色	
	56	P－14 P－14 P－14 P－14 P－14	700 2346 2347 2348 2349	825	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→丁寧なナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	口径22.8cm
第41図	57	Q－14	1712	871	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○			砂粒を含む			暗茶褐色～暗黄褐色	明黄褐色～暗褐色	緩やかな波状口縁
	58	P－15 P－15 P－15 P－15	612 671 672 675	826	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	口縁：丁寧なナデ 胴部：ハケ→ナデ	暗茶褐色～黒褐色	茶褐色～暗褐色	

塞ノ神Ａａ式土器４類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第42図	59	Q－09 Q－09 Q－09	4114 4116 4121	1032	Ⅶ Ⅶ Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色 ～茶褐色	茶褐色 ～暗茶褐色	緩やかな波状口縁
	60	R－11 R－11	2141 2941	1031	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色 ～暗茶褐色	黄褐色 ～暗茶褐色	
	61	P－14	1731	1027	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	口径21.8cm
	62	Q－14 Q－14 Q－14	513 516 519	1026	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	口径19.6cm 緩やかな波状口縁
	63	Q－12	7516	829	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○	◎	細砂・微砂	ナデ	口縁：丁寧なナデ，胴部：ハケ→ナデ	暗褐色～黒褐色	暗褐色～黒褐色	口径26.0cm
	64	Q－12 Q－12 Q－12	6163 7494 7506	868	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色～暗褐色	暗褐色	口径30.6cm スス付着
	65	S－10 S－10 S－10 S－10 S－10 S－10	2072 2109 2128 2130 6625 6636	808	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁下半～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	胴部径22.2cm

塞ノ神Ａａ式土器４類観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第43図	66	R－０９	4326	1035	Ⅶ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	黒褐色～暗茶褐色	
	67	O－１１	52	1036	Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	黄白色	
	68	R－１１	1852	1037	Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ →ナデ	茶褐色	茶褐色	
	69	R－１０ R－１０ R－１０ R－１０	4956 5058 5063 5080	1034	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ →ナデ	茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	底径10.6cm
	70	Q－１１	3811	1012	Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む			暗茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	
	71	Q－１３ R－１３ R－１３ R－１３	7222 70 74 100	1013	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ →ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
	72	R－１３ R－１３	558 789	1010	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ →ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗褐色	底径15.2cm

塞ノ神Ａａ式土器・小型深鉢観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第44図	73	Q－１５ Q－１５	56 57	1030	Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	口縁～胴部上端	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→粗いナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗褐色	口径16.5cm
	74	P－１５ P－１５	688 709	1028	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ →ナデ	ヨコハケ →ナデ	暗茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	口径16.8cm，スス付着
	75	R－０９	1950	1038	Ⅵ	深鉢	胴部上半	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ →ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	スス付着
	76	R－１３	1048	1039	Ⅵ	深鉢	胴部上半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	右下がりハケ →ナデ	暗褐色～暗黄褐色	黒褐色～黄白色	胴部径12.2cm，スス付着
	77	R－０９	1682	1043	Ⅵ	深鉢	胴部上半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ →ナデ	暗茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗褐色	
	78	S－０９	2414	1042	Ⅶ	深鉢	胴部下半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	黄白色～灰褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
	79	Q－０９ Q－０９	6401 6411	1044	Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ →ナデ	暗茶褐色～暗黄白色	暗茶褐色～暗黄白色	
	80	Q－１４ Q－１４	115 1916	853	Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ →ナデ	暗黄褐色～黒褐色	暗黄褐色～黒褐色	胴部径14.0cm
	81	Q－１４ Q－１４	523 812	1025	Ⅵ Ⅵ								タテハケ →ナデ	ヨコハケ →ナデ			胴部径12.5cm

③ 第３群　塞ノ神Ａｂ式土器

ｉ）概要

第３群に属する土器は，149点の土器片が出土し，その内の61点，12個体を資料化した。

第３群は，器形的特徴について「やや張りのある円筒形の胴部に，ラッパ状に開いた口縁部がつき，胴部の張りが僅かに勝り，口縁部は平坦である。底部は上げ底気味の平底を呈する」土器とした。さらに施文的特徴としては，「幾何学的な箆枠文を描き，その枠内を縄文系の文様で満たし」た施文をすると定義されている，河口貞徳氏により設定された土器型式である。

ではまず最初に，上野原遺跡第10地点において，第３群に属する土器がどの地点から主に出土しているか，その状況を検討してみよう（第45図～第49図参照）。なお，図中のドットは実測図が未掲載である土器も１ドット１点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは，特に集中して出土している区域がなく，点々と出土地点が点在していることである。しかも，出土地点間では接合関係もないことから，第３群に属する土器は極めて単発的な出土であったと言える。

さて，上野原遺跡第10地点で出土した第２群に属する土器を分析していくことにする。

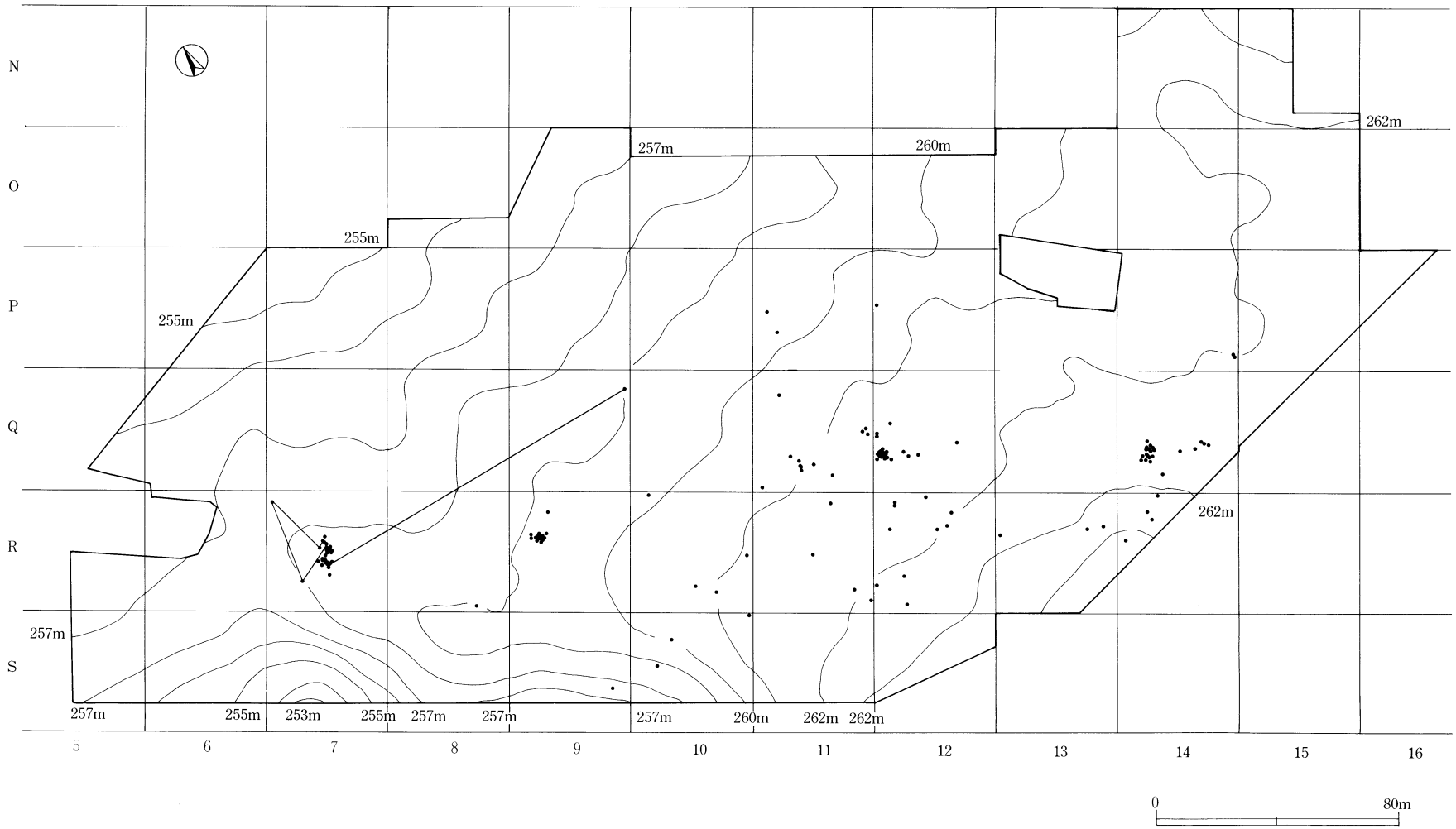
第３群に属する土器は，土器の大きさで分類すると，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（３・12）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（１・４・５）という，２種類の大きさが異なる中型の深鉢形土器が出土していることが認められた。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器や胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器は出土しなかった。

器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器（１・４・５）と，緩やかな波状口縁を呈す土器（３）とが本類でも認められた。

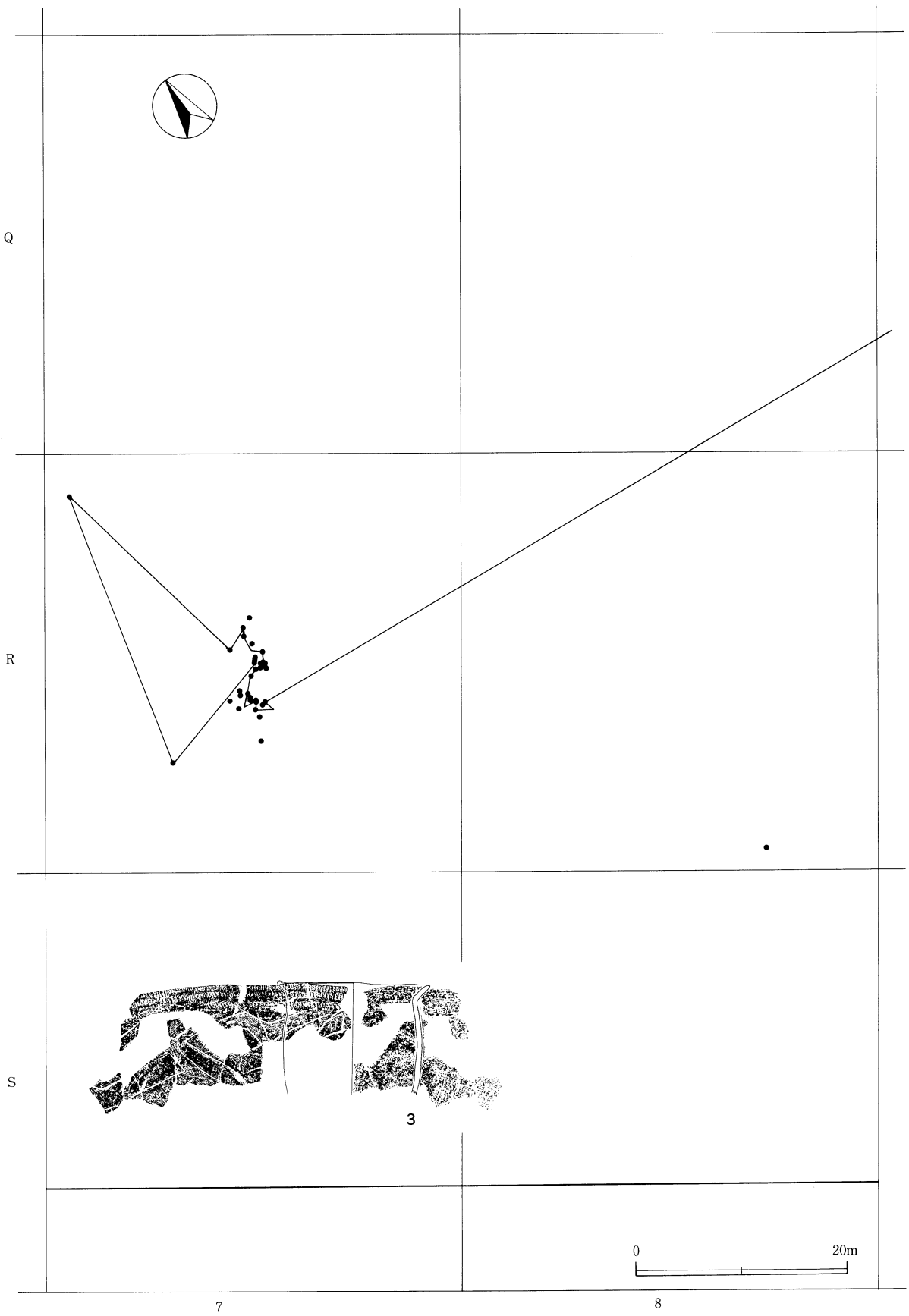
ところで大きさや口縁形態の違いに係わらず，第２群３類土器や４類土器と同様に，口縁部はラッパ状に強く開く土器である。胴部形態は直線的ないしはわずかな丸みを持って口縁部と底部とをつなぐ円筒形を呈する。底部は未出土であるが，胴部下端からやや外反し丸味もちながら立ち上がる土器である（第52図６～12）。

一方，第３群の施文的特徴としては，まず口唇部刻みが消失すること，口縁部には棒状工具を使った沈線文と刺突連点文とで文様が構成されること，胴部には棒状工具を使って幾何学的な箆枠文を描き，その枠内を網目撚糸文で満たしていることが挙げられる。網目撚糸文の撚りの方向は，１段左撚（Ｒ）である。

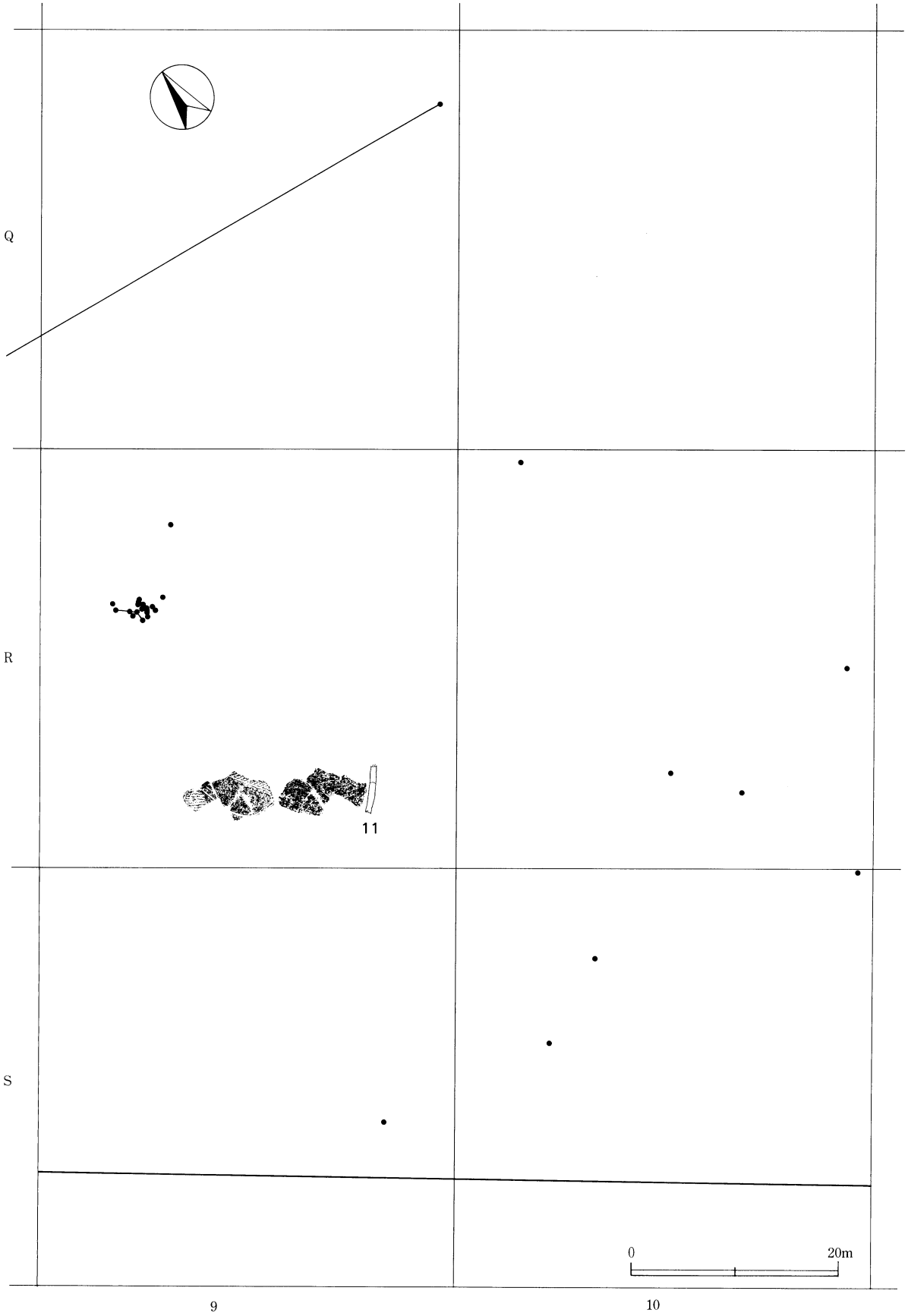
さて，第３群に属する土器の胎土中鉱物は，多くの土器が石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモの含有は認められたのは，３・５・10の土器であった。また土器の調整方法では，外器面がナデ調整あるいはハケ目調整の後にナデ調整を，内器面が木製工具によるヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色から暗黄褐色・暗褐色が，内器面では暗茶褐色から暗黄褐色・暗褐色が主流であった。



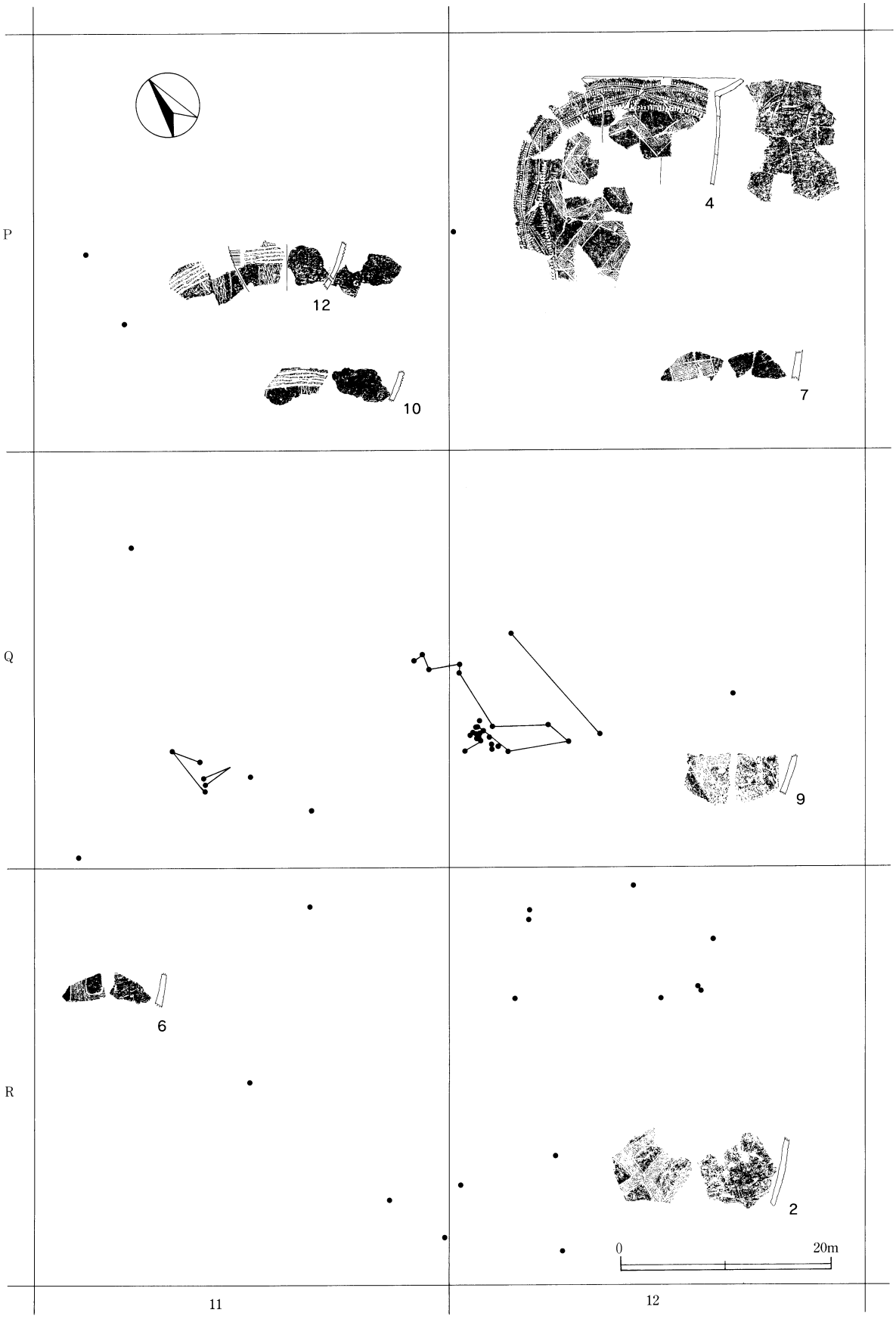
第45図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況全体図



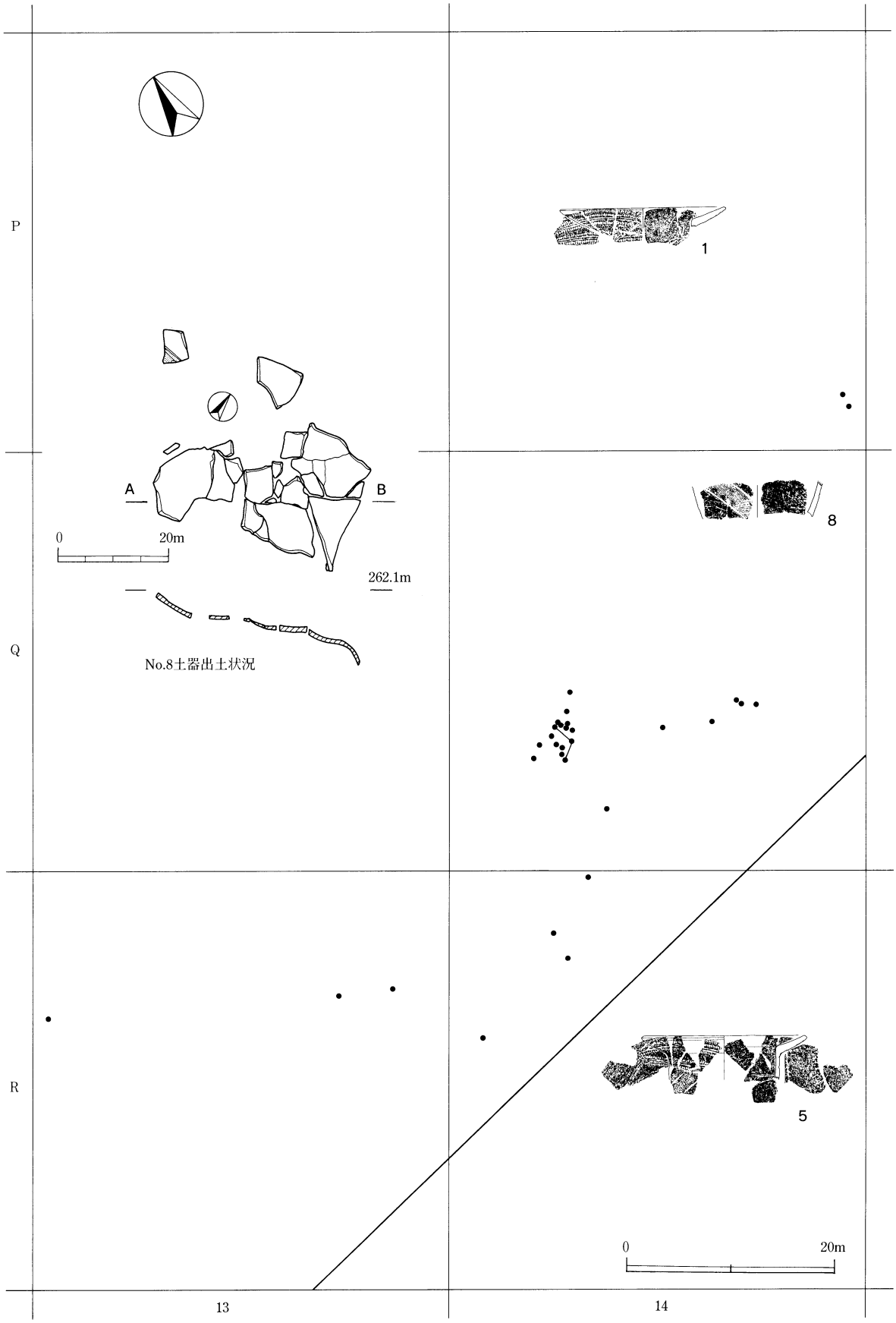
第46図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図１(Ｑ・Ｒ・Ｓ－７・８区)



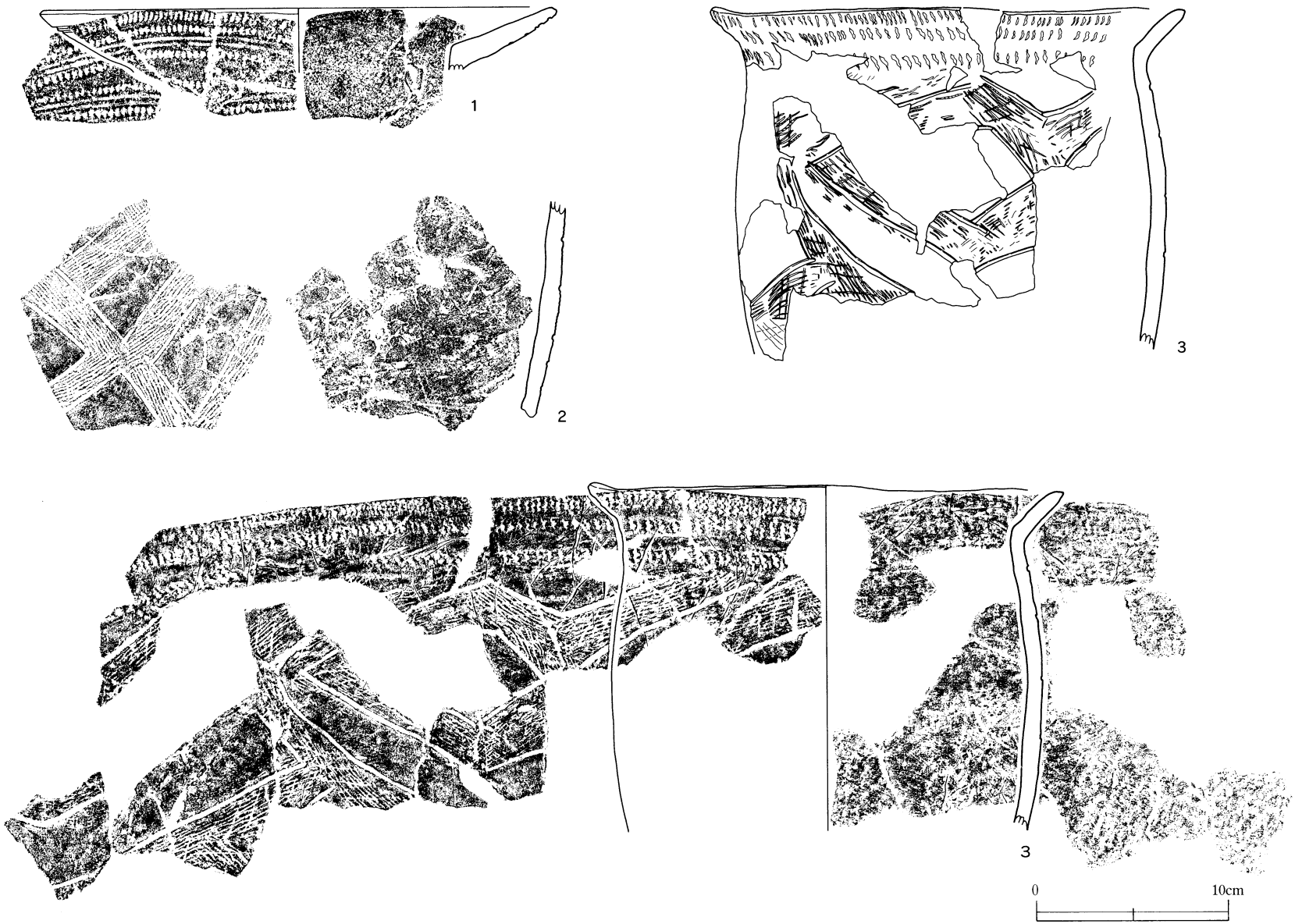
第47図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図２(Ｑ・Ｒ・Ｓ－９・10区)



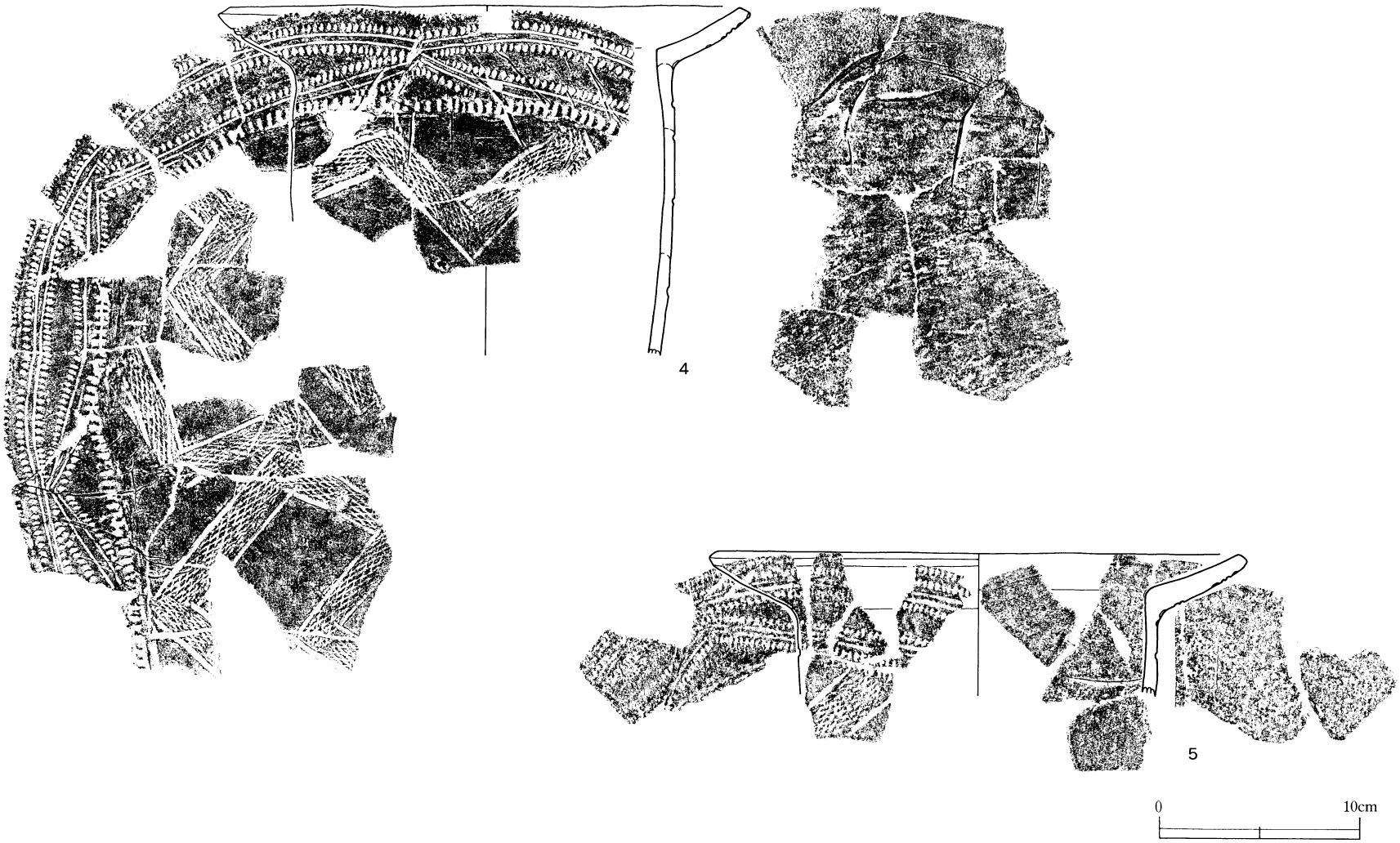
第48図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図３(Ｐ・Ｑ・Ｒ－11・12区)



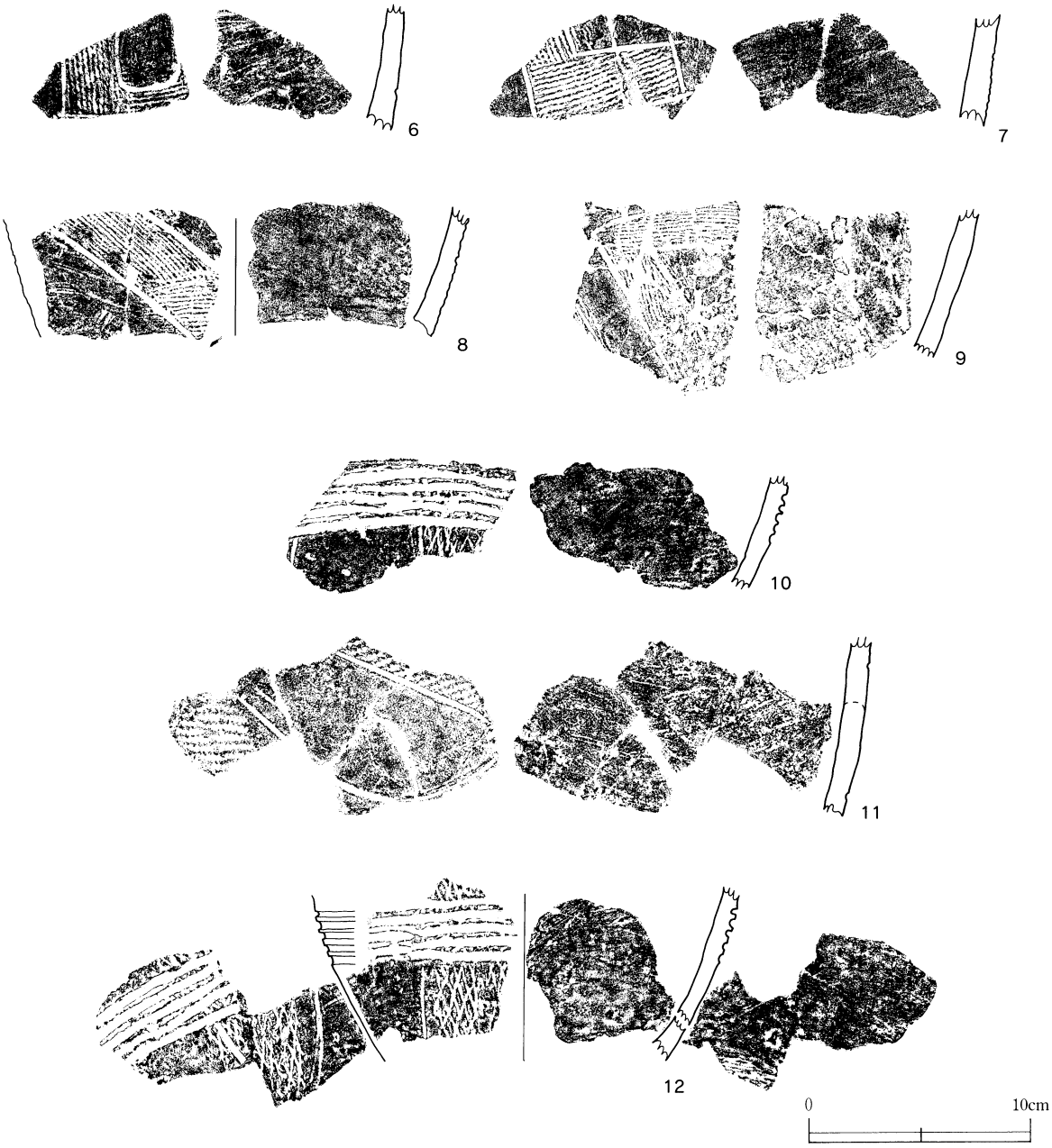
第49図　塞ノ神Ａｂ式土器出土状況図４(Ｐ・Ｑ・Ｒ－13・14区)



第50図　塞ノ神Ａｂ式土器実測図１



第51図　塞ノ神Ａｂ式土器実測図２



第52図　塞ノ神Ａｂ式土器実測図３

塞ノ神Ａｂ式土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第50図	1	Q－14	355	876	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色～暗黄褐色	暗赤褐色～暗茶褐色	口径26.6cm
		Q－14	629		Ⅵ												
	2	R－12	44.2	1005	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	右上がりハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～黄白色	
	3	Q－09	6933	815	Ⅶ	深鉢	口縁～胴部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗褐色	口径24.5cm
		R－07	219		Ⅶ												
		R－07	221		Ⅶ												
		R－07	223		Ⅶ												
		R－07	226		Ⅶ												
		R－07	259		Ⅶ												
		R－07	261		Ⅶ												
		R－07	273		Ⅶ												
		R－07	274		Ⅶ												
		R－07	276		Ⅶ												
		R－07	277		Ⅶ												
		R－07	291		Ⅶ												
		R－07	292		Ⅶ												
		R－07	294		Ⅶ												
		R－07	471		Ⅶ												
		R－07	476		Ⅶ												
		R－07	481		Ⅶ												
		R－07	482		Ⅶ												
		R－07	483		Ⅶ												
		R－07	484		Ⅶ												
第51図	4	Q－11	1898	814	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	暗黄褐色～茶褐色	口径25.7cm
		Q－11	2408		Ⅵ												
		Q－11	3069		Ⅵ												
		Q－12	6214		Ⅵ												
		Q－12	6239		Ⅵ												
		Q－12	6245		Ⅵ												
		Q－12	6271		Ⅵ												
		Q－12	6370		Ⅵ												
		Q－12	6707		Ⅵ												
		Q－12	6965		Ⅵ												
		Q－12	6967		Ⅵ												
		Q－12	6969		Ⅵ												
		Q－12	6970		Ⅵ												
		Q－12	6971		Ⅵ												
		Q－12	6996		Ⅵ												
		Q－12	6998		Ⅵ												
		Q－12	7302		Ⅵ												
		Q－12	7366		Ⅵ												
		Q－12	7391		Ⅵ												
		Q－12	8443		Ⅵ												
		Q－12	8595		Ⅵ												
	5	Q－14	359	1048	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○		○	細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	口径27.0cm
		Q－14	399		Ⅵ												
		Q－14	638		Ⅵ												
第52図	6	Q－11	12343	1008	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ハケ→ナデ	ハケ→粗いナデ	茶褐色～横白色	茶褐色	
	7	Q－12	796	1007	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	丁寧なナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色～茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
		Q－12	5937		Ⅵ												
	8	Q－14	1056	1003	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	左上がりハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～黄白色	
	9	R－12	44.1	1004	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	黒褐色～暗茶褐色	暗茶褐色	
	10	Q－11	5735	1015	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	茶褐色～暗褐色	黒褐色	
		Q－11	5739		Ⅵ												
	11	R－09	1461	1001	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→丁寧なナデ	粗いナデ	明黄白色～暗茶褐色	明黄白色～暗茶褐色	
		R－09	1469		Ⅵ												
		R－09	1707		Ⅵ												
		R－09	1725		Ⅵ												
	12	Q－11	3781	1011	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	茶褐色～暗褐色	黒褐色	胴部径19.6cm
		Q－11	3806		Ⅵ												
		Q－11	4658		Ⅵ												

塞ノ神Ａｂ式土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第55図	1	R－08	1859	831	Ⅶ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗褐色	口径30.7cm スス付着
		R－09	848		Ⅵ												
		R－09	1458		Ⅵ												
		R－09	1460		Ⅵ												
		R－09	1479		Ⅵ												
		R－09	1489		Ⅵ												
	2	R－09	14	830	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～明黄白色	口径30.8cm
		R－09	1300		Ⅵ												
		R－09	1457		Ⅵ												
		R－09	1459		Ⅵ												
		R－09	1471		Ⅵ												
		R－09	1472		Ⅵ												
		R－09	1473		Ⅵ												
		R－09	1490		Ⅵ												
		R－09	1492		Ⅵ												
		R－09	1494		Ⅵ												
		R－09	1721		Ⅵ												
		R－09	1722		Ⅵ												
		R－09	1733		Ⅵ												
		R－09	1783		Ⅵ												

④　第４群　塞ノ神Ｂｃ式土器

ｉ）概要

第４群に属する土器は，22点の土器片が出土し，その内の全点，２個体を資料化した。

第４群は，器形的特徴について「器形は塞ノ神Ａｂ式に類似し，胴部の張りが強く，口縁部はラッパ状に外反する器形で，底部が僅かに上げ底気味」な土器とした。さらに施文的特徴として「貝殻によって施文するのが特徴で，口唇部に刻み目，口縁部，頸部に刺突連点文を施す。胴部は波状あるいは横位に，篦による区画（枠）を設け，縄文の代わりに貝殻条痕によって区画内を満た」した文様構成の特徴からと定義されている，河口貞徳氏により設定された土器である。

ではまず最初に,上野原遺跡第10地点において，第３群に属する土器がどの地点から主に出土しているか，その状況を検討してみよう（第53・54図参照）。なお，図中のドットは実測図が未掲載である土器も１ドット１点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは，第３群に属する土器は全出土点数も22点と少ないこと，またその全点が２個体に復元できたこと，そして出土した区域もＲ－８・９区に限定されていること，以上のことから第４群は極めて単発的な出土であったことが言える。

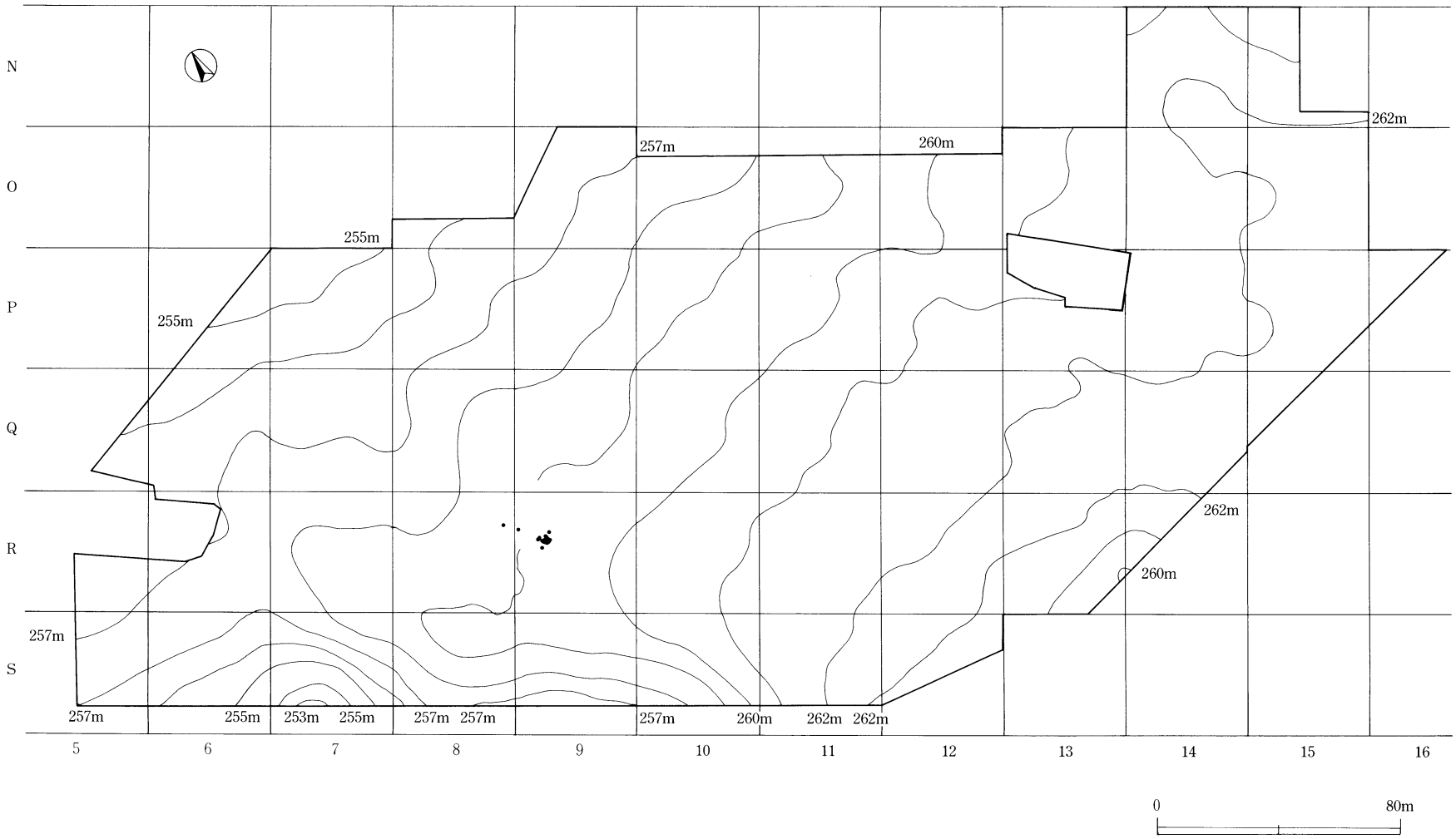
さて，上野原遺跡第10地点で出土した第４群に属する土器を分析していくことにする。

第３群に属する土器は，土器の大きさでは出土した２個体とも，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する深鉢形土器であった。

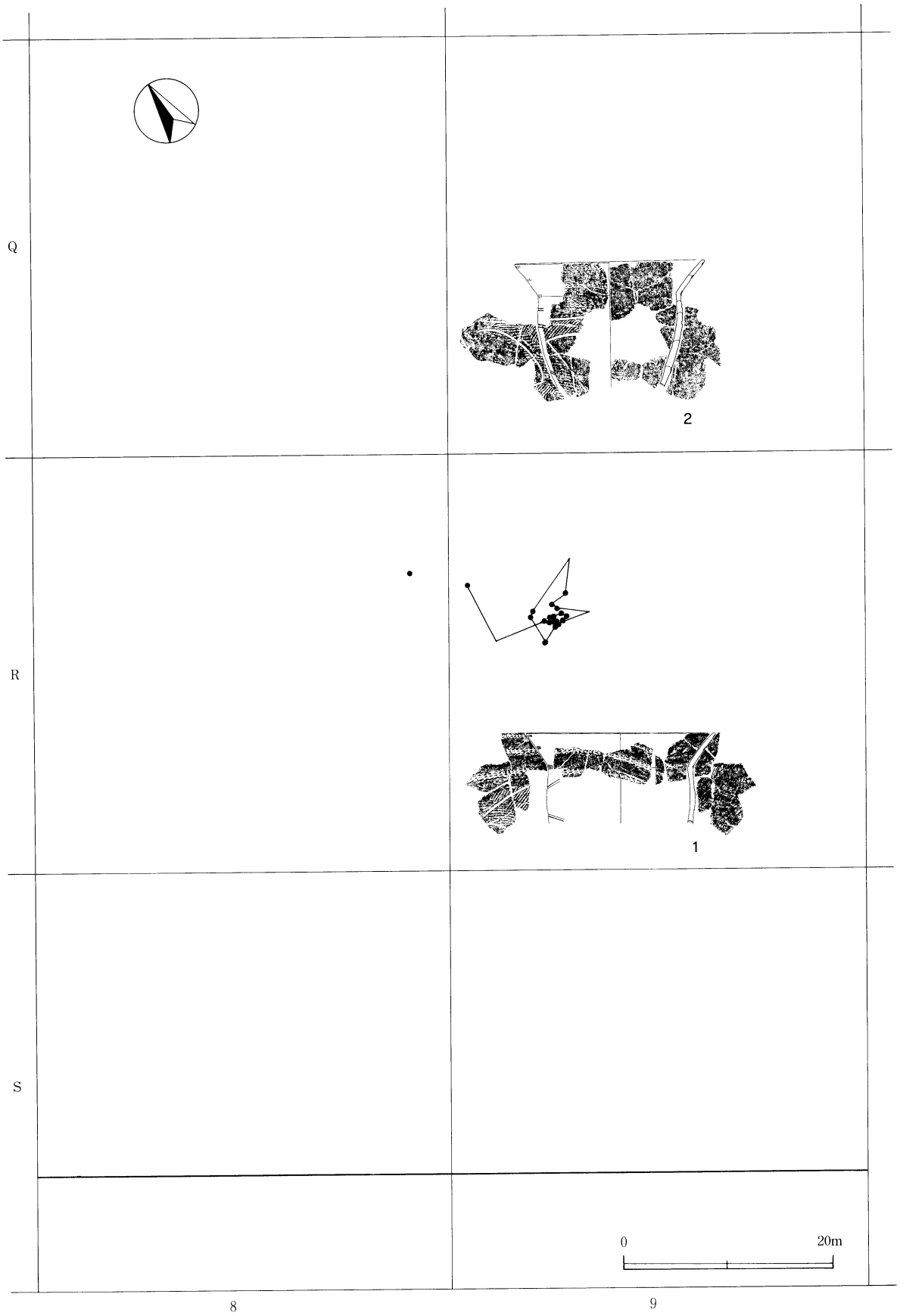
器形的特徴としては，口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器で，第２群３類土器や４類土器と同様に，口縁部はラッパ状に開く土器である。胴部形態は，湾曲しながら口縁部と底部とをつなぐ形を呈する（第55図１・２）。

一方，第４群の施文的特徴としては，まず口唇部刻みが消失すること，口縁部には貝殻腹縁を使用して横位方向に押し引き文を３条巡らすことが挙げられる。また，胴部には２段左撚の単節斜行縄文（LR）を施文した後に，棒状工具を使用して区画（枠）を設け，枠外をナデ消している。なお，（１）にはナデ消し損なった縄文が観察できる。

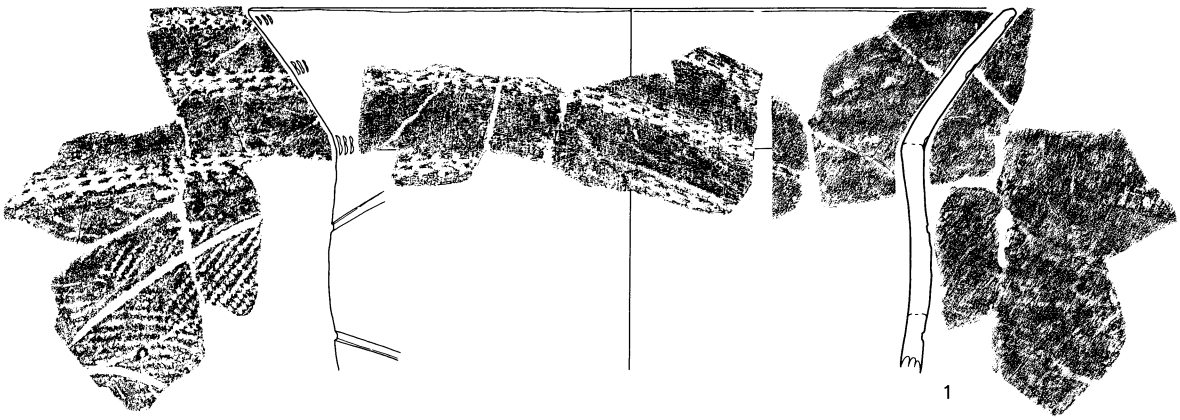
さて，第４群に属する土器の胎土中鉱物は，両個体の土器ともが石英・長石・角閃石で構成され，クロウンモの含有は認められなかった。また土器の調整方法では，外器面がナデ調整を，内器面が木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は，外器面では茶褐色から暗黄褐色が，内器面では暗茶褐色から暗褐色が主流であった。

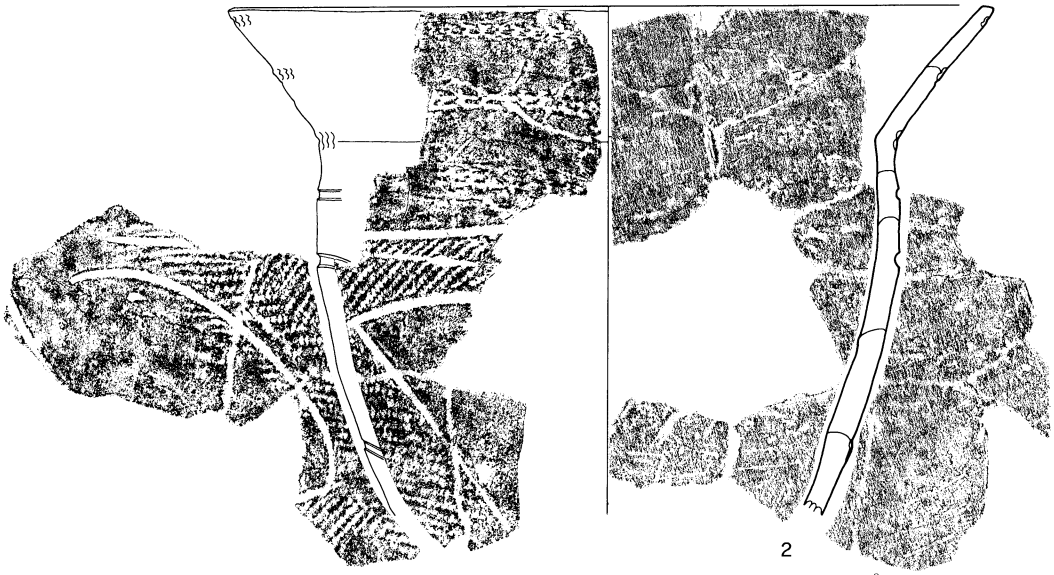


第53図　塞ノ神Ｂｃ式土器出土状況全体図



第54図　塞ノ神Ｂｃ式土器出土状況図（Q・R・S－８・９区）





0　10cm

第55図　塞ノ神Ｂｃ式土器実測図

⑤　第５群　塞ノ神Ｂｄ式土器

ｉ）概要

第５群に属する土器は，899点の土器片が出土し，その内の295点，65個体を資料化した。

第５群は，器形的特徴について「胴部の張りがやや弱く，口縁部はラッパ状に外反するが，再び内湾するものするものもある。底部は上げ底気味の平底である」とした土器である。一方，施文的特徴について「胴部には貝殻または篦による格子状文などを施文する」が，「口縁部に格子状文または平行沈線文，胴部に刺突連点文を施文し，施文部位が逆になるものもある」施文をするという特徴から，河口貞徳氏により設定された土器である。

ではまず最初に,上野原遺跡第10地点において，第５群に属する土器がどの地点から主に出土しているか，その状況を検討してみよう（第56図～第66図参照）。なお，図中のドットは実測図が未掲載である土器も１ドット１点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは，集中して出土している区域として，①Ｑ・Ｒ－11・12区の区域と，②Ｐ・Ｑ・Ｒ－14区の区域とを挙げることができる。

ところで①区域の出土状況は，Ｒ－11区とＲ－12区との境にある空白区域を中心として，土器が環状に出土している状況に見える（第61図参照）。しかし，出土した土器を詳細に検討すると，この区域には塞ノ神Ｂｄ式土器の範疇に属する様々なタイプの土器が出土していることがわかる。

現在，この様々なタイプの土器が，時間差を示すものなのか，種類の豊富さを示すものなのか，検討中である。したがって，この空白区域がある程度の期間を経て形成されたものなのか，一時期に形成されたものなのか，についても検討中である。

ここで注目できるのは，①区域中のＲ－12区という区域が，平栫式土器様式期では遺物の出土があまり見られず，土器埋納遺構が多数検出された区域である，ということである。

一方，②区域の出土状況を検討すると，この区域全体に接合関係が認められる土器が，集中して多数出土していることが注目できる（第61図～第63図）。この状況は，明らかに土器が地形の傾斜などの自然的要因によって集中拡散した結果ではなく，当時の状況を概ね反映した結果であると考えられる。

また，集中区域に①区域と②区域とが認められる状況は，塞ノ神Ａａ式土器の出土状況と同様である。しかし，塞ノ神式Ｂｄ式土器の出土状況に認められた②区域の集中度の方が高い状況が読みとれる。

そのうえで，①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることは，少なくとも①区域のある部分と②区域のある部分とは，ほぼ同時に形成されたことは確実である。

このことは，当時の「場の機能」を考える上で重要であるが，その性格付けについては今後の検討課題である。

さて，上野原遺跡第10地点で出土した第５群に属する土器を分析していくことにする。

第５群は，深鉢形土器と小型深鉢形土器とで構成されていた。そのうち，本報告では深鉢形土器を器形的特徴および施文的特徴から１類土器から６類土器まで６分類した。その特徴を以下に記す。

⑤－１　第５群１類土器（第67図１～第68図４）

第５群１類土器を，土器の大きさでは胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（１・２）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（４）という２種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器や胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器は出土しなかった。

器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，短い口縁部が外反する。胴部は口縁部直下で膨らむため，胴部最大径が胴部上半にある。胴部中央部から下半部にかけてはほぼ直線的に底部にむけてすぼまる。

また施文的特徴として，口縁部には貝殻を使用して，横位方向に数条の刺突連点文を施す。条数は２条から５条と一定ではない。一方，胴部には貝殻腹縁を使って横位方向もしくは斜位方向の条痕文を施すのが特徴である。

⑤－２　第５群２類土器（第69図５～第76図34）

第５群２類土器を，土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（６）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（５・７・13・14・15・22・27・30）と，胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器（20・26・33）という３種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器は出土しなかった。

器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，長い口縁部が外反する土器である。胴部は１類土器と同様，口縁部直下で膨らむため，胴部最大径が胴部上半にある。胴部中央部から下半部にかけてはほぼ直線的に底部にむけてすぼまる土器である。

一方，２類土器の施文的特徴として，口縁部には貝殻腹縁や棒状工具を使用して，横位方向あるいは斜位方向に刺突連点文もしくは押し引き文の組み合わせで様々な文様が構成される。

一方，胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施す土器（５・６・７・８・12・13・15・26・27・30・31・33）と，貝殻腹縁あるいは叉状条工具と組み合わせで使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施す土器（14・20・28・29・32）とがある。

⑤－３　第５群３類土器（第77図35～38）

第５群３類土器を，土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（35）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（36）と，胴部最大

径が20cm未満の中型３類に属する土器（38）という３種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器は出土しなかった。

器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，長い口縁部がわずかに外反し，口縁部と胴部の境が不明瞭になる土器である。胴部は中央部でわずかに膨らむため，胴部最大径が胴部中央にある。胴部中央部から下半部にかけてはほぼ直線的に底部にむけてすぼまる土器である。

一方，３類土器の施文的特徴として，口縁部には貝殻を使用して，横位方向あるいは斜位方向に刺突連点文で文様が構成される点が挙げられる。一方，胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して斜位方向に条線を施す土器といえる。

⑤－４　第５群４類土器（第78図39～第79図42）

第５群４類土器を，土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（39）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（42）という２種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器と胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器とは出土しなかった。

器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部から胴部までほぼ直線的になり，口縁部と胴部との境が３類土器よりもさらに不明瞭になる土器である。

一方，４類土器の施文的特徴として，口縁部には貝殻腹縁を使用して，横位方向あるいは斜位方向に刺突連点文もしくは押し引き文の組み合わせで様々な文様が構成される。一方，胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施す土器といえる。

⑤－５　第５群５類土器（第80図43～第81図47）

第５群５類土器を，土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型１類に属する土器（47）と，胴部最大径が20cm以上の中型２類に属する土器（44）という２種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で，胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器と胴部最大径が20cm未満の中型３類に属する土器とは出土しなかった。

器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部から胴部までほぼ直線的になり，口縁部と胴部との境が３類土器よりもさらに不明瞭になる，４類土器に近い器形の土器である。

一方，５類土器の施文的特徴として，まず口縁部には，口縁上端部と口縁下端部とに貝殻腹縁を使用して，横位方向に押し引き文を巡らす。そしてその間を棒状工具を使用して，縦位方向に十数条の沈線文を単位として，十数か所に施文するのが特徴である。一方，胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施すのが特徴である。

⑤－６　第５群６類土器（第82図48～第84図58）

第５群６類土器では，明瞭に胴部径が復元できる土器がほとんどなかった。

器形的特徴としては，土器の大きさの違いに係わらず，口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁部から胴部にかけては４類・５類土器と同様にほぼ直線的にすぼまる土器である。

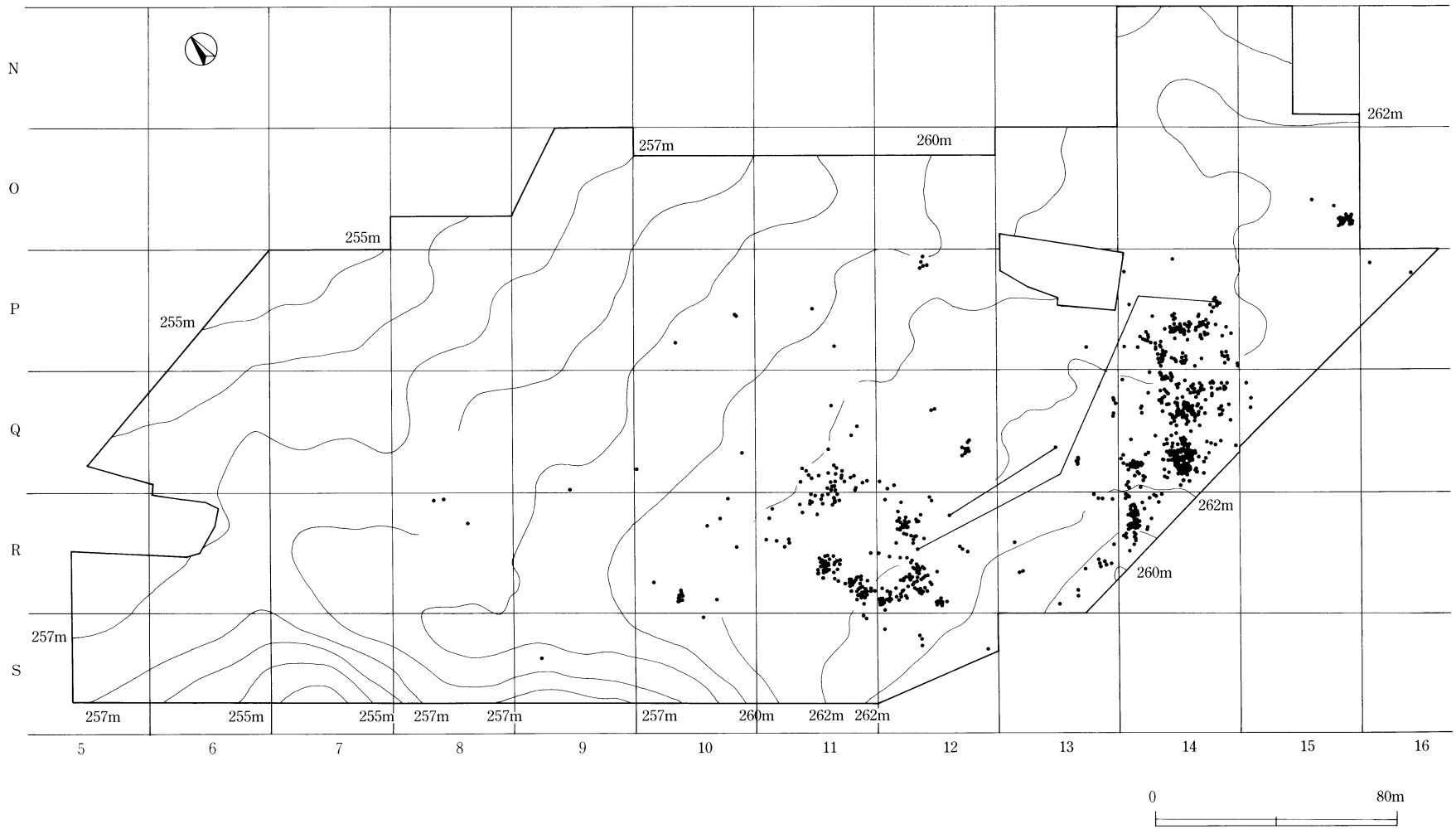
一方，６類土器の施文的特徴として，２タイプの土器が認められた。前者は，口縁部に棒状工具あるいは叉条工具を利用して斜格子沈線文を施文する土器である（48・49）。後者は，口縁部には貝殻腹縁を使用して横位方向に刺突連点文もしくは押し引き文を数条巡らし，胴部には棒状工具を使用して斜格子沈線文を施文する土器（50～55）である。

以上，塞ノ神Ｂｄ式土器を１類土器から６類土器まで分けた，その器形的特徴と施文的特徴とを記した。最後に塞ノ神Ｂｄ式土器の胎土中鉱物と調整方法と土器色調との特徴を記す。すなわち，

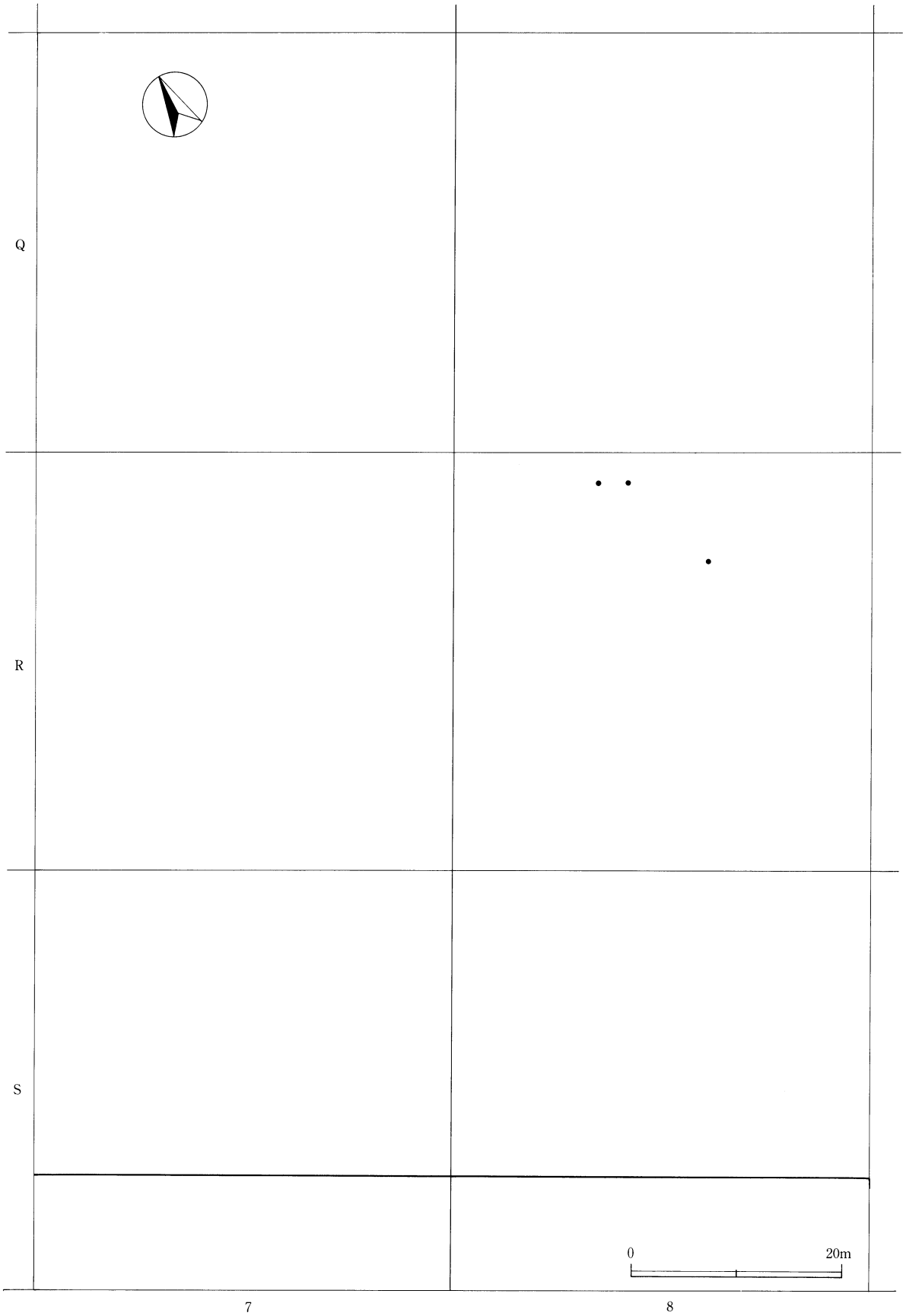
①土器の胎土中鉱物は，主に石英・長石・角閃石で構成され，クロウンモが含有される土器は少なかった。

②土器の調整方法は，主に外器面がナデ調整を，内器面が木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。

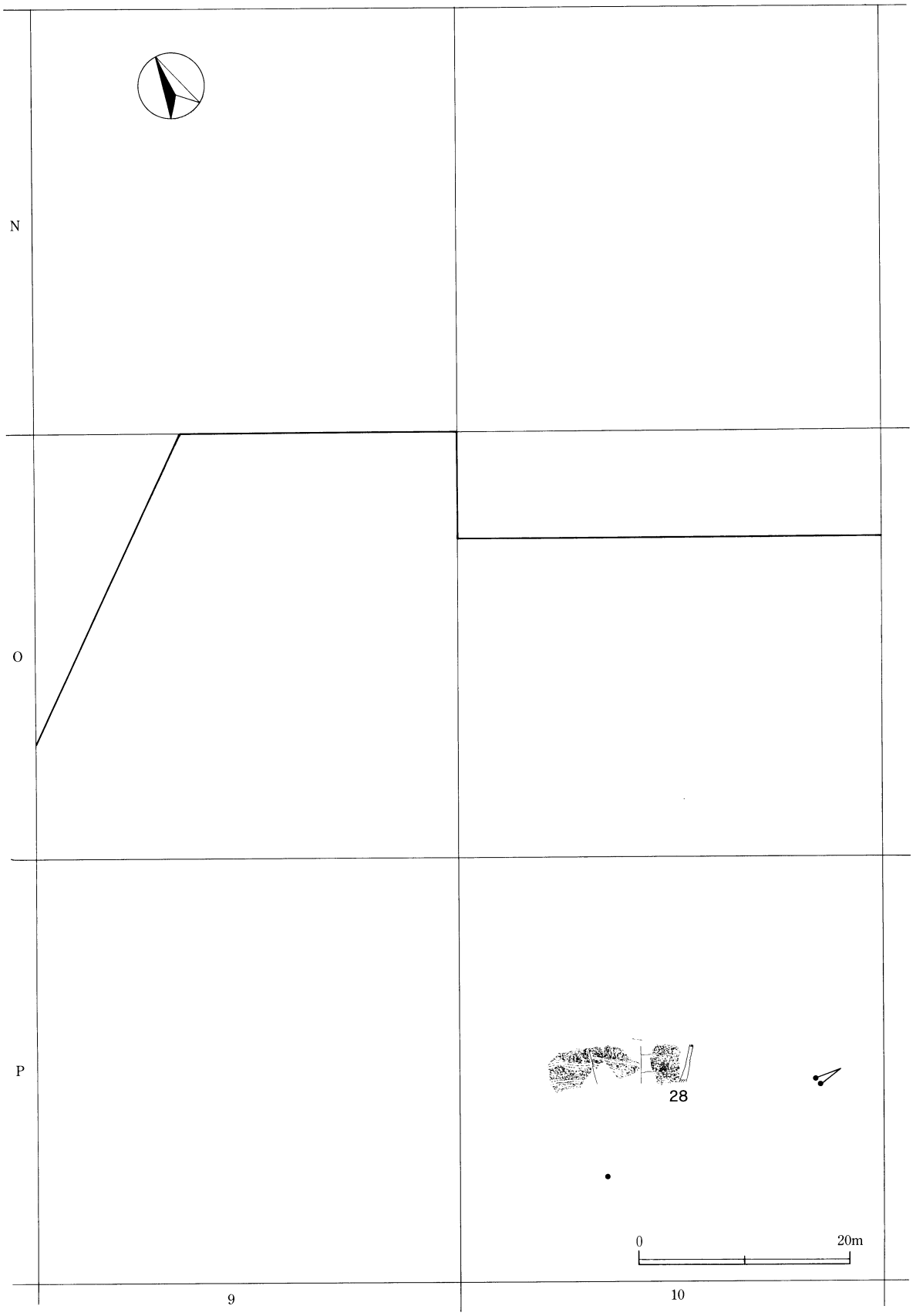
③土器の色調は，外器面では茶褐色から暗茶褐色が，内器面では暗褐色から暗黄褐色が主流であった。



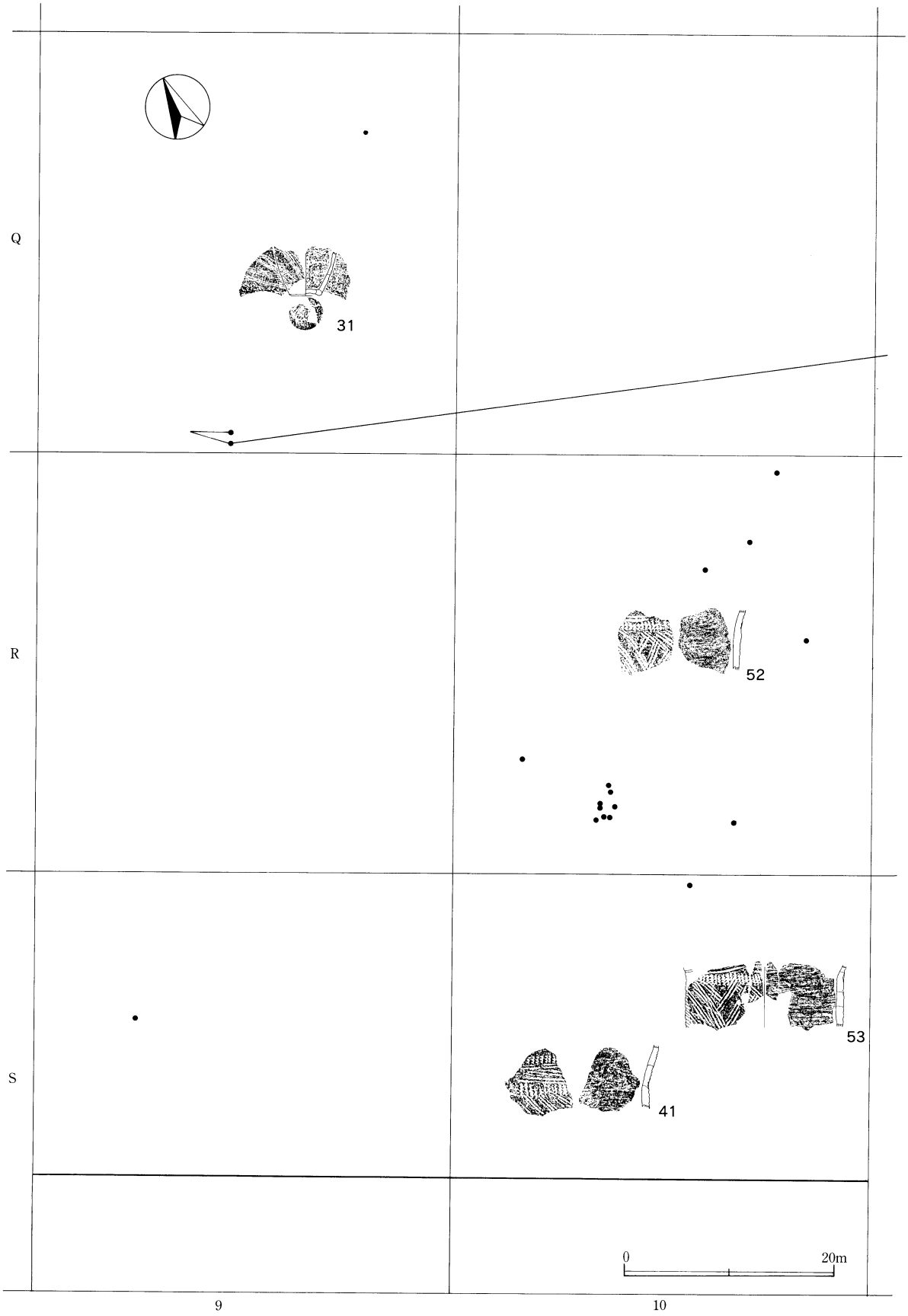
第56図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況全体図



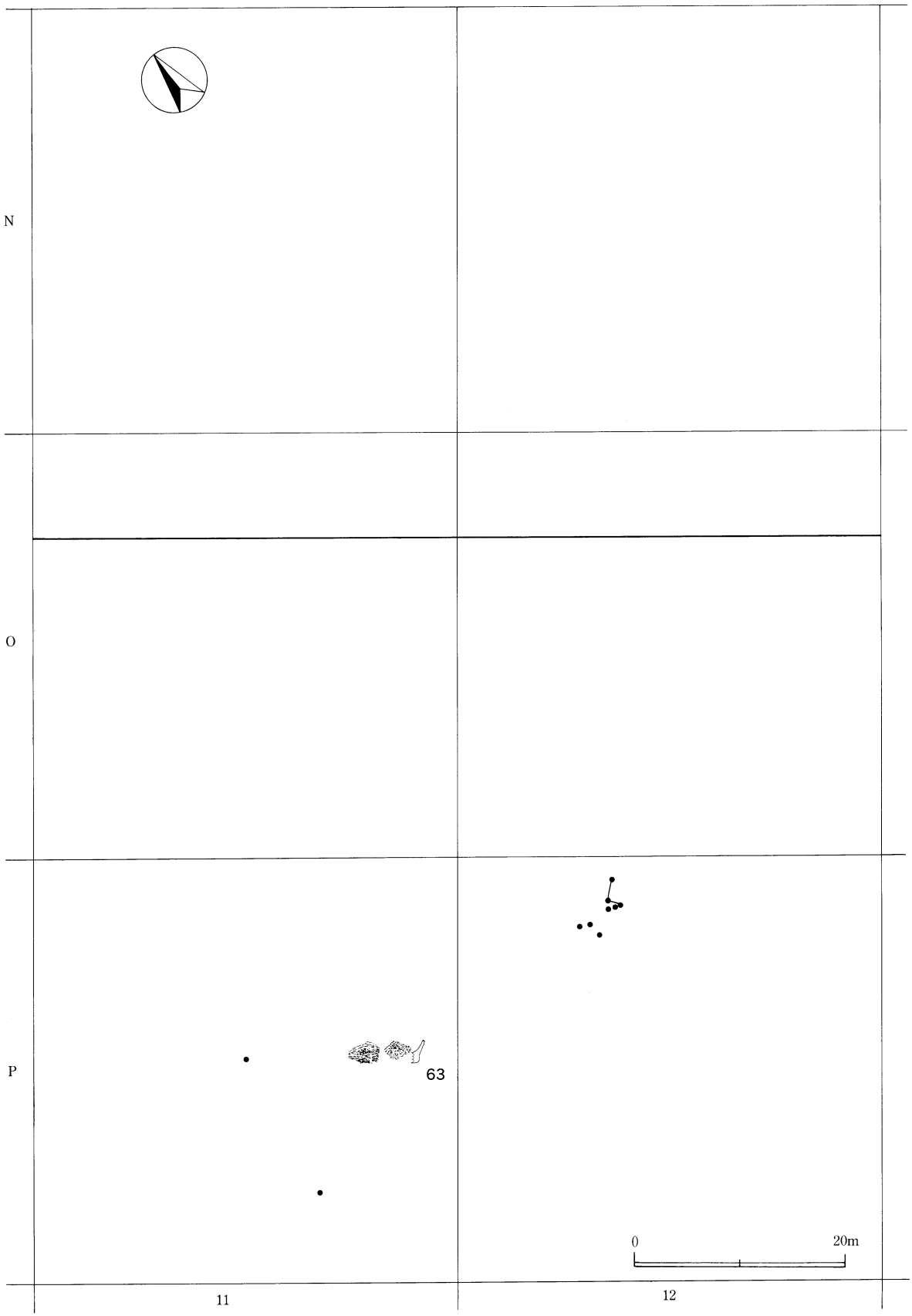
第57図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図１(Ｑ・Ｒ・Ｓ－７・８区)



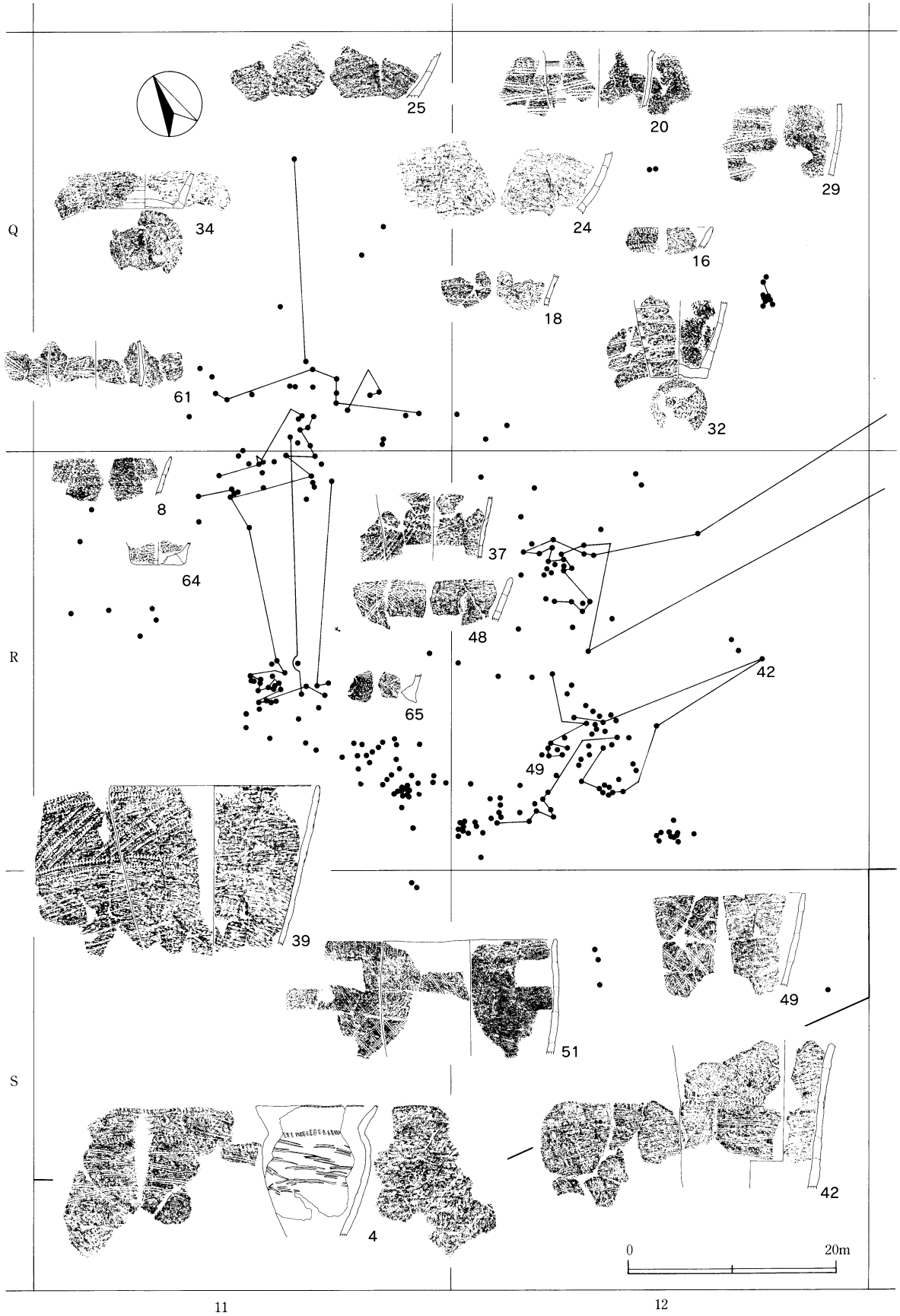
第58図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図２(Ｎ・Ｏ・Ｐ－９・10区)



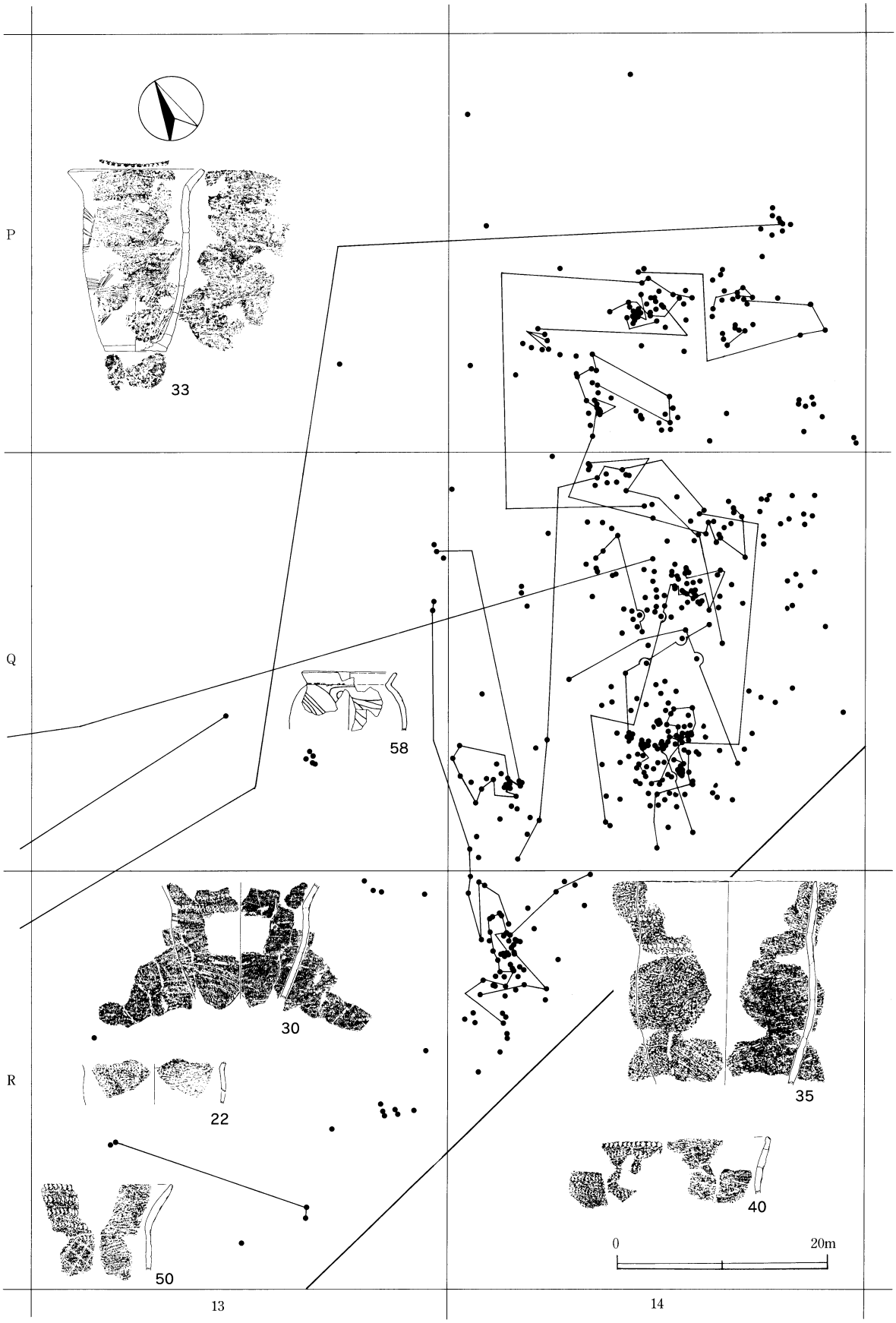
第59図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図３(Ｑ・Ｒ・Ｓ－９・10区)



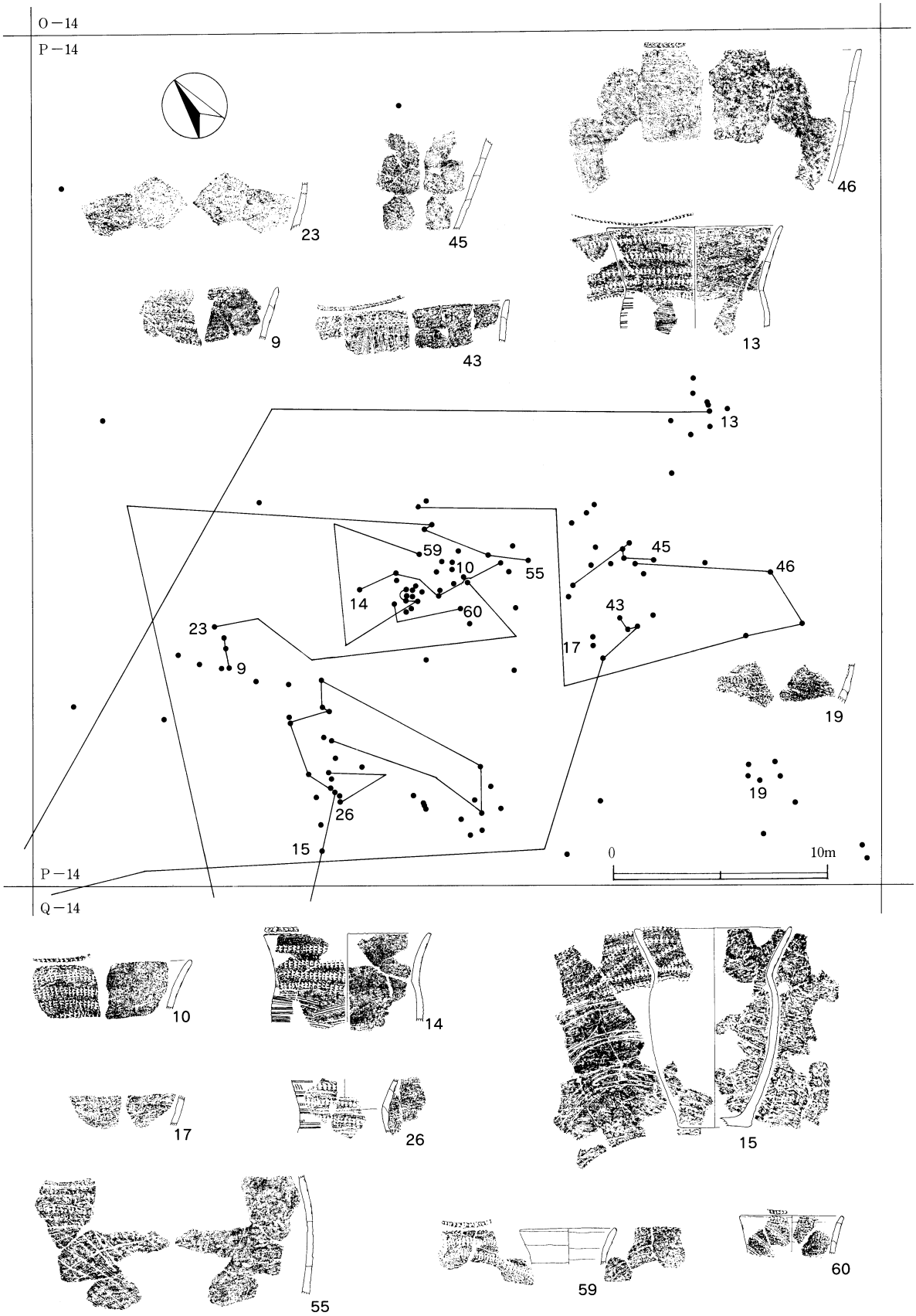
第60図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図４(N・O・P－11・12区)



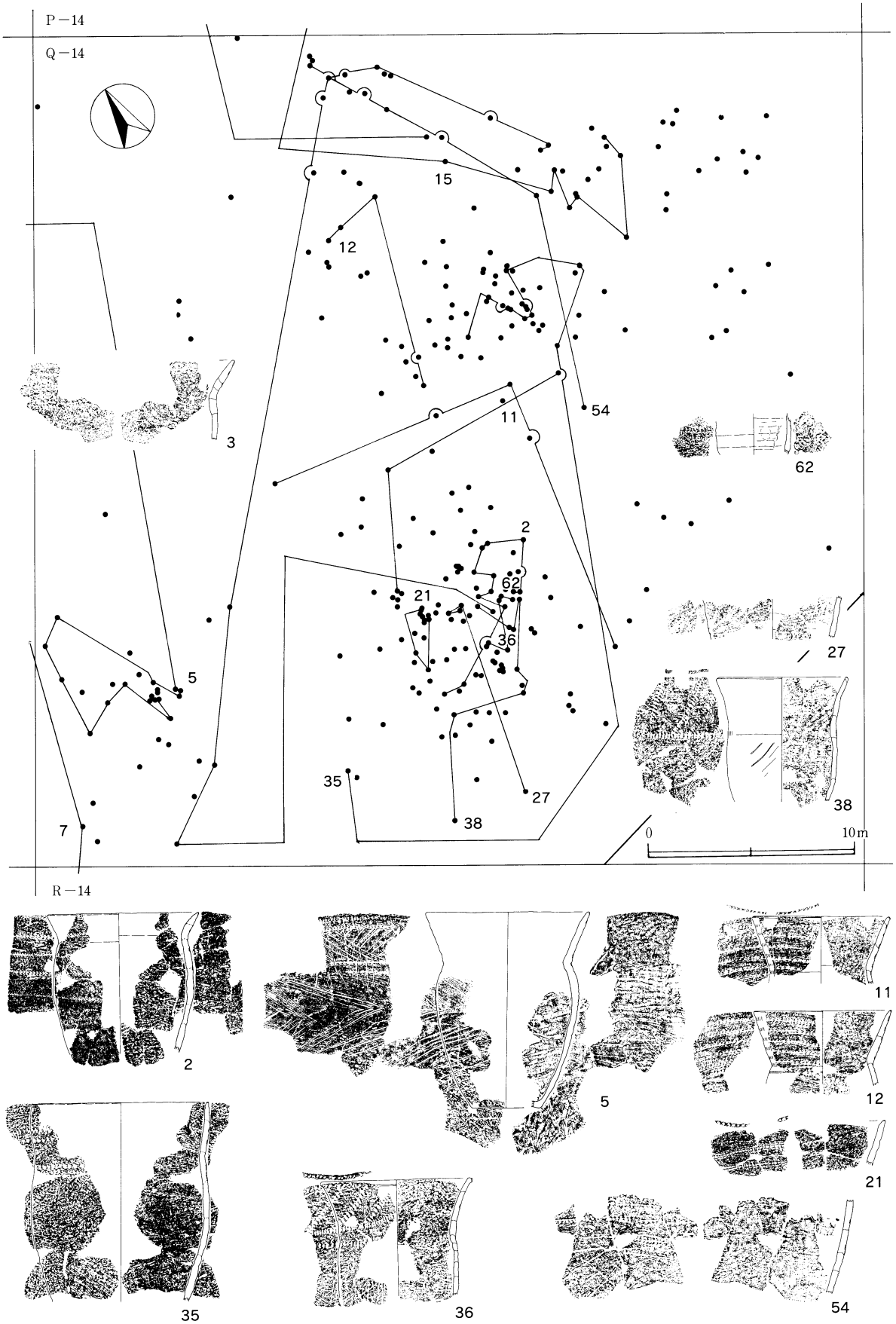
第61図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図５(Q・R・S－11・12区)



第62図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図６(Ｐ・Ｑ・Ｒ－13・14区)

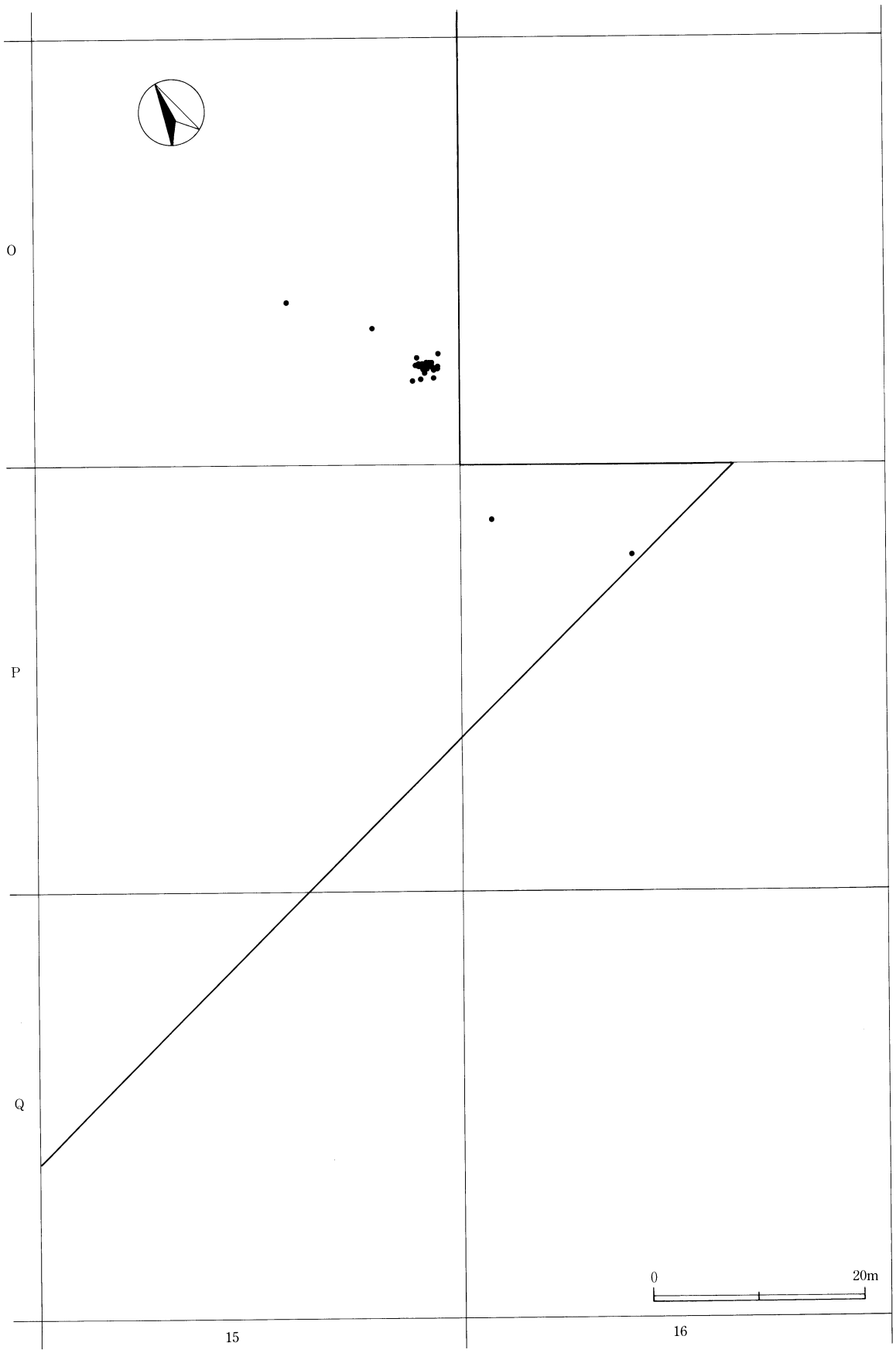


第63図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図７(Ｐ－14区)

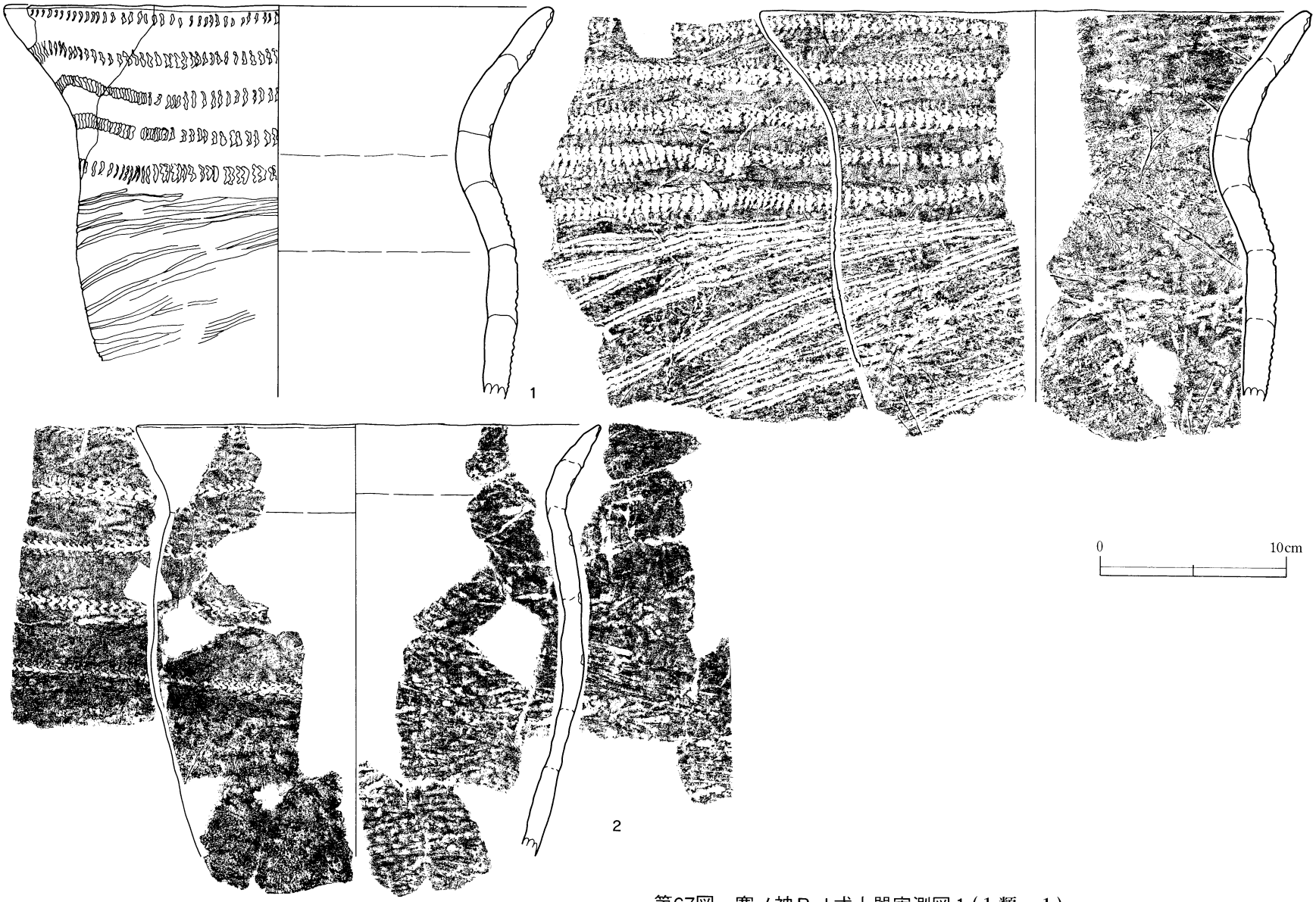


第64図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図８(Ｑ－14区)

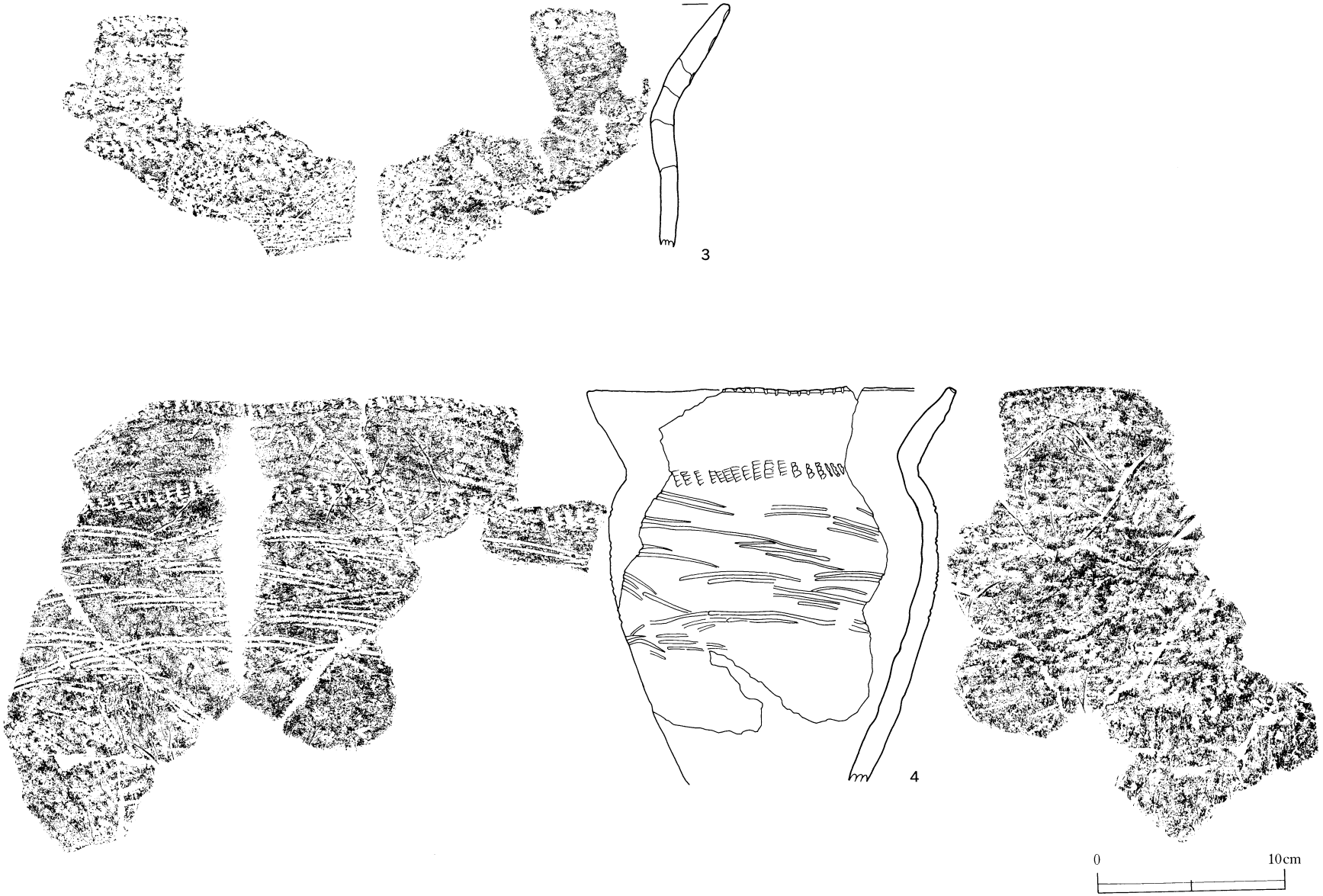
第65図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図９(Ｒ－14区)



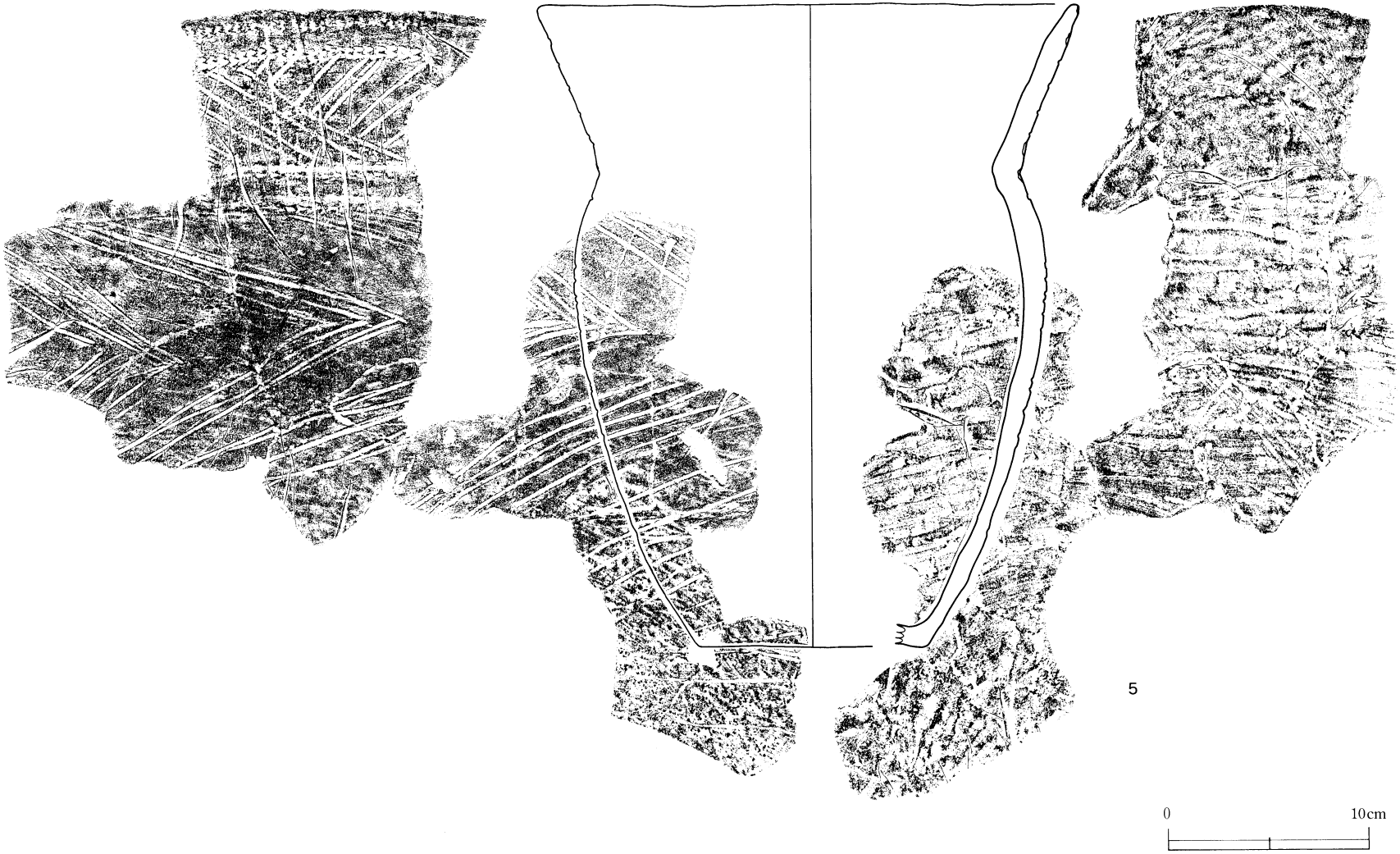
第66図　塞ノ神Ｂｄ式土器出土状況図10 (O・P・Q－15・16区)



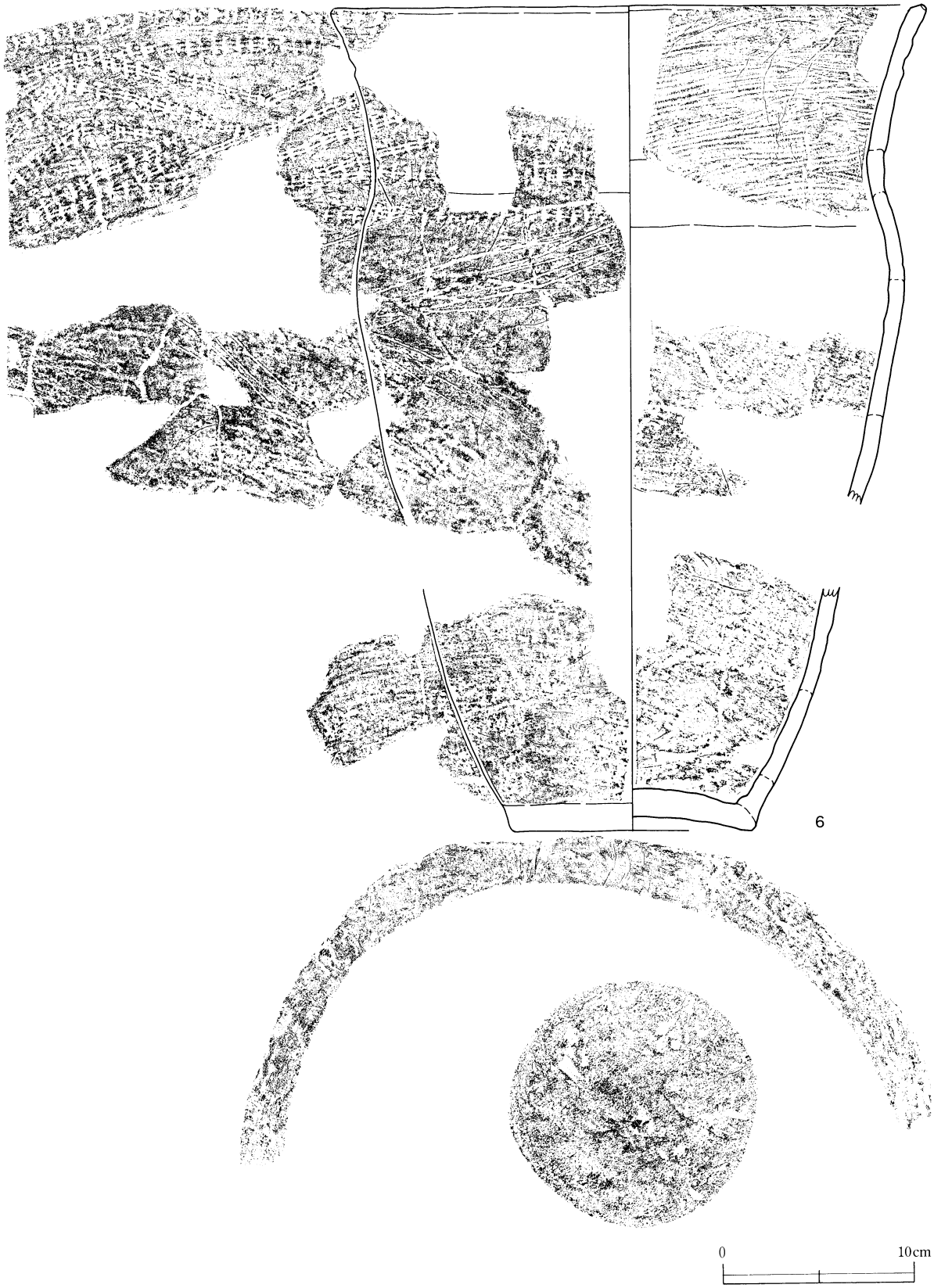
第67図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図１（１類－１）



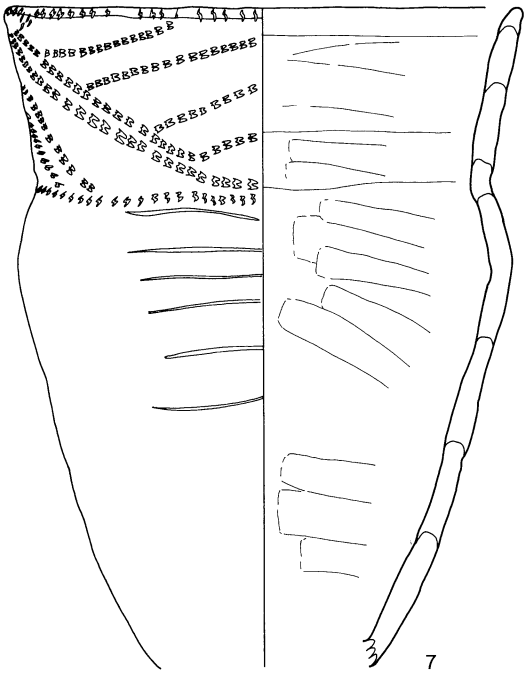
第68図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図２（１類－２）

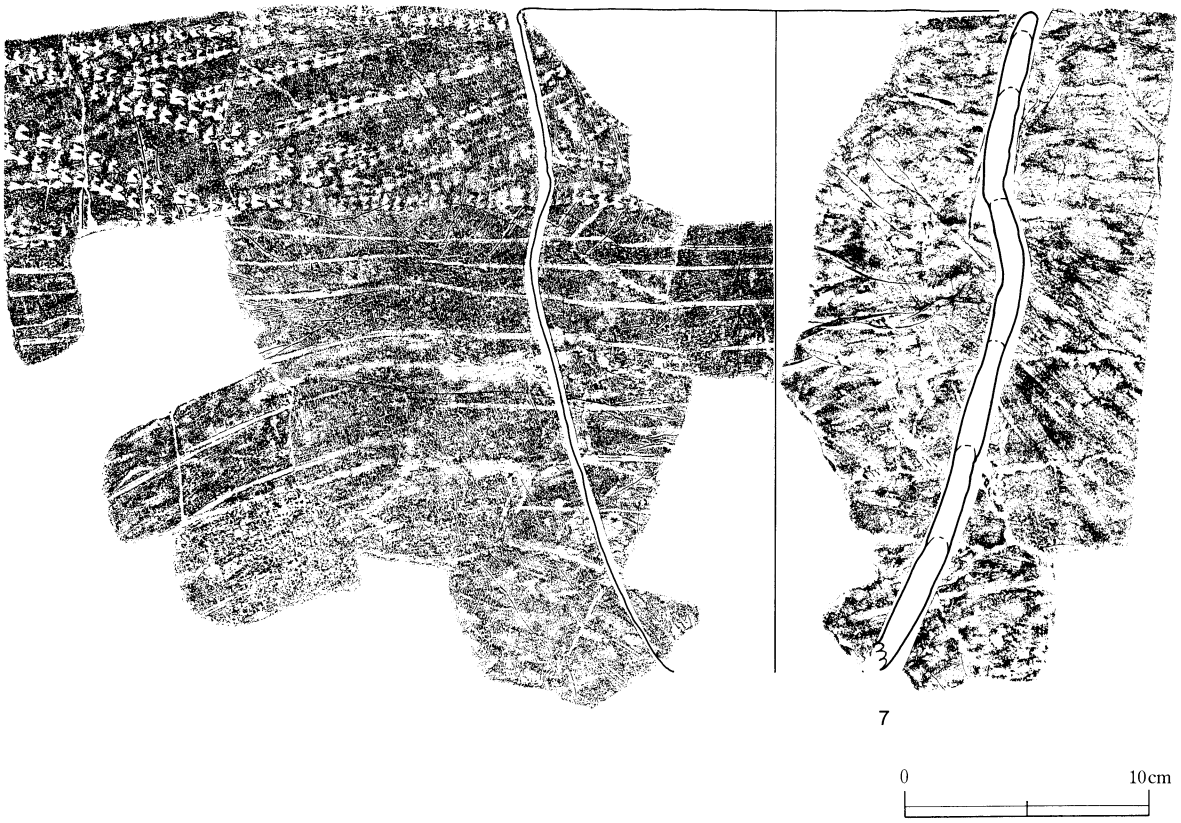


第69図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図３（２類－１）

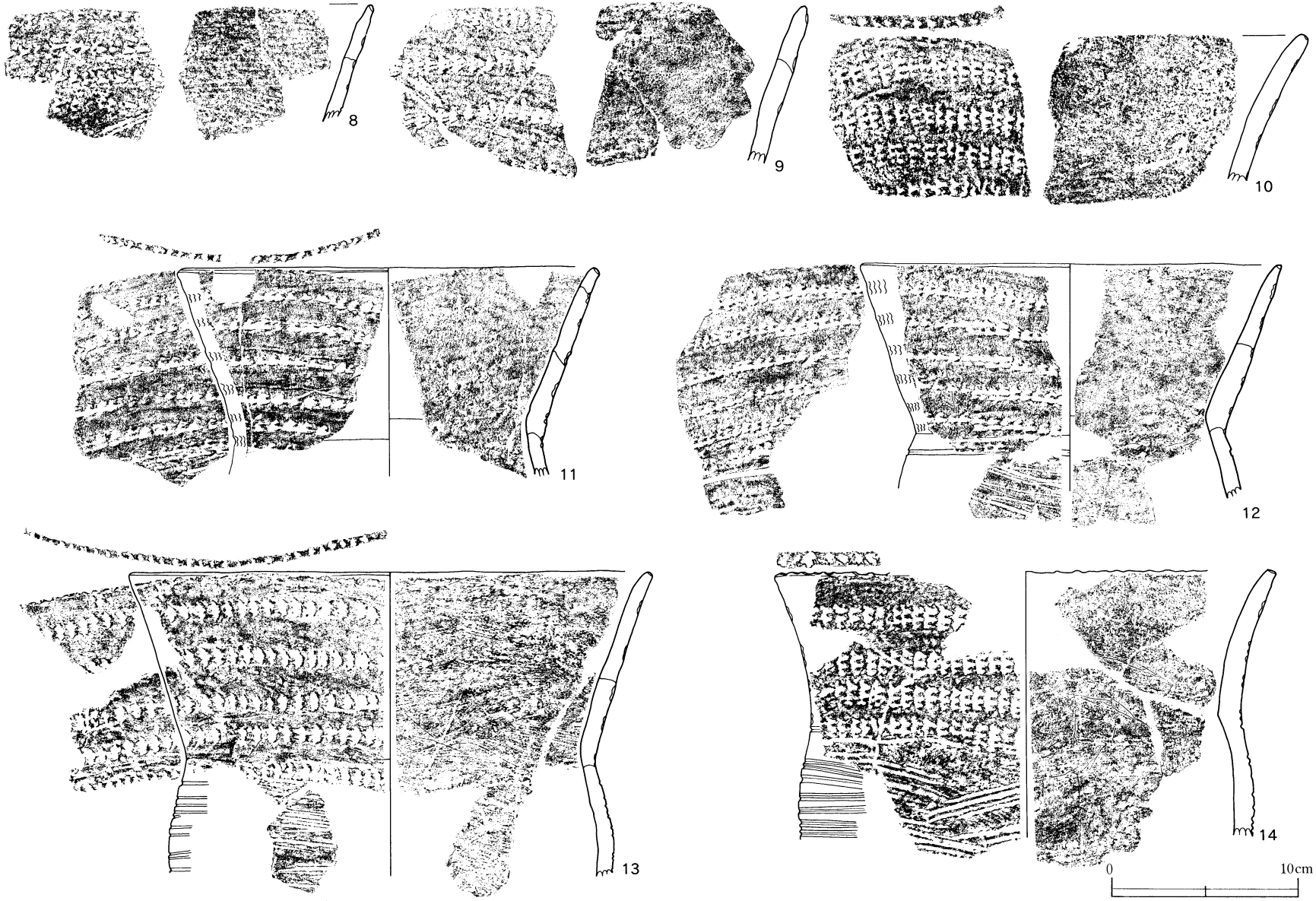


第70図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図４（２類－２）



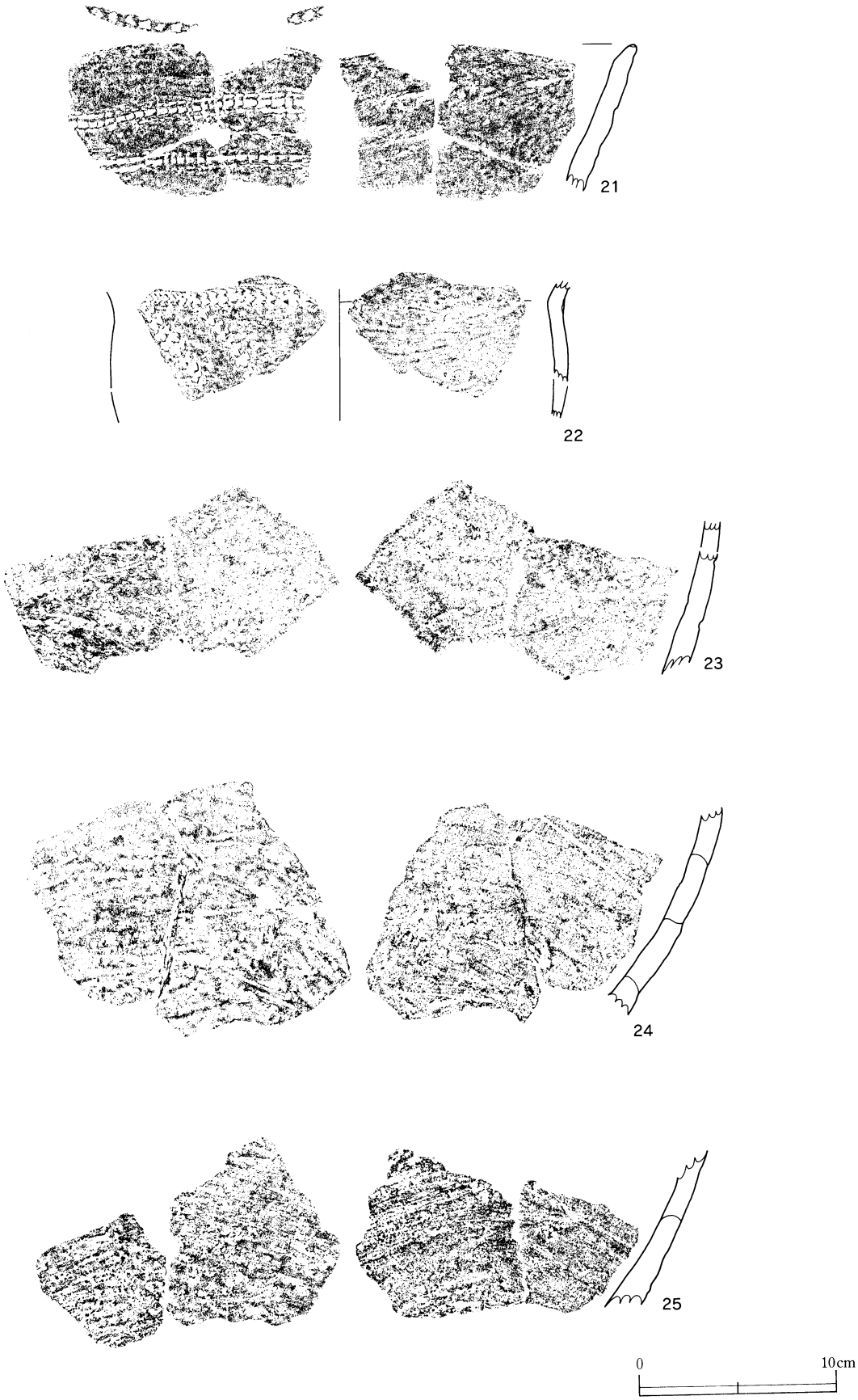


第71図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図５（２類－３）



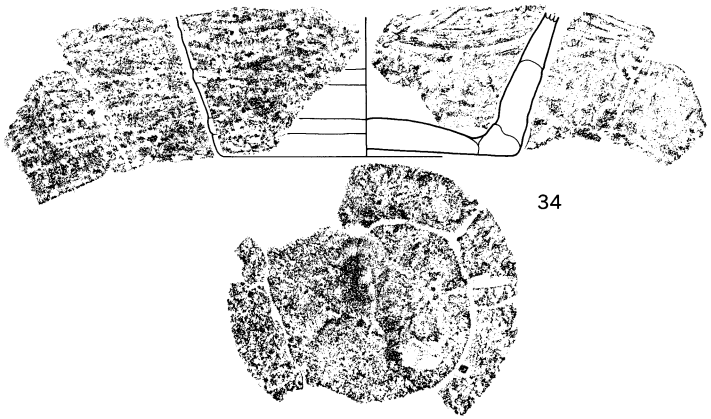
第72図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図６（２類－４）

第73図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図７（２類－５）



第74図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図８（２類－６）

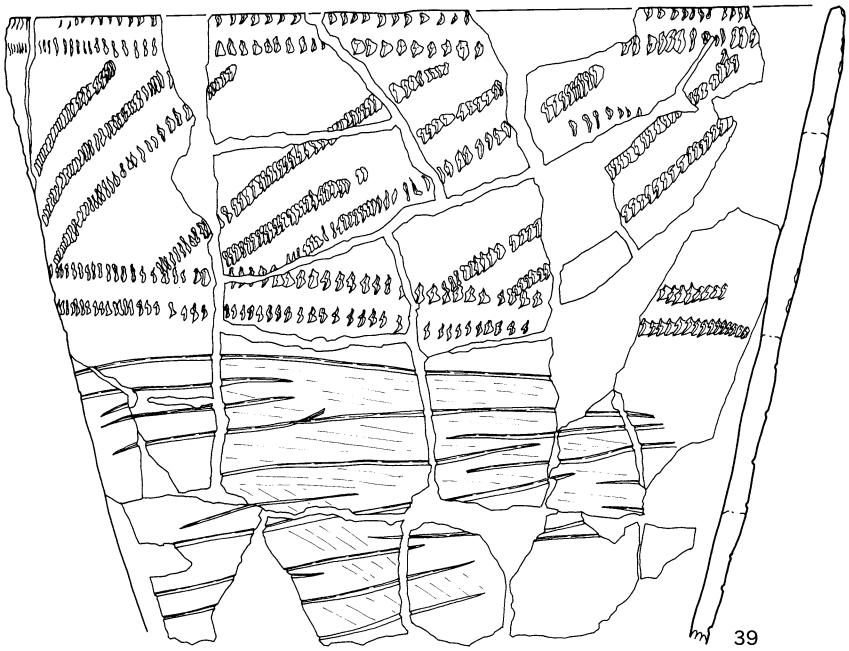
第75図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図９(２類－７)

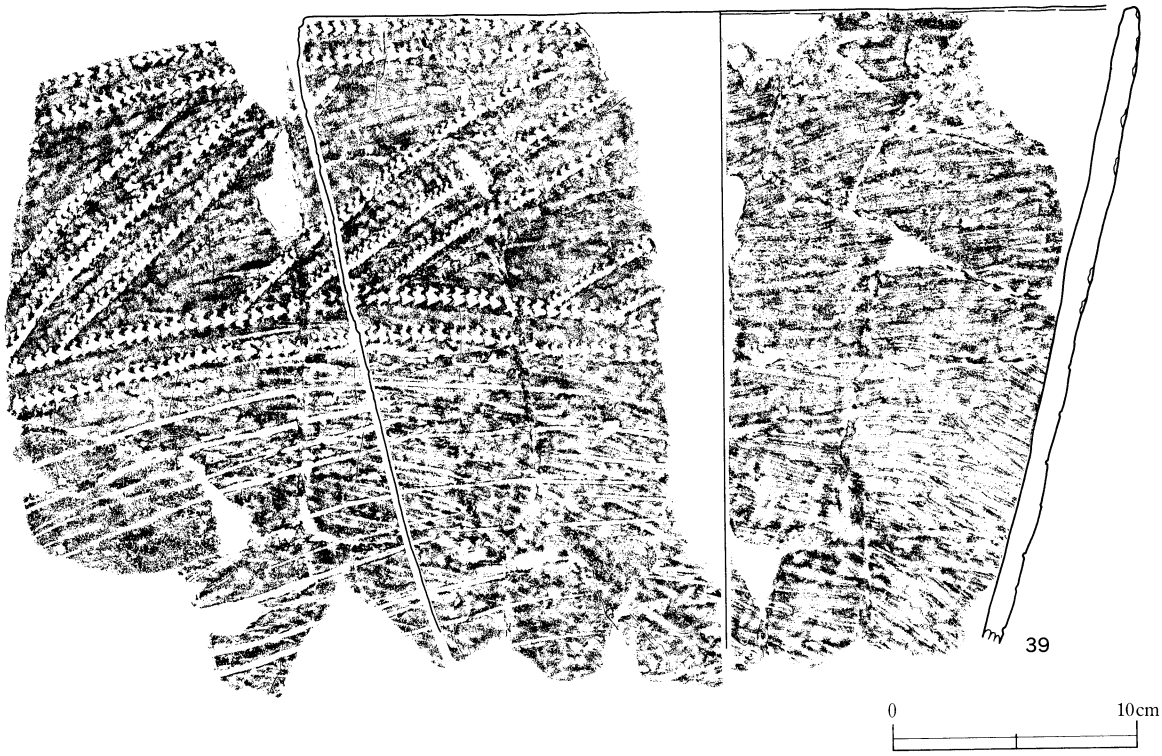


0　10cm

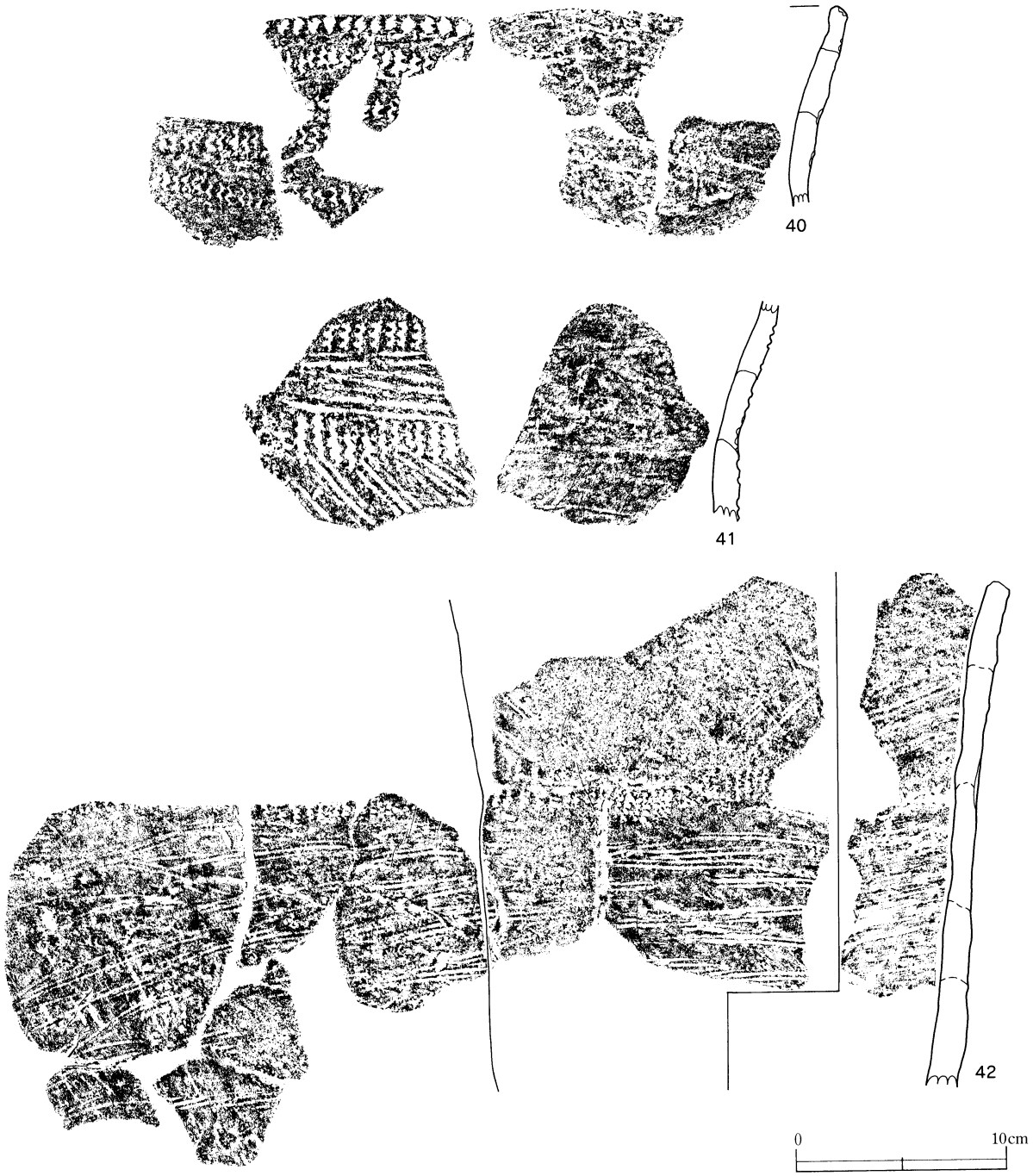
第76図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図10（２類－８）

第77図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図11（３類）

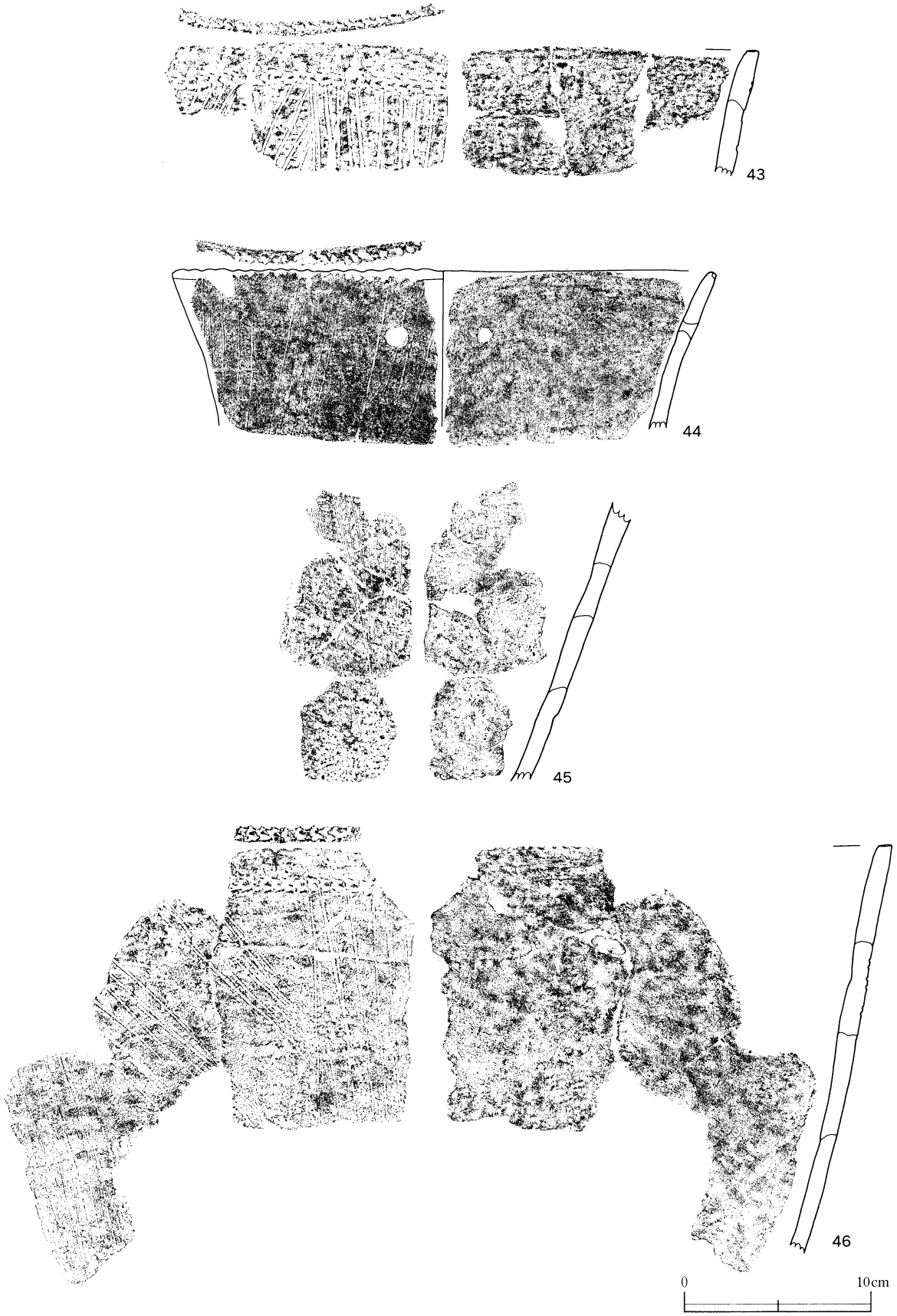




第78図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図12（４類－１）

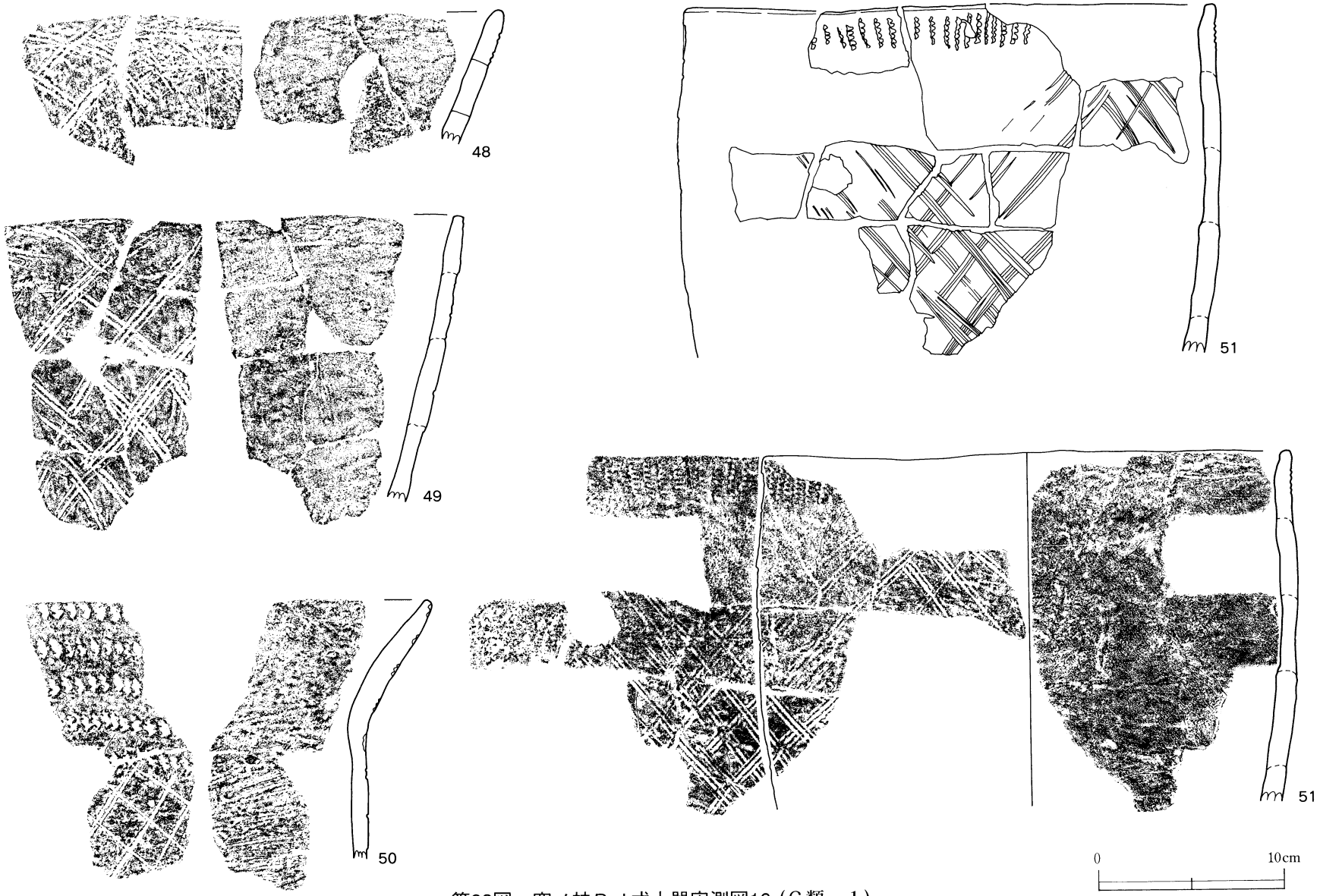


第79図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図13（４類－２）

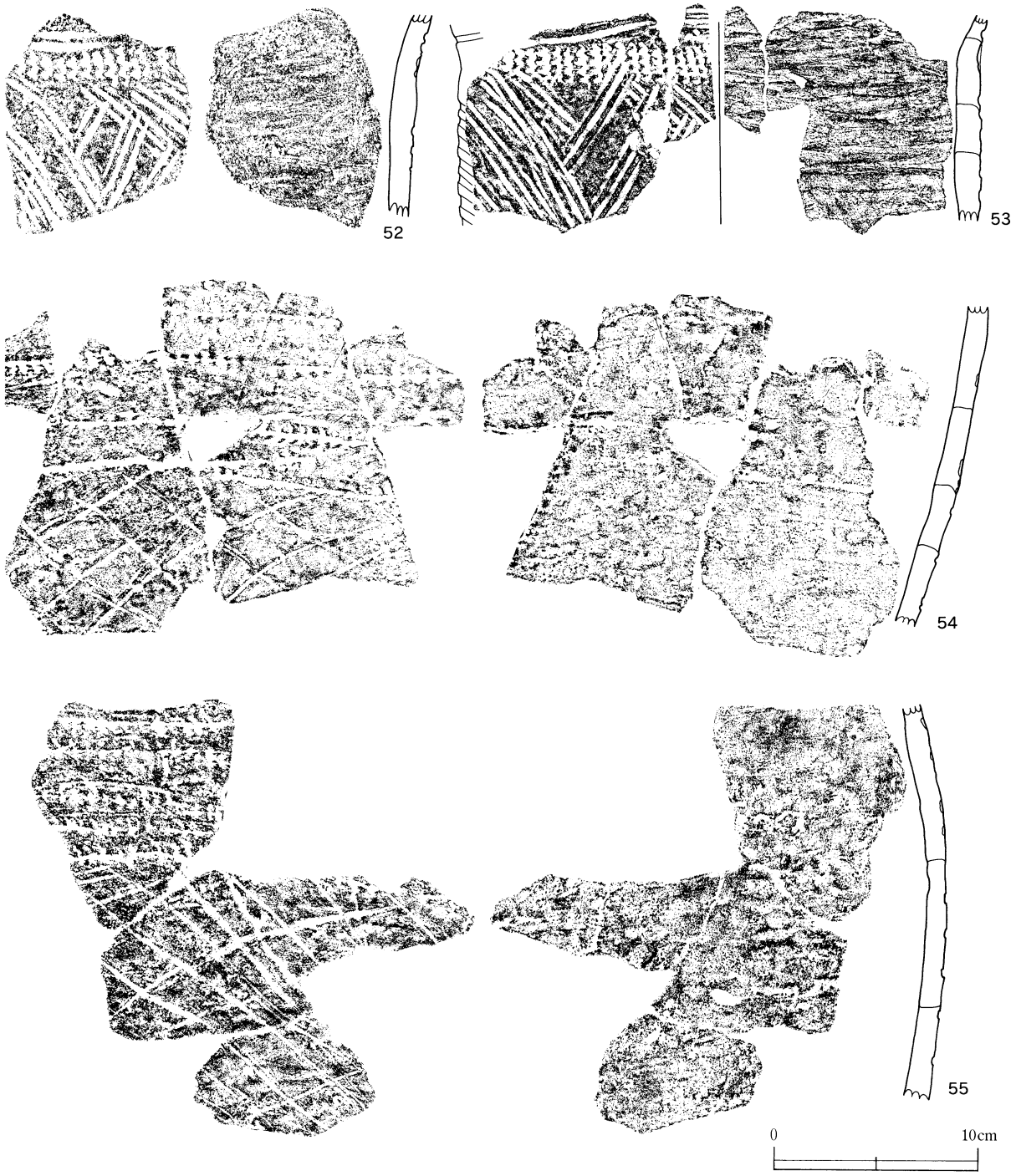


第80図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図14（５類－１）

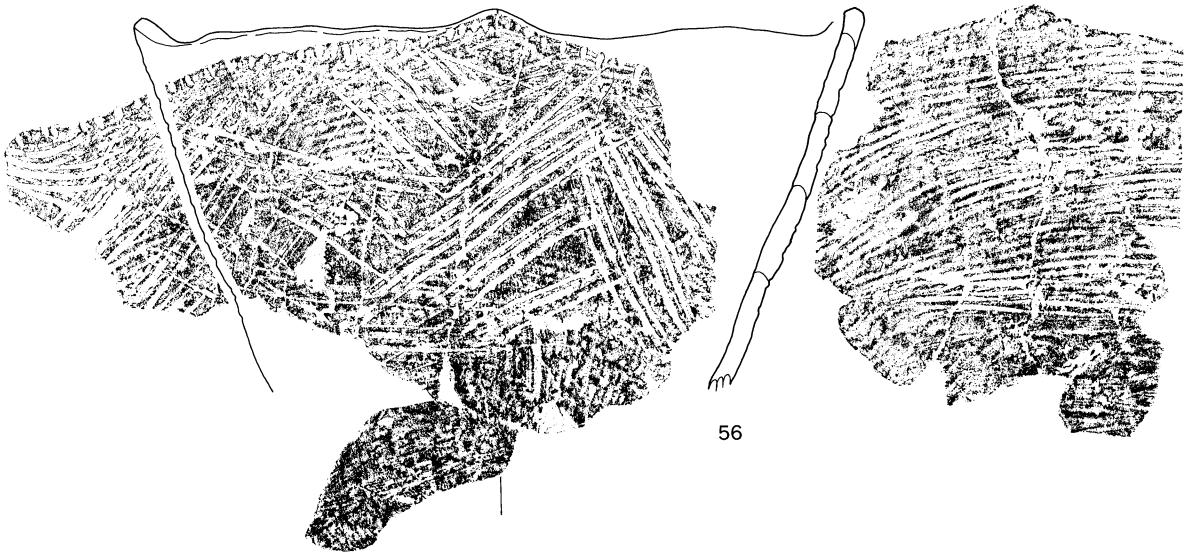
第81図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図15（５類－２）

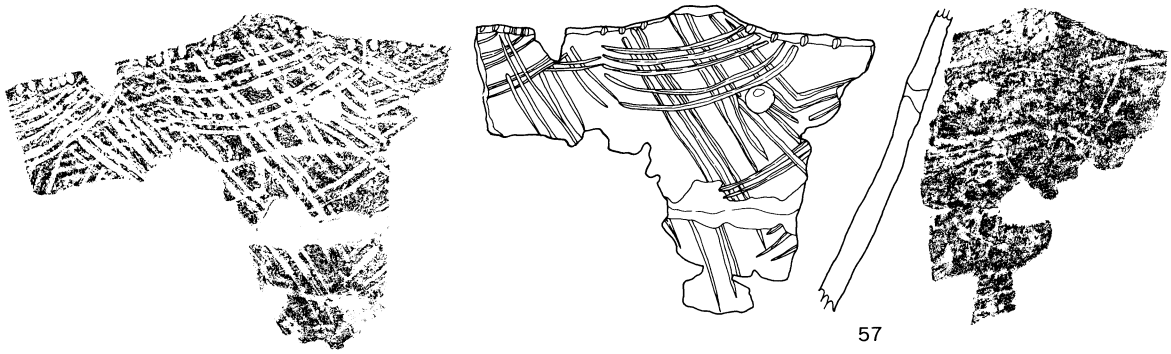


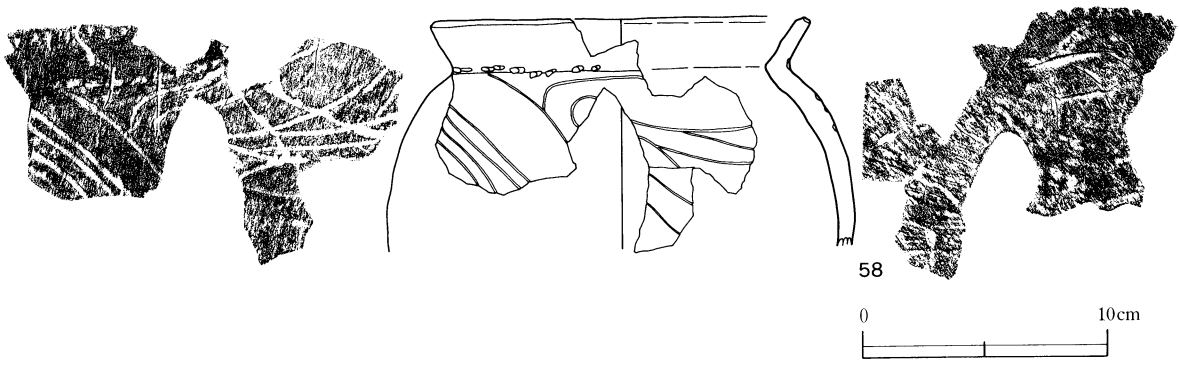
第82図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図16（６類－１）



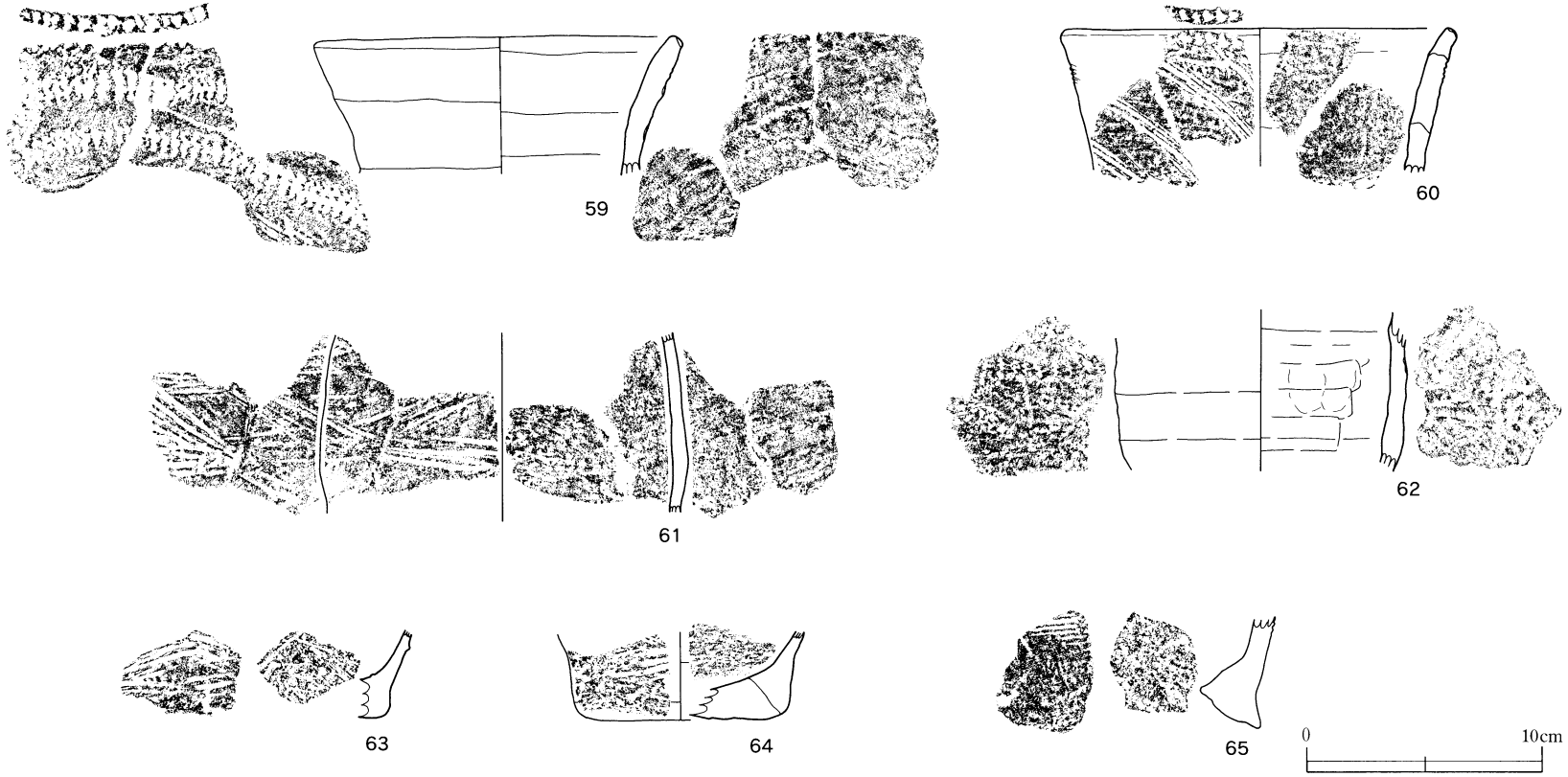
第83図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図17（６類－２）







第84図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図18（６類－３）



第85図　塞ノ神Ｂｄ式土器実測図19 (小型深鉢)

塞ノ神Ｂｄ式土器１類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第67図	1	R－14	30	801	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径29.4cm
		R－14	86		Ⅵ												
		R－14	123		Ⅵ												
		R－14	124		Ⅵ												
		R－14	262		Ⅵ												
		R－14	863		Ⅵ												
		R－14	1073		Ⅵ												
		R－14	1347		Ⅵ												
		R－14	1355		Ⅵ												
	2	221号集石	134・145	812		深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→粗いナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	スス付着
		Q－14	336		Ⅵ												
		Q－14	575		Ⅵ												
		Q－14	653		Ⅵ												
		Q－14	687		Ⅵ												
		Q－14	1099		Ⅵ												
		Q－14	2179		Ⅵ												
		Q－14	2194		Ⅵ												
		Q－14	2282		Ⅵ												
		Q－14	2627		Ⅵ												
		Q－14	2628		Ⅵ												
第68図	3	Q－14	305	931	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色～灰褐色	暗黄褐色～暗褐色	
		Q－14	990		Ⅵ												
		Q－14	2527		Ⅵ												
	4	Q－11	12347	1053	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部下半	○	○		○	砂粒を含む	粗いナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗茶褐色	
		R－11	264		Ⅵ												
		R－11	2198		Ⅵ												

塞ノ神Ｂｄ式土器２類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第69図	5	Q－13	11160	重10	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ケズリ→強いヨコハケ	赤褐色～黄褐色	暗茶褐色～黒褐色	口径25.8cm 器高31.8cm
		Q－14	429		Ⅵ												
		Q－14	430		Ⅵ												
		Q－14	431		Ⅵ												
		Q－14	441		Ⅵ												
		Q－14	472		Ⅵ												
		Q－14	480		Ⅵ												
		Q－14	488		Ⅵ												
		Q－14	491		Ⅵ												
		Q－14	754		Ⅵ												
		Q－14	772		Ⅵ												
第70図	6	R－14	6	813	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	強いヨコハケ→粗いナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗茶褐色	口径30.9cm
		R－14	29		Ⅵ												
		R－14	38		Ⅵ												
		R－14	358		Ⅵ												
		R－14	361		Ⅵ												
		R－14	403		Ⅵ												
		R－14	826		Ⅵ												
		R－14	897		Ⅵ												
		R－14	909		Ⅵ												
		R－14	974		Ⅵ												
		R－14	1075		Ⅵ												
		R－14	1177		Ⅵ												
		R－14	1256		Ⅵ												
		R－14	1352		Ⅵ												
		R－14	1359		Ⅵ												
第71図	7	Q－13	11186	重11	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	粗いヨコハケ→粗いナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	口径21.0cm 器高26.7cm
		Q－13	11199		Ⅵ												
		Q－14	2531		Ⅵ												
		R－14	159		Ⅵ												
		R－14	169		Ⅵ												
		R－14	202		Ⅵ												
		R－14	293		Ⅵ												
		R－14	922		Ⅵ												

塞ノ神Ｂｄ式土器２類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第72図	8	Q－１１ R－１１	11938 2605	941	Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	黄褐色～暗茶褐色	
	9	Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４	873 1488 1590	938	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁	○	○		◎	細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
	10	Ｐ－１４	2366	939	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～明黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
	11	Q－１４ Q－１４ Q－１４	373 704 994	811.2	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	黄褐色～暗褐色	黄褐色～暗黄褐色	口径22.3cm スス付着
	12	Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４	170 1021 1381 1383	811.1	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	黄褐色～暗褐色	茶褐色～暗黄褐色	口径22.4cm スス付着
	13	Ｐ－１４ Ｒ－１２ Ｒ－１２ Ｒ－１２	220 184 203 1111	928	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→粗いナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	口径27.8cm、スス付着
	14	Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４	24 695 1970 1986	935	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色～暗黄褐色	口径26.2cm
第73図	15	Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｐ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４ Ｑ－１４	597 764 769 1234 1235 1253 1263 1266 1267 1272 1304 43 1552 1571 1590 1776 2502 2566 2569	1051	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部～底部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色	口径
	16	Q－１２	2159	942	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ハケ→ナデ	ハケ・ケズリ→ナデ	暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	獣毛痕有？
	17	Ｐ－１４	1100	957	Ⅵ	深鉢	口縁下半	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗褐色～灰褐色	暗茶褐色～黒褐色	
	18	Q－１１	12080	950	Ⅵ	深鉢	口縁下部	○	○	○		砂粒を含む	右上がりハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	明黄褐色	明黄白色～暗褐色	
	19	Ｐ－１４	1113	956	Ⅵ	深鉢	口縁下半	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→粗いナデ	黄褐色	黄褐色	
	20	Q－１２ Q－１２ Q－１２ Q－１２ Q－１２	7204 7205 7207 7216 7217	924	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○		◎	砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～黒褐色	暗茶褐色～暗褐色	胴部径35.1cm スス付着
第74図	21	Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４	612 1117 1122 2260	948	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	右上がりハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色～暗褐色	
	22	Ｒ－１３	10035	958	Ⅵ	深鉢	口縁下半	○	○			砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコ・右下がりハケ→ナデ	暗茶褐色	暗褐色	胴部最大径23.4cm
	23	Ｐ－１４ Ｐ－１４	1492 2019	947	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	右下りハケ→ナデ	著しい剥落	明黄褐色～暗黄白色	明黄褐色～暗黄白色	
	24	Q－１１ Q－１１ Q－１１	2751 12056 12369	932	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○		◎	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
	25	Q－１１ Q－１１	1721 8007	934	Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○		◎	砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗褐色	

塞ノ神Ｂｄ式土器２類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第75図	26	P－１４	799	951	Ⅵ	深鉢	口縁下部～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～黒褐色	胴部径15.2cm
		P－１４	1240		Ⅵ												
	27	Q－１４	378	952	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗褐色～茶褐色	胴部径23.2cm
		Q－１４	387		Ⅵ												
		Q－１４	388		Ⅵ												
		Q－１４	2828		Ⅵ												
	28	P－１０	230	954	Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○		◎	砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	黒褐色	胴部径16.8cm スス付着
		P－１０	231		Ⅵ												
	29	Q－１２	7104	955	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○		◎	砂粒を含む	丁寧なナデ	右下がりハケ→粗いナデ	暗茶褐色	黒褐色～暗褐色	
		Q－１２	7209		Ⅵ												
	30	Q－１３	1529	922		深鉢	口縁下部～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	
		R－１２	191		Ⅵ												
		R－１２	192		Ⅵ												
		R－１２	195		Ⅵ												
		R－１２	202		Ⅵ												
		R－１２	205		Ⅵ												
		R－１２	386		Ⅵ												
		R－１２	388		Ⅵ												
		R－１２	390		Ⅵ												
		R－１２	391		Ⅵ												
		R－１２	392		Ⅵ												
		R－１２	396		Ⅵ												
		R－１２	402		Ⅵ												
		R－１２	1109		Ⅵ												
		R－１２	1112		Ⅵ												
		R－１２	1113		Ⅵ												
	31	Q－０９	2374	3001	Ⅵ	深鉢	底部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ケズリ	暗褐色～暗赤褐色	赤褐色～暗茶褐色	底径5.1cm
		Q－０９	2375		Ⅵ												
		Q－１４	2377		Ⅵ												
	32	R－１２	650	1050	Ⅵ	深鉢	底部～胴部下半	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	バインダー処理済み
	33	P－１３	556	1049	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部～底部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗茶褐色	口径20.4cm，器高30.4cm
	34	Q－１１	4103	923	Ⅵ	深鉢	胴部下半～底部	○	○			砂粒を含む	ヨコナデ	ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗褐色～暗黄褐色	底径11.8cm
		Q－１１	4113		Ⅵ												
		Q－１１	9528		Ⅵ												
		Q－１１	9554		Ⅵ												
		Q－１１	12011		Ⅵ												
		Q－１１	12085		Ⅵ												
		Q－１１	12363		Ⅵ												

塞ノ神Ｂｄ式土器３類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 クロウンモ	胎土 砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第77図	35	Q－１４	997	929	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○		◎	砂粒を含む	ハケ→粗いナデ	ハケ→粗いナデ	暗褐色～茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径28.8cm スス付着
		Q－１４	1088		Ⅵ												
		Q－１４	1271		Ⅵ												
		Q－１４	1272		Ⅵ												
		Q－１４	1281		Ⅵ												
		Q－１４	1580		Ⅵ												
		Q－１４	1733		Ⅵ												
		Q－１４	1745		Ⅵ												
		Q－１４	2389		Ⅵ												
		Q－１４	2392		Ⅵ												
	36	221号集石	133	809		深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	指頭押圧・ハケ→粗いナデ	茶褐色～暗褐色	茶褐色～黒褐色	取上集石191号 口径24.0cm スス付着
		Q－１４	592		Ⅵ												
		Q－１４	655		Ⅵ												
		Q－１４	656		Ⅵ												
		Q－１４	1189		Ⅵ												
	37	R－１１	2291	959	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	右下がりハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	胴部径19.3cm
		R－１１	2297		Ⅵ												
		R－１１	2628		Ⅵ												
		R－１１	2629		Ⅵ												
	38	221号集石	117	810		深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	粗いナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色	取上集石191号 口径21.0cm スス付着
		Q－１４	593		Ⅵ												
		Q－１４	607		Ⅵ												
		Q－１４	1097		Ⅵ												
		Q－１４	1173		Ⅵ												
		Q－１４	1179		Ⅵ												
		Q－１４	2587		Ⅵ												
		Q－１４	2718		Ⅵ												

塞ノ神Ｂｄ式土器４類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第78図	39	Ｑ－１１	11982	802	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	△		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→粗いナデ	暗茶褐色～茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	口径
		Ｑ－１１	11987														
		Ｑ－１１	11988														
		Ｑ－１１	11992														
		Ｒ－１１	1427														
		Ｒ－１１	2203		Ⅵ												
		Ｒ－１１	2269														
		Ｒ－１１	2277														
		Ｒ－１１	2285														
		Ｒ－１１	2528														
		Ｒ－１１	2531														
		Ｒ－１１	2532														
		Ｒ－１１	2541														
		Ｒ－１１	2551														
		Ｒ－１１	2554														
		Ｒ－１１	2582														
		Ｒ－１１	2583														
		Ｒ－１１	2592														
		Ｒ－１１	2593														
		Ｒ－１１	2595		Ⅵ												
		Ｒ－１１	2602														
		Ｒ－１１	2631		Ⅵ												
		Ｒ－１１	3030														
第79図	40	Ｒ－１３	1064	936	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○		○	砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗褐色～暗黄褐色	
		Ｒ－１３	6165		Ⅵ												
		Ｒ－１３	7285		Ⅵ												
	41	Ｒ－１０	9901	963	Ⅵ	深鉢	口縁下部～胴部	○	○	○		砂粒を含む	剥落が著しい	丁寧なナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
	42	Ｒ－１２	25	805	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→粗いナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	胴部径26.6cm 擬口縁
		Ｒ－１２	111		Ⅵ												
		Ｒ－１２	123		Ⅵ												
		Ｒ－１２	678		Ⅵ												
		Ｒ－１２	688		Ⅵ												
		Ｒ－１２	697		Ⅵ												
		Ｒ－１２	701		Ⅵ												
		Ｒ－１２	705		Ⅵ												
		Ｒ－１２	706		Ⅵ												
		Ｒ－１２	737		Ⅵ												
		Ｒ－１２	742		Ⅵ												
		Ｒ－１２	1034		Ⅵ												

塞ノ神Ｂｄ式土器５類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第80図	43	Ｐ－１４	373	925.2	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～明黄褐色	茶褐色～明黄褐色	
		Ｐ－１４	375		Ⅵ												
		Ｐ－１４	510		Ⅵ												
		Ｐ－１４	1762		Ⅵ												
	44	Ｒ－１２	993	926	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○		◎	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径28.6cm，補修孔あり
	45	Ｐ－１４	339	927	Ⅵ	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→丁寧なナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	
		Ｐ－１４	345		Ⅵ												
		Ｐ－１４	1088		Ⅵ												
		Ｐ－１４	1880		Ⅵ												
		Ｐ－１４	1882		Ⅵ												
	46	Ｐ－１４	347	925.1	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
		Ｐ－１４	435		Ⅵ												
		Ｐ－１４	473		Ⅵ												
		Ｐ－１４	479		Ⅵ												
		Ｐ－１４	667		Ⅵ												
第81図	47	Ｑ－１３	1301	832	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ケズリ→ハケ	茶褐色～暗黄褐色	茶褐色	多数接合

塞ノ神Ｂｄ式土器６類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	内器面	備考
第82図	48	Ｒ－１２	606	962	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	明黄白色	暗褐色～明黄白色	
		Ｒ－１２	784														
		Ｒ－１２	790		Ⅵ												
	49	Ｒ－１２	122	960	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	明黄白色	暗褐色～暗黄褐色	
		Ｒ－１２	792		Ⅵ												
		Ｒ－１２	794		Ⅵ												
		Ｒ－１２	795		Ⅵ												
	50	Ｒ－１３	6960	937	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→粗いナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗黄褐色	
		Ｒ－１３	6964		Ⅵ												
	51	Ｒ－１２	733	803	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～黄白色	暗黄褐色～暗褐色	口径28.4cm
		Ｒ－１２	892		Ⅵ												
		Ｒ－１２	894		Ⅵ												
		Ｒ－１２	895		Ⅵ												
		Ｒ－１２	904		Ⅵ												
		Ｒ－１２	910		Ⅵ												
		Ｒ－１２	922		Ⅵ												
		Ｒ－１２	1041		Ⅵ												

塞ノ神Ｂｄ式土器６類

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第83図	52	R－１０	5305	964	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	茶褐色	
	53	R－１０	141	965	Ⅲ	深鉢	胴部上半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ケズリ	赤褐色	暗褐色～暗黄褐色	Ⅳ層表採土器と接合
	54	Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４	1243 1710 2031 2032 2033 2370	930	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→(粗い)ナデ	明黄白色～暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	スス付着
	55	P－１４ P－１４ P－１４ P－１４ Q－１４	669 670 2068 2364 1538	933	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
第84図	56	Q－１１	1760	1017	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	貝殻条痕→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色	
	57	Q－１１	1760	1016	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	貝殻条痕→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色	
	58	Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４ Q－１４	595 786 1566 2036 2051 2233 2304 2306 2360	833	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	黄白色～暗褐色	黄白色～暗褐色	

塞ノ神Ｂｄ式土器・小型深鉢

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	実測図番号	層	器種	部位	胎土 石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外器面調整	内器面調整	色調 外器面	色調 内器面	備考
第85図	59	P－１４ P－１４ P－１４ P－１４	674 687 2355 2359	940	Ⅵ Ⅵ Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～暗褐色	茶褐色～暗茶褐色	口径15.0cm
	60	P－１４ P－１４	2018 2352	953	Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	口縁	○	○			砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～黄白色	黄白色～暗茶褐色	口径16.4cm
	61	R－１１ R－１１ R－１１	228 1432 1436	946	Ⅵ Ⅵ Ⅵ	小型深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～黄白色	暗茶褐色～暗褐色	胴部径15.9cm
	62	Q－１４	658	949	Ⅵ	小型深鉢	胴部	○	○		◎	細砂・微砂	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗褐色	胴部径12.5cm
	63	P－１１	254	945	Ⅵ	小型深鉢	胴部下半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗黄白色	茶褐色～暗黄褐色	
	64	R－１１	964	943	Ⅵ	小型深鉢	底部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	黄白色	
	65	R－１１	2142	944	Ⅵ	小型深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	指オサエ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗黄褐色	底部との接合痕残存

⑥ 第６群　苫浜式土器（第86図～第98図）

苫浜式土器は，器形からみて平底の底部で，胴部が膨らみ頚部はゆるくしまり口縁部が外反するものと口縁部がバケツ状に直線的に外反するもの，口縁部が内弯気味に立ち上がるものに分けられる。また，文様構成でもコブ状の突起および突帯を有するものと有しないものに大きく分けられる。

１～18は，コブ状の突起及び突帯を有するものである。１は，復元口縁径32.2cmを測る。ゆるくしまった頚部から口縁部は外反するものである。また，波状口縁を呈し，頂部の位置に縦位のコブ状突起を３条，その下位に横位のコブ状突起を２段有している。器面には浅い条線（直線）と押引文が施されるが，浅いため明瞭ではない。２も縦位のコブ状突起を３条有するものである。３は口縁部下位の部分と思われるが，横位のコブ状突起とその下に３条の縦位のコブ状突帯を貼り付けるものである。突起には貝殻による刻目が施されている。４は，復元口縁径39cmを測るもので，胴部から口縁部へ直線的に外反するバケツ状を呈する。口唇部は平坦で，貝殻復縁による刻み目を施す。器面全体に貝殻による条線を横位・斜位に施すものである。また，口縁部には長さ約８cmのコブ状突起を２条１対で貼り付ける。突起には口唇部と同様の刻目を施す。口縁下位に補修孔と思われる穿孔が認められる。穿孔は両面からの円穿孔である。５は復元口縁径29cmを測るもので，口縁部はわずかに外反する。口縁部から胴部にかけて突帯を縦位に施すものであるが，１状の突帯を口縁部の位置で逆Ｕ字状に折り曲げてあり２条の突帯のように見えるものである。６は２条のコブ状突起を有する口縁部である。７は縦位のコブ状突起，８～10は，縦位・横位のコブ状突起を有する。11は復元口縁径25cmを測るもので，口縁部が波状を呈し，その頂部に横位の短いコブ状突起，その下に縦位の突起を有するものであるが，２箇所か４箇所かについては不明である。胴部には貝殻復縁による条線文を格子目状に施すものである。12も横位・縦位のコブ状突起を有するものである。13は復元口縁径30cmを測る。口縁部は波状を呈し，頂部の位置に十字になるように縦位・横位のコブ状突起を有する。口縁端部には貝殻復縁による刺突文，胴部には波状・直線の条線文を施すものである。14は，復元口縁径15.7cmを測るもので，口縁部はやや内弯気味に立ち上がる。器形がいびつなものであるが，口縁部は波状を呈し頂部に縦位のコブ状突起を有する。胴部には貝殻復縁による波状を呈する押引文と条線文（直線）を施す。15は復元口縁径35.4cmを測る。口縁部は直線的に外反し，頚部はゆるやかにしまるものである。口縁部は波状を呈し，頂部の位置に横位のコブ状突起を３段に有する。胴部には貝殻復縁による刺突文と条線文（直線）を交互に施すものである。16は口縁部およびその下に横位のコブ状突起を有し，口辺部には貝殻押引文，胴部には条線文（直線）を施すものである。17～20はコブ状突起を有するものである。21～47はコブ状の突起および突帯を有しないものである。胴部には，貝殻復縁による押引文・条線文（波状・直線）・刺突文等を施す。24は復元口縁径27cmを測り，口縁部がわずかに内弯するものである。胴部には貝殻復縁により波状および直線の押引文を施す。26は口縁端部に貝殻復縁による刺突文，胴部には条線文（大きな波状文・こまやかな波状文・直線文）を施すものである。27は口縁部下位に貝殻復縁による条線文（波状）を施し，胴部は条線文状の貝殻条痕を器面全体に斜位に施すものである。28は頚部がゆるやかにしまるものである。胴部上位には貝殻復縁による条線文（波状）を施し，下位には直線の条線文を格子目状に施すものである。29は胴部に直線の条線文を斜位及び横位に施すものである。30～40は胴部破片であるが，貝殻復縁による押引文，条線文（直線・波状），刺突文を施すものである。41は，復元口縁径29.6cmを測る。波状口縁を呈し，口辺部には貝殻復縁による刻目様の押引文を巡らし，胴部には浅い条線が施される。42は胴部に貝殻復縁による直線の条線文と波状の条線文を交互に施すものである。43は平底の底部から胴部はあまり膨らまないものである。復元底部径14.4cmを測る。胴部上位には波状の条線文，下位には直線の条線文を施す。44～46はいずれも平底の底部である。復元底部径は44が11cm，45が 8,8cm，46が 8.4cmを測る。47は復元口縁径31.2cm，器高41cm，底部径

11.6cmを測る。平底の底部から胴部はあまり膨らまずに立ち上がり，ややしまった頸部から口縁部はゆるやかに外反するものである。

胴部には器面全体に弧状の条線文を奔放に施してある。

苦浜式土器観察表　No.1

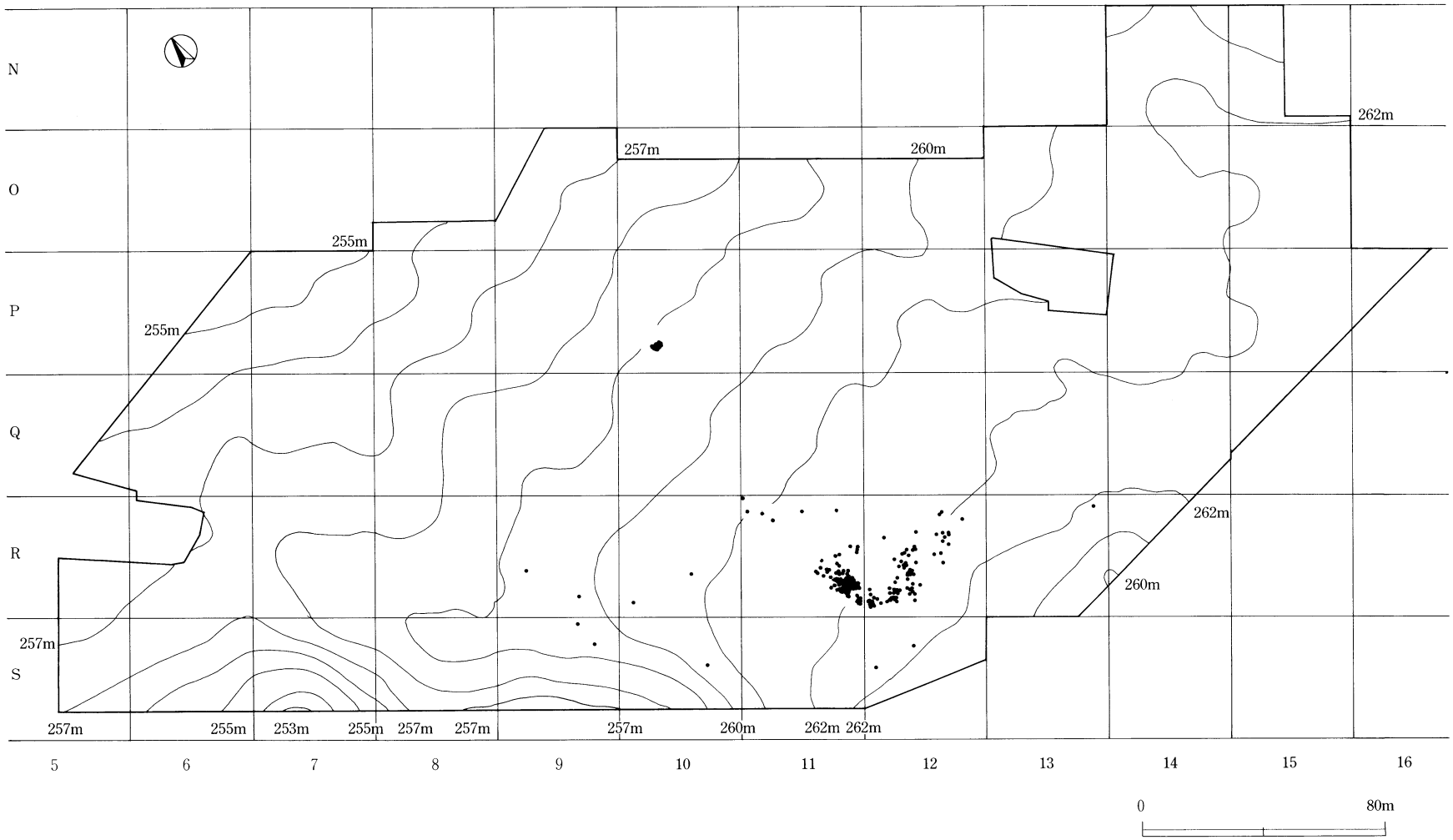
挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
							石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第図	1	R－12	745 746 894 971	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	横位（2段）・縦位（3条）のコブ状突起 貝殻復縁による押引文
	2	R－12	624	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○		○	貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	縦位（3条）のコブ状突起
	3	R－12	47 199	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	暗茶褐色	コブ状突起
第図	4	R－11 R－12	2117 2102 2096 2054 2103 2115 1938 1943 1975 1897 2095 2454 2060 2071 2105 2461 2091 2072 2079 2108 2471 2077 2465 2045 2106 2476 2109 1019	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		○	貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	コブ状突起，補修孔
第図	5	R－11	1869 1928 1932 1935 2508	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	縦位の突帯
	6	R－12	1029	Ⅵ	深鉢	口縁部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	茶褐色	コブ状突起
	7	R－11	2041 2100	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	茶褐色	縦位の突起

苦浜式土器観察表　No.2

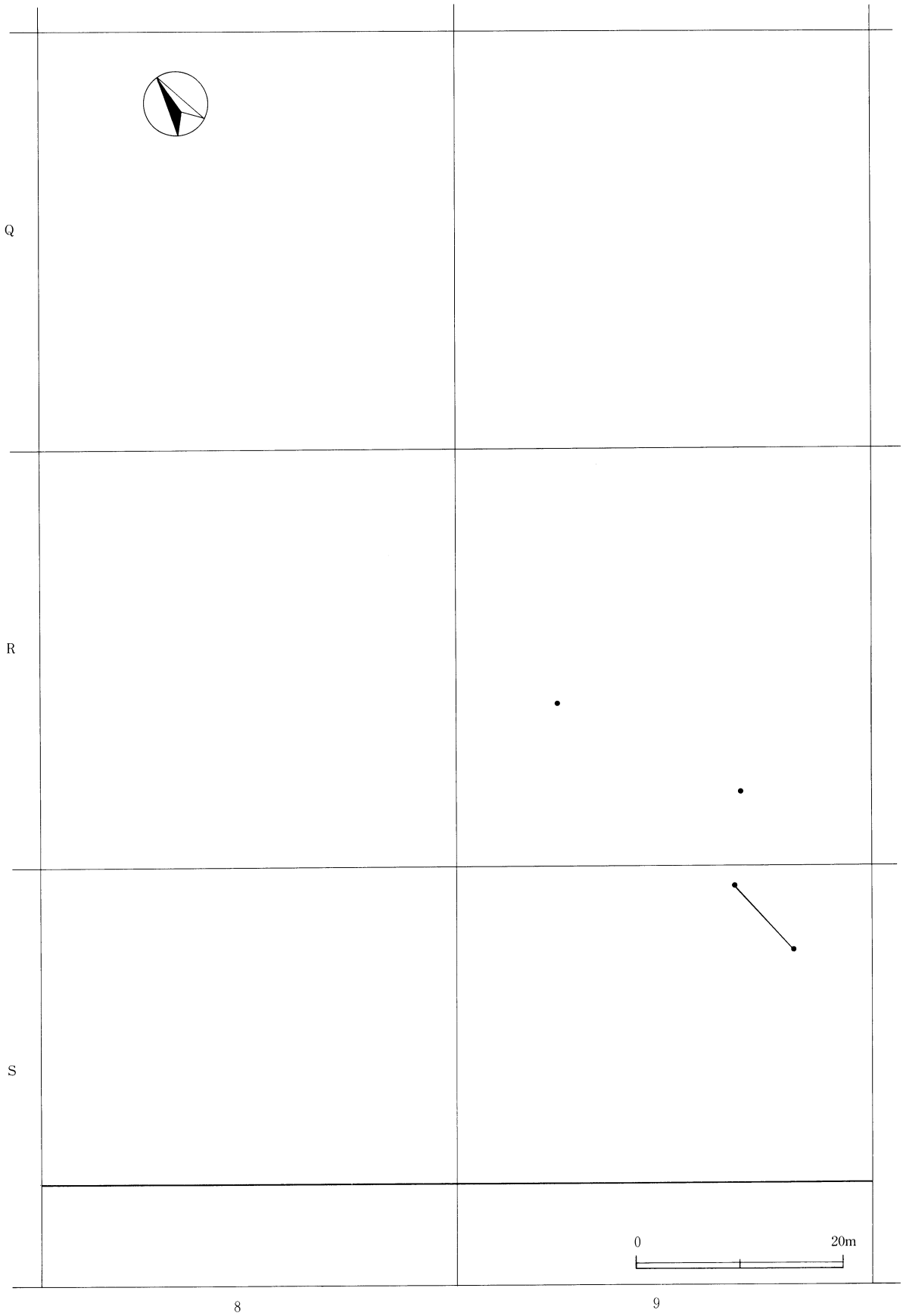
挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
							石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第図	8	R－11	3106	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	暗茶褐色	縦位・横位の突起
	9	R－11	3110 3111	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	赤茶褐色	茶褐色	縦位・横位の突起
	10	R－11	1873	Ⅵ	深鉢	口縁部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	縦位・横位の突起，押引文
	11	R－12	171 190 216 370 389 554	Ⅵ	深鉢	口縁部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	縦位・横位の突起 貝殻復縁による条線を格子条に施す 波状口縁部
第図	12	R－12	892 897 905 906 907 913 917 967	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	茶褐色	縦位・横位の突起
	13	R－11	1870 1907 1908 1914 2492	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	縦位・横位の突起 貝殻復縁による条線(波状) 波状口縁
	14	P－10	301 303 304 308 310 311 315 316 317 318 319 321 322 323 325 328	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部 ～底部近く	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	茶褐色	縦位の突起 貝殻復縁による条線（波状・直線）
第図	15	R－12	42 44 46 91 92 93 95 96 211	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	横位の突起線(直線) 貝殻復縁による押引文 貝殻復縁による条
	16	R－12	35	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	横位の突起
	17	R－12	690 712	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	茶褐色	横位の突起 貝殻復縁による条線(直線)
	18	S－12	31	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	横位の突起，貝殻条線
	19	R－12	714	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	横位の突起，貝殻押引文
	20	R－12	701	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○			○	貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	黒茶褐色	横位の突起，貝殻条線（波状）
	21	R－12	181	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	茶褐色	貝殻条線
	22	R－11	1838	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	茶褐色	貝殻条線
	23	R－12	647	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	茶褐色	貝殻条線（直線），押引文
	24	R－12	702 1017	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	茶褐色	貝殻押引文

苦浜式土器観察表　No.3

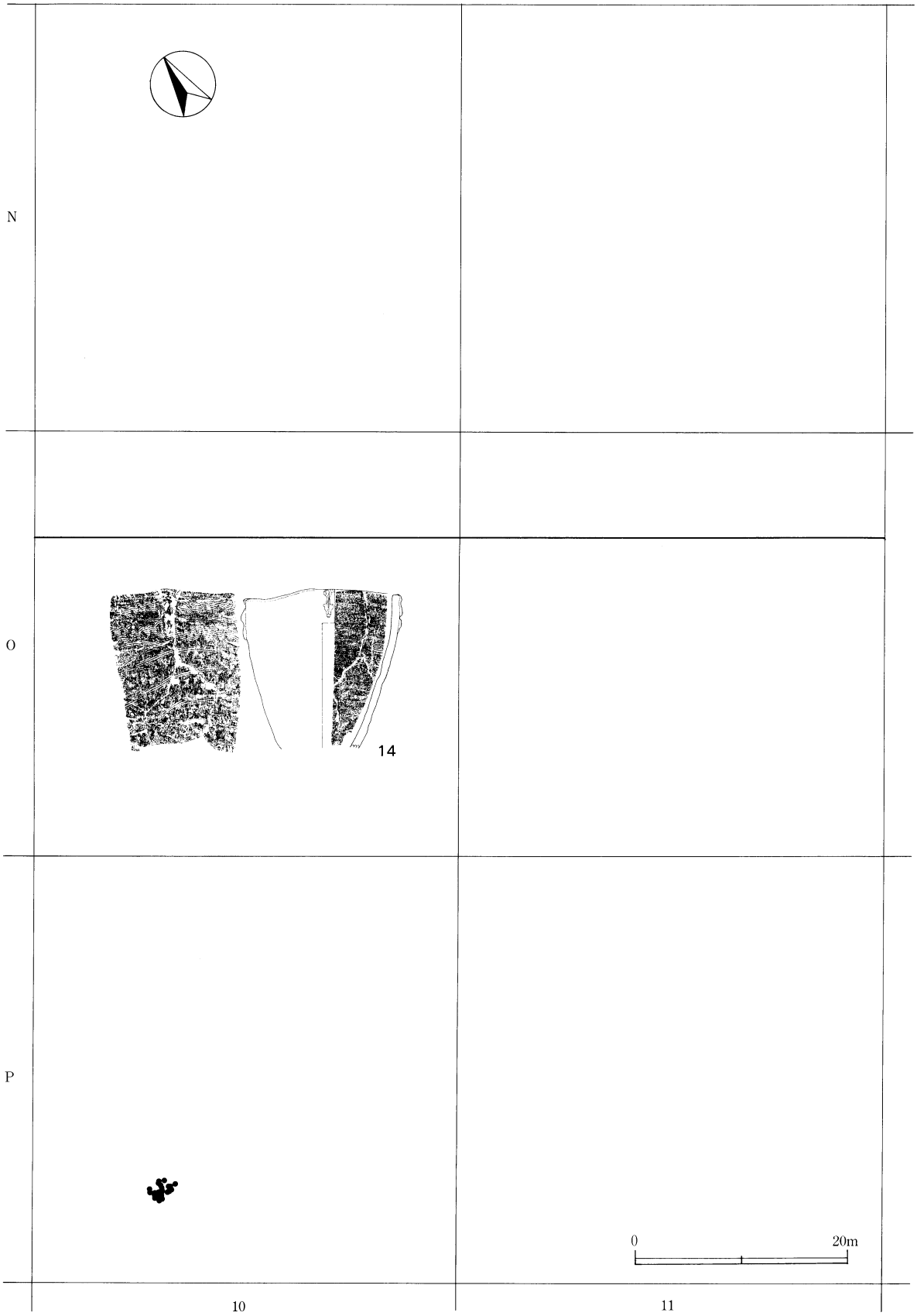
挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
							石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第図	25	R－11	1881 1884 2506	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	貝殻条線(波状・直線)，刺突文
	26	R－12	1010 1012	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	貝殻条線，押引文
	27	R－12	352 584 559 645 957 975	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻押引文，貝殻条線（格子目条）
	28	O－15	22 25 29 33 39 40 45 47	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	明茶褐色	茶褐色	貝殻条線（格子目状）
	29	R－11	2475	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	茶褐色	貝殻条線（波状・直線）
	30	R－11	2433	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	茶褐色	貝殻条線（波状）
	31	R－12	101	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	赤茶褐色	茶褐色	貝殻復縁押引文
	32	R－12	720 1883	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	赤茶褐色	茶褐色	貝殻復縁押引文
第図	33	R－12	103	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	黒茶褐色	貝殻押引文（波状を呈する）
	34	R－11	1968	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○				貝殻条痕	ヘラ削り	黒茶褐色	黒茶褐色	貝殻条線
	35	R－12	51	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻条
	36	R－12	689	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻条線，貝殻刺突文
	37	R－12	936	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	明茶褐色	茶褐色	貝殻押引文貝殻押引文（波状を呈する）
	38	Q－11	12059	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	暗茶褐色	暗茶褐色	貝殻押引文（殻頂部使用）
	39	S－12	120	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻押引文（板状施文具）
第図	40	R－12	268 270 299 371 378 549 556 588	Ⅵ	深鉢	口縁	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	貝殻条線，貝殻押引文
	41	R－12	997 1000 1013 1014 1016	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	明茶褐色	茶褐色	貝殻文（波状押引文と直線文を交互に施す）
	42	R－11	2012 2120 2126 2132 2135 2137 2148 2181 2157 2441	Ⅵ	深鉢	胴部～底部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻文（上位に波状押引文・下位に直線文）
	43	R－12	125	Ⅵ	深鉢	底部	○	○						明茶褐色	茶褐色	
	44	R－12	128	Ⅵ	深鉢	底部	○	○						明茶褐色	茶褐色	粘土紐積み上げの痕跡が明瞭
	45	R－12	596 770	Ⅵ	深鉢	底部	○	○						明茶褐色	茶褐色	粘土紐積み上げの痕跡が明瞭
第図	47	R－12	45 99 250 251 401	Ⅵ	深鉢	口縁～底部	○	○	○			貝殻条痕	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻条線（器面全体に弧状で複雑な文様が施される）



第86図　苦浜式土器出土状況全体図

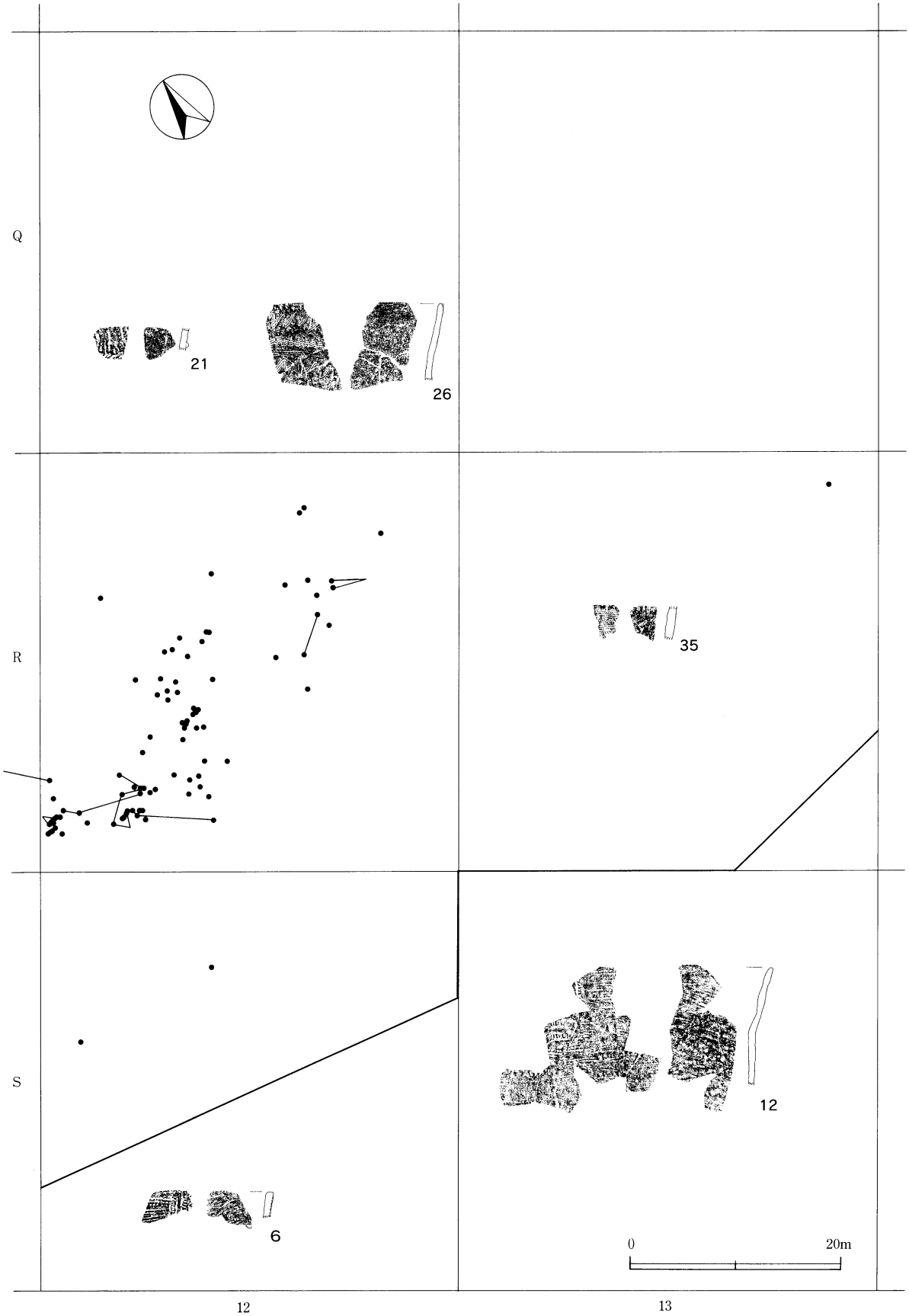


第87図　苦浜式土器出土状況図１(Q・R・S－８・９区)

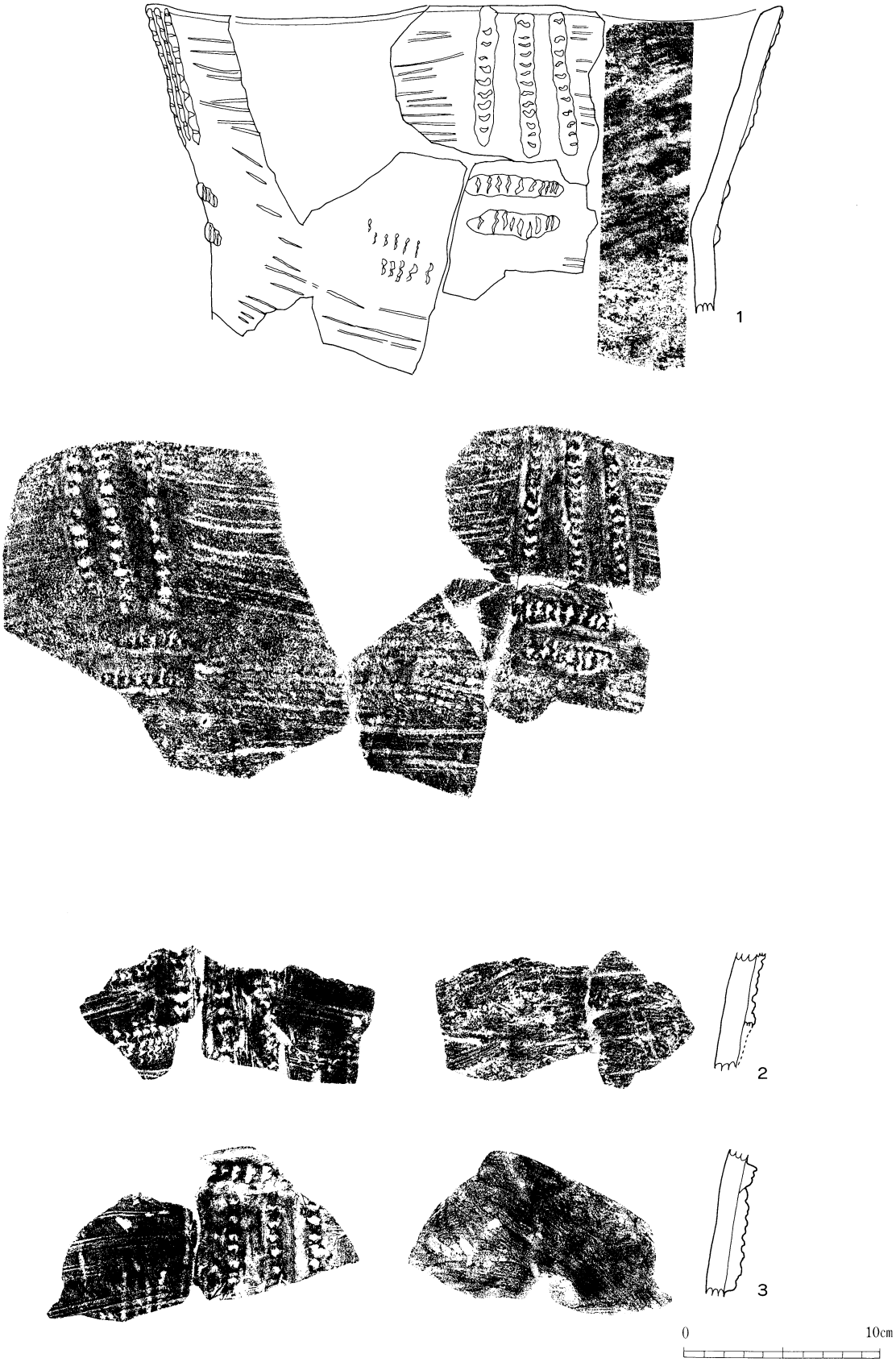


第88図　苦浜式土器出土状況図２(N・O・P－10・11区)

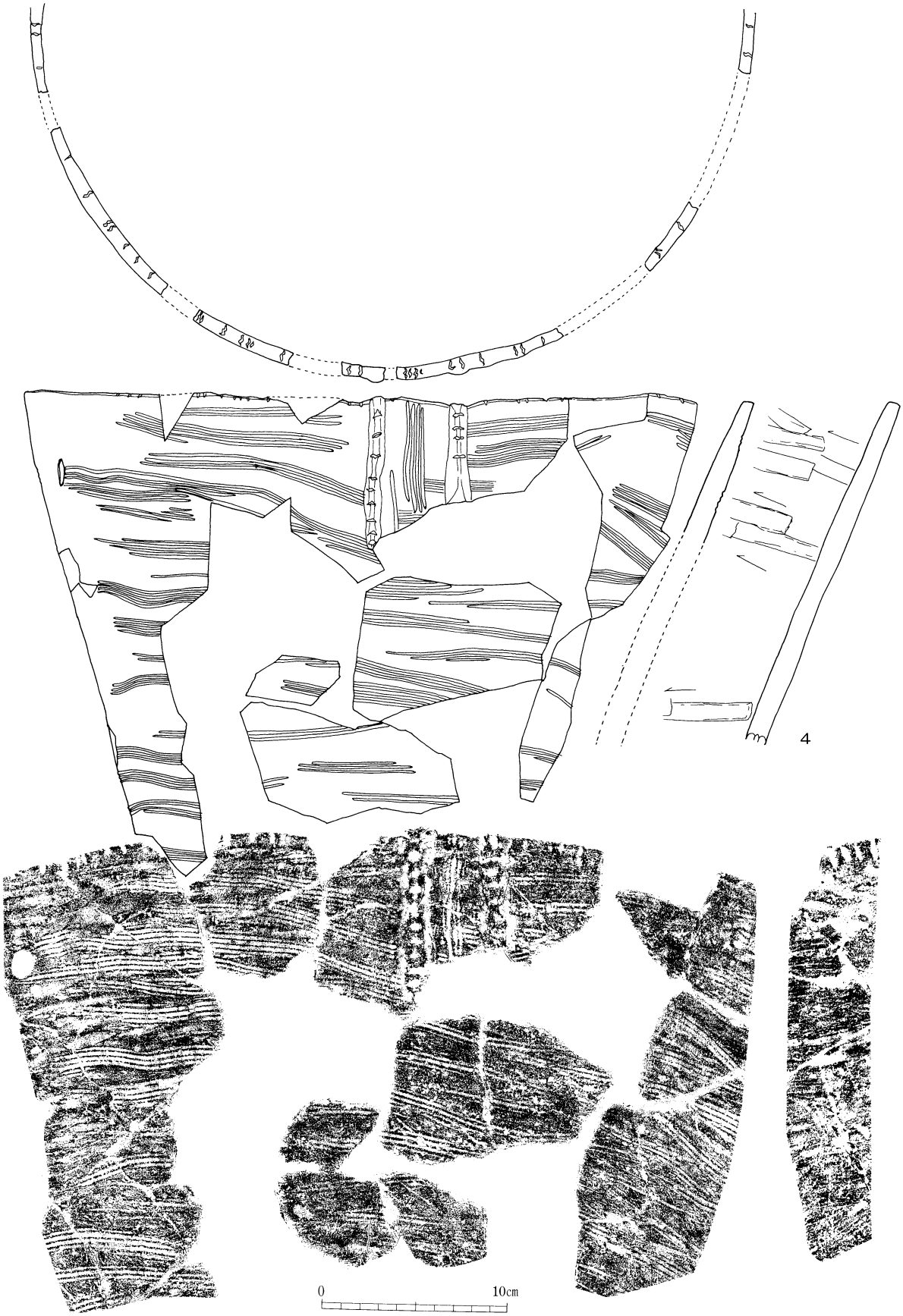
第89図　苦浜式土器出土状況図３(Q・R・S－10・11区)



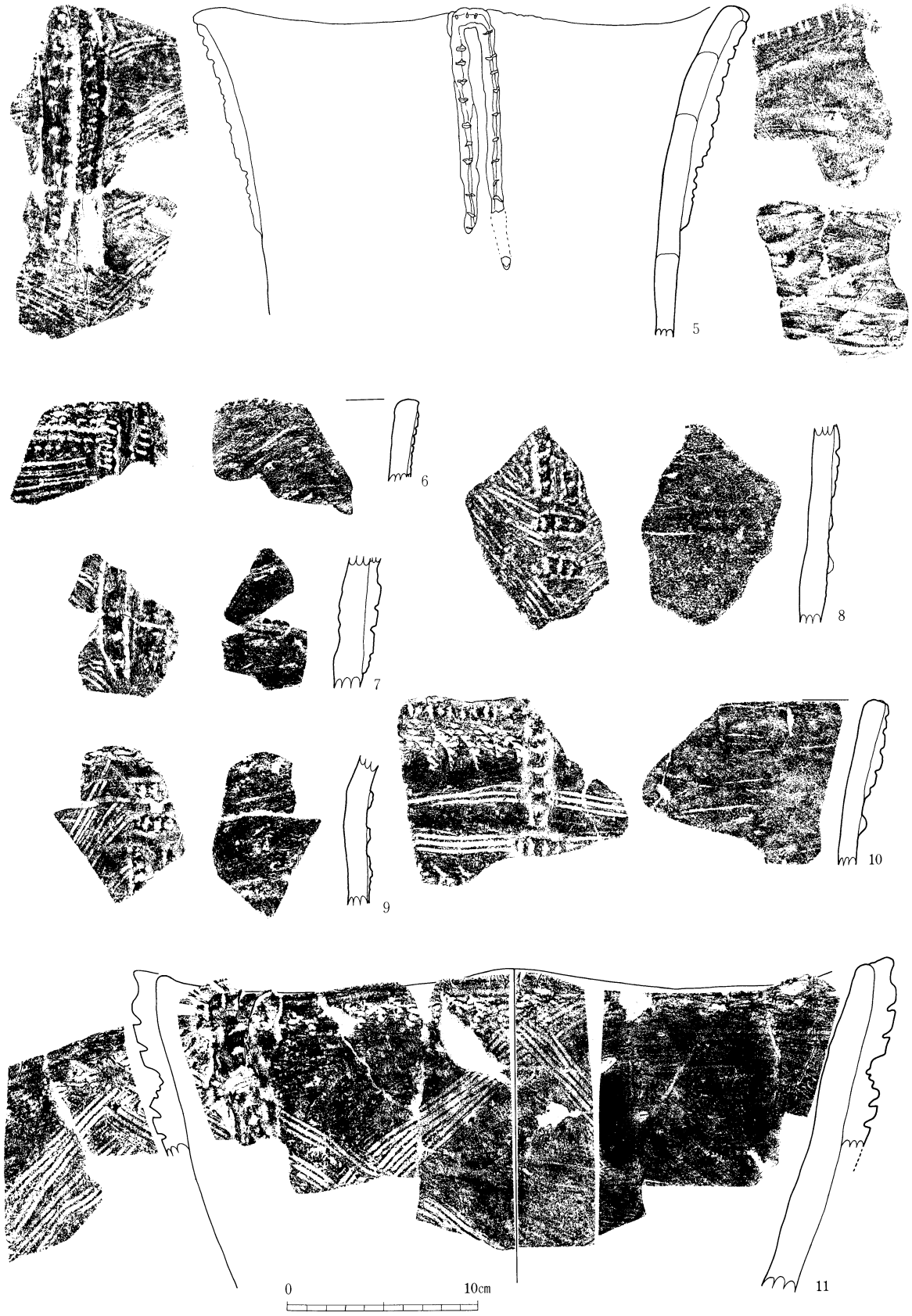
第90図　苦浜式土器出土状況図４(Q・R・S－12・13区)



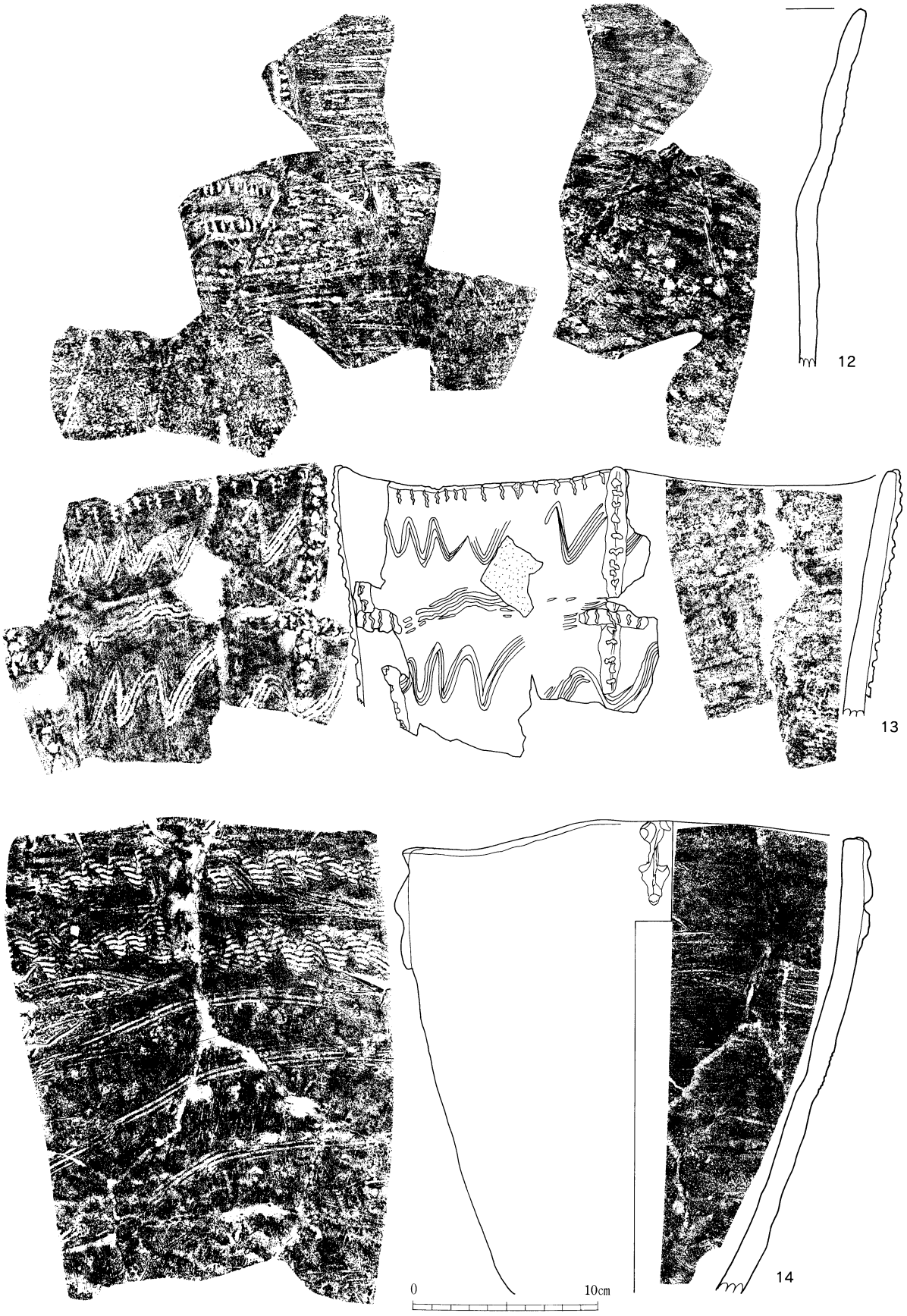
第91図　苦浜式土器実測図１



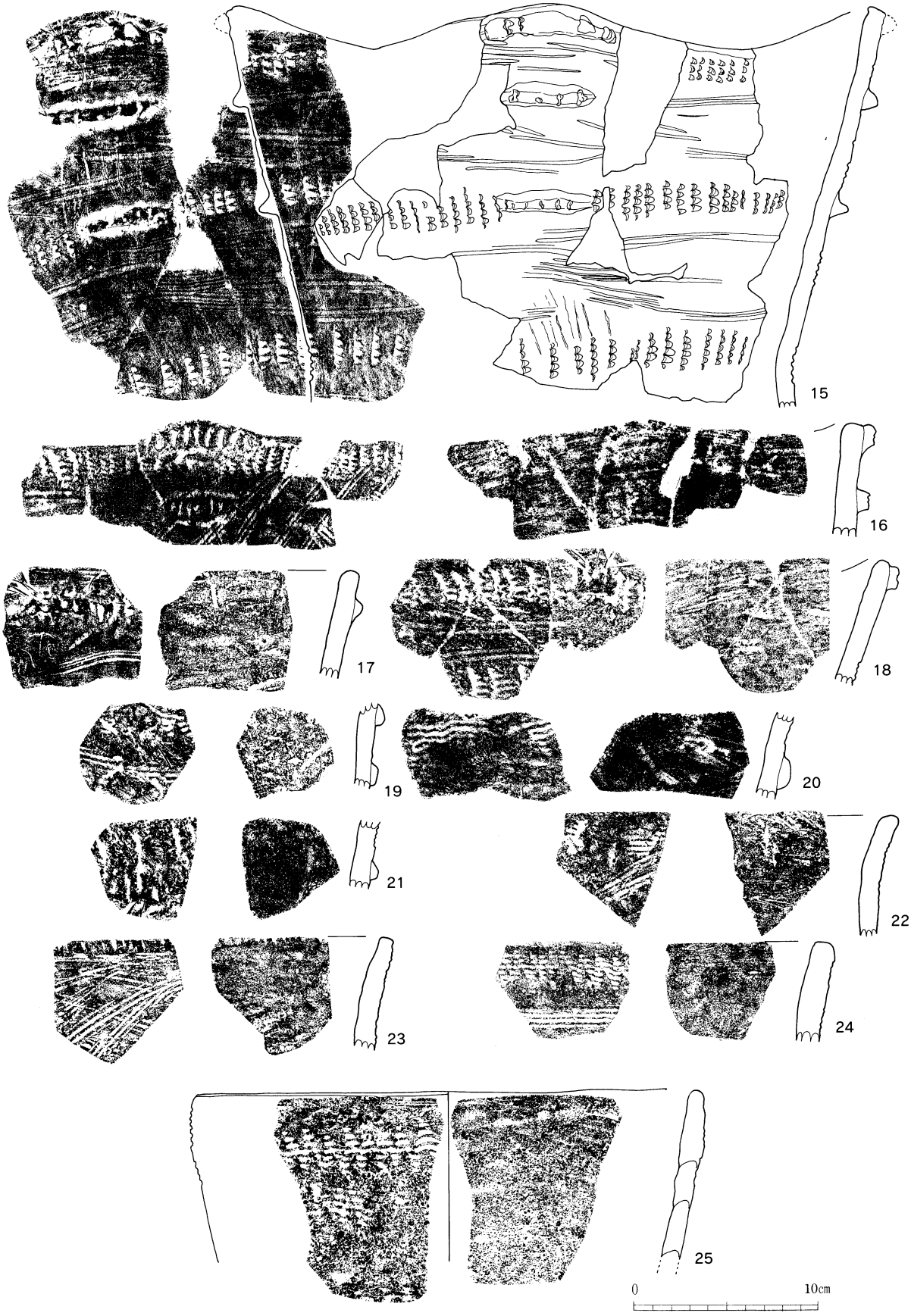
第92図　苦浜式土器実測図２



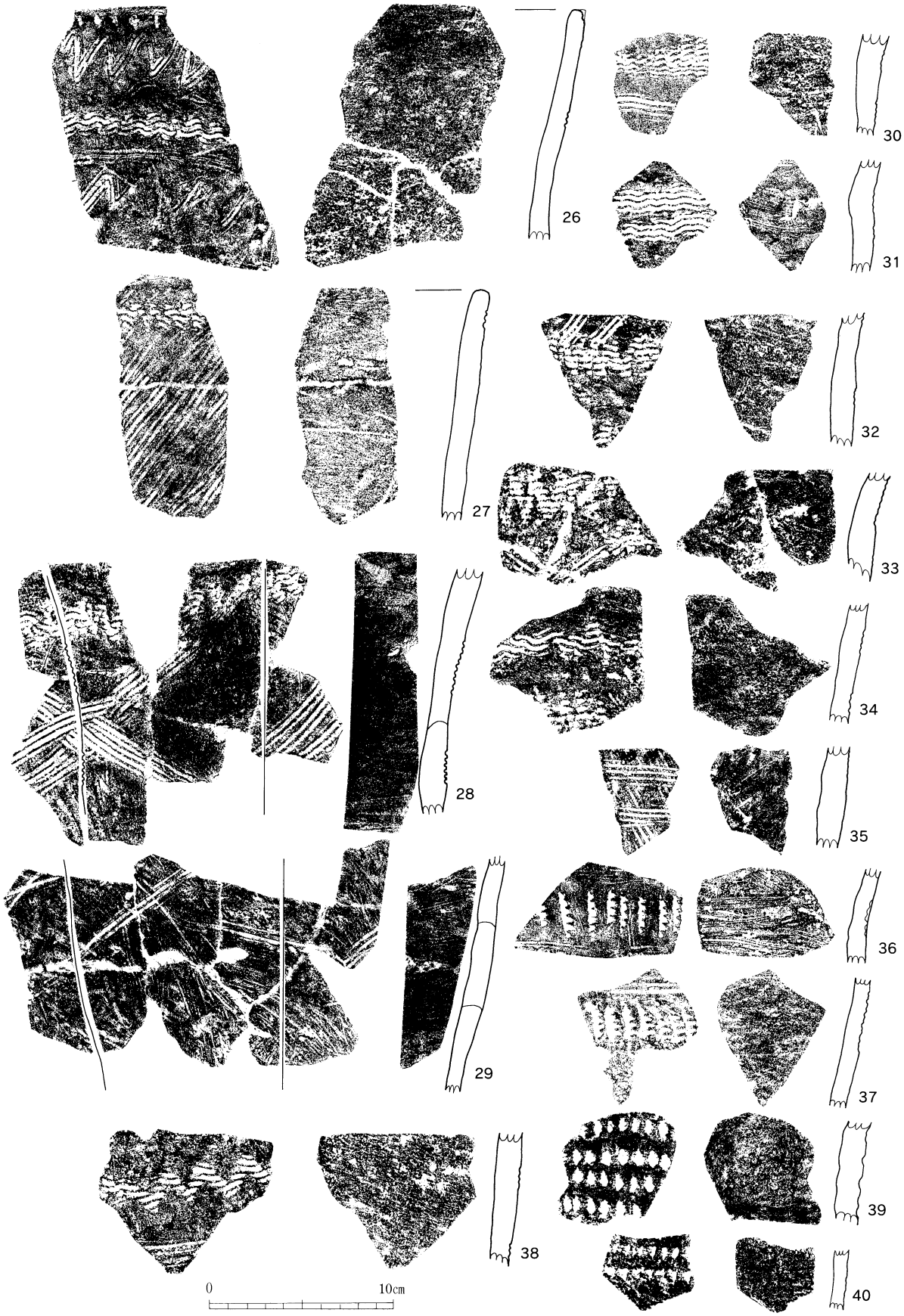
第93図　苦浜式土器実測図 3



第94図　苦浜式土器実測図 4



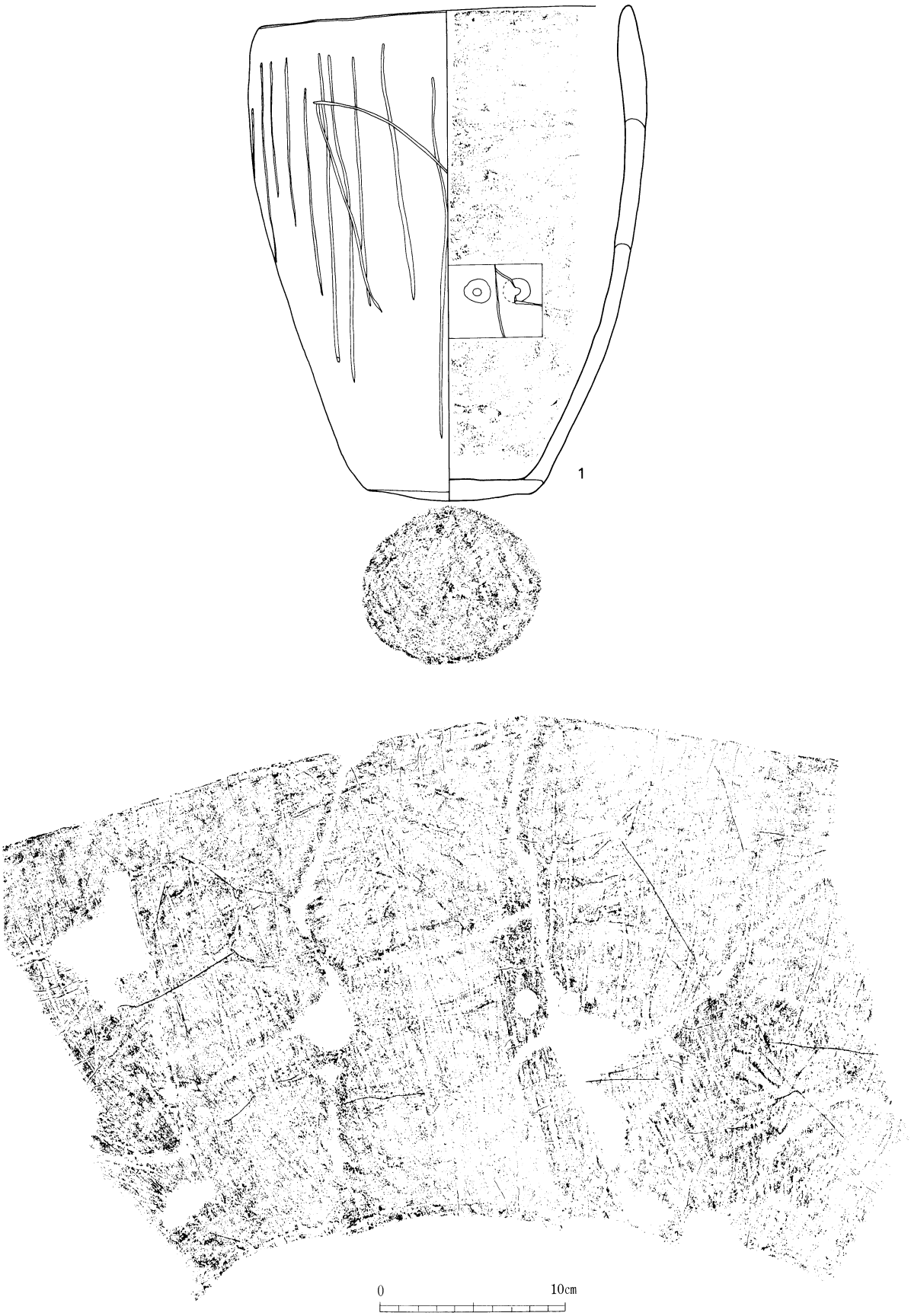
第95図　苦浜式土器実測図５



第96図　苦浜式土器実測図 6

第97図　苦浜式土器実測図７

第98図　苦浜式土器実測図 8



第99図　型式不明土器実測図１

第100図　型式不明土器実測図２

型式不明土器観察表

挿図番号	報告番号	出土区	注記番号	層	器種	部位	胎土					外器面調整	内器面調整	色調		備考
							石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫			外器面	内器面	
第図	1	Q－13	1044 1060 4462	Ⅵ	深鉢	口縁～底部	○	○	○		○	ヘラ削りの後ナデ	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	縦方向の沈線文 胴部中位に１対の補修孔 口縁部付近にスス付着
	2	Q－9	761 3353 3354 3551	Ⅵ	深鉢	口縁～底部	○	○	○		○	ヘラ削りの後ナデ	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色	波状口縁部 無文

型式不明の土器

上野原遺跡の第10地点における縄文時代早期の土器は，早期中葉から後葉まで22類に分類することができた。しかしながら，そのどこにもあてはまらない土器が２点ある。ここでは，無理に型式にあてはめないで型式不明の土器として取り扱うこととした。

１は，口縁径19.8cm，底部径 9.2cm，器高26cmを測る深鉢形土器である。底部は平底であるが，底面がやや丸みを帯びているため座りがよくない。胴部はあまり膨らまず，口縁部は内弯気味に立ち上がり，端部はすぼまるものである。また，口唇部はわずかな平坦面を有する。外面には浅くて不規則な縦方向の沈線文を施す。また，口縁部付近にススの付着が顕著に認められる。胴部には補修孔と思われる穿孔が１対穿たれているが，中心よりやや下位に穿孔があるため煮炊きには使用することは不可能と思われる。当初は煮炊きに使用されていたものであろうが，補修後は堅果類等の貯蔵用として利用されたのではないだろうか。

２は復元口縁径22.6cm，器高20.3cmを測る深鉢形土器である。平底の底部から直線的に立ち上がり，口縁部は外反するものである。口縁部は突起を有し波状口縁状を呈している。外面は無文で荒いヘラ削り調整の後，一部ナデ調整を施しているのみである。

⑧　小結

上野原遺跡第10地点の発掘調査では，縄文時代早期の時期の土器は，層位的に把握することはできなかった。しかしながら，早期後葉後半期の土器についても，各型式間には器形的特徴にも施文的特徴にも違いがある。さらには出土分布の状況にも明瞭な差が認められた。このことなどから，ここまで分類したタイプが時間差を示すと仮定して，型式組列を考えることにする。

⑧－１　第１群について

この項では，塞ノ神式土器様式とした第１群から第５群のうち，特に第１群に属する土器について若干の考察を記す。

南九州縄文早期土器編年において，「平栫式土器」から「塞ノ神Ａａ式土器」へという変遷が考えられている。深鉢形土器について，この型式の変化を属性の変化で置き換えると以下のようになる。

1）口縁肥厚帯が消滅する。

2）口縁部内面と胴部内面との境の屈曲が明瞭になり，稜線ができる。

3）口縁部文様が，沈線文と刺突連点文とで文様が構成される土器から，沈線文のみで文様が構成される土器へ。

4）胴部文様が「結節縄文」から「網目撚糸文」へ。

以上，４点の属性変化が主に考えられる。

さて第１群に属する深鉢形土器は，従来，塞ノ神式土器様式に属する諸型式の土器として分類されてきた土器である。しかし，上野原遺跡第10地点の調査では約400点の土器片が，第１群に属する土器として抽出できた。しかも下記に示すように，さらに類型化できるタイプともいえる，一定の纏まりをもった土器群として認識できたことが成果であった。

A　口縁形態が緩やかな波状口縁もしくは平口縁を呈し，口縁中央部でいくぶんか屈曲する。口縁屈曲部上位には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し，口縁屈曲部下位には微隆帯文を施す。胴部には「結節文」を施す土器である（１類土器）。

なお，微隆帯文を口縁部（上位）に施す土器の中には，口縁部下位を削り取ることで見かけの口縁部肥厚帯を作出する土器がある（５～８）。

B　口縁形態がほぼ平口縁を呈し，口縁中央部で屈曲し立ち上がる。口縁屈曲部外面の稜線が不明瞭な土器群（２類土器）と，口縁屈曲部外面の稜線は明瞭であるが口縁屈曲部内面の稜線が不明瞭な土器群（３類土器）とがある。口縁屈曲部上位には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し，口縁屈曲部下位には微隆帯文を施す施文的特徴を持つ。

C　口縁形態はほぼ波状口縁を呈し，口縁中央部で強く屈曲し立ち上がる。屈曲部内面の稜線が明瞭になる。波頂部の口唇端部を外側に張り出させると共に，口縁屈曲部に瘤状突起を貼付する。施文的特徴はＢと同様の土器である（４類土器）。

D　Ｃとほぼ同様の器形を呈し，胴部には縦位方向に網目撚糸文を施す土器である（５類土器）。

という類型化が，深鉢形土器についてできた。

このように類型化できた深鉢形土器の主な特徴を，先に１～４で挙げた属性変化に合わせて並べると，

（A）→（B）→（C）→（D）

という型式組列を考えることができる。

この変遷については，（A）タイプの中に平栫式土器の特徴を色濃く残した土器を含んでいることや，（E）タイプの土器の中に塞ノ神Ａａ式土器の特徴が見えつつあることから，深鉢形土器に関するこのタイプの型式変遷は概ね妥当であると考える。

一方，壺形土器とした土器は，志布志町に所在する別府（石踊）遺跡でⅥ類土器に分類されたのが初出である。以来，新東晃一編年では「界子仏式土器」に分類された土器でもある。

壺形土器に分類した土器には長頸壺と無頸壺とがある。この器形的特徴は，「平栫式土器」（本報告では平栫Ｃ類土器）でもいえることであり，両者の土器が型式的に近い関係にあるといえる。

最後に壺形土器の出土状況（第４図～第９図）を検討すると，第１群においても壺形土器の出土状況は深鉢形土器の出土状況と全く同様であることがわかる。このことは壺形土器そのものが，当時の人々にとって何らかの祭祀的行事に用いる特別の存在であったと，解釈することは困難であり，深鉢形土器とは用途を異にしてセットで用いた土器であろう。

⑧－２　塞ノ神式土器様式まとめ

この項では，次頁に示す上野原遺跡第10地点縄文早期後葉後半土器編年表を基に，各時期を概観すると次のようになる。

【XⅡ期】

第１群（塞ノ神・微隆帯文土器）に分類した土器を基準とする時期である。器形的・施文的特徴の類似性から，平栫Ｃ類土器（平栫式土器）に後続する時期の所産と考えられる。

平栫Ｃ類土器（平栫式土器）期より，土器の出土が希薄な区域が狭まり，東側では出土集中区域との差が不明瞭となる。しかし，Ｒ－11・12区南側と，Ｓ－11・12区での出土量が少ないことは，当該期の人々が“広場”の意識を持ち続けていたと解釈できる。

【XⅢ期】

第２群（塞ノ神Ａａ式土器）に分類した土器を基準とする時期である。器形的・施文的特徴の類似性から，微隆帯文土器に後続する時期の所産と考えられる土器群を位置づけた。出土量が多く，縄文早期後葉後半の時期では，ピークの時期の１つである。

微隆帯文土器期より，さらに東側で出土集中区域と出土希薄域との差が無くなり，土器の出土が希薄な区域に対する意識がなくなる時期といえる。

また，新たにＰ・Ｑ・Ｒ－14区からＰ・Ｑ－15区での土器集中が見られる時期である。当該期の人々が“場の機能”に対する意識を変化させはじめた時期であると，解釈できる。

【XⅣ期】

第３群（塞ノ神Ａｂ式土器）に分類した土器を基準とする時期である。土器が出土する地点は点々と点在する状況であり，全体図を見ても極めて単発的な出土である。したがって，上野原遺跡第10地点では非常に小規模な生活が行われていたと解釈できる。

【XⅤ期】

第４群（塞ノ神Ｂｃ式土器）に分類した土器を基準とする時期である。出土地点がＲ－８・９区に限定され，出土個体数が２個体と少ないのが特徴である。この時期に上野原遺跡第10地点では，人々はほとんど生活を行っていなかったと考えられる。

【XⅥ期】

第５群（塞ノ神Ｂｄ式土器）から苫浜式土器に分類した土器を基準とする時期である。ともにＲ－11区南側からＲ－12区南側にかけての区域を遺物集中地点とすることから１期としてまとめた。

この期は，第５群全体で約900点にのぼる土器が出土したことが確認できたことから，早期後葉後半段階では上野原遺跡第10地点における人々の生活が，ピークを迎える時期の１つであると解釈できる。

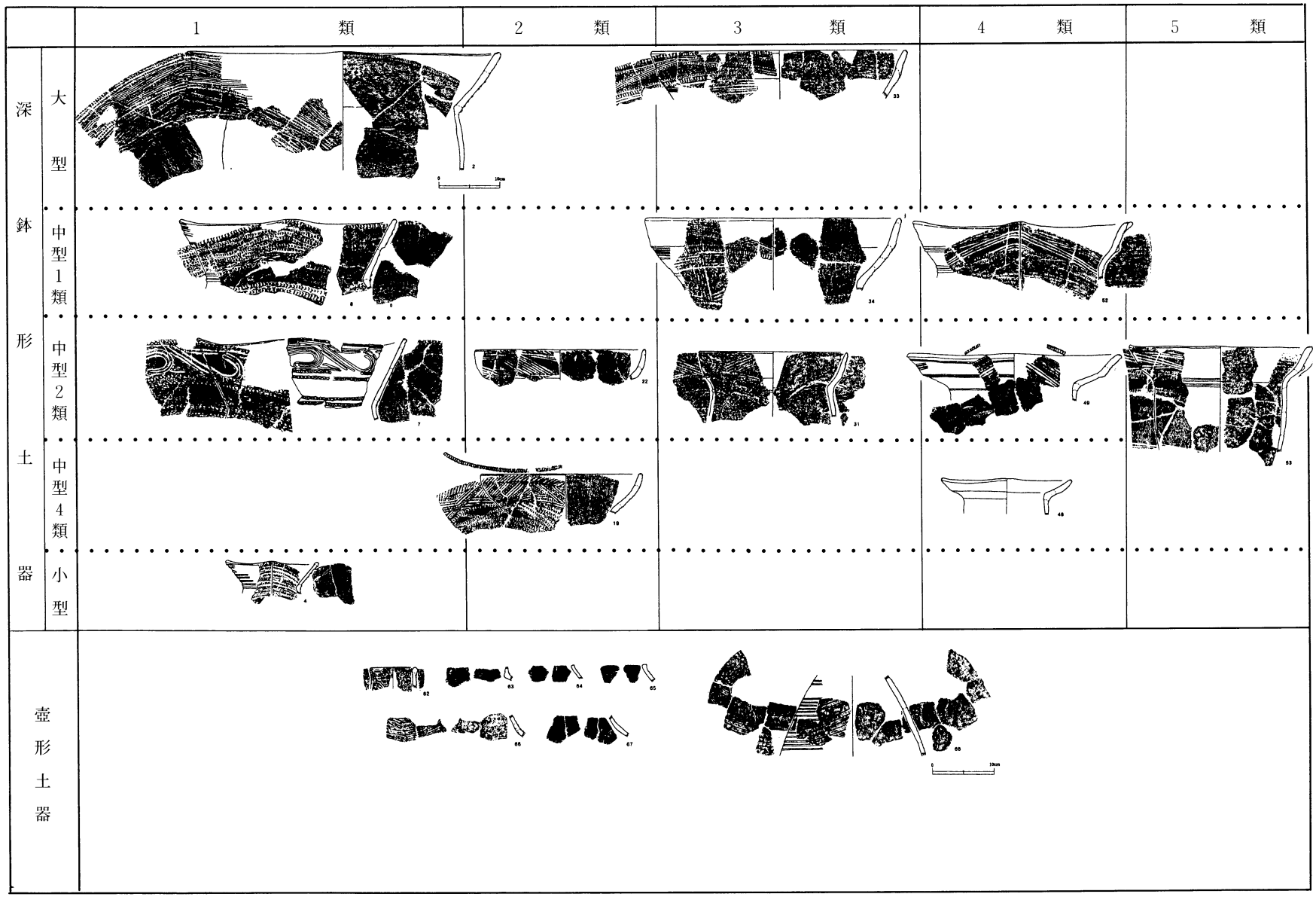
ところで，Ｐ・Ｑ・Ｒ－14区に遺物が集中して出土している状況が見られることから，この区域の南側や東側に続く発掘区域外にも生活域が拡がることが予想できる。

さてこの期に土器が集中して出土する，Ｒ－11区南側からＲ－12区南側にかけての区域は，手向山式土器期（第４分冊第102図参照）から妙見式土器期（第５分冊第17図参照）・天道ヶ尾式土器期（第５分冊第52図参照），そして平栫Ａ類土器（第５分冊第91図参照）・平栫Ｃ類土器期（第５分冊第163図参照）を経て，塞ノ神・微隆帯文土器期（第６分冊第３図参照）および塞ノ神Ａａ式土器期（第６分冊第23図参照）に至るまで，土器の出土が希薄な地域であり，その外側に拡がる土器出土集中区域との出土量の差が大きいところから，祭祀を行う“広場”として注目してきた区域である。

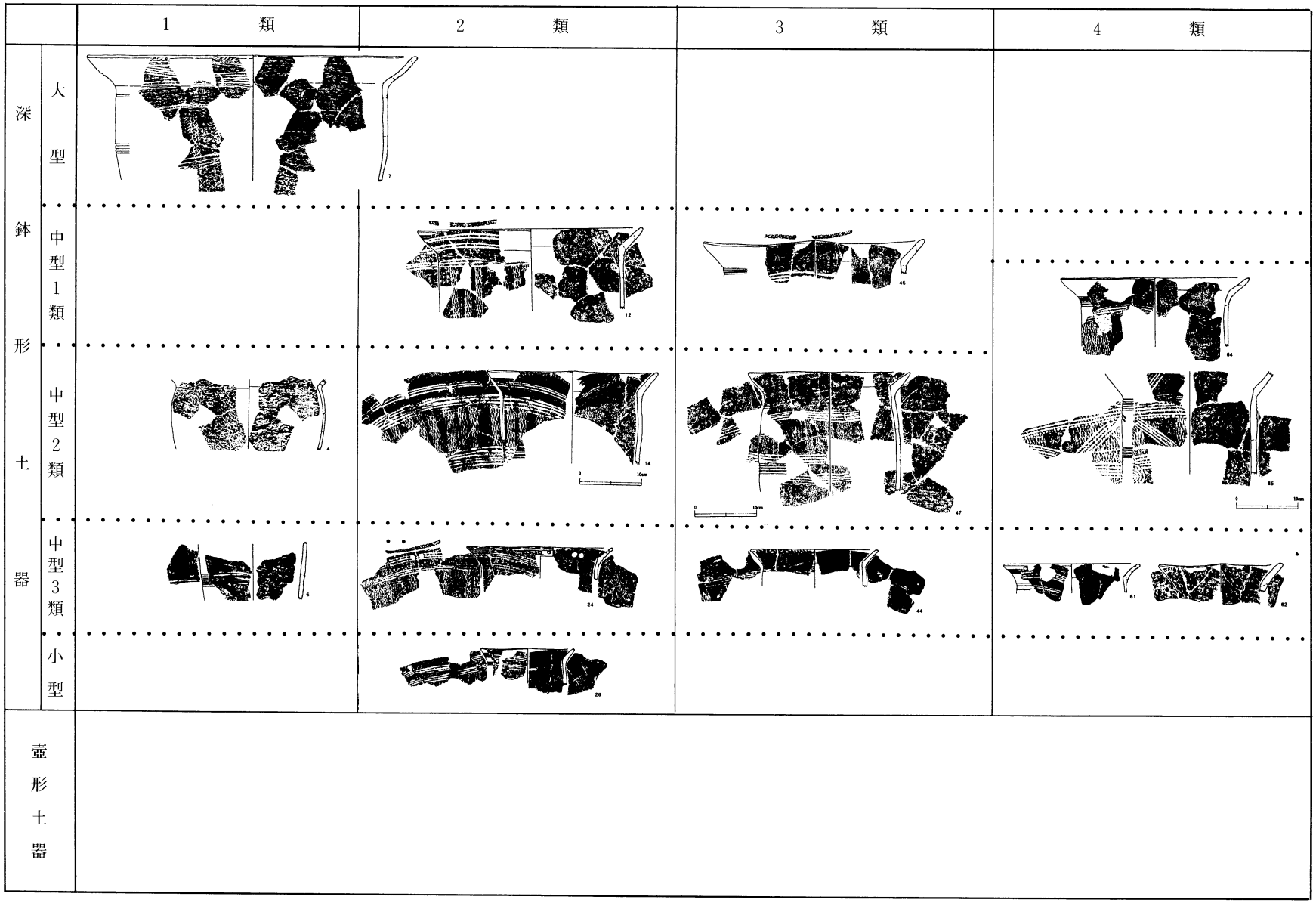
まさに，この区域に土器を残した人々は，この前段階の人々とは全く異なった意識の下に生活を送る場を設定したと解釈できる。

さて，早期中葉から早期後葉前半および後半の時期にかけて，上野原遺跡第10地点で人々が，“場の機能”についてどのような意識の下に生活を送ったか，ある程度明らかにし得たと考える。

しかし，“場の機能”の内容などについては分析が未熟である。また，上野原遺跡第10地点の各期に対応する，上野原遺跡他地点の様相も不明瞭である。したがって，これらの様相が明らかとなった段階で，再度分析を行い，上野原台地で生活した人々の諸様相を明らかにする，ことが必要であろうことを提起して，土器編を閉じることとする。



塞ノ神・微隆帯文土器分類表（縮尺同一）



塞ノ神・Aa式土器分類表（縮尺同一）

⑧－３　苦浜式土器について

苦浜式土器については，熊毛郡中種子町苦浜貝塚出土の土器について，調査担当者の盛園尚孝氏によって型式設定がなされたものである。そして種子島において他に６遺跡が報告され，地域性の強い土器として認識されてきた。

近年の調査によると鹿児島県内でも各地で同様の土器の出土がみられるようになり，南九州に普遍的にある土器型式としてとらえられるようになった。

苦浜式土器については，堂込秀人氏が1998年に「苦浜式土器からみた塞ノ神式土器」（九州縄文土器編年の諸問題・九州縄文研究会編）において南種子町横峯Ｃ遺跡出土の土器の再検討の中で分類検討をしている。それによる苦浜式土器の設定は以下のとおりである。

１，器形は口辺部が外反し，頚部がゆるくしまり，胴部が膨らみ平底の底部にいたるものと，頚部がゆるくしまり，口縁部が直立気味に立ち上がるもの，口縁部が内湾気味に立ち上がり，直線的に平底の底部にいたるものがある。

２，焼成は全体的に良好であるが，胎土に砂礫をかなり含むために，剥落がよく見られる。色調は暗赤褐色や淡黄褐色を呈する。

３，口縁部に貝殻腹縁による刻目が入る。波状口縁のものがある。

４，文様は貝殻による条線文を施す。条線は波状を呈するものが多いが，直線のものもある。上半部に区画文を施すものもある。外側の口縁部下に，縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を施す。突帯はナデ出しているものと，貼り付けているものがあるがいずれも貝殻による刻目があり微隆である。微隆起突帯は口辺部あるいは土器の上半部分にナデ出されたり貼り付けられ，全周を巡るものと，部分的にとどまるものがある。

５，内面調整は，ナデおよびヘラケズリである。

また，堂込秀人氏は苦浜式土器の編年的な位置付けついては，塞ノ神式土器に続く縄文時代早期末としている。

上野原遺跡においても，苦浜式土器として捉えられる土器が少なからず出土している。これらは大きくコブ状突起（突帯）を有するものと有しないものに分類される。また，口縁部が直線的に外反しバケツ状を呈するものと，頚部でしまり口縁部が外反するものとに分けられるが，概して突起を有するものはバケツ状を呈する傾向がみられる。これらが時間差によるものか否かについては現在の段階での結論は出し得ない状況である。また，塞ノ神式土器との関連についても，器形や文様構成からみて密接な関係があることは間違いないところであろう。編年的な位置付けについては，今後の資料の増加と研究に待ちたい。

型式不明の土器については，アカホヤより下層から出土していることを考慮に入れると，縄文時代早期としての時期設定は出来よう。しかしながら，器形および文様構成等が，これまでの型式設定された土器に当てはまらないものである。今後の類例の増加に期待したい。

土 製 品 編

（2）土製品（第101図～第112図）

①　土偶及び異形土製品（第101図～第103図）

土偶は，１点出土している。１は高さ 5.5㎝，幅５㎝，厚さ 1.5㎝を測るものである。頭部と両腕を三角の突起で表現し，乳房を表した突起も認められる。ただ，片方の乳房は焼成前に剥脱しており痕跡を留めるのみである。また，胸部には横位の細い沈線が施されている。左側に９本，右側に７本の沈線が肋骨を表現している可能性も考えられるものである。背面には製作時についたと思われる爪の痕跡も認められる。

２は現状で分胴の形をしているものであるが，欠損しているため全体の形状は不明である。厚さ 2.9㎝の平板なもので，前面に沈線文を施す。また，上部には穿孔を有する。土偶の一部とも考えられるが用途についても不明である。

３は高さ 4.3㎝，厚さ 2.9㎝の土製品である。瓢箪に似た形状で胴部は球形を呈するが，用途については不明である。

４・５・６は棒状土製品である。土偶の手・足の可能性も考えられるが用途は不明である。

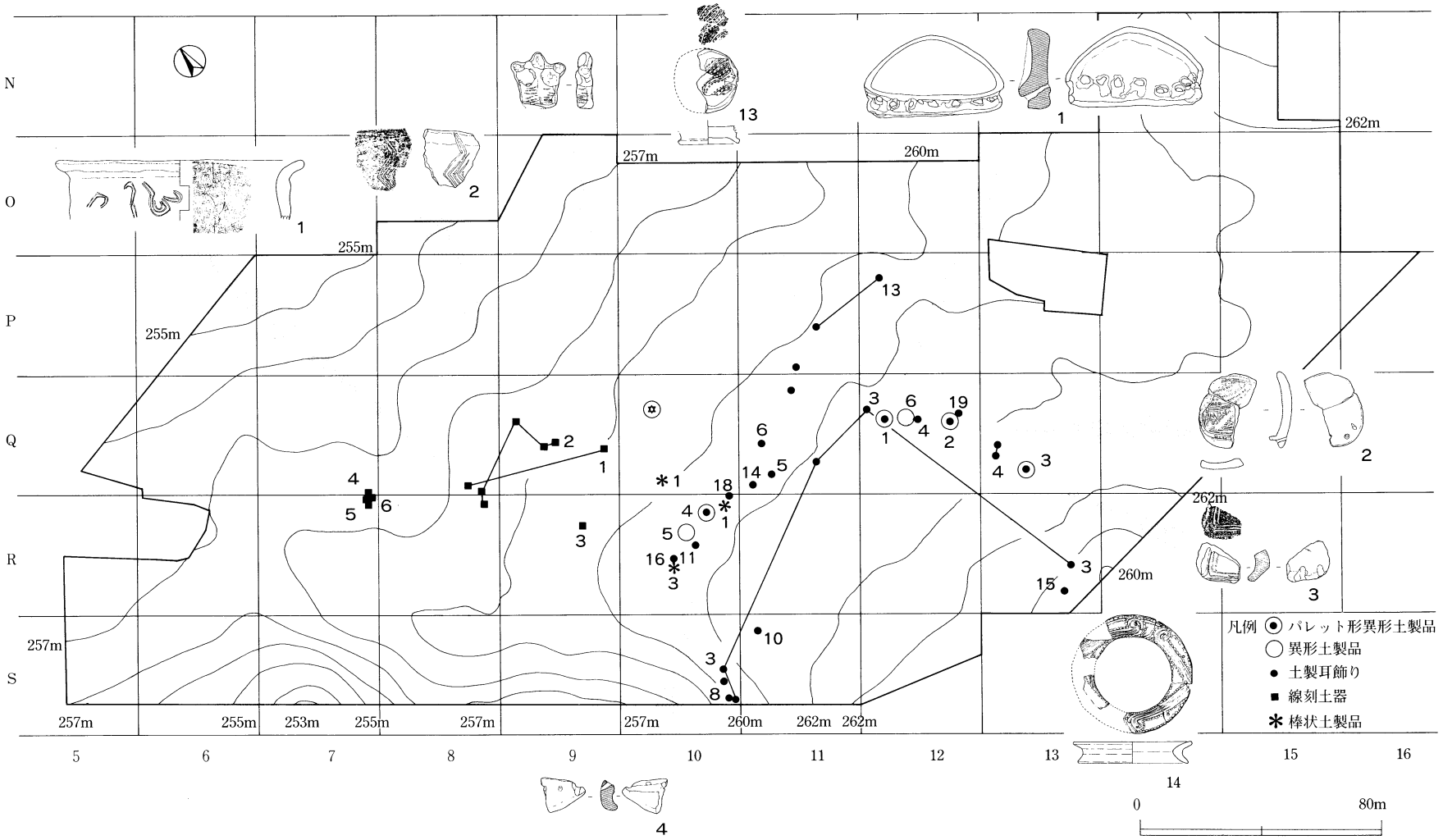
７～10も異形土製品である。７だけが完形で，８～10は破片であるが，同じ用途の土製品と思われるものである。７は，底辺13.5㎝，高さ 8.1㎝，厚さ 3.3㎝を測る略三角形を呈した完形品である。上部は皿状に凹み，下位には７箇所の焼成前に穿たれたと思われる穿孔がみられる。８はやや薄手の土製品であるが，上部の皿状に凹んだ部分に沈線文と刺突連点文を施すものである。９も皿状の部分に沈線文を施すものである。

②　土製耳飾り（耳栓）（第104～第107図）

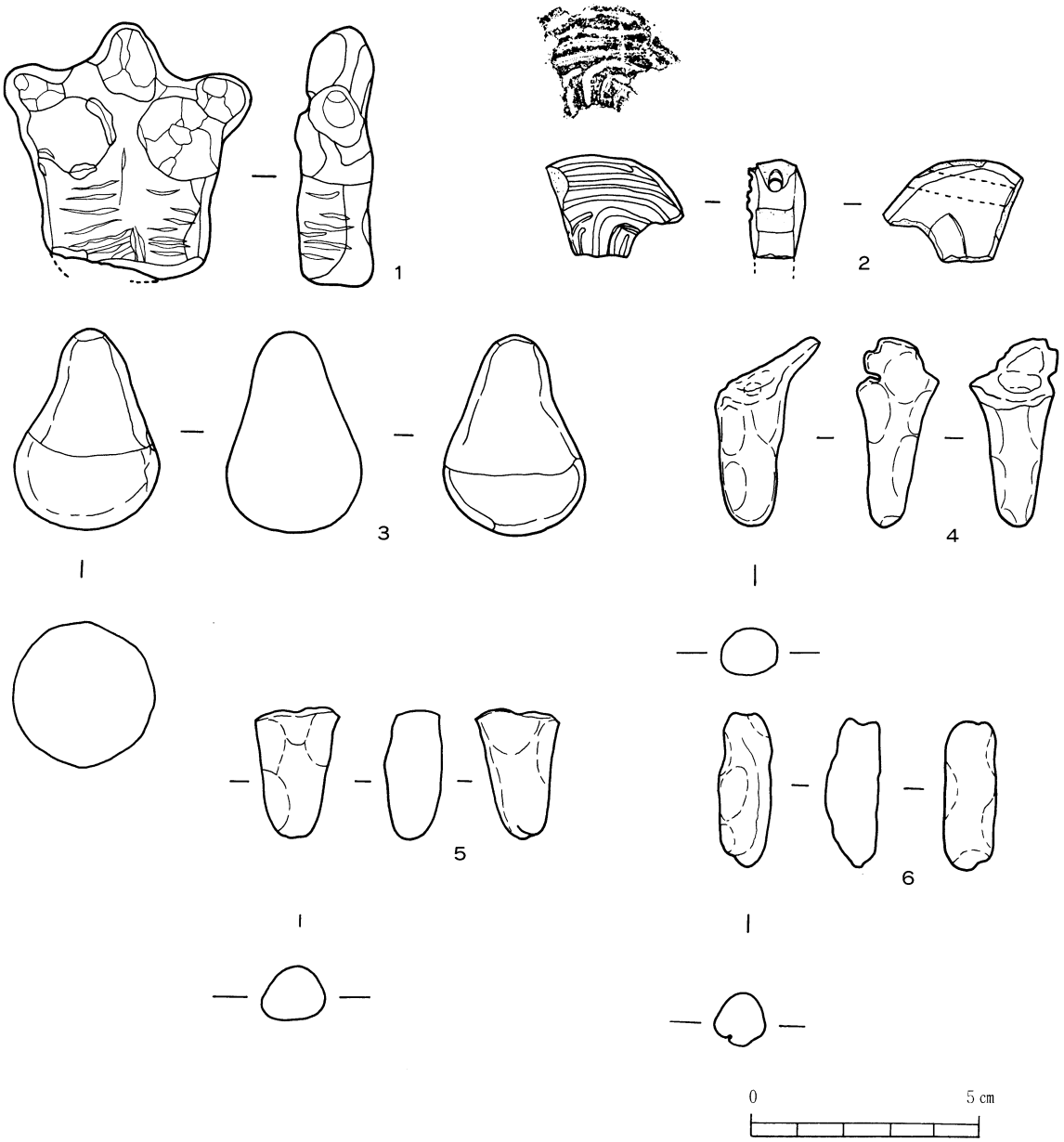
土製耳飾は，環状を呈する輪状耳栓と環状を呈さないで充填された円盤形態の臼形耳栓の大きく２種類に分類される。また，表面の径と裏面の径では，ほとんどのものが表面径のほうが大きい。

Ⅰ類は，輪状耳栓である（１～11）。いずれも外面には抉りを持つが，内面は稜を有するものと（３・５・10），上下２箇所に稜を有するもの（１・２・６・７・８），丸みを帯び稜を有しないもの（４・11）に分けられる。また，10は外面があまり凹まず断面三角形を呈する。文様についてみると１・３～９は沈線文と刺突文を施し，２・４は無文である。１はＳ字状の文様で沈線内の一部に丹と思われる赤色顔料が残る。３は鍵手状文と刺突連点文の組合せで沈線内に赤色顔料（丹）が残る。５～11は沈線による直線文・曲線文と刺突連点文が施されるものである。

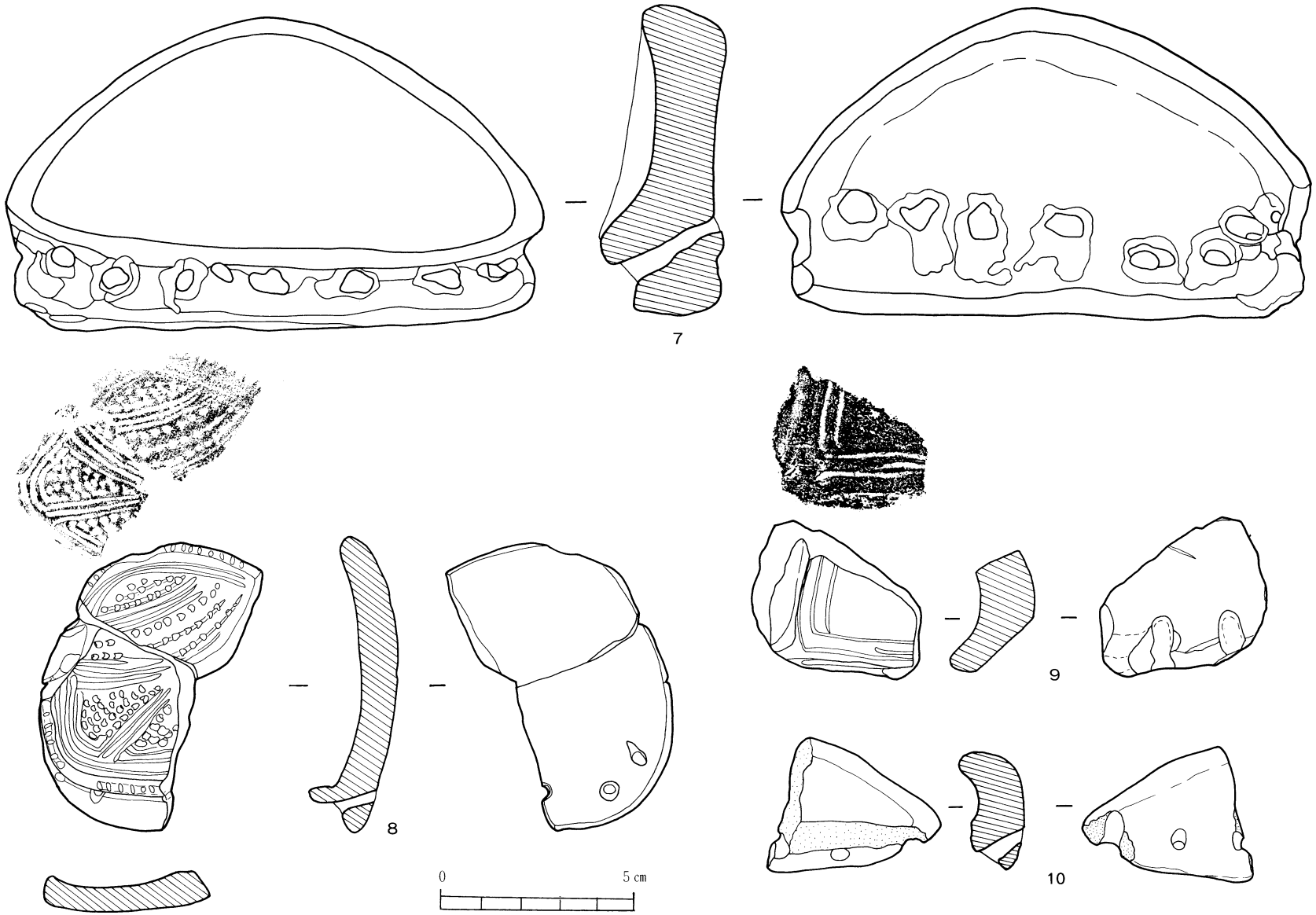
Ⅱ類は，臼状耳栓である（12～19）。12～17は充填部分に沈線文・刺突連点文などが施されるものである。12は鋭いヘラ状施文具による細沈線文と刺突連点文が施されるが，沈線内に赤色顔料（丹）が残る。13・15～17は弧状の沈線文と刺突連点文。14は鍵手状沈線文と刺突連点文が施される。18は臼状耳栓であるが，これまでのものとは形状の異なるものである。表面径が 2.9㎝，中央部の径が 2.1㎝と小さく文様も無い粗雑な造りである。19は外面に刻みを有するやや異なった形状である。小破片のため輪状耳栓か臼状耳栓か判断出来ないものである。



第101図　土製品出土状況全体図１(土偶，棒状･異形土製品，土製耳飾り，線刻土器)



第102図　土製品実測図１(土偶，棒状･異形土製品)



第103図　土製品実測図２(パレット形土製品)

土偶観察表

表内の（　）は復元及び現存部分計測による数値

挿図番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
102	1		Ⅵ	5.5	5.4	1.8	(32.6)		上半身に乳房（左側は剥落） 表面に細沈線，裏面に爪の痕跡	1

棒状土製品観察表

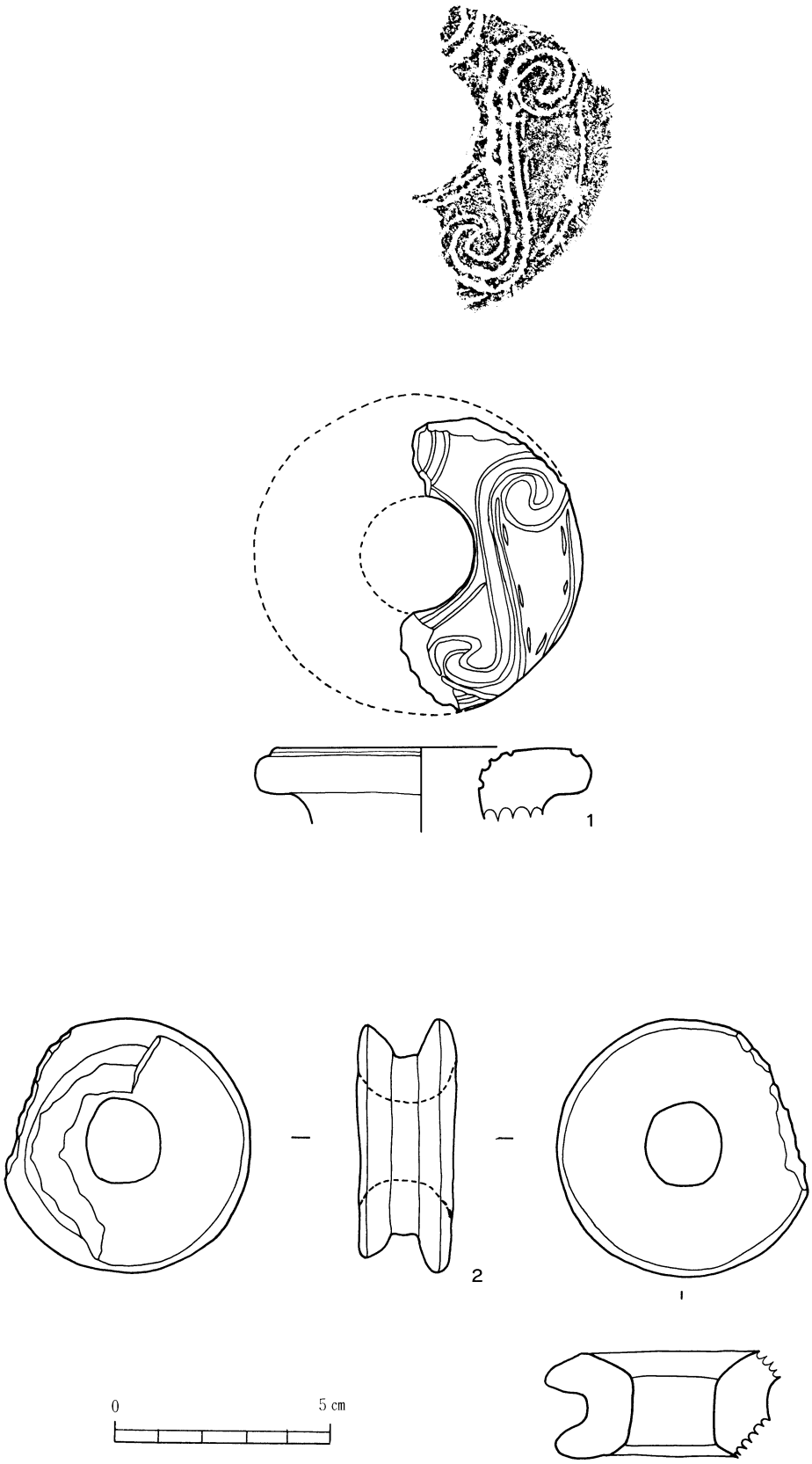
表内の（　）は復元及び現存部分計測による数値

挿図番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
102	4	R－10	Ⅶ	(4.1)	(2.4)	(2.0)	(5.76)	無文		1
	5	Q－10	Ⅵ	(3.3)	1.2	1.1	(4.29)	無文		2
	6	R－10	Ⅵ	(2.9)	(1.8)	1.1	(4.96)	無文		3

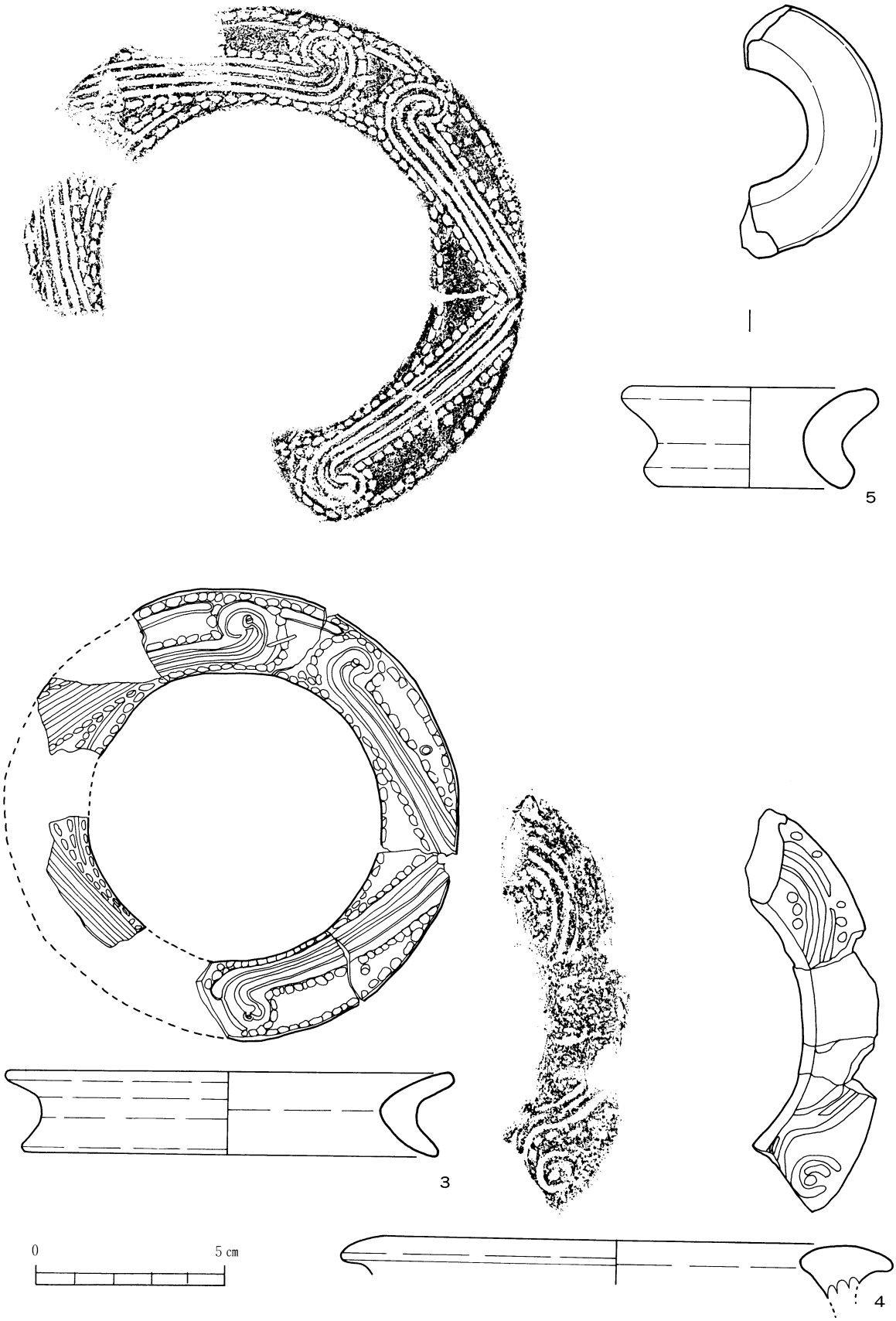
異形土製品観察表

表内の（　）は復元及び現存部分計測による数値

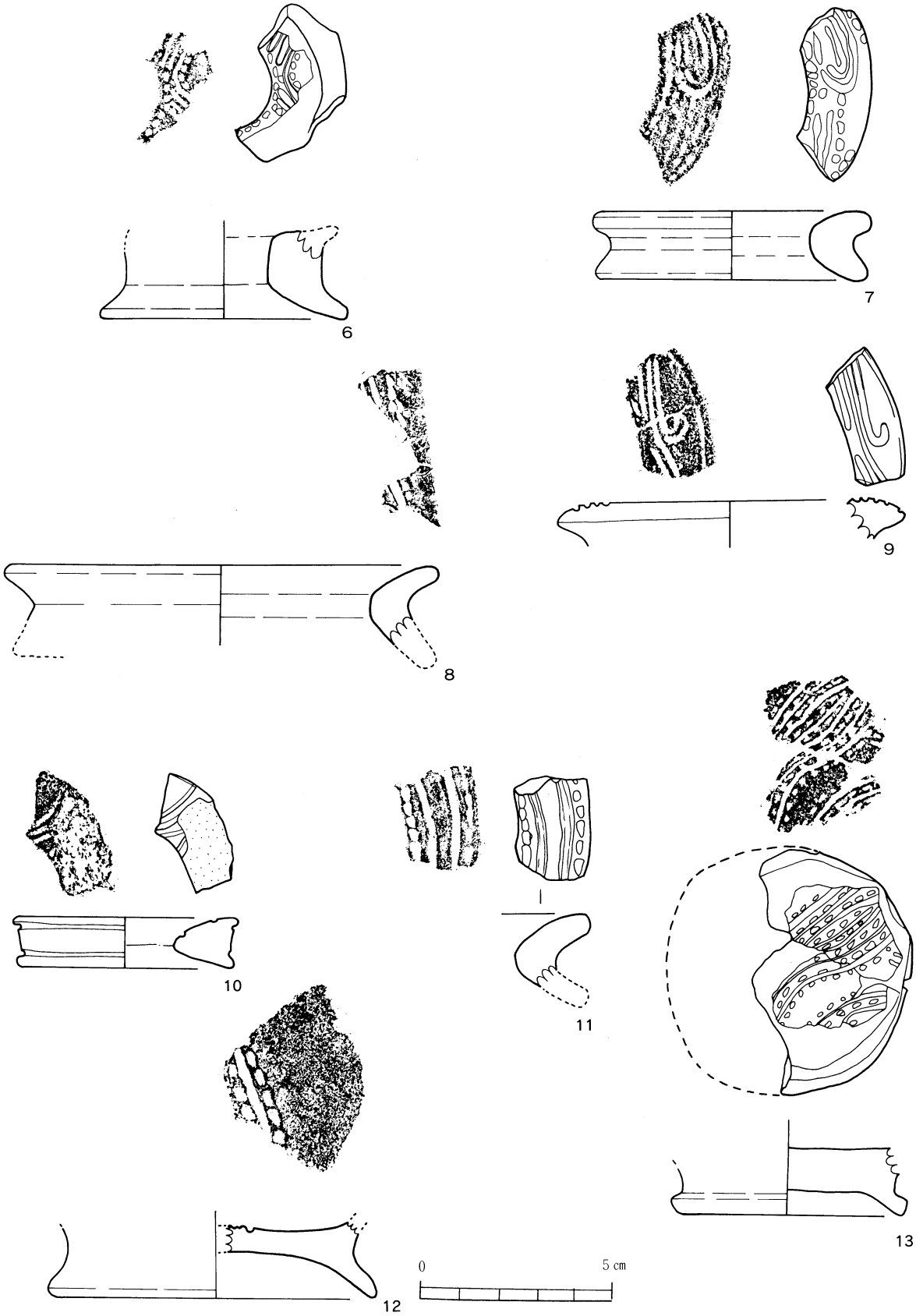
挿図番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
102	2	Q－12	Ⅵ	(2.3)	(3.3)	1.2	(6.5)	沈線文	分胴形，穿孔有り	6
	3	R－10	Ⅵ	4.3	3.3	2.9	26.93		涙滴形土製品	5
103	1	Q－12	Ⅵ	8.1	13.5	3.3	290.0		パレット形土製品，穿孔有り	1
	2	Q－12	Ⅵ	(6.9)	(7.2)	1.3	(41.2)	刺突文・沈線文	パレット形土製品，穿孔有り	2
	3	Q－13	Ⅵ	(4.1)	(4.4)	2.3	(28.8)	沈線文	パレット形土製品，穿孔有り	3
	4	R－10	Ⅵ	(3.6)	(4.3)	(1.8)	(26.9)		パレット形土製品，穿孔有り	4



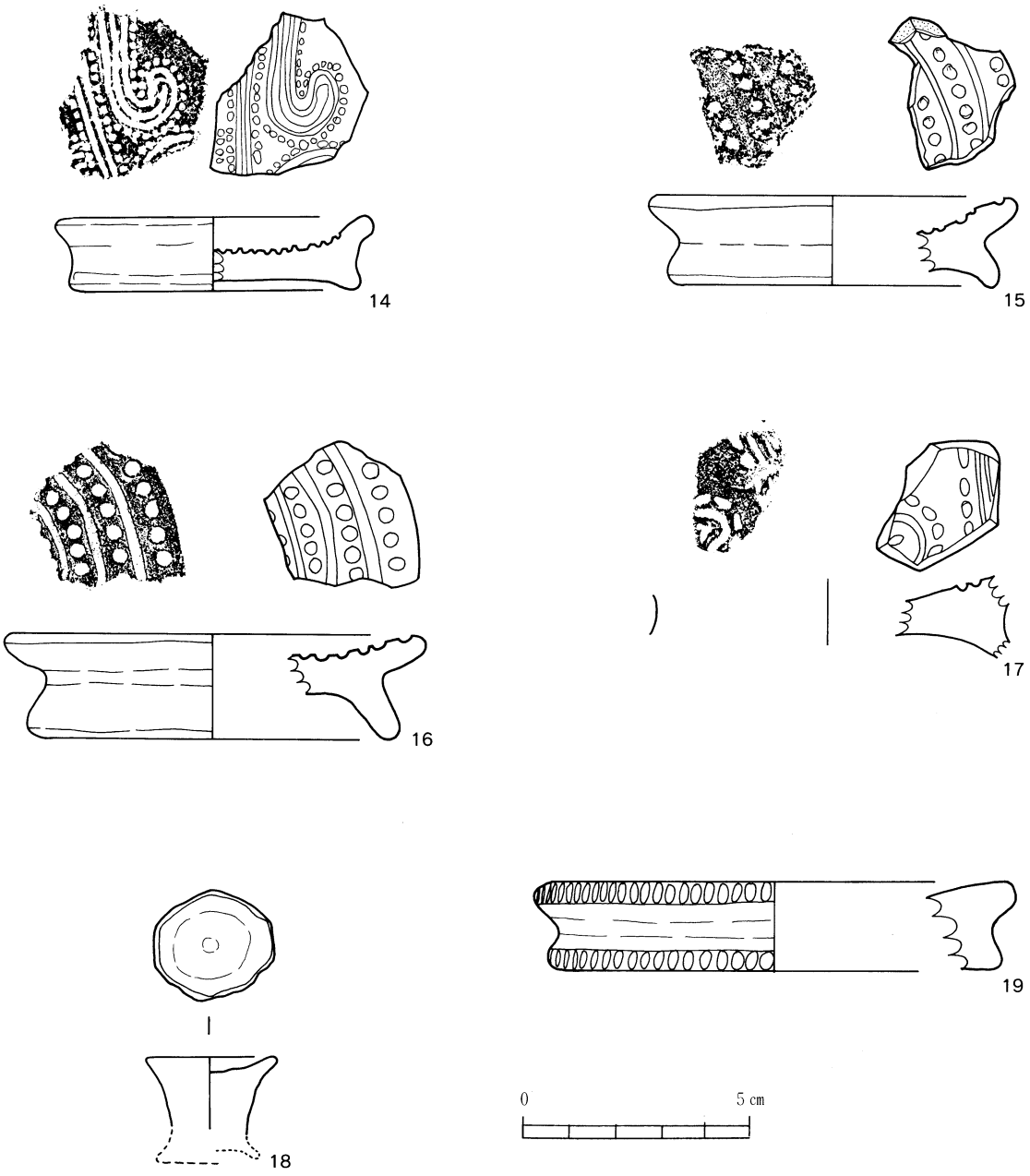
第104図　土製品実測図３(土製耳飾り１)



第105図　土製品実測図４(土製耳飾り２)



第106図　土製品実測図５(土製耳飾り３)



第107図　土製品実測図６(土製耳飾り４)

土製耳飾り観察表

表内の（　）は復元及び現存部分計測による数値

挿図番号	番号	出土区	層	表面径 cm	裏面径 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
104	1	Q－12	Ⅵ	7,8		(1,7)	(34,8)	刺突連点文・沈線文	滑車形，沈線内に赤色顔料塗布	1
	2	Q－11	Ⅵ	5,9	5,4	2,6	(52,2)	無文	〃	2
105	3	Q－11・12・R－13 S－10	Ⅵ	11,9	11,0	2,2	(107)	刺突文・沈線文	〃，沈線内に赤色顔料塗布	3
	4	Q－13	Ⅵ	14,7		(1,5)	(31,3)	刺突文・沈線文	〃	4
	5			(6,8)	(5,6)	2,2	(42,2)	無文	〃	5
106	6	Q－11	Ⅵ		(6,5)	(2,3)	(13,4)	刺突文・沈線文	〃	6
	7	Q－11	Ⅵ	(7,0)	(6,8)	1,8	(9,6)	刺突文・沈線文	〃	7
	8	S－10	Ⅵ	11,4		(2,1)	(14,1)	刺突文・沈線文	〃	8
	9	Q－12	Ⅵ	(9,1)		(0,9)	(4,3)	沈線文	〃	9
	10	S－11	Ⅵ	(5,9)	(5,7)	1,5	(4,7)	沈線文	〃	10
	11	R－10	Ⅵ			(1,5)	(7,5)	刺突文・沈線文	〃	11
	12	Q－12	Ⅵ		(8,7)	(2,0)	(40,1)	刺突文・沈線文	臼形	12
	13	P－11 P－12	Ⅵ		(6,1)	(1,8)	(36,5)	刺突文・沈線文	〃	13
107	14	R－11	Ⅵ	(7.1)	(6,4)	(1,7)	(15,7)	刺突文・沈線文	〃，沈線内に赤色顔料塗布	14
	15	R－13	Ⅵ	(8,2)	(7,3)	1,8	(10,5)	刺突文・沈線文	〃	15
	16	R－10	Ⅵ	(9,4)	(8,3)	2,1	(17,0)	刺突文・沈線文	〃	16
	17	P－11	Ⅵ			(1,9)	(12,2)	刺突文・沈線文	〃	17
	18	R－10	Ⅵ	2,9	(2,3)	(1,7)	(8,4)	無文	〃，小型	18
	19	Q－12	Ⅵ	(10,7)	(10,1)	(2,0)	(12,4)	刻目	滑車形？	19

③ 土製円盤（第108図～第111図）

土製円盤は土器の破片を円盤状に再加工したもので「メンコ」とも呼ばれる土製品である。縄文時代の全時期を通じて出土しているが，用途については諸説あり定まっていない。縄文時代後期に多く出土する傾向があるが，鹿児島県においては，すでに縄文時代早期前半には出現しており，上野原遺跡においても縄文時代早期後半の平栫式土器の破片を再利用した土製円盤が41点出土している。

最大のものは，２の径 7.3cm× 6.9cm，重さ59ｇで，最小のものは，28の径 2.8cm，重さ 3.0ｇである。いずれも，平栫式土器の破片のため，その深鉢形土器や壺形土器と同様の文様構成である。沈線文(29)，沈線文と刺突文（１～６・27)，縄文（７・８・11・15・32・33)，縄文と沈線文（10)，結節縄文（12～14・23・35・38)，結節縄文と刺突文(25)，羽状縄文（９・26)，撚糸文（28)，押引文(39)，無文（16～22・24・30・31・34・36・37・40・41)。また，33は底部の破片利用である。

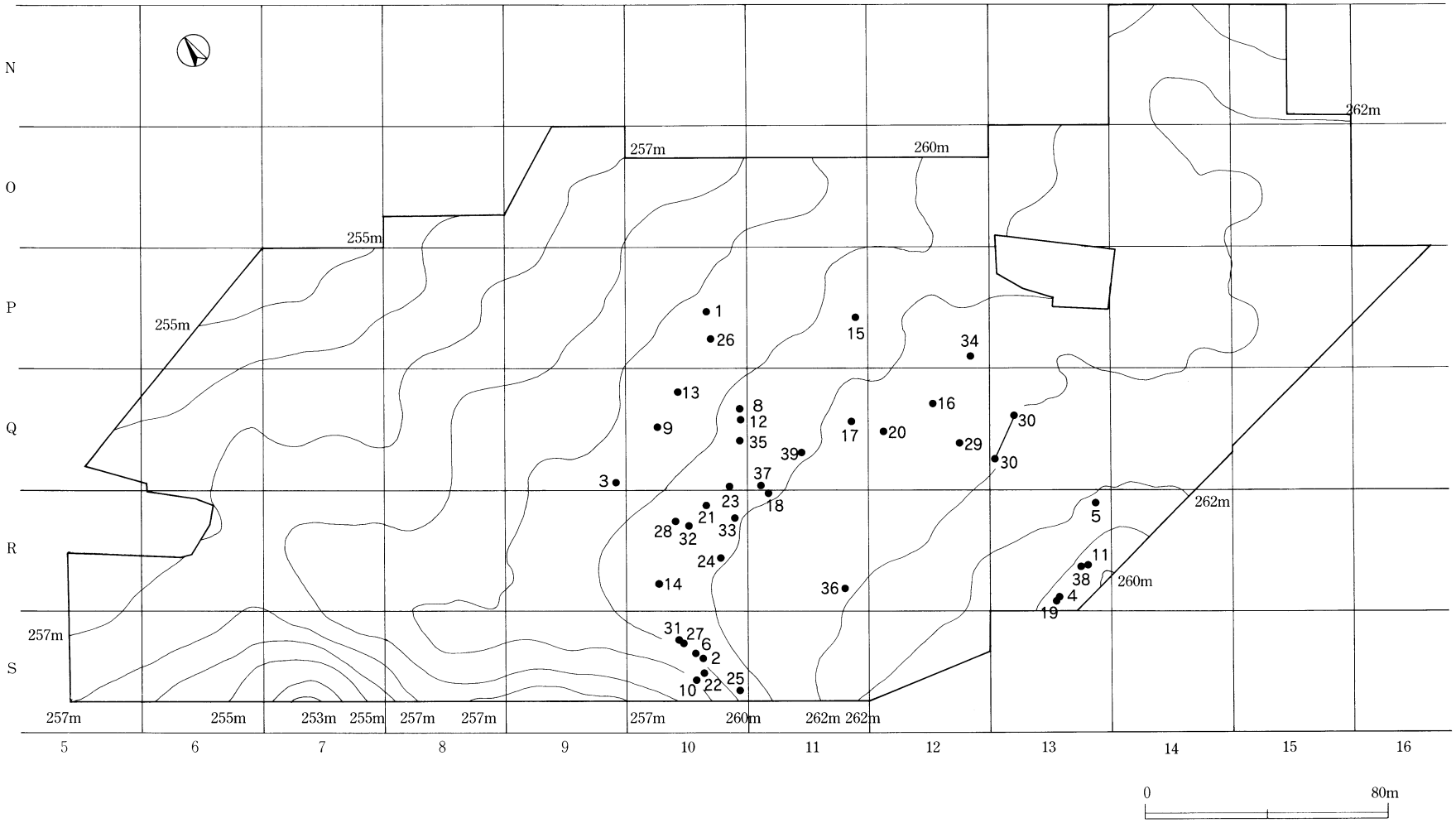
④ 線刻画を有する土器（第112図）

線刻画を有する土器片は８点，４個体分が出土している。

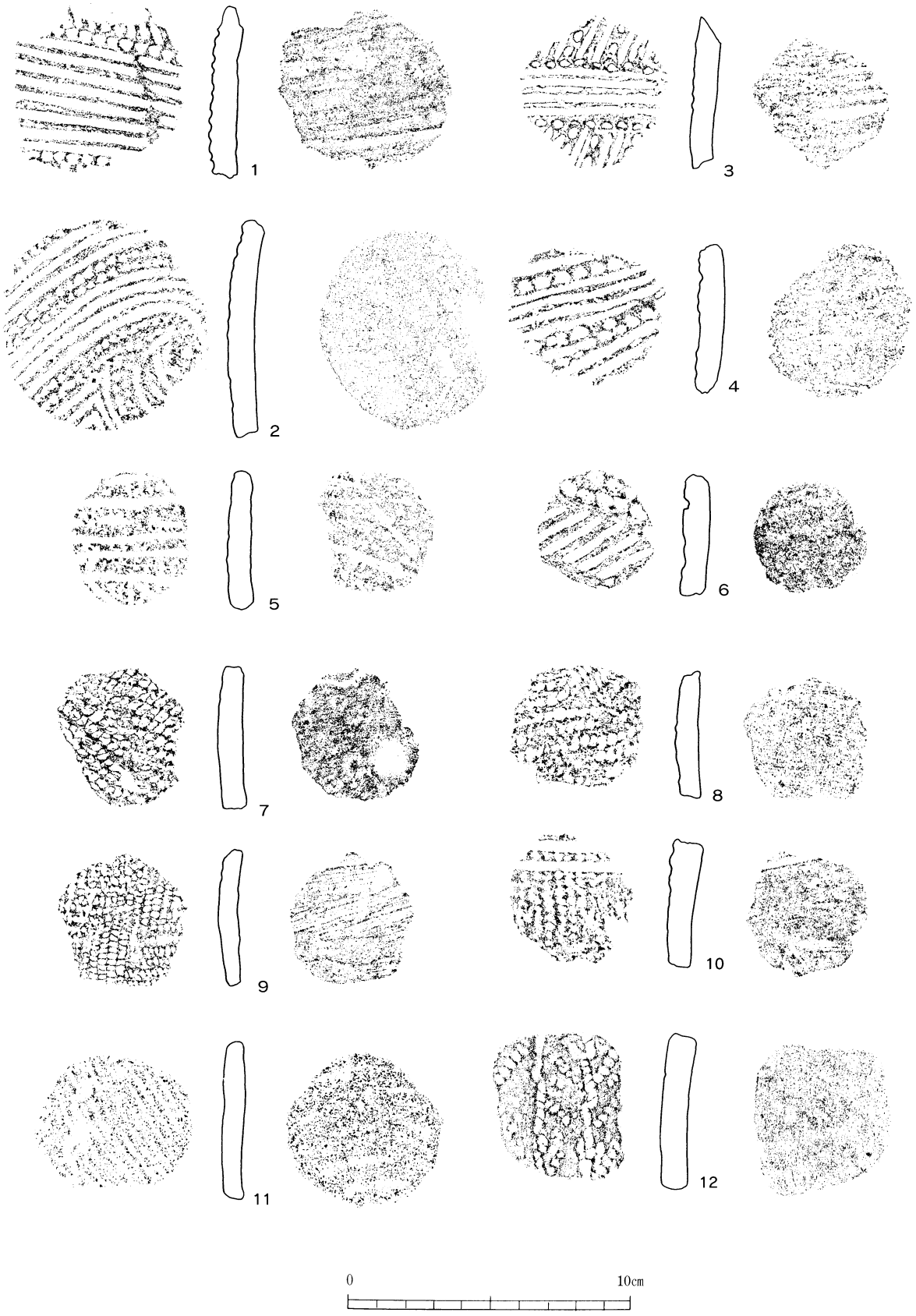
１～３は，いずれもⅥ層出土で同一個体である。復元口縁径25.2cmを測り，口縁部が外反するものであるが，胴部はあまり張らない。一見古代の土師器の甕に類似した器形である。胴部上位のみの破片であるが，外面に鋭いヘラ状の工具により曲線・直線の線刻画が自由奔放に描かれている。４は，壺形土器の胴部と思われる。肩部に直線による線刻画が描かれている。５～７は同一個体で，壺形土器の胴部と思われる。地文の縄文が施された後で鋭いヘラ状の工具による線刻画が描かれている。６の線刻画は，同心円状を呈し，絵画的である。８は，復元口縁径10cmを測る壺形土器の口縁部と思われる。口唇部は刻みを有し外面に線刻画が描かれている。この土器はⅣａ層出土で縄文後期の土器の可能性の高いものである。

線刻画土器観察表　　表内の（　）は復元による数値

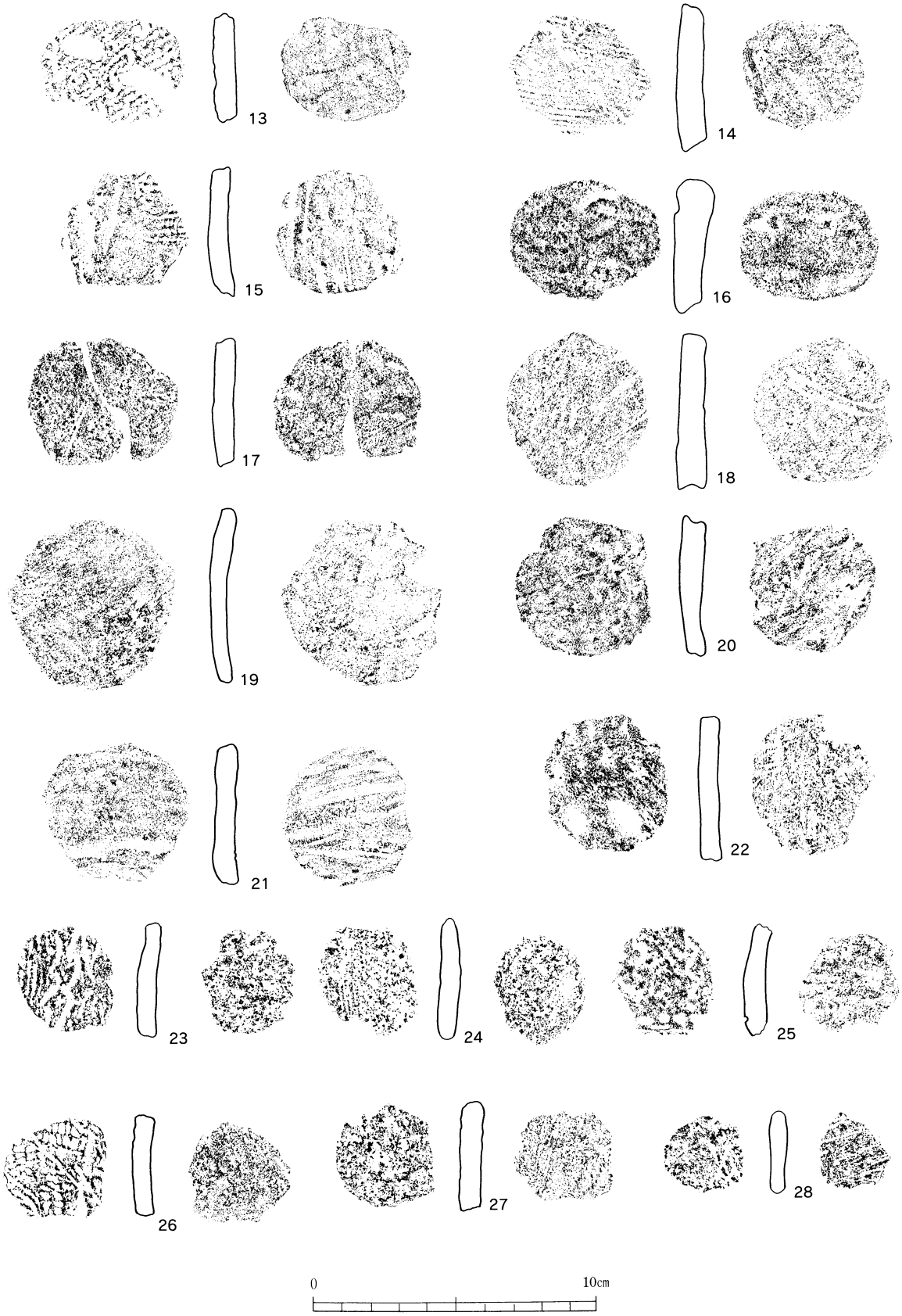
挿図番号	番号	出土区	層	口縁径 cm	器高 cm	底部径 cm	最大径 cm	文様構成	胎土	備考
112	1	Q－8 Q－9 Q－11 R－9	Ⅵ	(25.2)			(25.2)	無文 絵画様沈線	石英・長石 角閃石	鋭いヘラ状工具による線刻有り １～３は同一個体 深鉢形土器
	2									
	3									
	4	Q－8	Ⅵ					無文 絵画様沈線	石英・長石	鋭いヘラ状工具による線刻有り。　壺形土器
	5	R－6	Ⅳ							
	6	Q－7 R－7	Ⅵ					縄文 絵画様沈線	石英・長石	鋭いヘラ状工具による線刻有り。 ６～８は同一個体 壺形土器
	7									
	8									



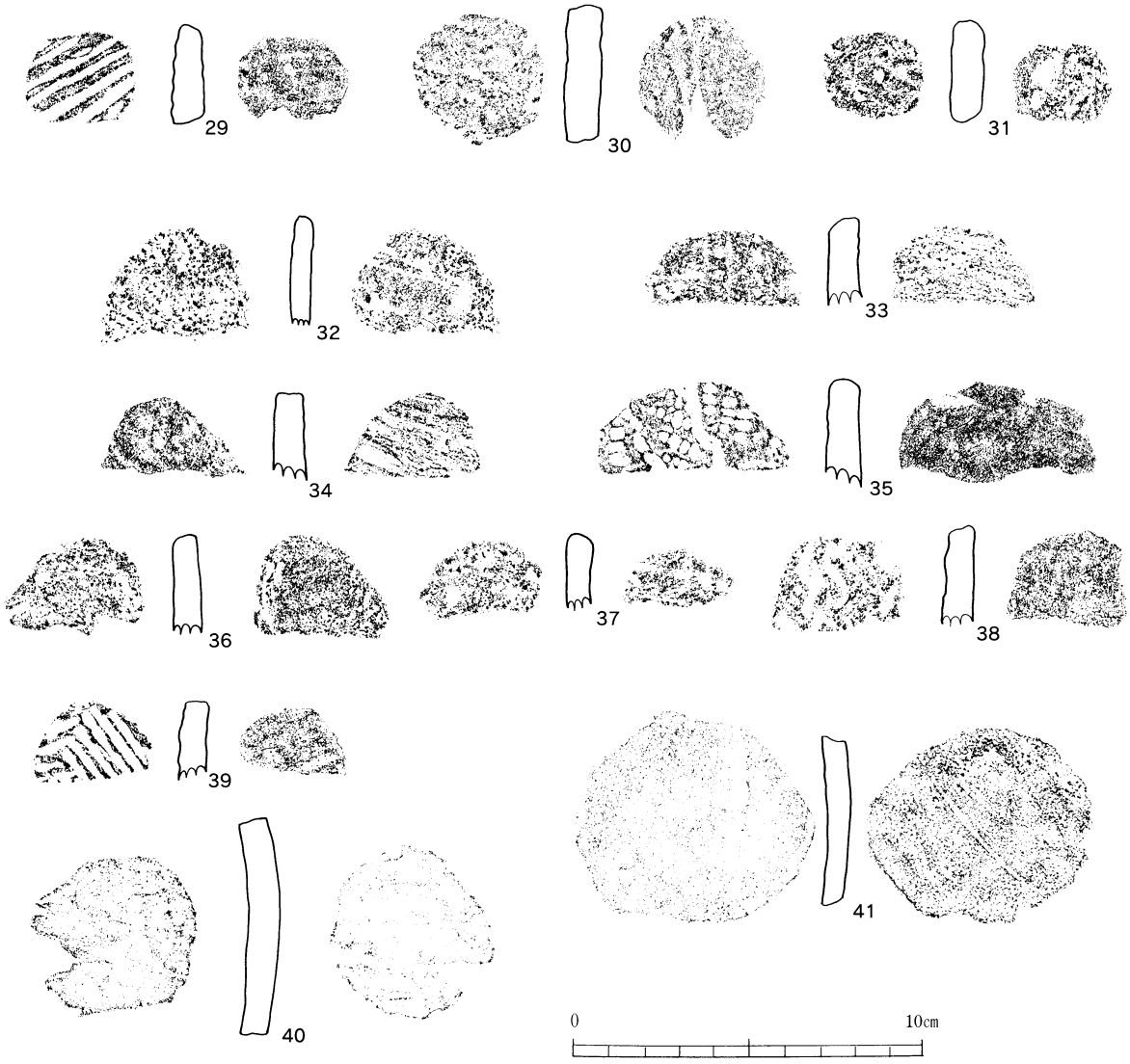
第108図　土製品出土状況全体図２(土製円盤)



第109図　土製品実測図７(土製円盤１)



第110図　土製品実測図８(土製円盤２)



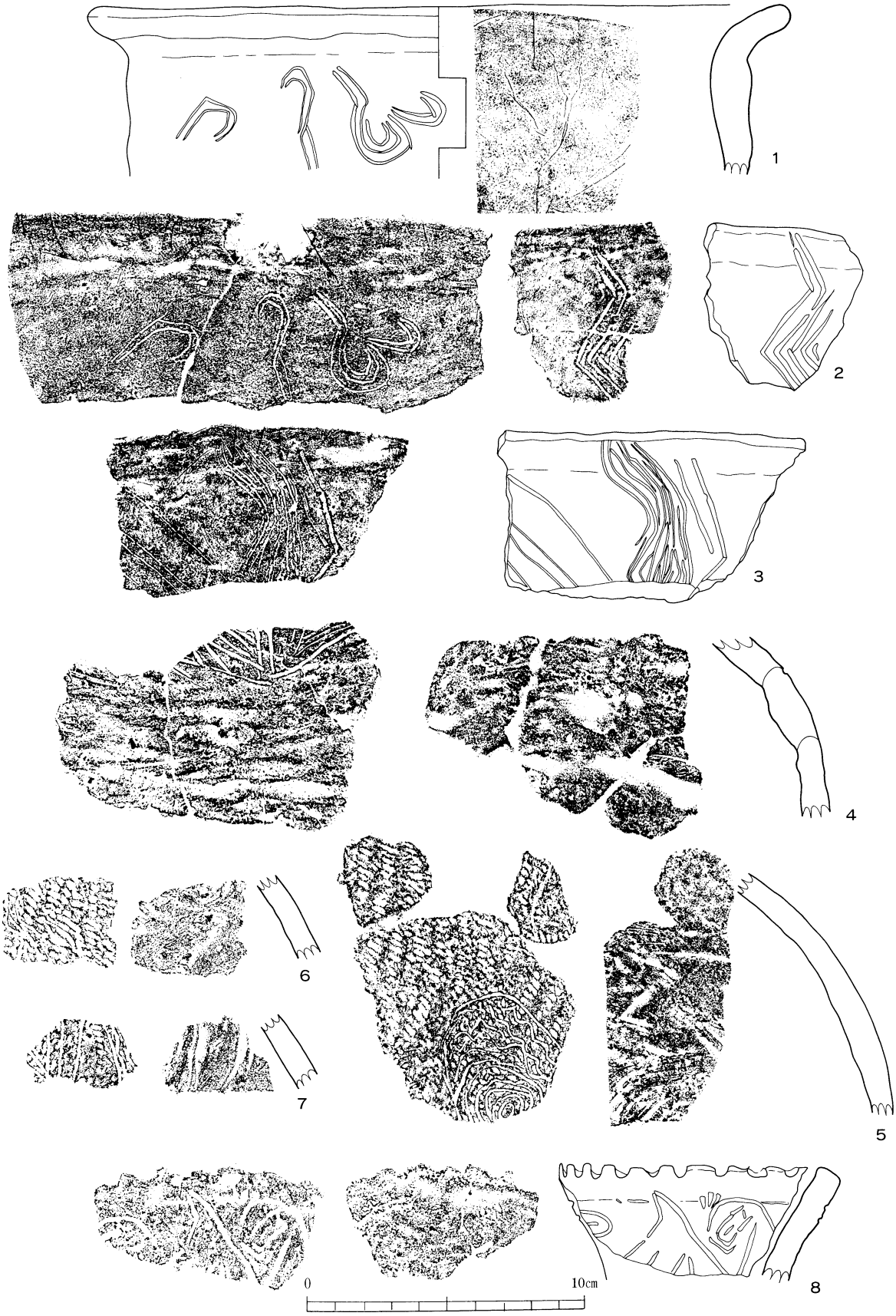
第111図　土製品実測図９(土製円盤３)

土製円盤観察表　No.1　　表内の（　）は復元及び現存部分計測による数値

挿図番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
109	1	P－10	Ⅵ	5,75	6,05	1,00	48,65	刺突文・沈線文		1
	2	S－10	Ⅵ	7,30	6,90	1,05	59,37	刺突文・沈線文・こぶ状突起		2
	3	Q－9	Ⅶ	5,20	5,25	0,90	27,82	刺突文・沈線文		3
	4	R－13	Ⅵ	5,20	5,25	1,05	37,95	刺突文・沈線文		4
	5	R－13	Ⅵ	4,75	4,30	0,95	24,64	刺突文・沈線文		5
	6	S－10	Ⅵ	4,10	4,30	1,05	24,54	刺突文・沈線文		6
	7	S－10	Ⅵ	4,45	5,20	1,00	25,49	縄文		7
	8	Q－10	Ⅵ	4,40	5,05	0,90	22,74	縄文		8
	9	Q－10	Ⅵ	4,60	4,60	0,90	18,70	羽状縄文		9
	10	S－10	Ⅵ	4,50	4,40	1,05	27,54	沈線文・縄文		10
	11	R－13	Ⅵ	5,65	5,50	0,85	28,47	結節縄文		11
	12	Q－10	Ⅵ	4,60	5,35	1,05	45,17	結節縄文		12
110	13	Q－10	Ⅵ	3,70	5,10	0,85	21,36	結節縄文	楕円形を呈する	13
	14	R－10	Ⅵ	4,25	5,20	0,95	22,52	結節縄文		14
	15	P－11	Ⅵ	4,40	4,20	0,80	16,49	縄文		15
	16	Q－12	Ⅵ	4,35	5,35	1,25	39,46	無文	楕円形を呈する	16
	17	Q－11	Ⅵ	4,80	5,20	0,90	25,89	無文		17
	18	R－11	Ⅵ	5,05	5,40	1,10	37,06	無文		18
	19	R－13	Ⅵ	5,90	6,00	0,75	28,53	無文		19
	20	Q－12	Ⅵ	5,35	5,05	1,00	23,07	無文		20
	21	R－10	Ⅵ	4,90	5,15	0,90	25,57	無文		21
	22	S－10	Ⅵ	4,80	4,95	0,80	18,67	無文		22

土製円盤観察表　No.2　　表内の（　）は復元及び現存部分計測による数値

挿図番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
110	23	Q－10	Ⅵ	3,50	3,80	0,75	11,34	結節縄文	小型	23
	24	R－10	Ⅶ	3,45	4,20	0,80	12,71		小型，器壁が荒れている	24
	25	S－10	Ⅵ	3,80	3,50	0,90	14,00	刺突文・結節縄文	小型	25
	26	P－11	Ⅵ	3,45	3,90	0,75	12,10	結節縄文	小型	26
	27	S－10	Ⅵ	3,70	3,50	0,80	12,77	無文	小型	27
	28	R－10	Ⅵ	2,80	3,0	0,75	6,16	無文	小型	28
111	29	Q－12	Ⅵ	2,70	3,50	0,90	10,19	沈線文	小型，楕円形を呈する	29
	30	Q－13	Ⅵ	3,75	3,70	1,10	19,91	無文	小型	30
	31	S－10	Ⅵ	2,90	3,25	1,00	8,95	無文	小型	31
	32	R－10	Ⅶ	4,40	(3,05)	0,70	(11,4)	無文	一部欠損	32
	33	R－10	Ⅶ	4,90	(2,30)	0,95	(12,6)	無文	一部欠損	33
	34	P－12	Ⅵ	4,30	(2,30)	0,90	(10,7)	無文	一部欠損	34
	35	Q－10	Ⅵ	5,60	(2,70)	1,10	(24,3)	結節縄文	一部欠損	35
	36	R－11	Ⅵ	(2,8)	4,20	0,90	(11,6)	無文	一部欠損	36
	37	Q－11	Ⅵ	(2,3)	3,60	0,80	(5,78)	無文	一部欠損	37
	38	R－13	Ⅵ	3,70	(2,7)	0,95	(12,7)	結節縄文	一部欠損	38
	39	Q－11	Ⅵ	3,40	(2,3)	0,90	(6,80)	押引文	一部欠損	39
	40			(6,1)	(4,9)					40
	41			(4,8)	(7,0)					41



第112図　土製品実測図10（線刻土器）

⑤ 小結

土製品についてみると，土偶・棒状土製品・分胴形土製品・パレット形土製品と種々の土製品が出土している。

土偶

土偶は，縄文時代後期・晩期に多く見られるようになるものである。これまでは，鹿児島県内においても，加世田市上加世田遺跡の縄文時代晩期の土偶が唯一の土偶であった。それが一気に縄文時代早期までさかのぼったことになる。全国的にも縄文時代早期の土偶は少ないが，近年の調査で，増加してきており，原田昌幸氏によると1997年の段階では，全国で20遺跡183個体が知られている。また，三重県粥見井尻遺跡においては縄文時代草創期の土偶も出土しており土偶の起源がかなり古いことが知られてきている。

上野原遺跡の土偶についてみると板状土偶ではあるが，頭部と両腕を突起で表現し，胸には乳房を表現するものであり，明らかに女性を表現したものである。また，胸部に横位の細い沈線が施されているのが観察されるが，この沈線が人体内部の肋骨を表現したものであるとすれば興味深い。

分胴形土製品・棒状土製品

分胴形土製品・棒状土製品については，土偶の一部ではないかとも考えられるが，全体の形状が不明なため用途についても分からないものである。

パレット形土製品

パレット形の土製品についても，このような形状の土製品は初めての例であり，用途については皆目検討がつかないのが現状である。ただ，同様の土製品が完形品と破片を含め４点出土しており，なんらかの意図をもって製作・使用されたことと思われる。上野原遺跡の持つ祭祀的な様相とも考え合わせれば祭祀に関わる土製品ではないかと想定される。

土製耳飾り

土製耳飾りは，環状を呈する輪状耳栓と環状を呈さないで充填された円盤形態の臼形耳栓の大きく２種類が出土している。耳栓については，これまでは縄文時代中期頃から製作・使用されていると言われてきていたものである。しかしながら，南九州では川辺郡知覧町「石坂上遺跡」，曾於郡志布志町「下田遺跡」，熊本県人吉市「白鳥平Ａ遺跡」等で縄文時代早期の段階で耳栓が出土してことは早くから知られていたものである。上野原遺跡においてもアカホヤ火山灰層の下層より出土している点や文様が平栫式土器と同様のものであることから縄文時代早期に位置付けて間違いないものと考えられる。

土製円盤

土製円盤については，縄文時代の全時期を通じて見られるものである。縄文時代後期に多く出土していたものであるが，近年の調査では，縄文時代早期前半から見られるようになってきている。上野原遺跡においても，縄文時代早期後半の平栫式土器の胴部破片を再利用したものである。この土製円盤も使用目的については諸説あり定まっていないところである。

線刻土器

線刻土器については，４個体分，８点が出土している。１点はⅣ層出土で，縄文時代後期の可能性のあるものであるが，他の３個体７点はアカホヤ層下位のⅥ層出土である。

１～３については，縄文時代早期のものとは思えないような器形であるが，鋭いヘラ状の施文具で胴部に曲線・直線を描いてある。４および５～７は平栫式土器の壷形土器の胴部と思われるものである。いずれも鋭いヘラ状施文具で直線・曲線を描くものであるが，なにを描いているかについては不明である。

出土状況についてみると，まとまった状態ではなく，上層からの落ち込みの可能性はないものである。つまり，縄文時代早期（平栫式土器）の所産と考えて然るべきものと思われる。

このような，絵画的な沈線を有するもので縄文時代早期に位置付けられるものは類例がなく貴重なものと考えられるが，なにを意図して描かれたものかについては，判断できないものである。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）

国分上野原テクノパーク第３工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（II）

上野原遺跡（第10地点）（第６分冊）

発行日　平成13年３月31日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
☎（0995）６５－８７８７
印刷所　濱島印刷株式会社
〒890-0052　鹿児島市上之園町17-2
☎(代)（099）２５５－６１２１